下月隈C遺跡2

――下月隈C遺跡2次、3次調査――

福岡市埋蔵文化財報告書 第566集

1998

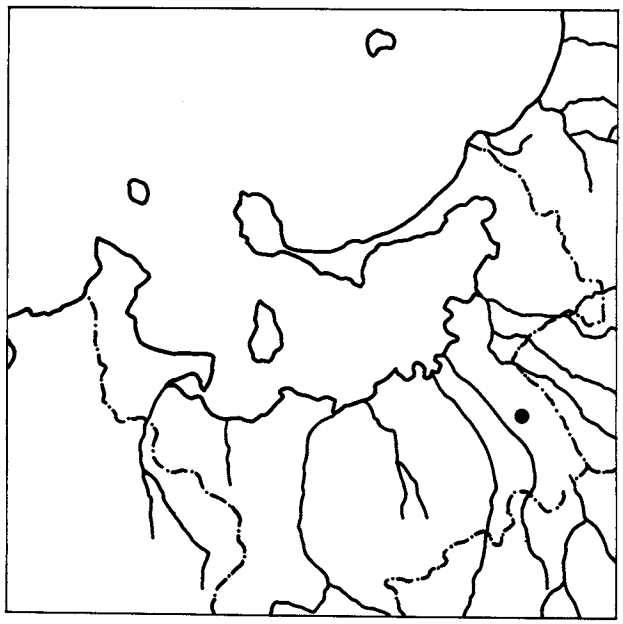
福岡市教育委員会

Shimo tsuki kuma

下月隈C遺跡2

―― 2次 3次調査 ――

福岡市埋蔵文化財調査報告書第566集



遺跡略号 SHC2 SHC3
調査番号 9515 9610

1998

福岡市教育委員会

巻頭図版　1

(1)　２次調査区上面集落（北半区 北から）

(2)　２次調査区上面集落（北半区 南から）

巻頭図版　2

(1)　２次調査区上面集落（南半区 南から）

(2)　２次調査区上面集落（南半区 南から）

(1)　２次調査区下面水田（北半区 西から）

(2)　２次調査区下面水田（南半区 西から）

(1)　３次調査区上面水田（北半区 南から）

(2)　３次調査区下面水田（南から）

序

アジアの拠点都市を目指す福岡市にとって空港機能の整備は不可欠であり、それに伴う周辺地域の環境整備もまた急務であります。しかし近年の埋蔵文化財保護、調査体制の充実に伴い、福岡空港内外にも豊富な文化財が埋もれていることがわかって参りました。

本書はそうした遺跡のひとつで、空港周辺整備事業に先立ち、博多区上月隈に所在する遺跡について行った発掘調査の成果報告書です。

発掘調査の結果古代から中世にわたる集落と、水田が見つかりました。動乱の時代に生活の場や生産の向上を求めて進出していく我々の祖先の営みの一端が明らかになったと言えるでしょう。

発掘調査から整理、報告にいたるまでご理解とご協力をいただいた空港整備機構、福岡空港を始めとする多くの関係者の方々に対し、心からの感謝をいたしますと共に、本書が文化財に対する認識と理解、更には学術研究に役立てば幸いに思います。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　町田　英俊

例　　言

1．本書は空港周辺整備に先だって、福岡市教育委員会が1995年６月６日～３月21日にかけて行なった下月隈Ｃ遺跡第２次調査、および1996年５月７日～10月18日にかけて行なった第３次調査の報告書である。下月隈Ｃ遺跡としては２冊目の報告書である。

2．検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Ｍを付して検出順に通し番号を付した。本章では、この番号からＭを除き、遺構の性格を示す用語を付して、土壙１、溝２のように記述する。

3．本書で使用する方位は磁北である。

4．本書で使用した遺構実測図は宮井善朗、久住猛雄の外、西村智道（現太刀洗町教育委員会）、井上繭子（現福岡市教育委員会）、平田こずえ、今泉博子、石橋忠治（別府大学）、伊藤美和、柴田実香、日野綾子、永井洋子、吉開元泰（西南学院大学）、北村幸子（九州大学）菅裕一郎（福岡大学）、藤川繁昌が作成した。製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。

5．本書で使用した遺物の実測図は宮井の他中暢子が作成した。また製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。

6．本書使用の写真は、宮井、久住が撮影したものである。

7．遺物実測図の番号は収蔵時の登録番号である。遺構図中の遺物出土状況図の番号に一致する。

8．本調査に関わる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。

9．本書の執筆はⅢ－３を久住が、他を宮井が行い、編集は久住、宮井両者協議の上宮井が行なった。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査体制 …… 2
Ⅱ．下月隈Ｃ遺跡周辺の地理的、歴史的環境 …… 6
Ⅲ．２次調査の記録
　1．調査の概要 …… 7
　2．上面集落の調査
　　(1) 溝 …… 7
　　(2) 土壙墓 …… 27
　　(3) 土壙 …… 27
　　(4) 井戸 …… 65
　　(5) ピット、包含層など出土遺物 …… 73
　　(6) 各遺構出土石製品 …… 73
　　(7) 掘立柱建物 …… 76
　　(8) 上面集落について …… 77
　3．第２面水田の調査
　　(1) 概要 …… 79
　　(2) 各水田の内容 …… 82
　　(3) 調査区の土層 …… 94
　　(4) その他の遺構 …… 94
　　(5) 旧河川と杭列 …… 96
　　(6) 出土遺物 …… 97
　　(7) まとめ …… 102
Ⅳ．３次調査の記録
　1．基本層序 …… 103
　2．上層水田の調査 …… 103
　3．下層水田の調査 …… 103
Ⅴ．小結 …… 104

挿 図 目 次

Fig. 1　調査区位置図(1:4000) …… 3
Fig. 2　下月隈C遺跡周辺の遺跡(1:25000) …… 4
Fig. 3　調査区割図(1:1000) …… 5
Fig. 4　溝配置図1(1:300) …… 8
Fig. 5　溝配置図2(1:300) …… 9
Fig. 6　溝断面図、土層図1(1:40) …… 10
Fig. 7　溝断面図、土層図2(1:40) …… 11
Fig. 8　溝出土土器実測図1(1:3) …… 13
Fig. 9　溝出土土器実測図2(1:3) …… 14
Fig. 10　溝出土土器実測図3(1:3) …… 15
Fig. 11　溝出土土器実測図4(1:3) …… 16
Fig. 12　溝出土土器実測図5(1:3) …… 17
Fig. 13　溝出土土器実測図6(1:3) …… 18
Fig. 14　(1)溝28実測図(1:100、1:40)　(2)溝28遺物出土状況実測図(1:20) …… 20
Fig. 15　溝28出土土器実測図1(1:3) …… 22
Fig. 16　溝28出土土器実測図2(1:3) …… 23
Fig. 17　溝28出土土器実測図3(1:3) …… 24
Fig. 18　土壙墓実測図(1:30) …… 26
Fig. 19　土壙墓出土土器実測図(1:3) …… 26
Fig. 20　土壙実測図1(1:40) …… 28
Fig. 21　土壙出土土器実測図1(1:3) …… 29
Fig. 22　土壙出土土器実測図2(1:3) …… 30
Fig. 23　土壙実測図2(1:40) …… 31
Fig. 24　土壙出土土器実測図3(1:3) …… 32
Fig. 25　土壙実測図3(1:40) …… 33
Fig. 26　土壙出土土器実測図4(1:3) …… 35
Fig. 27　土壙実測図4(1:40) …… 37
Fig. 28　土壙出土土器実測図5(1:3) …… 38
Fig. 29　土壙出土土器実測図6(1:3) …… 39
Fig. 30　土壙実測図5(1:40) …… 40
Fig. 31　土壙実測図6(1:40) …… 42
Fig. 32　土壙実測図7(1:40) …… 45
Fig. 33　土壙出土土器実測図7(1:3) …… 46
Fig. 34　土壙実測図8(1:40) …… 47
Fig. 35　土壙出土土器実測図8(1:3) …… 48
Fig. 36　土壙実測図9(1:40) …… 50

Fig. 37　土壙出土土器実測図9(1:3) …… 51
Fig. 38　土壙出土土器実測図10(1:3) …… 52
Fig. 39　土壙実測図10(1:40) …… 54
Fig. 40　土壙実測図11(1:40) …… 55
Fig. 41　土壙実測図12(1:80) …… 57
Fig. 42　土壙出土土器実測図11(1:3) …… 58
Fig. 43　土壙出土土器実測図12(1:3) …… 59
Fig. 44　土壙実測図13(1:80) …… 60
Fig. 45　井戸43実測図(1:30) …… 64
Fig. 46　井戸43土層図(1:30) …… 66
Fig. 47　井戸43出土土器実測図(1:3) …… 66
Fig. 48　井戸実測図1(1:30) …… 67
Fig. 49　井戸実測図2(1:30) …… 68
Fig. 50　井戸出土土器実測図1(1:3) …… 69
Fig. 51　井戸実測図3(1:30) …… 70
Fig. 52　井戸出土土器実測図2(1:3) …… 70
Fig. 53　ピット、包含層出土土器実測図(1:3) …… 74
Fig. 54　各遺構出土石製品実測図1(1:2) …… 74
Fig. 55　各遺構出土石製品実測図2(1:3) …… 75
Fig. 56　第２面水田全体概略図(1:600) …… 79
Fig. 57　北部調査区東半水田平面図(1:300) …… 80
Fig. 58　南部調査区東半水田平面図(1:300) …… 81
Fig. 59　北部調査区西半水田平面図(1:300) …… 82
Fig. 60　南部調査区西半水田平面図(1:300) …… 60
Fig. 61　水田東西断面図(ヨコ1:500　タテ1:100) …… 84
Fig. 62　水田南北断面図(ヨコ1:500　タテ1:100) …… 85
Fig. 63　水田158足跡、稲株痕実測図(1:80) …… 87
Fig. 64　水田調査区壁面土層図(1:40) …… 89
Fig. 65　各水田区画、畦畔土層図1　溝土層図、断面図(1:40) …… 91
Fig. 66　各水田区画、畦畔土層図1　調査区壁面土層図(1:40) …… 93
Fig. 67　杭列170、356、357実測図(1:60) …… 95
Fig. 68　杭列354、356(堰?)、365実測図(1:60) …… 96
Fig. 69　杭列359、360、361実測図(1:60) …… 97
Fig. 70　第２面水田の時期に関連する遺物(水田、旧河川出土　1:3) …… 99
Fig. 71　第２面出土のその他の遺物(1:3) …… 101
Fig. 72　３次調査区基本層序(1:40) …… 104
Fig. 73　旧河道506土層図(1:40) …… 104
Fig. 74　３次調査区出土遺物実測図1(1:3) …… 105
Fig. 75　３次調査区出土遺物実測図2(1:3) …… 106

図 版 目 次

巻頭図版１　(1)　２次調査区上面集落（北半区　北から）
　　(2)　２次調査区上面集落（北半区　南から）
巻頭図版２　(1)　２次調査区上面集落（南半区　南から）
　　(2)　２次調査区上面集落（南半区　南から）
巻頭図版３　(1)　２次調査区下面水田（北半区　西から）
　　(2)　２次調査区下面水田（南半区　西から）
巻頭図版４　(1)　３次調査区上面水田（北半区　南から）
　　(2)　３次調査区下面水田（南から）
ＰＬ．１　(1)　溝28（西から）
　　(2)　溝28遺物出土状況（北から）
ＰＬ．２　(1)　土壙墓133（東から）
　　(2)　土壙墓134（北から）
ＰＬ．３　(1)　土壙40（北から）
　　(2)　土壙46（西から）
ＰＬ．４　(1)　土壙64（西から）
　　(2)　土壙248（北から）
ＰＬ．５　(1)　土壙251(東から)
　　(2)　井戸43（東から）
ＰＬ．６　(1)　井戸43遺物出土状況(北から)
　　(2)　井戸61（北から）
ＰＬ．７　(1)　井戸65（東から）
　　(2)　井戸65井戸枠
ＰＬ．８　(1)　井戸279(東から)
　　(2)　井戸280(東から)
ＰＬ．９　(1)　井戸287櫛出土状況
　　(2)　井戸290木器出土状況(東から)
ＰＬ．10　(1)　井戸291(東から)
　　(2)　２次調査区下面水田（南から）
ＰＬ．11　(1)　２次調査区土層
　　(2)　３次調査区上層水田(南から)
ＰＬ．12　(1)　旧河道506（北から）
　　(2)　３次調査区土層
ＰＬ．13　(1)　３次調査区下層水田(北から)
　　(2)　３次調査区下層水田(南から)

Ⅰ．は　じ　め　に

1．調査に至る経緯

1994年２月17日付けで、空港周辺整備機構より、博多区上月隈地内における埋蔵文化財の有無についての事前調査依頼が出された。申請地は94年に道路拡幅のために調査された下月隈Ｃ遺跡に近接し、また申請面積も広大であるため、埋蔵文化財課では事前調査依頼を受けて94年３月17日～４月１日にかけてに試掘調査を行なった。その結果申請地内には集落と水田が良好な遺存状態で検出され、検出レベルから重複して遺存しているものと予想された。この成果をもとに協議を行ない、遺構の遺存する部分においては発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は、空港周辺整備機構との委託契約により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなった。調査は２年度にかけて行なうこととし、第２次調査を1995年５月８日に着手し、３月19日に終了した。また第３次調査は1996年５月7日に着手し、10月18日に終了した。第３次調査中の６月８日には、現場から約100mの至近距離で、ガルーダインドネシア航空機の墜落事故があり、相当現場も混乱したが、調査現場や、調査参加者に被害は及ばなかったのは幸いであった。

2．調査体制

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花剛（前）、町田英俊（現）

調査総括　埋蔵文化財課　課長　荒巻輝勝

第２係長　山口譲治

調査庶務　埋蔵文化財課第１係　入江幸男（前）　小森彰（現）

調査担当　埋蔵文化財課第２係　宮井善朗　久住猛雄

調査補助　西村智道（現太刀洗町教育委員会）　井上繭子（現福岡市教育委員会）　平田こずえ、今泉博子　石橋忠治（別府大学）

調査作業　野村道夫　太田正顕　田原房五郎　楠林司朗　吉田米男　吹春憲治　藤川繁昌　江下和彦　平田穂積　三宅安隆　河野龍哉　小林義徳　三浦力　宇田川健一　杉本和暁　乙部武彦　橋本幸樹　喜田敏　篠原耕一郎　阿部賢太郎　浦信英　吉川均　伯野慎一郎　国方大輔　清水厚　吉開元泰　伊達昌孝　小島孟　久保山勝広　永井大志　村本義雄　鹿毛賢次郎　一ノ瀬周三郎　岩佐亘　今塩屋毅行　相良大輔　鈴賀智幸　立川喜章　脇田栄　小路丸嘉人　井立尚　松林慎一　吉田隆　古賀義康　菅裕一郎　荒木秀明　永田耕三　森田祐子　古賀典子　持丸玲子　森園弘子　平田浩美　山村スミ子　林厚子　宮本順子　鷲尾美佐子　綟川ゆかり　吉野幸子　森山キヨ子　石川洋子　篠原恵子　鍋山治子　中野満代　磯埜和子　井上彩子　日野綾子　柴田実香　伊藤美和　永井洋子　北村幸子　土倉崇子　崎村春子　川原愛　烏川美恵　伊藤貴美恵　松岡芳枝　金子二三枝　木村文子　花田則子　岸原千秋　中野裕子　坂本俊子　増田ゆかり　宮原久子　森教子　阿部幸子　山下智子　津田ひろ子　中野めぐみ　幸田信乃　柳瀬伸　寺園恵美子　永田優子　指原姶子　小路丸良江　永川カツエ　本多ナツ子　池田伸子

整理作業　中暢子　藤信子　佐々木涼子　大石加代子　林由紀子　太田順子　武田祐子

また調査時の条件整備等に関して空港周辺整備機構、福岡空港事務所に多くのご配慮を賜った。また調査中の遺物の取上げに関しては本田光子氏（現別府大学）に度々指導を受けた。記して感謝申し上げるとともに、本報告に十分生かせていないことをお詫びする次第である。

（２次調査）

遺跡調査番号	９５１５	遺跡略号	ＳＨＣ－２		
調査地地番	福岡市博多区大字上月隈地内空港用地Ｆ－１				
開発面積	18,000㎡(2、3次総面積)	調査対象面積	18000㎡(同左)	調査面積	8900㎡
調査期間	1995年６月６日～３月21日	分布地図番号	11-2625		

（３次調査）

遺跡調査番号	９６１０	遺跡略号	ＳＨＣ－３		
調査地地番	同　　上				
開発面積	同上	調査対象面積	同上	調査面積	3575㎡
調査期間	1996年５月７日～10月18日	分布地図番号	11-2625		

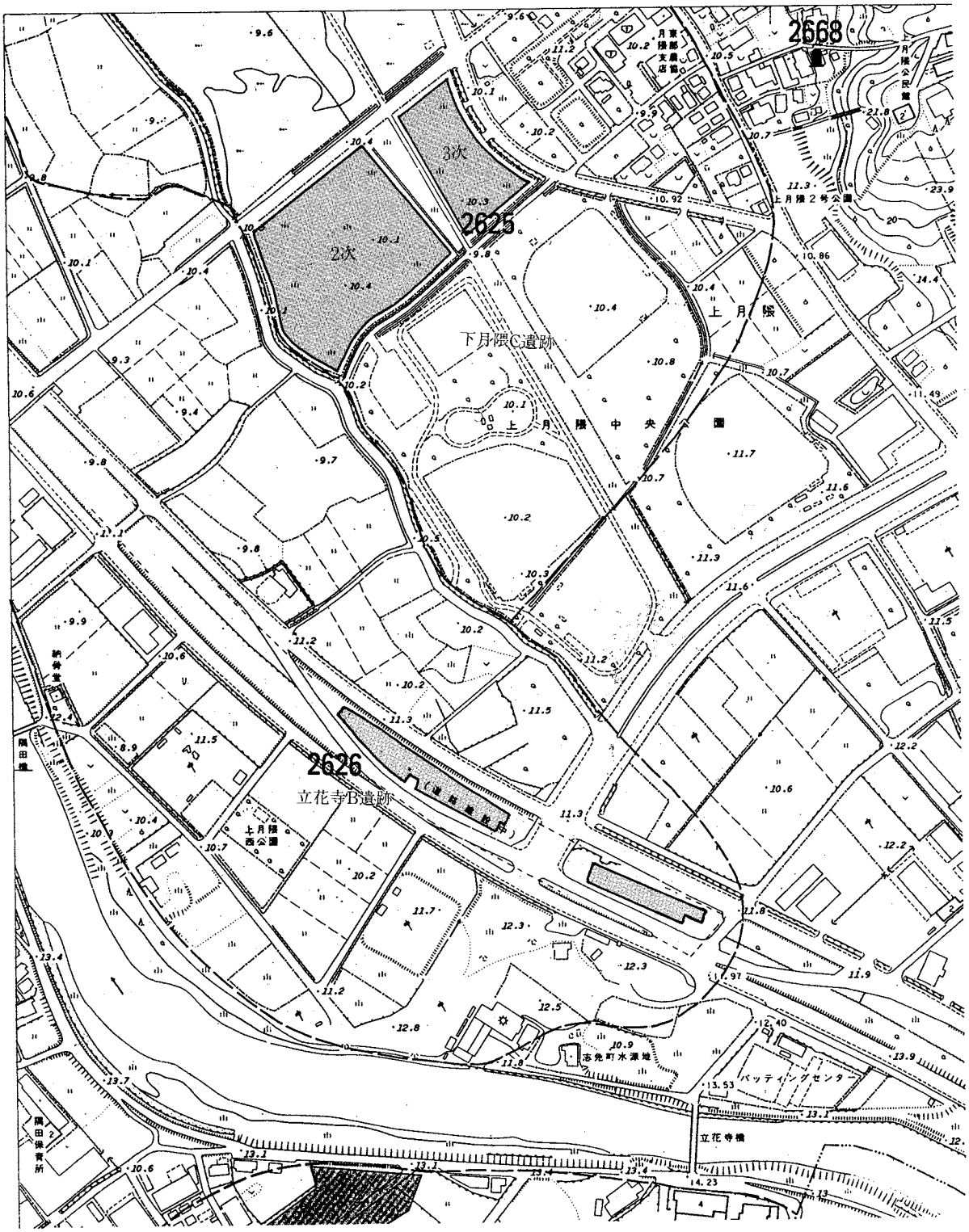


Fig.1　調査区位置図（1：4000）

1．下月隈C遺跡
2．立花寺遺跡
3．立花寺B遺跡
4．下月隈A遺跡
5．下月隈B遺跡
6．天神森遺跡
7．上月隈遺跡
8．宝満尾遺跡
9．金隈遺跡
10．金隈上屋敷遺跡
11．雀居遺跡
12．板付遺跡
13．高畑遺跡
14．麦野A遺跡
15．麦野B遺跡
16．麦野C遺跡
17．南八幡遺跡
18．井相田A遺跡
19．井相田B遺跡
20．井相田C遺跡
21．那珂遺跡
22．那珂君休遺跡
23．五十川遺跡
24．井尻B遺跡
25．井尻A遺跡
26．横手遺跡
27．諸岡A遺跡
28．諸岡B遺跡
29．笹原遺跡
30．三筑遺跡
31．仲島遺跡

Fig.2　下月隈C遺跡周辺の遺跡（1：25000）

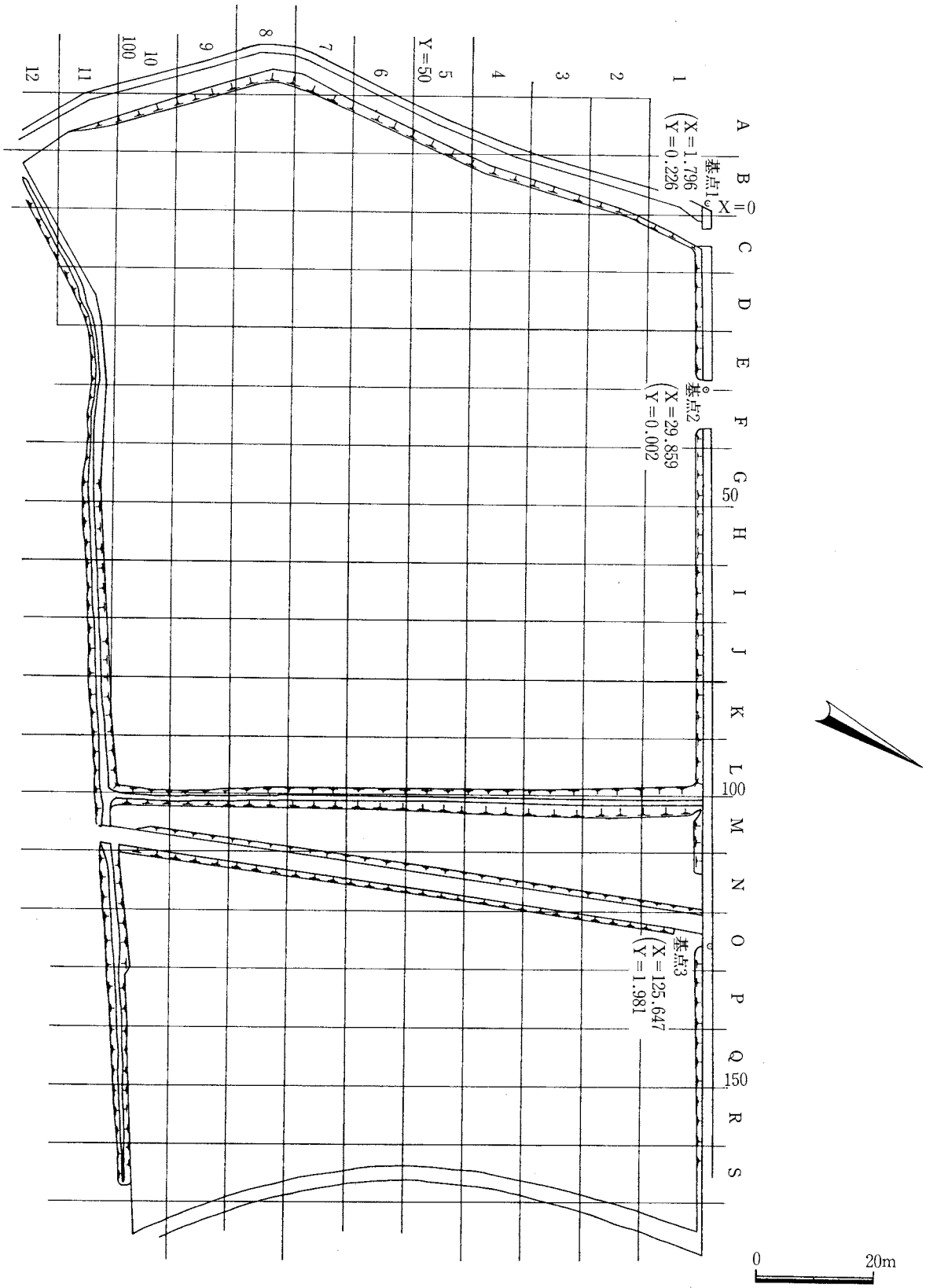


Fig.3　調査区割図（1：1000）

Ⅱ．下月隈Ｃ遺跡周辺の地理的、歴史的環境

下月隈Ｃ遺跡は、福岡平野の東端に位置し、福岡空港の南側に広がる遺跡である。地形的には月隈丘陵と御笠川に挟まれた、東西500ｍ程の幅の沖積面に立地する。基盤面は段丘礫層で、その上位に厚い青灰色粘土が堆積し、その上に洪水などで何層もの砂、シルトが堆積し、各時期の遺構が重層的に検出される。このような状況は同じような立地である雀居遺跡、立花寺Ｂ遺跡などとも類似する。

調査区周辺では、弥生時代以降、遺構が増加するようである。天神森遺跡では前期から墓地の造営が見られる。また影ヶ浦遺跡、持田ヶ浦遺跡などで貯蔵穴などの生活遺構も検出されている。中期から後期にかけては金隈遺跡、席田青木遺跡などで甕棺墓地が見られ、久保園遺跡、赤穂ヶ浦遺跡などでは大規模な集落も検出されている。古墳時代に入るととくに５世紀以降の調査例が多く、６世紀頃からは群集墳が各地に造営される。

今回調査の主な時期である古代以降については近年立花寺遺跡、立花寺Ｂ遺跡等を中心に多く検出されつつある。ここでは各調査の概要を示しておく。

立花寺遺跡　現在まで４次にわたる調査が行なわれている。１次調査では溝、土壙などが検出され、古墳時代後期を中心に縄文時代から中世にかけての遺物が出土している。古代から中世にかけては、土師器や陶磁器に加え、瓦や朝鮮製無釉陶器等も出土している。２次調査では３面にわたって調査が行なわれ、その上面に当たる１、２面では掘立柱建物群や柵列などが検出されている。時期は古代に属し、越州窯系青磁、邢窯系白磁、緑釉陶器、瓦、権等が出土している。官衙的建物の可能性があり、筵田駅との関係が考慮されている。なお下面である３面では古墳時代後期の集落が検出されている。３次調査では２面にわたって遺構が検出されている。弥生時代から中世にかけての遺構で、溝、古墳時代の竪穴式住居、古代の溜井状遺構、土壙、掘立柱建物等が検出されている。ここでは官衙的建物を示すような特殊な遺物は出土していない。４次調査では溝、土壙などが検出されており、古墳時代後期を中心とするようである。２間×２間の総柱建物も２棟検出されている。

立花寺Ｂ遺跡　都市高速道路２号線建設に伴って、近年発見された遺跡である。平安時代前期と中世の遺構群が検出されている。ここでも越州窯系青磁、白磁、緑釉陶器等が多量に出土している。ほぼ立花寺遺跡と同時期で、共に駅に関連した施設であろうとされている。

下月隈Ｃ遺跡１次調査　下月隈Ｃ遺跡２、３次調査地点はちょうど立花寺遺跡と、立花寺Ｂ遺跡に挟まれた位置に当たり、今回調査で出土した越州窯系青磁、緑釉陶器、蛇の目高台の白磁などは両遺跡に関連した施設の存在を示唆している。ところで下月隈遺跡は既に１次調査が行なわれているので、概要を述べておく。１次調査は２、３次調査の約400ｍ北側で行なわれている。主として弥生時代後期の集落関係の遺構が検出されている。遺構検出面は標高７ｍ程で、３次調査の下層水田面より更に１ｍ以上深い。２、３次調査の成果からは１次調査地点と２、３次調査地点が同一の遺跡がどうかは疑問である。近い将来１次地点と２、３次地点の中間に当たる地区の、約60,000㎡の調査予定があり、この成果によって微高地上の遺跡の立地と分布が明らかになることと期待される。

Ⅲ. 2次調査の記録

1. 調査の概要

2次調査では、上下2面の調査面を設定して調査を行なった。

上面は調査区のほぼ西半分に展開する。古代から中世にかけての集落、及びその縁辺に関わる遺構が検出された。遺構の種類は、溝、井戸、土壙及びピットである。建物は数棟しか確認できなかった。井戸や溝の遺存から見て相当数のピットが削平されている可能性がある。また南半区で、下層水田面の検出中に上面で検出できなかった井戸などの遺構が検出された。従って、生活面も2面以上あった可能性が高い。調査面積の割には遺物は多くない。土器、木器を合わせてもコンテナ100箱に満たない。出土土器は土師器を主体とし、黒色土器、須恵器、中国製陶磁器を混じえる。博多、大宰府周辺部の集落に共通したあり方を示している。

下面水田は時間的な制限から、ごく一部を除き、最下層の水田面のみの調査に止まった。調査区中央に旧河道を検出したが、水田面を切っており、直接水田に取水した水路とは考えがたい。

調査日誌をもとに、以下に調査経過を略述する。

5月31日から北半区の表土剝ぎを開始したが、この時点でまだ事務所が建っておらず、機材の搬入をし、調査を開始したのは6月5日である。排水溝を切り回した後、6月6日より遺構検出を開始した。6月23日より、溝1から遺構掘り下げを開始。平行して、測量用の杭打ち、平板測量を行なう。7月に入って梅雨の雨が降り続き、調査に大きな支障をきたした。この間、7月3日～7日にかけて、韓国高麗大学学生が調査に参加する予定であったが、雨のため1日も参加することができなかったのは残念なことであった。7月10日頃からようやく軌道に乗り出し、8月7日にはほぼ掘り下げを終え、8月10日に北半部上面の全景写真を撮影した。ただちに実測を始め、8月29日に実測を終了した。補足的な調査を行なって、9月7日に北半部上面を終了した。平行してトレンチをいれ、下層水田面の範囲とレベルを確認し、9月14日から下面の調査に入る。9月19日より水田面の検出を始め、9月26日から略測を開始する。10月19日頃までにほぼ検出を終え、清掃の後、10月27日に北半区水田の全景写真を撮影した。実測と補足的な調査を行ない、北半区が終了したのは11月13日である。続いて南半区の表土剝ぎにかかる。上面遺構は西半分にしか見られないので、東半分は水田面まで掘り下げた。11月21日から遺構検出を始める。11月29日にほぼ検出を終え、掘り下げを開始。平行して平板測量を行なう。1月10日に掘り下げを終え、1月12日に南半部上面の全景写真撮影。実測と平行して下面水田の検出も始める。2月2日より、担当者の一人宮井は雑餉隈遺跡8次調査のため現場を離れ、以下年度末まで久住が担当する。3月21日に95年度の調査を終了した。

調査区の座標軸については、調査区周囲の道路に空港整備機構側が設置した鋲のうち、土地区割りに平行な任意の2点を選んで基点とし、10m方眼を組んだ。磁北とのずれは約30° Wであり、以下の記述ではとくに磁北とことわらない場合は座標上方を北と称する。

2. 上面集落の調査

(1) 溝

溝は遺構番号を付したものが上面のみで80条ある。内明らかに自然河道と考えられるものを1条含む。溝は浅いものが多く、人為的な掘削がどうか明らかでないものが多い。配置図には人為的か否かに関わらず、溝として遺構番号を付したものを図示した。以下、人為的な掘削の可能性が強い溝を中心に述べていくことにする。

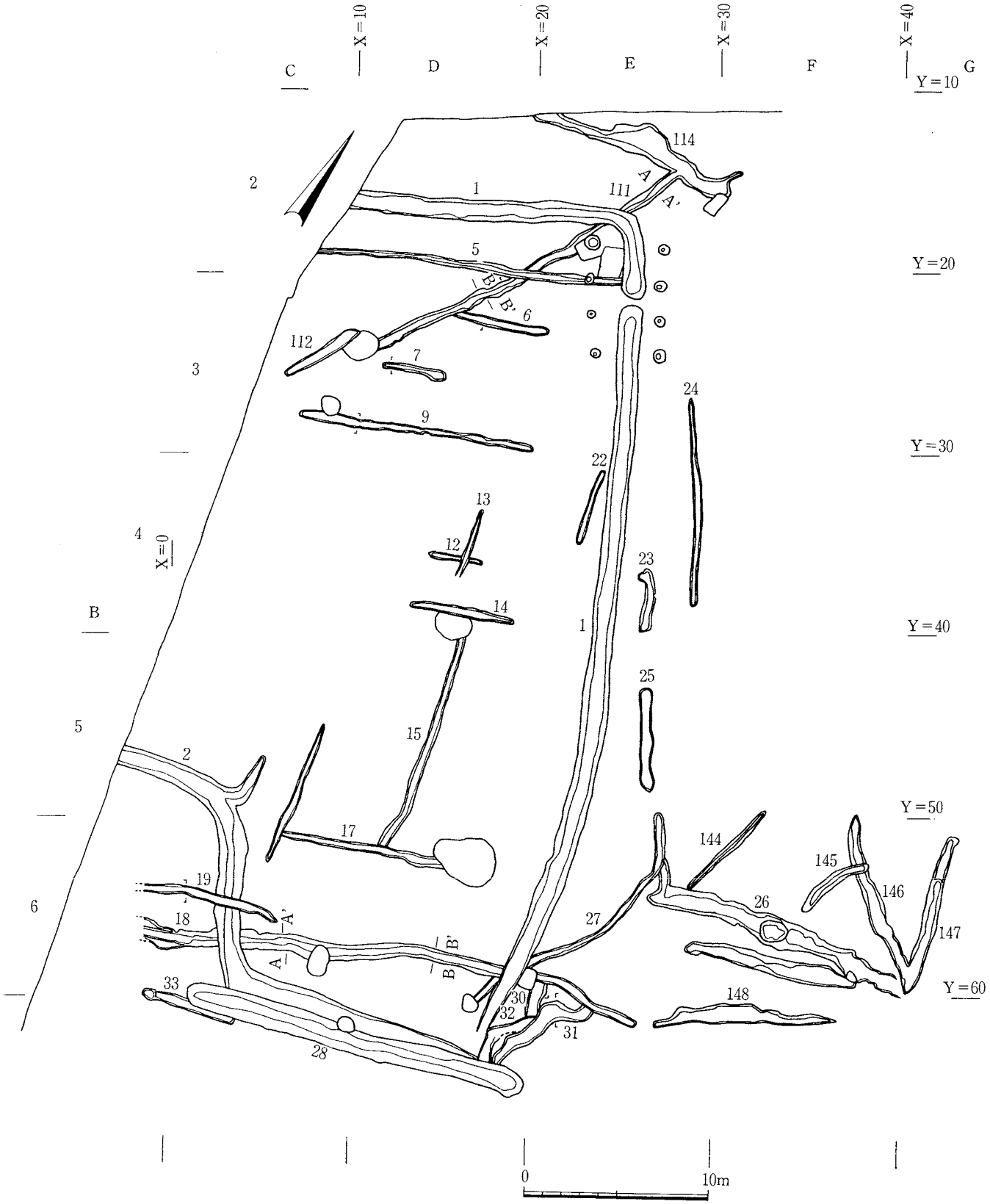


Fig.4　溝配置図1（1：300）

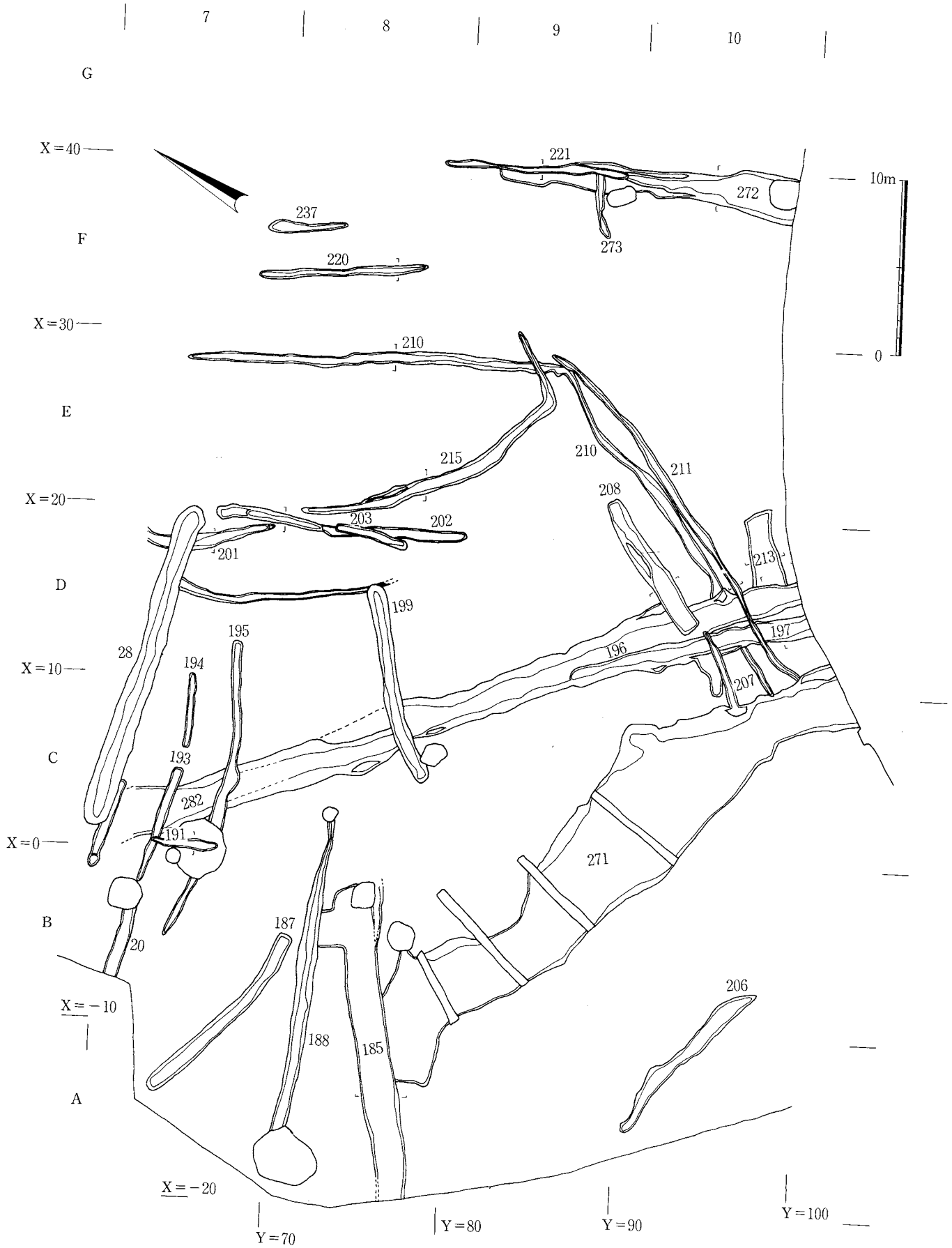


Fig.5　溝配置図2（1：300）

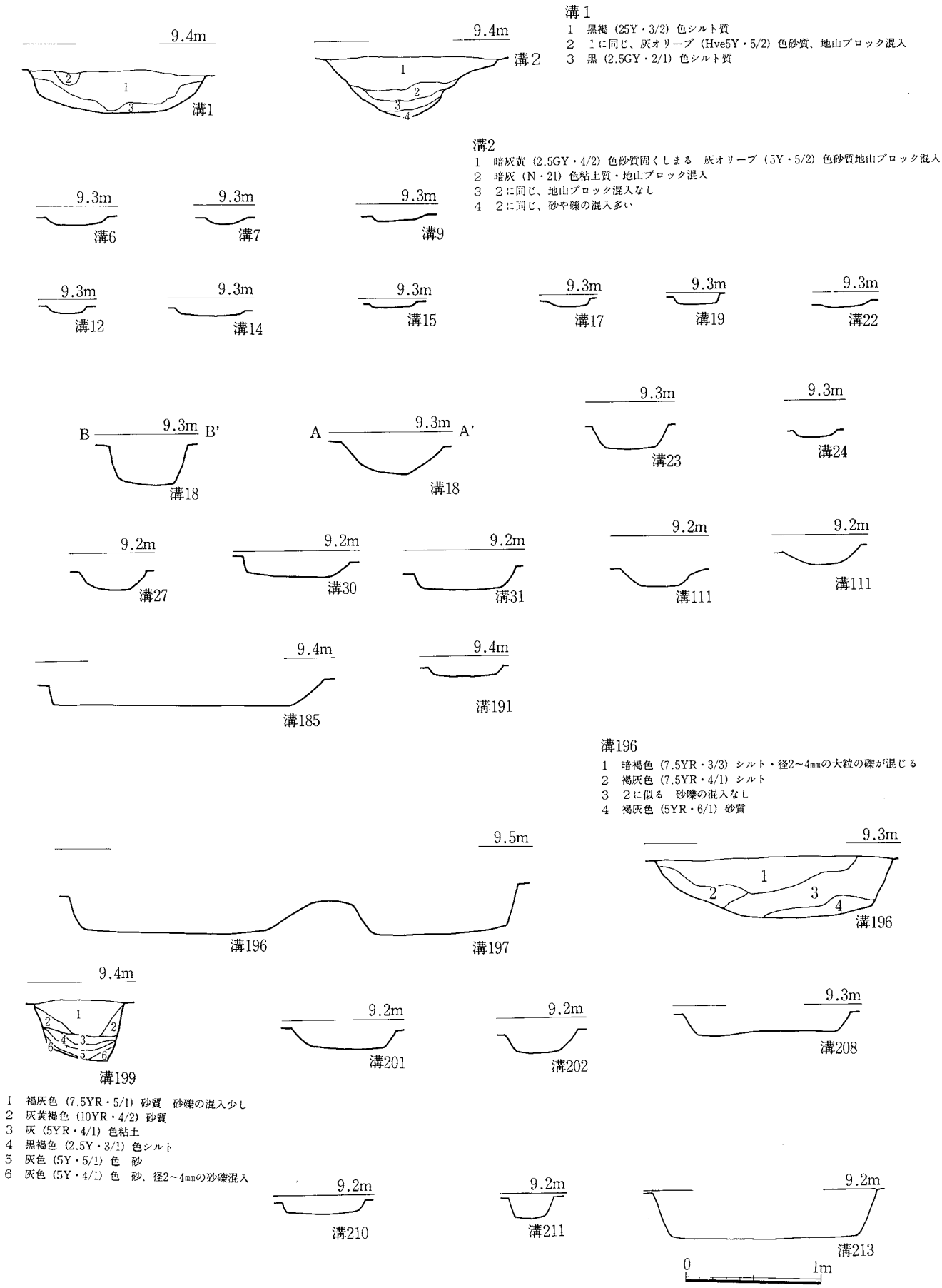


Fig.6　溝断面図、土層図1（1：40）

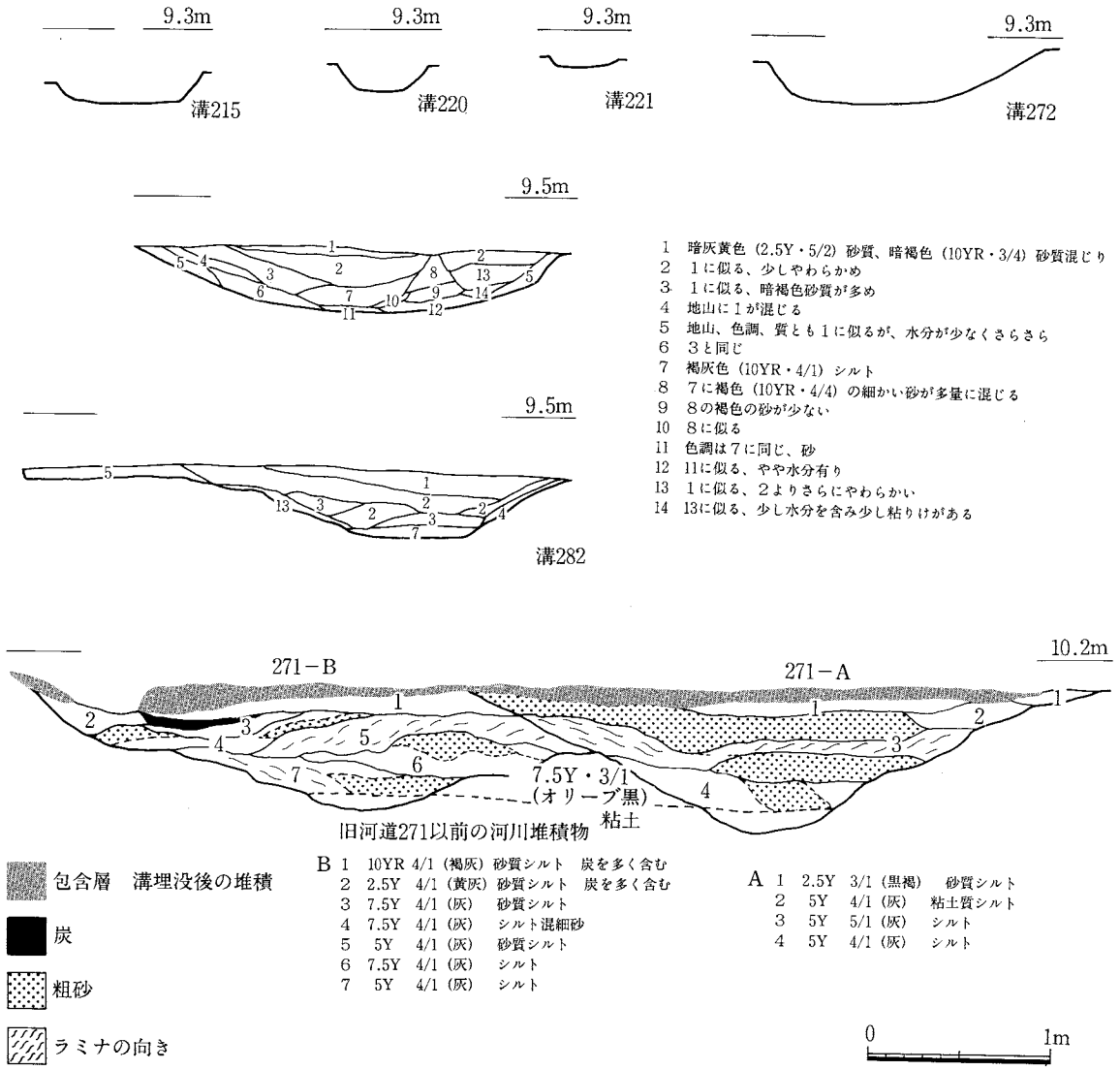


Fig.7　溝断面図、土層図2（1：40）

溝1、2とその周辺(Fig.4)

配置図1には北半区で検出した溝を示しているが、まず目を引くのは遺構群をL字に囲む**溝1**である。**溝1**は幅1～1.5mほどの溝で、調査区内の延長は東西16m、南北45mほどに及ぶ。南端部は次第に浅くなり、南半区では延長を検出できなかった。溝200や201につながる可能性もあるかもしれないが、確証はない。北半区調査時には**溝2**と同一の可能性を考えていたが、南半区の調査によると、**溝1**と**溝2**は切り合うようである。**溝1**は北東隅から4.5m程南へ下がった個所に陸橋部をもつ。陸橋幅は狭く、50cm程に過ぎない。溝の端部は丸みを持つ。この陸橋部を挟んで1間×3間の掘立柱建物がある。中央の柱間がちょうど陸橋部に対応しており、門遺構の可能性が高い。この**溝1**を境に東側では極端に遺構が少なく、集落の中心部が**溝1**の西側にあることは明らかであり、集落の東側を限る溝と考えられる。**溝1**は検出面からの深さは30cm程で、これが当時の姿であれば深さ、幅ともただの区画以上の意味はない。しかし、後述するように集落内の井戸の深さがかなり浅く、湧水面が高いにせよ、多少の削平が行なわれている可能性はある。

溝2も幅1～1.5m、深さ40cm程の溝で、逆S字状に曲がる。やはり集落を区画する溝と考えられる。

この他北半区には**溝1**と方向を同じくする溝が多く検出された。東西方向の溝として**溝5**、**7**、**9**、**17**など、南北方向の溝として**溝15**などがある。これらの溝はいずれも極めて浅い。ほとんど10cmに満たず、何度か削り直しているうちに無くなってしまったものもある。幅も30～50cmで共通している。

街区などとは考えがたいが、何らかの仕切り溝、もしくは建物の雨落ちなどの可能性は考えられよう。また**溝23**、**24**、**25**などは**溝1**にほぼ平行するが、**溝1**の東側で、集落の外と考えられる位置にある。

また**溝1**、**2**と切り合う溝に**溝18**、**19**、**27**、**111**などがある。**溝18**は**溝1**、**2**共に切られる。深さ20～30cmを測る。東西に緩やかに蛇行して伸びる。**溝111**も**溝1**とそれに平行する**溝5**、**6**に切られる。覆土は砂である。

溝28(Fig.14)

Ｃ７～Ｄ７区にかけて伸びる。東西方向の溝である。溝２を切る。両端とも丸みを持って立上り、終わっている。延長19.6m程を測る。幅は1.4～1.5m程を測る。検出面からの深さは50～60cm程である。壁は緩やかに落ち、床面は幅50～60cm程になる。検出面近くの、かなり浮いたレベルから多量の遺物が出土している。遺物は溝がかなり埋まった段階での一括廃棄の状態と考えられる。出土遺物から見て、溝の廃絶は14世紀後半頃と考えられる。溝28は数基のピットを除いて他の遺構に切られず、逆に溝２を始め多くの遺構を切っている。ほぼ上面集落の最終段階の時期の遺構と考えられる。調査区前体の出土遺物から見ても該期以降の遺物は極めて少なく、例えば青花などはほとんど見ない。該期以降近世、近代までは再び水田として利用されたと考えられる。

南半区検出の溝(Fig.5)

溝配置図２は南半区検出の溝を図示した。溝は浅いものが多く、**溝196**、**197**が検出面からの深さ40～50cm、溝199が40cm、188が35～40cmなどが比較的深い例である。他の溝はほとんど20cm以下で、10cmに満たないものも多い。

溝185は幅２ｍを測る幅広の溝で、調査区の西端に位置する。旧河道を切るため、床面が極めてわかりにくく、トレンチをいれて確認した。また東端部も非常に検出が困難で、ここで終わるかどうかは疑問もある。**199**は断面Ｕ字状を呈する溝で、**溝28**を小形にしたような形態である。**溝28**とは方向が異なり、時期も異なる。**溝196**と**197**は切り合い関係にあるが、先後は不明である。また**282**とした溝は下面水田検出途中に確認した**溝196**の延長部分である。**溝196**の北端、**溝185**、**188**の東端の確認が極めて困難であったこと、また下面検出途中で確認した井戸などの遺構群が、Ｂ～Ｄの７～９区に集中していることから、この区域を中心に生活遺構面が最低２面あったと考えられる。

調査区の南端近くには、ほぼ磁北に近い向きを持つ溝が見られる。**溝208**、**210**、**211**などである。いずれも浅い溝で**208**を除けば幅狭の溝である。**210**は途中で西へ折れ、座標北とほぼ平行になる。この付近の、調査区東半分では、座標北に平行する溝が多い。**溝202**、**219**、**220**、**221**等である。

総じて南半区検出の溝は、規模や方向、形態がまちまちで、北半区のような企画性が見られない。また南半区はピットや土壙も北半区に比べて密度が疎で、集落の縁辺に近い位置とも考えられる。ただし、円形土壙や井戸などもかなり南端に近い個所にまで確認されており、集落内ではあるようである。

調査区の南西端には旧河道が検出された。**271**としたものは集落と時期的に重なると思われる河道である。この西側も不安定な沖積地であり、複数の河道が重複しているものと考えられる。**271**とした河道も、土層図に示したように２条の流路が切り合っている。最上層の包含層はＡ～Ｄの７～９区の遺構面と類似した層で、その層の上面から**溝185**が掘り込まれていることになる。この層が**溝196**(**282**)の上層にも堆積していたのであろう。**河道271**は**溝185**の北側にも当然伸びると思われるが、調査は行なっていない。

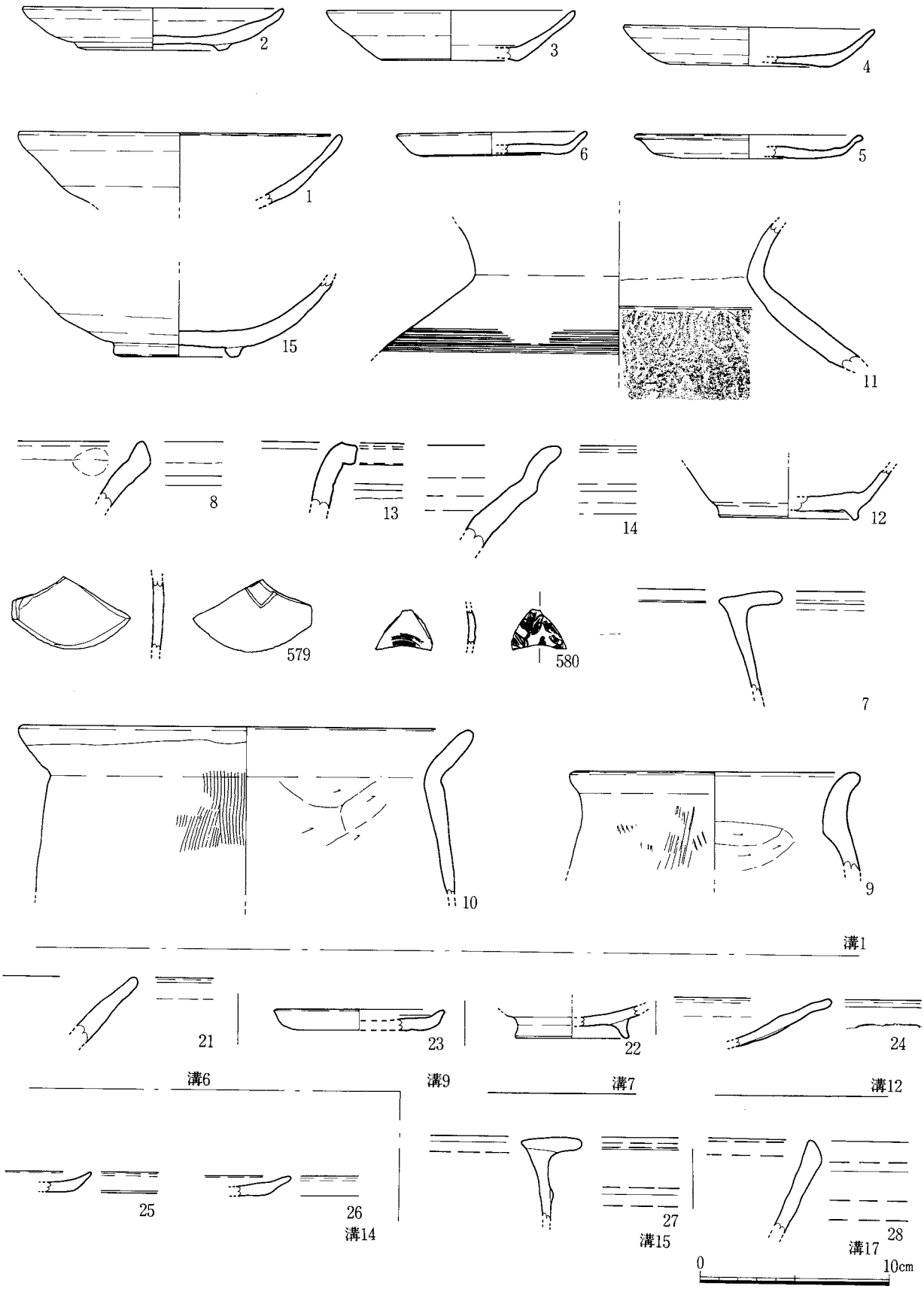


Fig.8　溝出土土器実測図1（1：3）

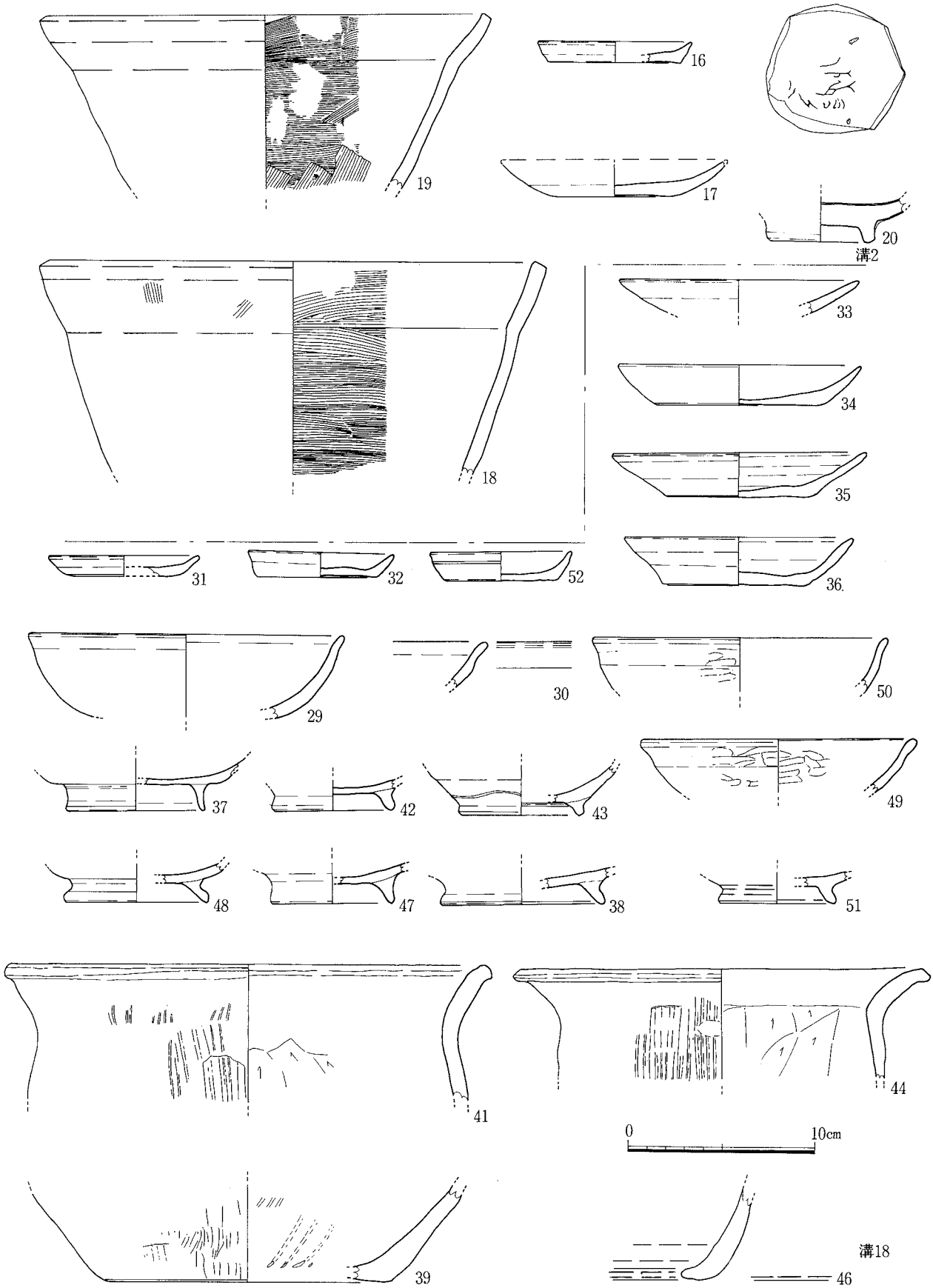


Fig.9　溝出土土器実測図2（1：3）

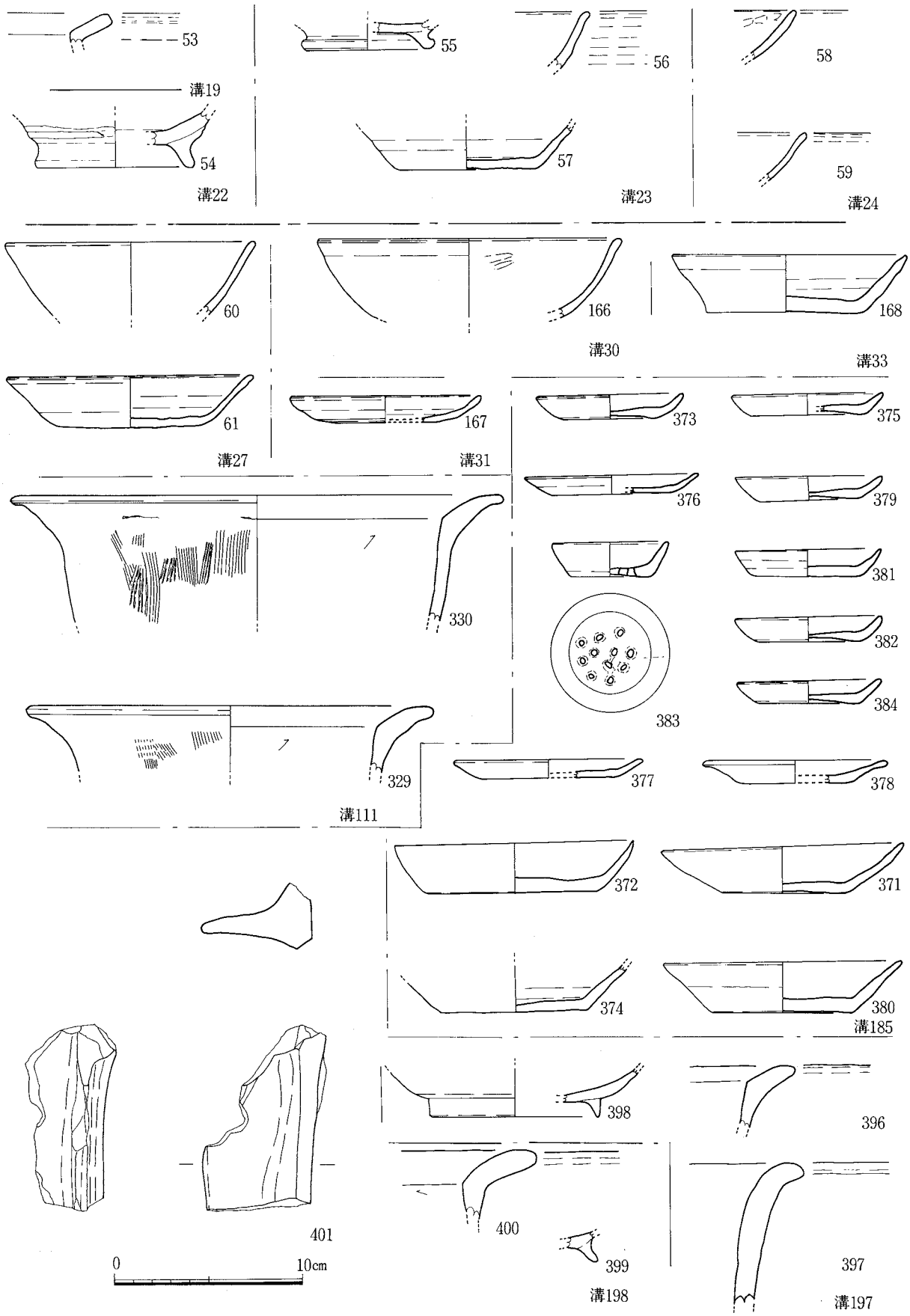


Fig.10　溝出土土器実測図3（1：3）

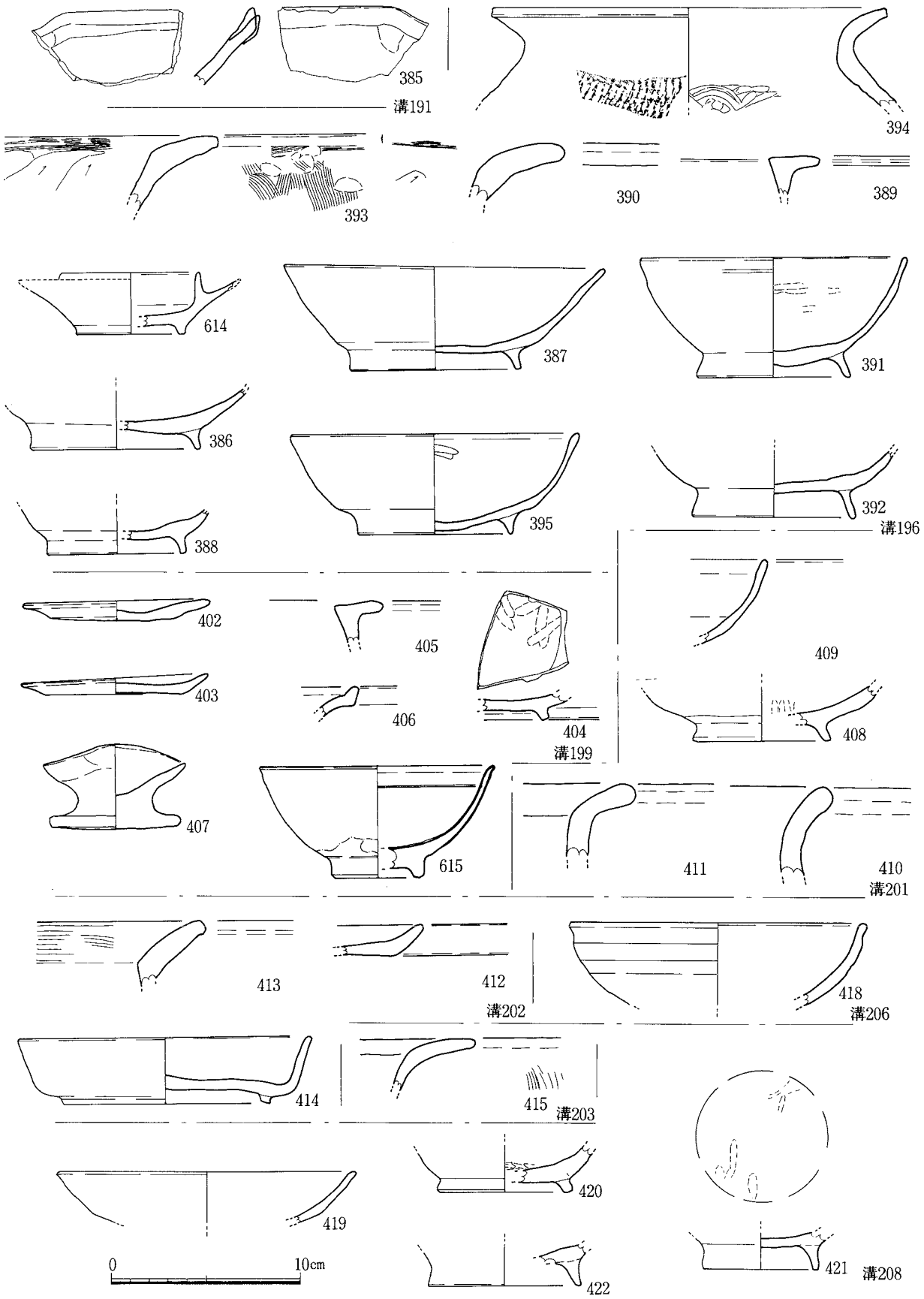


Fig.11　溝出土土器実測図4（1：3）

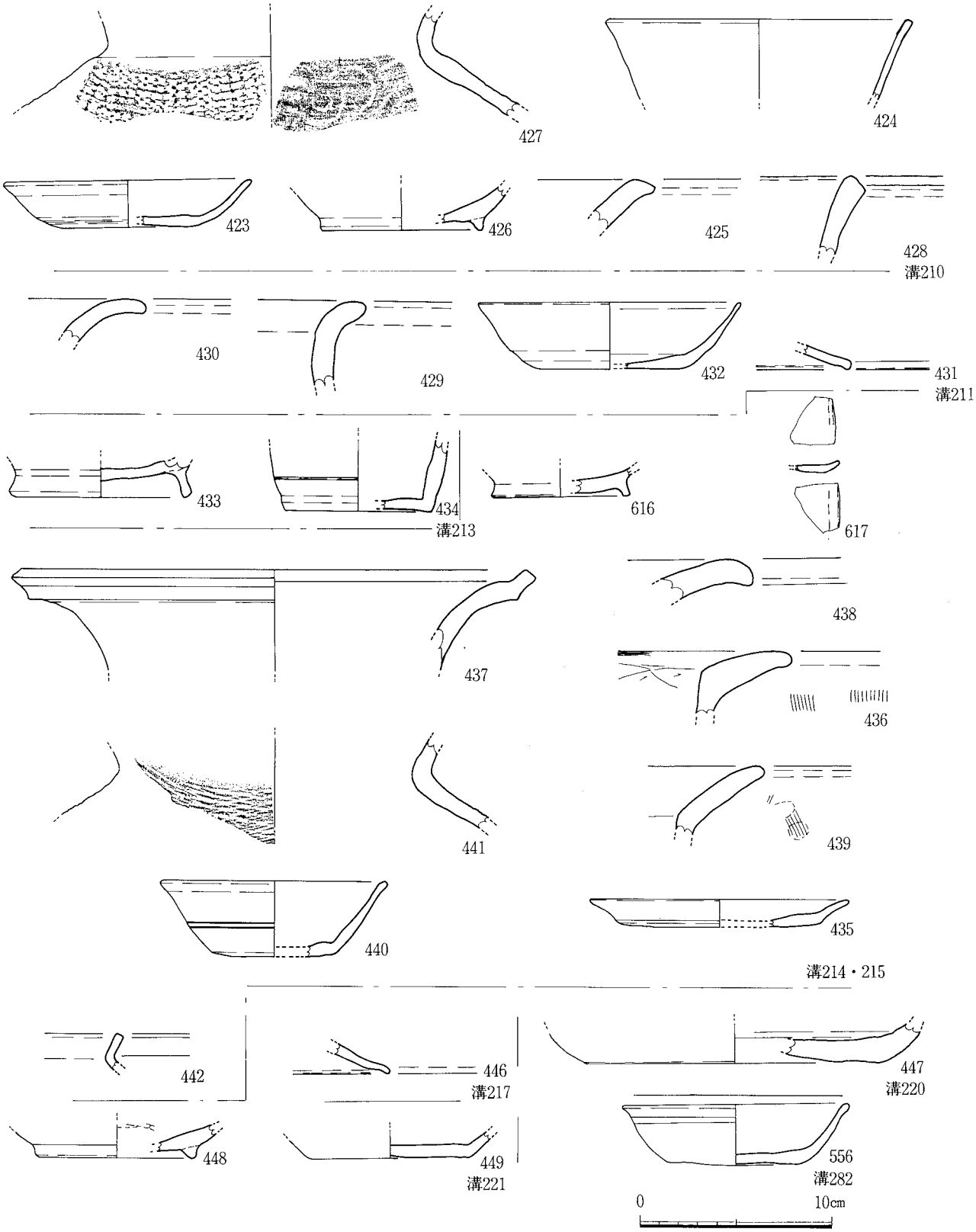


Fig.12　溝出土土器実測図5（1：3）

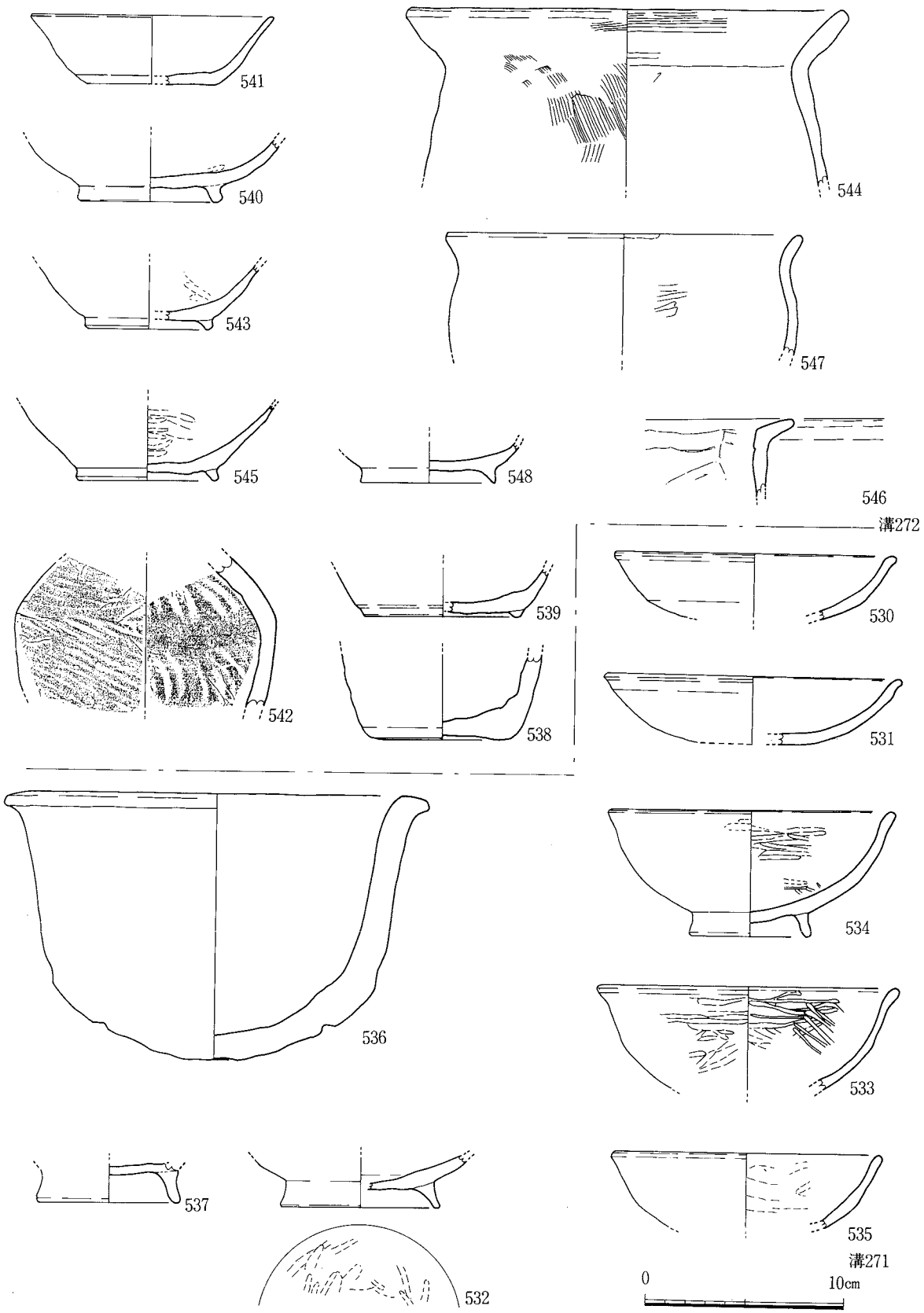


Fig.13　溝出土土器実測図6（1：3）

溝出土土器

溝出土土器をFig. 8～Fig.13に示した。北半区検出溝の土器、溝28出土土器、南半区検出溝出土土器、旧河道出土土器の順に述べる。

北半区検出溝の土器

溝1出土土器はFig. 8に示した。2～4は土師器坏である。2は低い高台を持つ。底部は4が糸切りで、2は板目に消されてよくわからないが、ヘラ切りのようである。6、5は小皿である。いずれも板目が残り、底部調整がよくわからないが、5はヘラ切りで、6は糸切りと思われる。1は土師器椀である。15は灰色を呈するが、土師器椀と思われる。外面は回転ナデ、内面もナデを施す。11は須恵器壷である。外面はカキメ、内面は同心円文の当て具痕が見られる。8は須恵器鉢口縁部。端部は垂直に坦面をなす。13は甕口縁であろう。端部は断面方形で、口縁下に沈線を持つ。14は脚の可能性もある。外面の屈曲部より下は、格子目もしくは擬格子叩きを回転ナデにより消している。12は須恵器坏である。7は混入の弥生土器である。9、10は土師器甕である。579は象嵌を持つ青磁片。580は型押しの浮文を持つ白磁である。これらの遺物は時期幅があるが、糸切りとヘラ切りを混えることなどから、溝1の時期を12世紀中頃を前後する頃に考えておく。

溝2出土土器をFig. 9に示した。土師器坏、小皿の底部は糸切りである。18、19は土師質の鍋。内面に横方向のハケメを密に施し、外面は煤が付着する。20は龍泉窯系の青磁、見込に刮花文らしき文様を刻む。畳付から外底部にかけて露胎。溝1と溝2は時期的にはそれほど隔たっていないと考えられる。

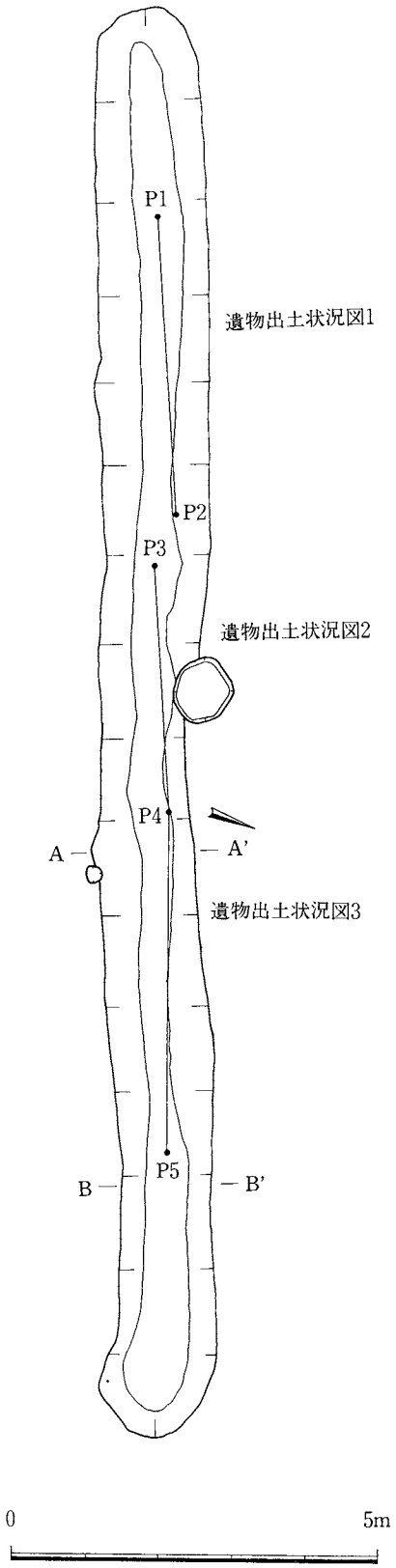
Fig. 8の24は溝12出土の土師器であるが、器形不明。22（溝7）は黒色土器A類の底部。28(溝17)は東播系須恵器である。Fig. 9の33～52は溝18出土である。土師器坏、小皿は糸切り底で、35は口径13cm、36は12.6cmである。椀口縁部は、29、30が土師器、49、50は黒色土器B類。高台付きの底部は、37、42、48が土師器。ただし48は外底部のみ黒変する。43、47が黒色土器A類。38、51が黒色土器B類である。39は焼成の甘い須恵質ないし瓦質を呈する。内面に摺目らしい条線が見られ、須恵質の摺鉢であろう。46は土師器の甑と考えられる。

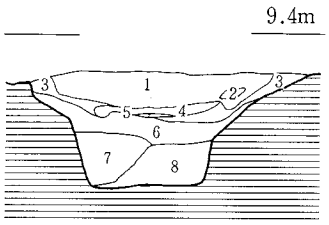
Fig.10の溝19から111出土土器について略述する。53は土師器である。椀口縁部は56、59、60は土師器。58は黒色土器A類。底部は54が土師器。55は黒色土器B類。166は黒色土器A類。土師器坏、小皿はヘラ切り底が57、61、167。糸切り底が168である。

溝28出土土器(Fig. 15～17)

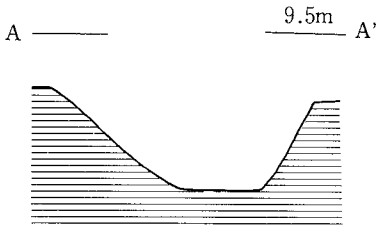
溝28から出土した多量の土師器坏、小皿他の土器をFig.15～Fig.17に示した。Fig.15には小皿を図示した。底部はいずれも糸切りである。法量が直接測れるほど遺存しているもので見ると、口径は最小6.8cm(77、109など4点)、最大8.4cm(133)で、平均は7.4cm程になる。口縁部がかなり開き、底径の小さいものが主流を占めるが、114のようにあまり開かないものから、99、100のように大きく開くものまである。また66、151のように穿孔されるものがあり、いずれも焼成前の穿孔である。72、121は口縁端部に煤が付着し、灯明皿として使われたことがわかる。107は器形が異なり、径が小さく器高が高い。小皿B類である。Fig.16と17に坏を図示した。すべて糸切り底である。口径は最小12cm(115、129、157)、最大13.9cm(161)、平均は12.8cm程になる。68、85、102～106、149など底径が小さく体部が開く坏B類が多数含まれるが、その他の坏（A類）も比較的体部が開く器形を示す。

Fig.15の165は土師質の摺鉢である。口縁端部は坦面をなす。内面に櫛状工具で摺り目を入れる。外面はハケメをナデ消し、底部付近にハケメが残る。Fig.17には陶磁器類も図示した。62は高麗製の象嵌青磁碗であろう。釉調は灰味の強い緑色で、内面に白色土で圏線と花文を象嵌する。63は陶器





1　灰黄色砂質、暗褐色粘土混入
(2.5Y・6/2)（10YR・3/4)
2　黒褐色砂質
(10YR・3/1)
3　灰色粘土質、暗褐色粘土混入
(10Y・5/1)
4　3に砂利混入
5　砂利
6　灰色粘土質、暗褐色粘土の混入多い
(N・4/1)
7　6と灰白色砂が縞状に堆積
(5Y・7/2)
8　6に同じ、暗褐色粘土の混入少ない



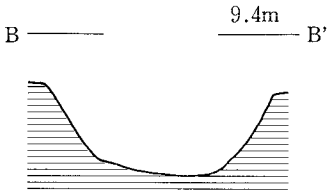


Fig.14　(1)溝28実測図（1：100、1：40）

Fig.14 (2)溝28遺物出土状況実測図（1：20）

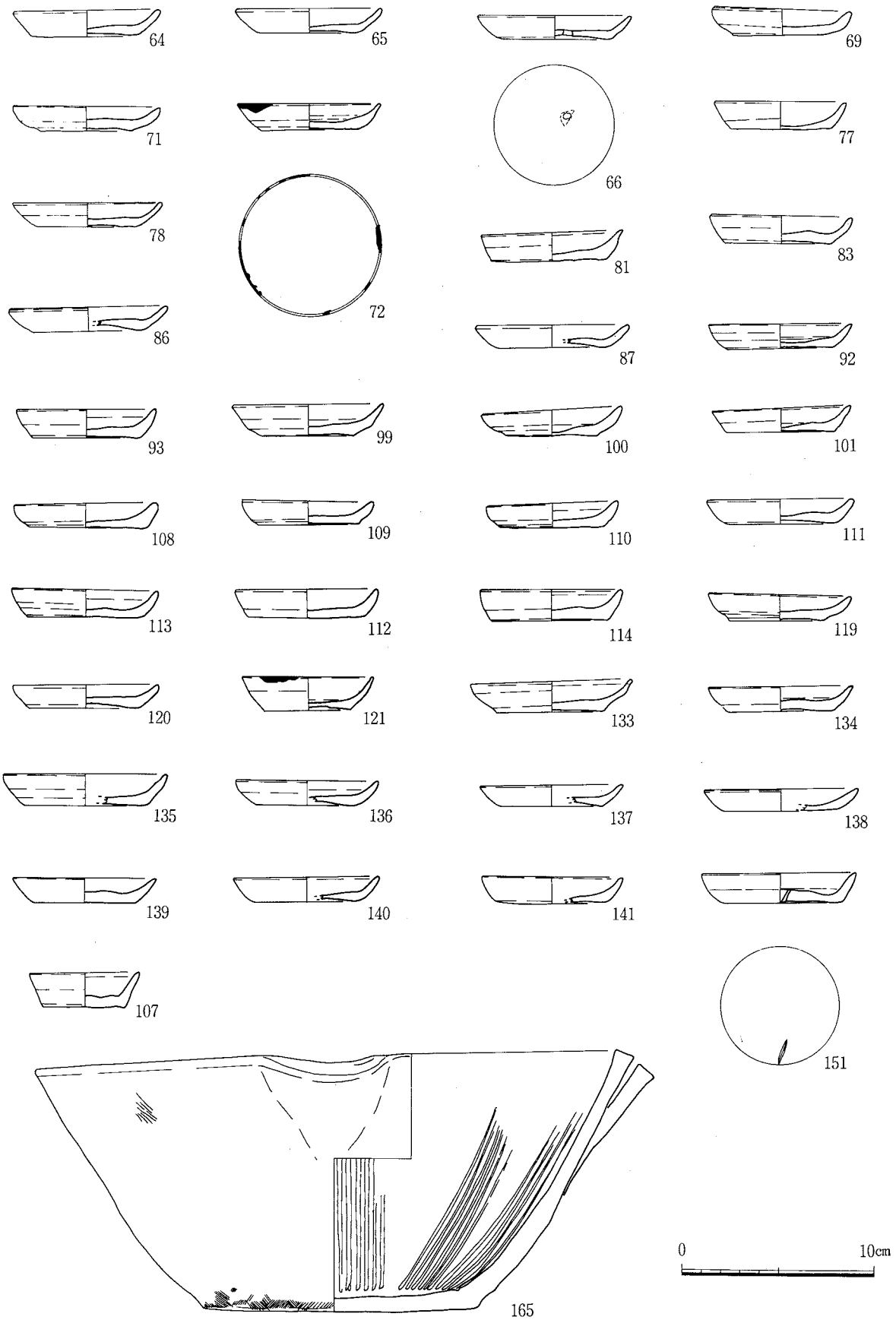


Fig.15　溝28出土土器実測図1（1：3）

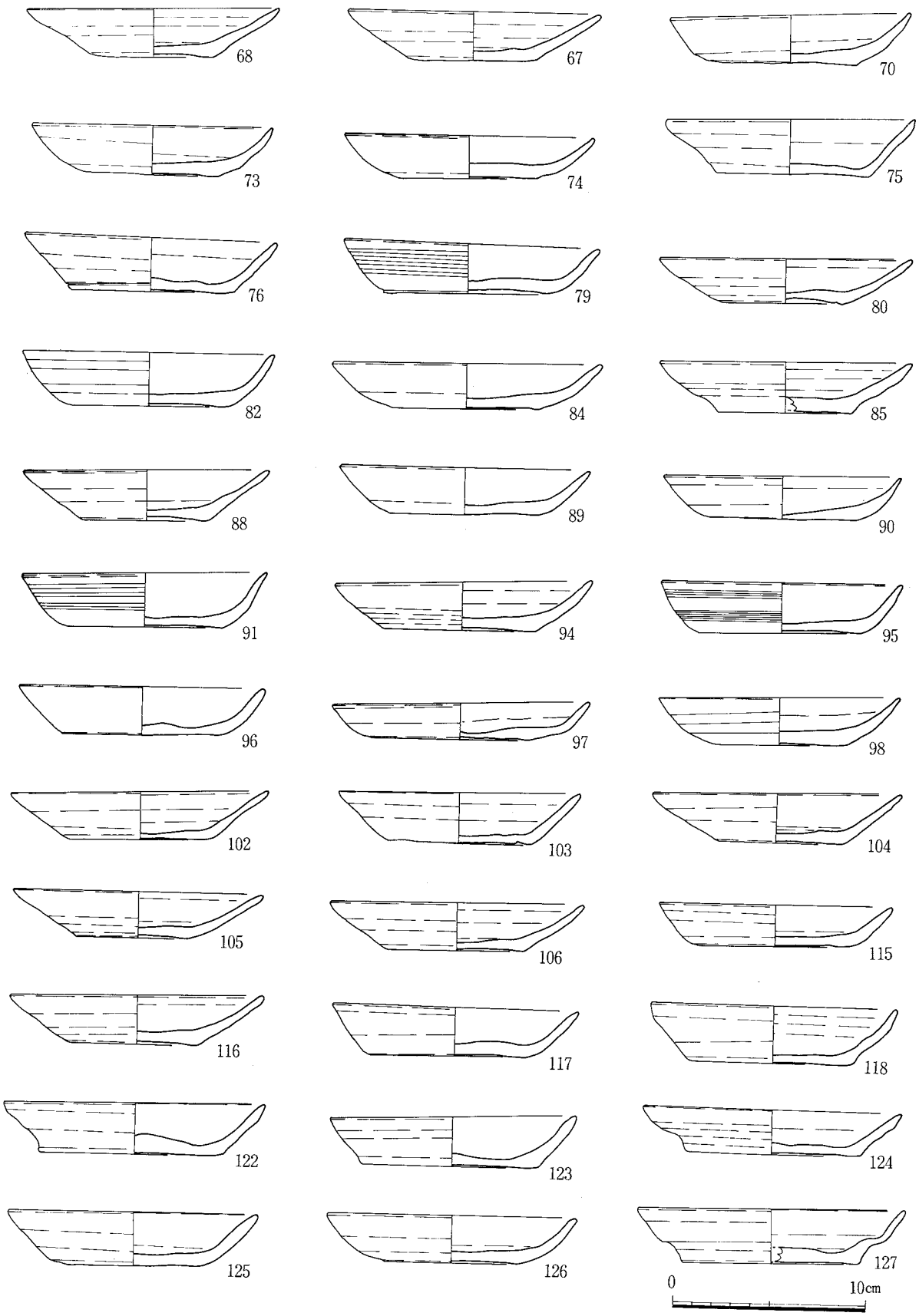


Fig.16　溝28出土土器実測図2（1：3）

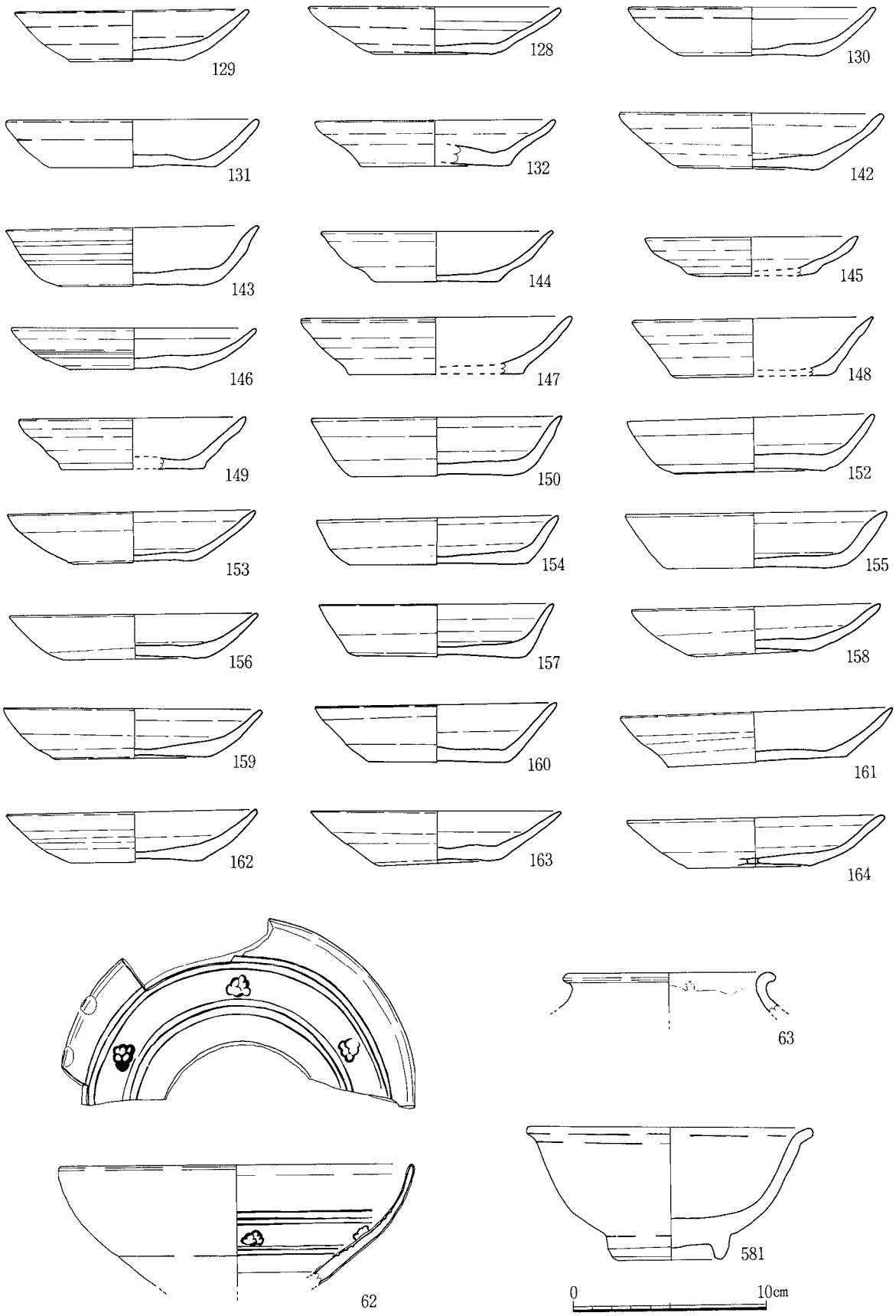


Fig.17　溝28出土土器実測図3（1：3）

の壷である。外面に暗い緑色の釉がかかる。口縁部は短く屈曲する。581は龍泉窯系青磁碗である。体部があまり開かず、口縁は厚く、外反する。畳付まで施釉され、外底部の釉は削り取る。以上の一括遺物の示す年代は14世紀後半代と考えられる。

南半区検出溝の土器

溝185出土土器をFig.10に示した。土師器小皿は口縁部が立ち、糸切り底で、口径7.5cm～8cmのものと、口縁が開き扁平で、ヘラ切り底で、口径9.5cm～10cmの2種がある。また383は糸切り底であるが、器形が異なり、口径が小さく器高が高い。底部に11の穿孔を施す。坏は糸切り底で、口径は12.6cm～13cmである。糸切り底とヘラ切りの二つの遺物群は、明らかに時期差がある。糸切り底の坏と小皿は、東端からまとまって出土したもので、時期の異なる遺構が重複していた可能性が高い。

溝196出土の土器をFig.11に示した。椀は386、387、388は土師器。387は直線的に開く体部を持つ。391、392は内黒の黒色土器A類。391、392は外面は明るい橙色を呈する。395は黒色土器B類。外面は回転ナデを施す。614は青磁の茶托である。ほとんど全面施釉で、畳付の所々を欠く程度である。越州窯系。556(Fig.12)は282部分から出土した土師器坏である。ヘラ切り底で口径12cmを測る。

溝199出土土器は同じくFig.11に図示している。402、403の土師器小皿はヘラ切り底である。口径は9.7cmである。404は瓦器である。407は脚台付の耳皿。脚台は円板状を呈し、坏部は外側から押さえ付けて屈曲させる。406は須恵器。405は弥生土器である。615は白磁の碗で、底部は厚く、口縁端は端反りになる。高台やや上位から底部にかけて露胎。

溝201出土の409は土師器椀で、408は内黒の黒色土器A類。溝202出土の土師器小皿412はヘラ切り底。414は須恵器坏である。418(溝206)は土師器椀。溝208出土の底部420、421は黒色土器A類。422は土師器である。

Fig.12の溝210出土土器は、427、424は須恵器である。424は坏であろう。423はヘラ切り底で、口径13cmを測る。426は黒色土器A類である。土師器428は端部にヨコナデにより坦面をなすため口縁部に復元したが、甑の底部の可能性もある。溝211出土の土師器坏432はヘラ切りで、口径13.6cmほどに復元される。溝213出土底部433は土師器。434は須恵器。溝215出土の底部616、皿617は緑釉陶器である。いずれも外底部まで全面施釉、617は体部内面にミガキを施す。胎土は土師質である。437は須恵器。脚かも知れない。441は外面に平行叩きを施す。440、435は共にヘラ切り底である。溝215出土土器は、土壙214出土土器と分別し得なかった。

溝272出土遺物をFig.13に示した。土師器坏541はヘラ切り底。復元口径は12cmを測る。椀類はいずれも内黒の黒色土器A類。また甕547も黒色土器A類である。538、539、542は須恵器。542は外面に平行叩きを施し、肩部はナデ消す。

旧河道271出土土器もFig.13に示した。土師質の鍋536は厚手で、口縁部は短く屈曲する。外面は底部と体部の境付近を粗く削り、全面に粗いナデをかける。530、531は丸底の坏である。椀532、537は黒色土器A類。533～537は黒色土器B類である。

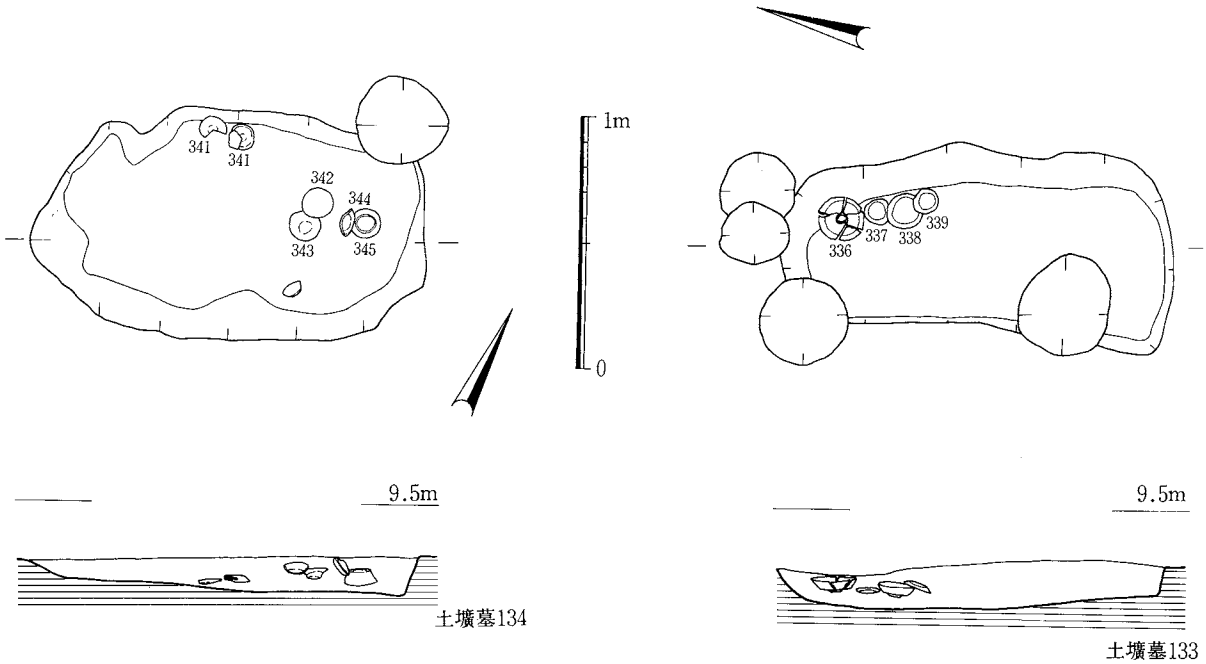


Fig.18　土壙墓実測図（1：30）

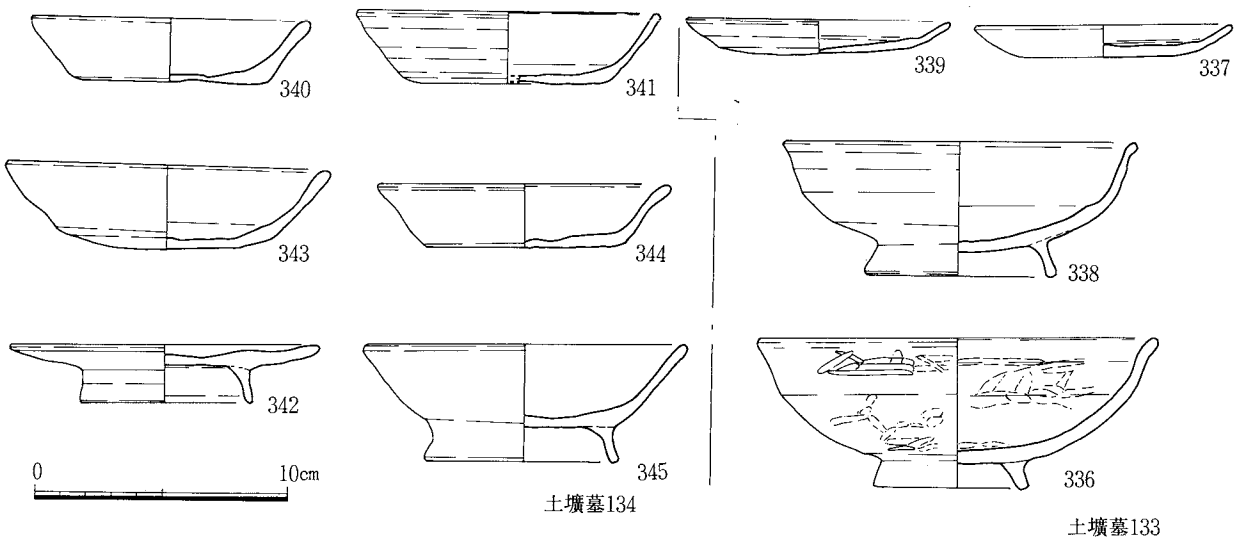


Fig.19　土壙墓出土土器実測図（1：3）

（2）土壙墓

埋葬遺構と考えられる土壙が2基検出された。

土壙墓133(Fig.18、19)

土壙墓133は隅丸の長方形を呈する。長1.5m、幅0.7mを測る。北東隅に副葬遺物がまとまって出土している。

337、339は土師器小皿である。337は底部が丸みを持つ。339は底部に板目が見られる。337は口径10cm、339は10.4cmを測る。338は土師器椀である。口縁端部は外反する。底部は丸みを帯び、高くて踏張る高台を持つ。太宰府分類で言う丸底の坏Cに当たるか。336は黒色土器B類の椀である。径の小さい高台が付く。口縁端部は緩やかに外反し、内外面に粗い磨きを施す。

土壙墓134(Fig.18、19)

133の南側で検出した。133に直交し、東西に主軸をむく。検出時は長楕円形を呈しているが、本来は133と同じく長方形と考えられる。長1.05m、幅0.9mを測る。東端と、北側に副葬遺物が置かれている。340、341、344は土師器坏である。底部はヘラ切りで、板目が見られる。340は口径10.8cm、341は12cmを測る。344は11.5cmを測る。343は底部が丸みを帯びる。ヘラ切りである。口径13cmを測る。345は土師器の椀で、高台が付く。体部は直線的に開く。口径12.8cmを測る。342は高台付きの土師器皿である。口径12cmを測る。

（3）土壙

土壙は前述のように、調査時において一定の規模と深さを持ち、人為的になんらかの目的を持って掘り込まれたと判断したものに遺構番号を付した。その内一定程度の遺物が出土したものを中心に報告する。また深さから見て井戸の可能性あるものを含んでいる。

土壙34(Fig.20)

E2区で検出した。溝1、土壙89、35に切られ、規模、形態とも不明である。土壙90とはあるいは同一遺構かも知れない。この周辺の遺構はいずれも溝111を切る。

出土土器(Fig.21)

図示した土器は172が須恵器で、他は土師器である。171、173、174は甕である。口縁は強く屈曲して開く。外面はハケメ、内面はケズリ、口縁部はヨコナデを施す。169、170は椀である。170は高台の径が小さく高い。169は径が大きく低い。175～177は竈である。177は炊口鍔基底部、175、176は基部である。172は須恵器の壷か。外面は回転ヘラ削りを一部ナデ消す。

土壙37(Fig.20)

D2区で検出した。楕円形を呈し、長径2.5m、短径1.7mを測る。壁は比較的直に立つが、検出面から30cmほどと浅い。

出土土器(Fig.21)

178、179は瓦器椀である。高台は小さく低い。582は須恵器か。一部に緑色の釉が認められるが、自然釉と思われる。高台は削り出し、蛇の目形を呈する。583は白磁碗。

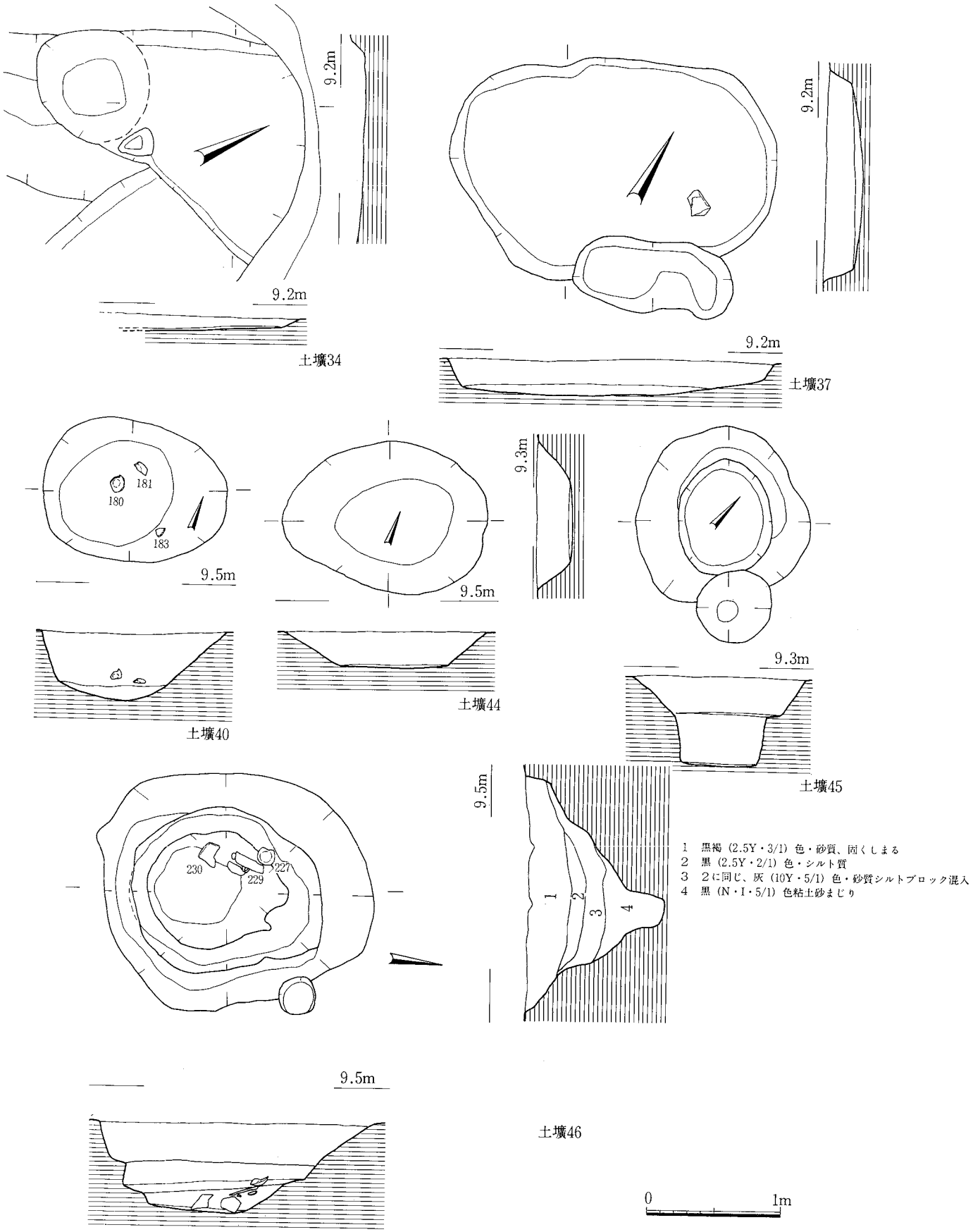


Fig.20 土壙実測図1（1：40）

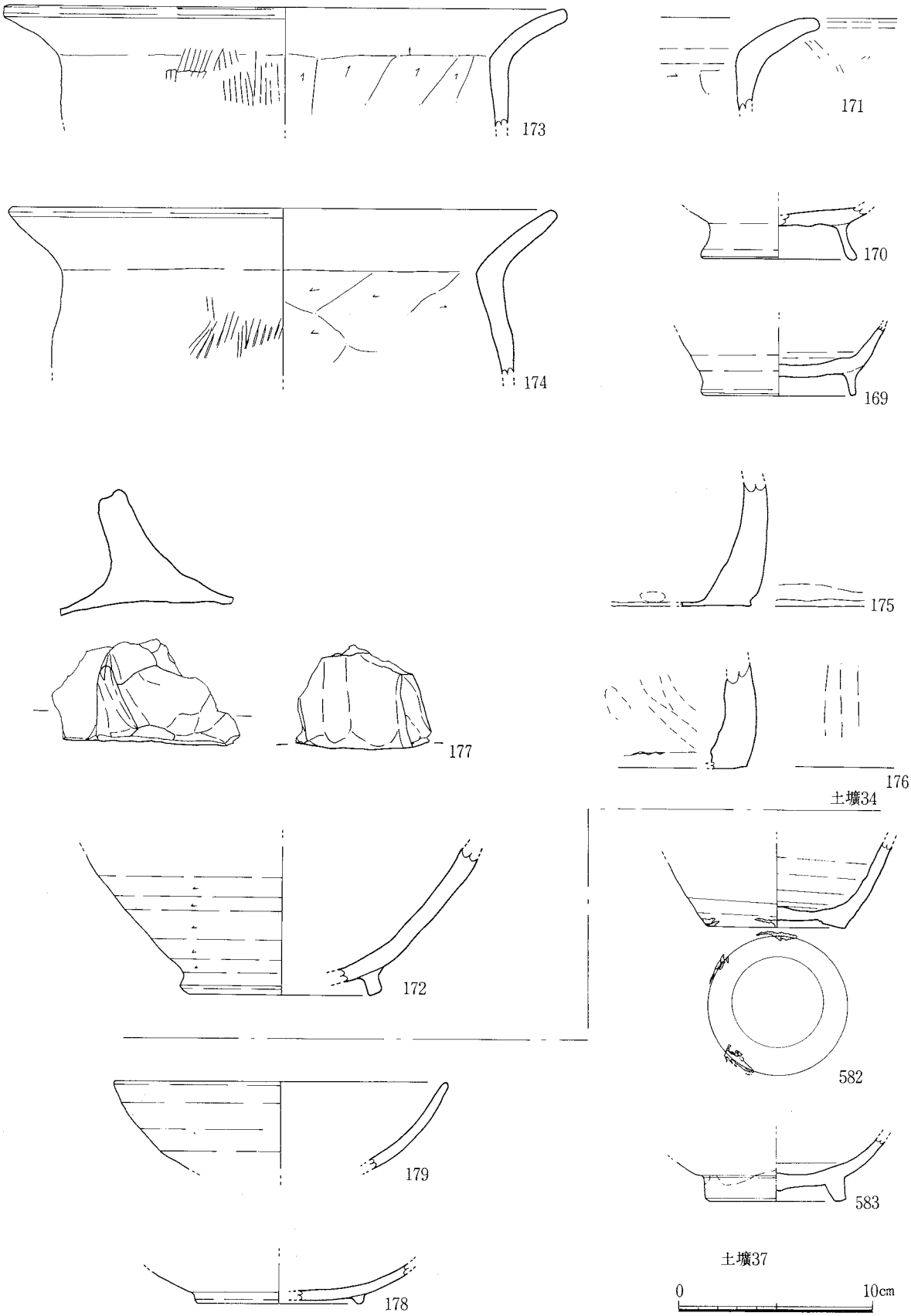


Fig.21　土壙出土土器実測図1（1：3）

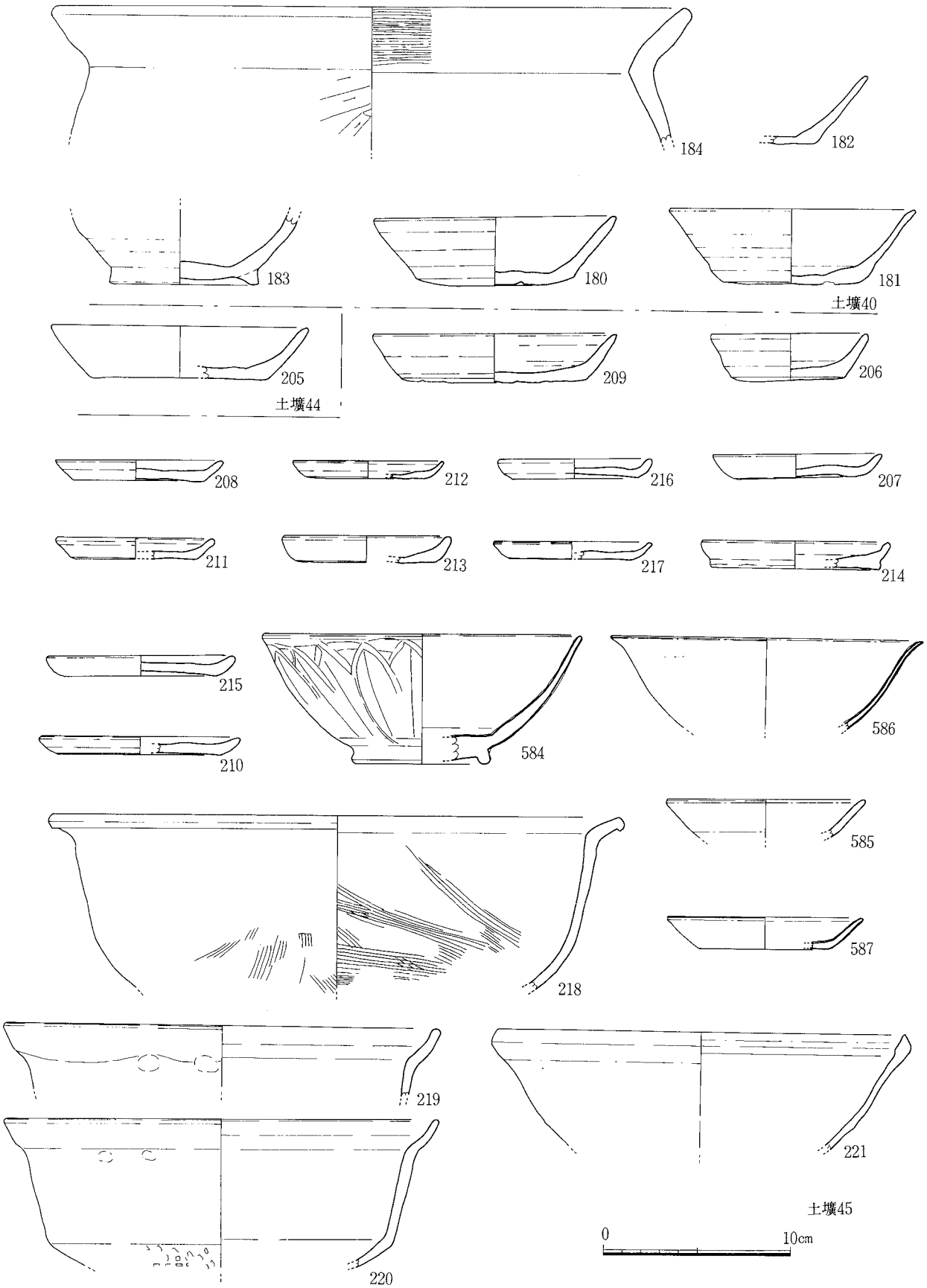
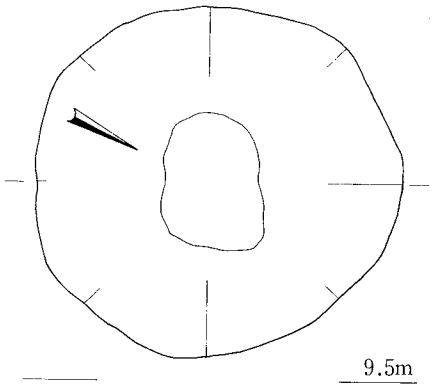
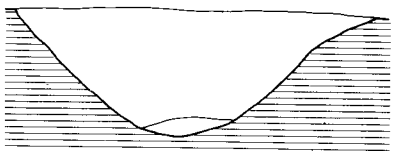
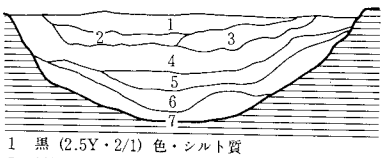


Fig.22　土壙出土土器実測図2（1：3）

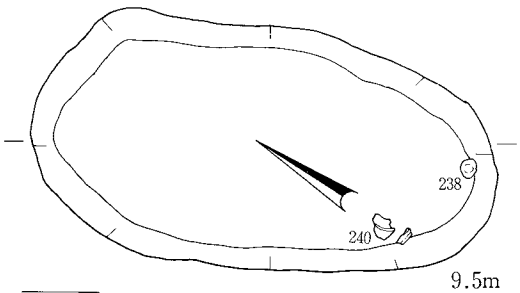




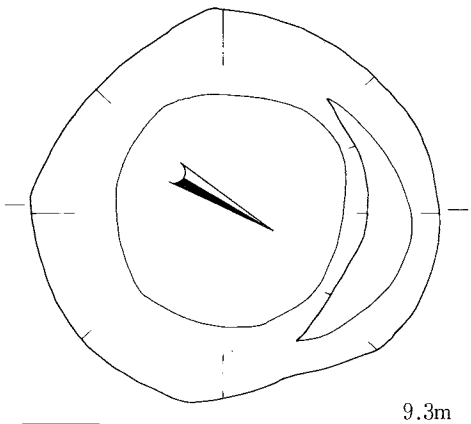


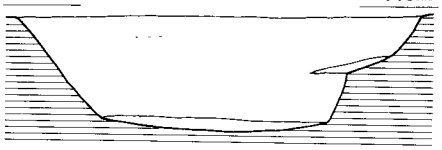
土壙48

1　黒（2.5Y・2/1）色・シルト質
2　黒褐（10YR・3/1）色・シルト質
3　灰オリーブ（5Y・5/3）色・砂質
4　黒褐（2.5Y・3/1）色・シルト質
5　灰（5Y・4/1）色粘土質、1～2㎜の砂礫含む　3の砂混入
6　5に同じ、3の混入わずか
7　黒（N・15/）色粘土、水分多い、炭化した木片含む

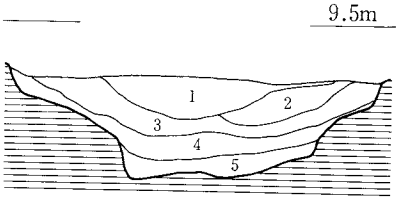


土壙49

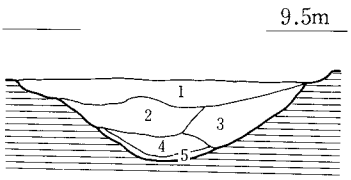




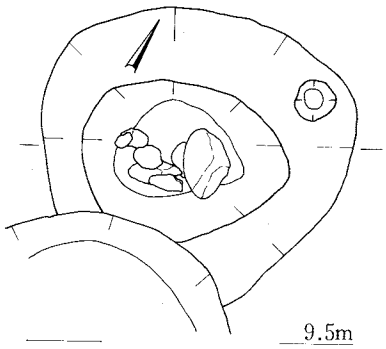
土壙50

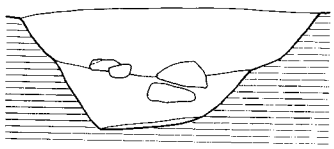


1　黒（2.5Y・2/1）色・砂質、礫含む
2　黒褐（2.5Y・3/1）色・シルト質
3　黒（2.5Y・2/1）色粘土・左側上部に黒褐色（10YR・3/1）の砂が多量に混入
4　黄灰（2.5Y・4/1）色砂質、オリーブ灰（2.5GY・5/1）粘土ブロック混入
5　3に同じ、礫多い、オリーブ灰色粘土ブロック混入



1　黒褐（10YR・3/1）色砂質、灰オリーブ（5Y・5/2）色砂質、地山ブロック混入
2　1に同じ、地山ブロック混入なし
3　1に似る
4　灰褐（10YR・4/1）色粘土質、砂礫を多く含む
5　黒（5Y・2/1）色粘土質、砂礫を多く含む





土壙51

Fig.23　土壙実測図2（1：40）

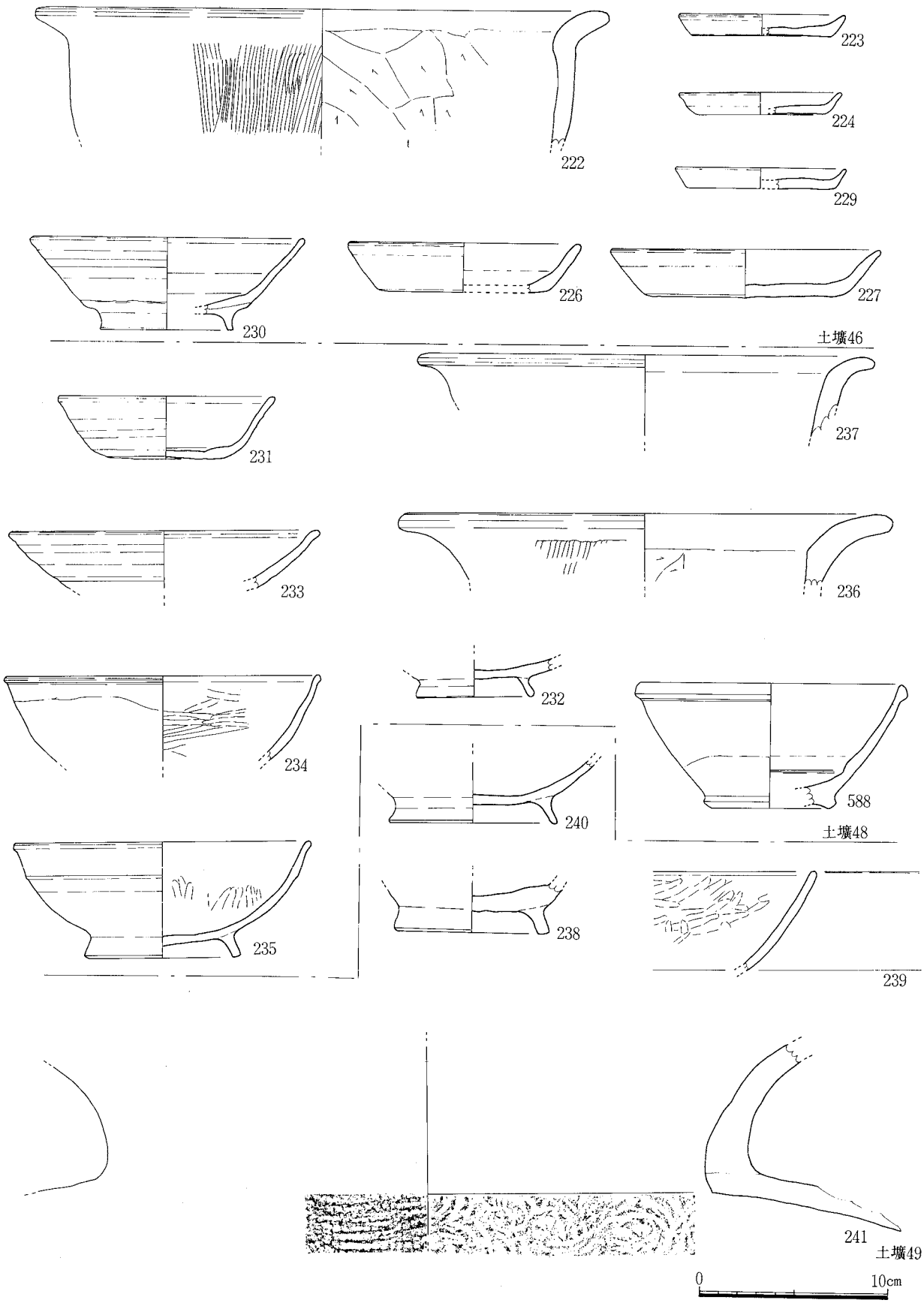


Fig.24　土壙出土土器実測図3（1：3）

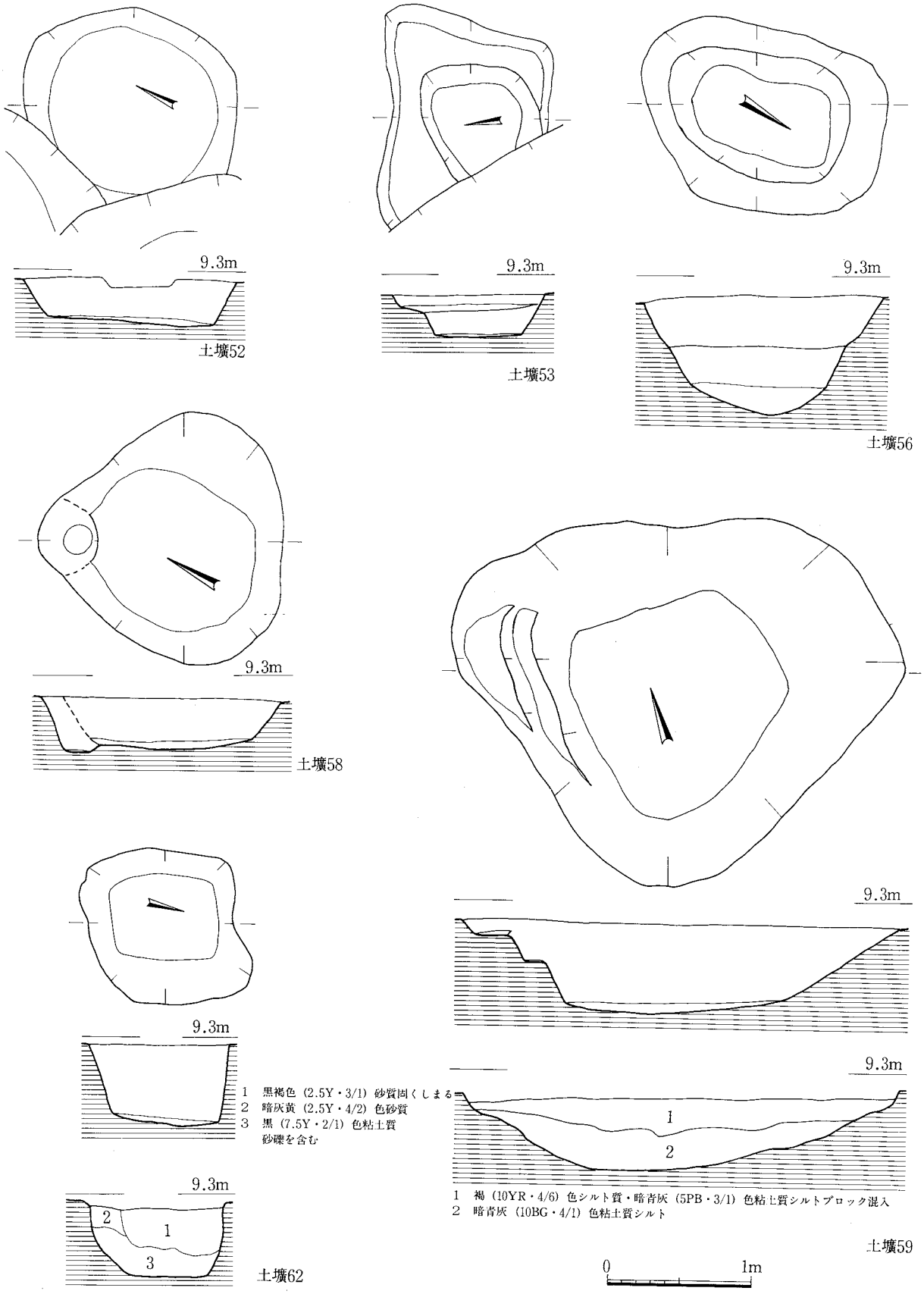


Fig.25　土壙実測図3（1：40）

土壙40(Fig.20)

Ｅ２区で検出した。東西に長い楕円形を呈し、長径1.6m、短径1.1mを測る。壁は東側が緩やかな斜面をなし、床面はほぼ円形を呈する。検出面からの深さは50cmである。比較的大きな破片が出土した。

出土土器(Fig.22)

図示したものはいずれも土師器である。184は甕である。内面はケズリを施す。180～182は坏である。ヘラ切りで、口径13cmほどに復元できる。183は高台付きの坏である。

土壙44(Fig.20)

Ｄ５区で検出した。東西に長い楕円形を呈する。長径1.5m、短径1.1mを測る。検出面からの深さは30cmほどで、壁も緩やかに落ちていく。

出土土器(Fig.22)

205は土師器坏である。破片が小さく口径はやや疑問。底部は糸切りである。

土壙45(Fig.20)

Ｄ５区で検出した。ほぼ円形を呈する。径1.3mを測る。上半部は壁が緩やかに落ちるが、検出面からの深さ30cmの所から、壁が直に立ち、円筒状になる。上半部は壁が崩れた可能性もあるが、検出面では比較的整った円形なので、本来２段掘りになるのであろう。床までの深さは70cmである。

出土遺物(Fig.22)

209は土師器坏。底部は糸切りで、板目がある。206は瓦質を呈する。やや深い小皿である。底部は糸切り。207、208、210～217は土師器小皿である。207以下の８個は、やや小片で疑問のあるものもあるが、ほぼ口径９cmである。215、210は若干大きく10cmを測る。底部はいずれも糸切りで、207、208、215、216などには板目が見られる。218～220は土師質の鍋である。218は屈曲して開く口縁をもち、内面にハケメが見られ、外面は煤が付着する。219、220は内湾しながら開く受口状の口縁を呈する。胴部は屈曲して、下半部には格子目叩きが見られる。外面には煤が付着する。221は東播系の須恵器であろう。584は龍泉窯系青磁。585～587は口禿の白磁。586は碗でそれ以外は皿である。

土壙46(Fig.20)

Ｄ５区で検出した。東西1.7m、南北２mほどの楕円形を呈する。検出面からの深さ１mを測り、井戸の可能性もある。壁は一部階段状になる。壁に密着して、土器、板材、礫などが出土している。

出土遺物(Fig.24)

図示した土器はいずれも土師器である。222は甕。口縁部は短く強く屈曲する。外面はハケメ、内面はケズリ。223、224、229は小皿。底部は糸切りで、いずれも破片であるが、口径９cmほどに復元できる。226、227は坏である。糸切り底で、227の口径は14cm。230は高台付きの坏である。

土壙48(Fig.23)

Ｅ４区で検出した。径1.9mの円形の土壙である。壁は緩やかに落ち、平坦な床面を持たない。検出面からの深さは70cmを測る。

出土遺物(Fig.24)

231は土師器坏。底部ヘラ切りで、口径12cmを測る。233も坏口縁部であろう。236、237は土師器甕

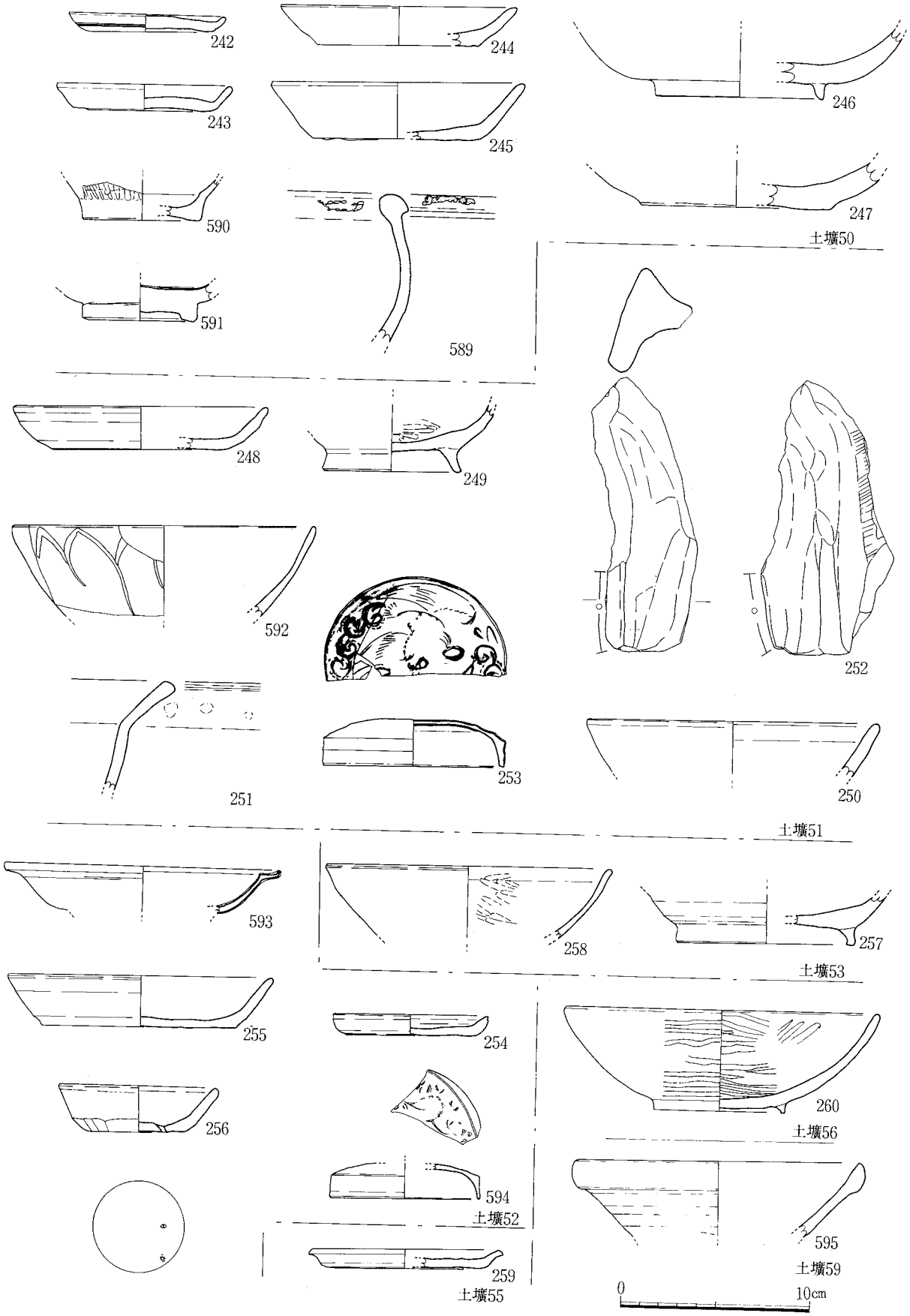


Fig.26　土壙出土土器実測図4（1：3）

である。口縁部は強く外反する。234、235は内黒の黒色土器である。234は口縁部外面まで黒変する。232は黒色土器B類である。高くて径の小さい高台である。588はⅣ類の白磁である。体部はあまり開かない。

土壙49(Fig.23)

E4区で検出した。南北に長い長楕円形を呈する。南北2.5m、東西1.3mを測る。壁は比較的立つが、深さは検出面から20cmほどと浅い。南端の床面近くより、土師器片などが出土した。

出土遺物(Fig.24)

240は土師器坏である。高く踏張る高台が付く。238も高台片であるが、高台、底部共に厚手で、かなり大形品になるようである。239は内黒の黒色土器A類。241は須恵器の大甕である。肩が強く張り、外面に擬格子叩き、内面には同心円文の当て具痕が見られる。

土壙50(Fig.23)

D4区で検出した。土壙51、52を切る。南北2.2m、東西2.1mと、わずかに南北に長い円形を呈する。壁は緩やかに落ち、北側にはステップ状の段を持つ。床は径1.2mの円形で、平坦である。検出面からの深さ60cmを測る。

出土遺物(Fig.26)

242、243は土師器小皿である。糸切り底で、径がやや異なり、242は8.3cm、243は9.3cmを測る。244、245は土師器坏である。糸切り底。246は焼成の甘い須恵器であろうか。貼り付けの高台を持つ底部でかなり厚手である。247も須恵器であろう。やや突出する平底である。底部、体部とも不定方向のナデを施す。589は陶器の鉢である。玉縁口縁をなし、端部に砂目が残る。内面のみに灰色の釉をかける。590は外底部露胎で、内面には暗緑色の釉がかかる。591は青磁碗の底部。

土壙51(Fig.23)

D4区で検出した。土壙52を切り、土壙50に切られる。径1.6mほどの円形であろう。床はやや西よりで、平坦である。床面よりやや上位に礫が投棄されたような状態で出土した。検出面からの深さは60cmを測る。

出土遺物(Fig.26)

248は土師器坏で、糸切り底である。口径は13.5cm程に復元される。249は内黒の黒色土器A類。高く踏張る高台が付く。252は竈片である。炊口の鍔片であろう。250は須恵質ないしは瓦質を呈する口縁部片である。内外面回転ナデを施す。251は土師質の鍋であるが、焼成は極めて堅緻である。253は青白磁の合子蓋である。口縁部内面は露胎。天井部の文様は浮き彫りである。592は龍泉窯系の青磁碗。鎬のない蓮弁を刻む。

土壙52(Fig.25)

D4区で検出した。土壙50、51に切られる。径1.5m程の円形であろう。壁は緩やかに落ち、床面は平坦である。検出面からの深さは30cmを測る。

出土遺物(Fig.26)

255は土師器坏。糸切り底で、口径14cm程に復元される。254は土師器小皿。糸切り底で板目が見られる。256は瓦質の小皿である。底部の周囲を削り、面取する。底部に穿孔があり、一つは貫通して

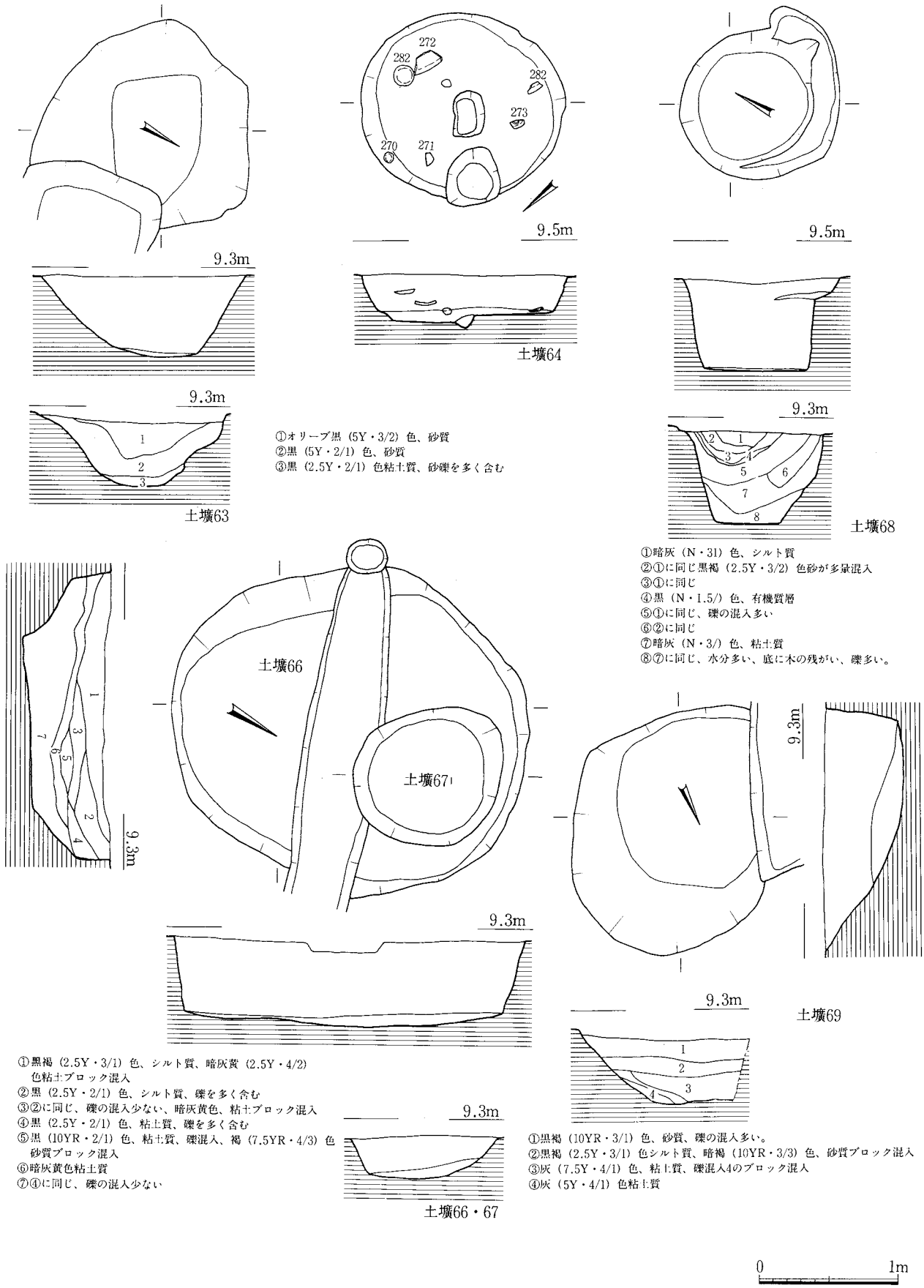


Fig.27　土壙実測図4（1：40）

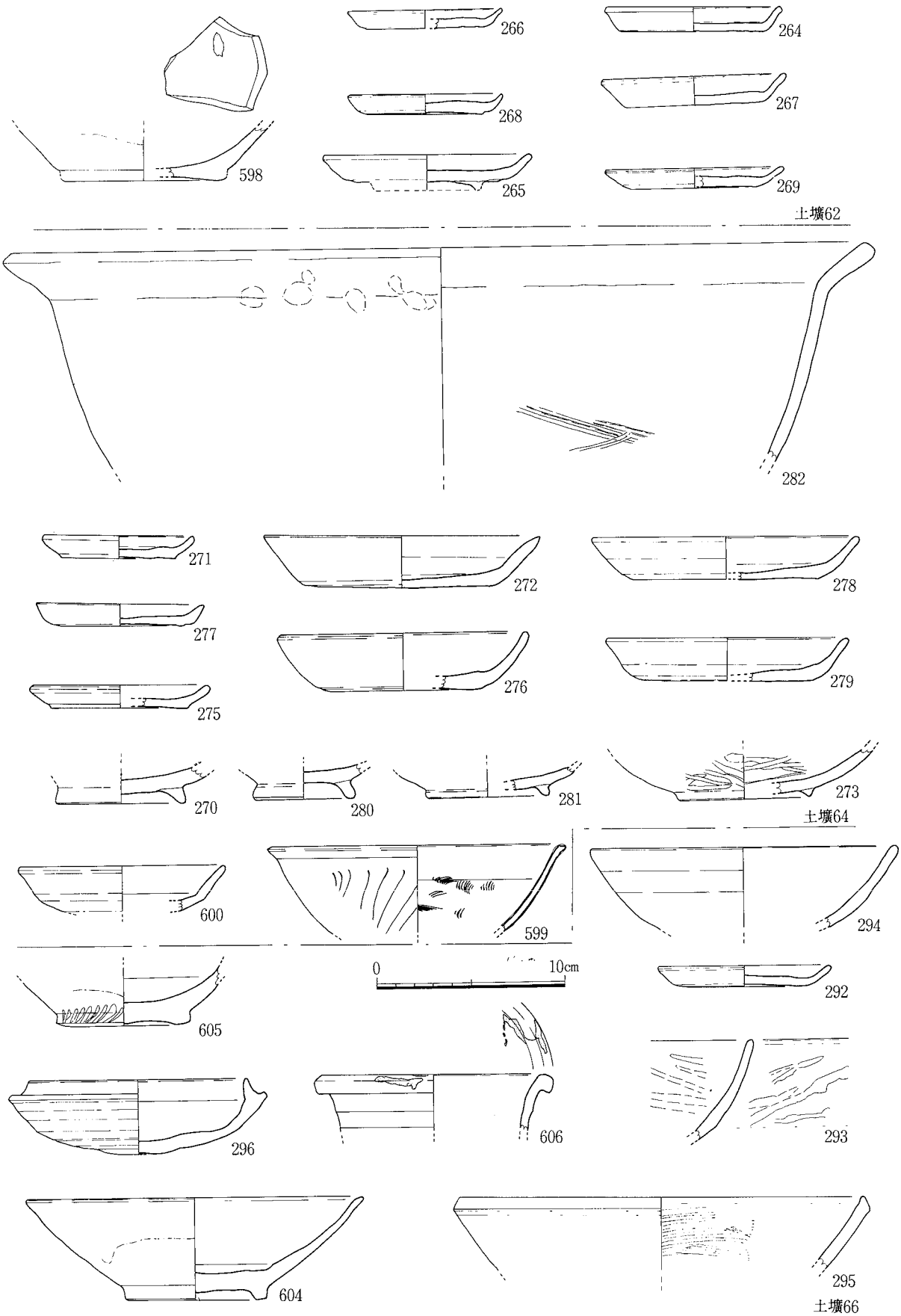


Fig.28　土壙出土土器実測図5（1：3）

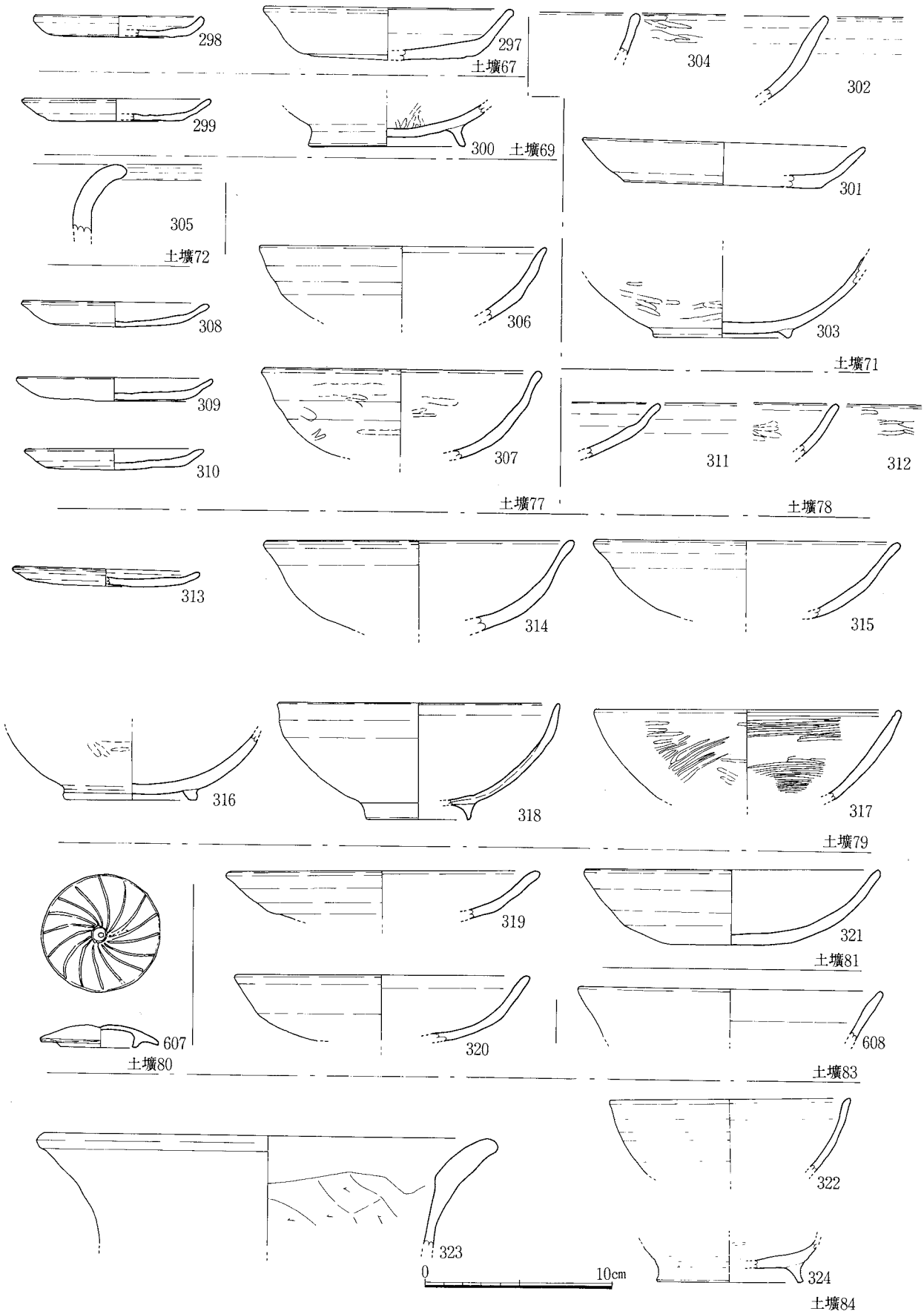
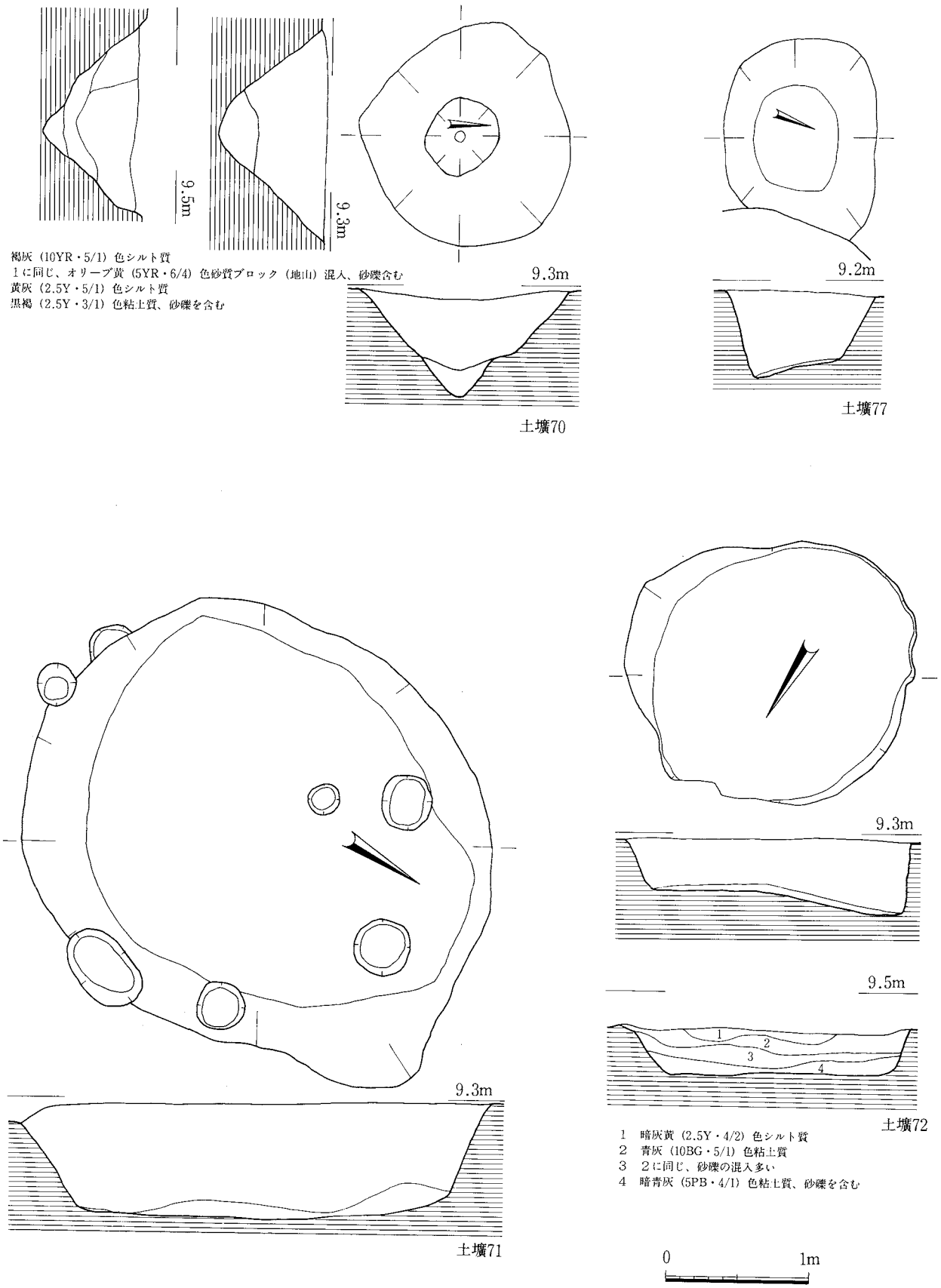


Fig.29　土壙出土土器実測図6（1：3）



1　褐灰（10YR・5/1）色シルト質
2　1に同じ、オリーブ黄（5YR・6/4）色砂質ブロック（地山）混入、砂礫含む
3　黄灰（2.5Y・5/1）色シルト質
4　黒褐（2.5Y・3/1）色粘土質、砂礫を含む

1　暗灰黄（2.5Y・4/2）色シルト質
2　青灰（10BG・5/1）色粘土質
3　2に同じ、砂礫の混入多い
4　暗青灰（5PB・4/1）色粘土質、砂礫を含む

Fig.30　土壙実測図5（1：40）

いない。593は龍泉窯系青磁の小鉢である。口縁が受口状に屈曲する。釉は厚い。594は青白磁の合子蓋。253とよく似るが、接合しない。釉調も594がやや暗い。

土壙53(Fig.25)

Ｅ５区で検出した。溝１に切られる。南北1.2m、東西1.6mほどの長方形と考えられる。長方形の土壙の中に径80cmほどの円形の土壙が掘り込まれている。壁は比較的直に立ち、床面は一段目、二段目とも平坦である。

出土遺物(Fig.26)

258は内黒の黒色土器Ａ類である。257は須恵質ないし瓦質の底部片である。底部は厚い。体部外面に回転ヘラ削りらしい痕跡が見られる。内底部は不定方向のナデ。

土壙56(Fig.25)

Ｅ４区で検出した。やや南北に長い楕円形で、長径1.8m、短径1.3mを測る。壁は段をなしつつ緩やかに落ち、床は平坦でなく丸く凹まる。検出面からの深さ80cmを測る。

出土遺物(Fig.26)

260は瓦器椀である。内外面に単位の粗いミガキを施す。

土壙58(Fig.25)

Ｅ３区で検出した。溝１に伴う門状遺構のピットと切り合うが、先後関係は確認できなかった。やや東西に長い楕円形で、東西1.8m、南北1.6mほどであろう。壁は緩やかに落ち、床面は平坦である。検出面からの深さ40cmを測る。図化に耐える遺物は出土していない。

土壙59(Fig.25)

Ｅ５区で検出した。大形の部類に入る土壙である。南北2.6m、東西2.8mほどの、楕円形に近い不定形を呈する。壁は緩やかに落ち、西側にはステップ状の段をなす。床面は比較的平坦である。検出面からの深さ60cmを測る。

出土遺物(Fig.26)

595はⅣ類の白磁。体部は直線的に開き、外面の中程まで施釉する。

土壙62(Fig.25)

Ｄ４区で検出した。土壙63を切る。南北1.1m、東西１mほどの長方形と考えられる。検出面近くは若干壁が崩れているのであろう。床面は比較的均整な長方形を呈する。壁は直に近く、床面は平坦である。検出面からの深さ50cmと、規模の割りには深い。

出土遺物(Fig.28)

598は越州窯系青磁である。釉は暗い緑色で、剥落が著しい。見込に目跡がある。遺存部の外面は暗い橙色を呈する。264～269は土師器小皿である。糸切り底で、267を除いて板目が見られる。265は貼り付けの高台を持つ。266は復元口径7.5cm、269で9.5cm、265は11cmを測る。

土壙63(Fig.27)

Ｄ４区で検出した。土壙62に切られる。規模、形態とも土壙62と類似する。壁は一部崩落したもの

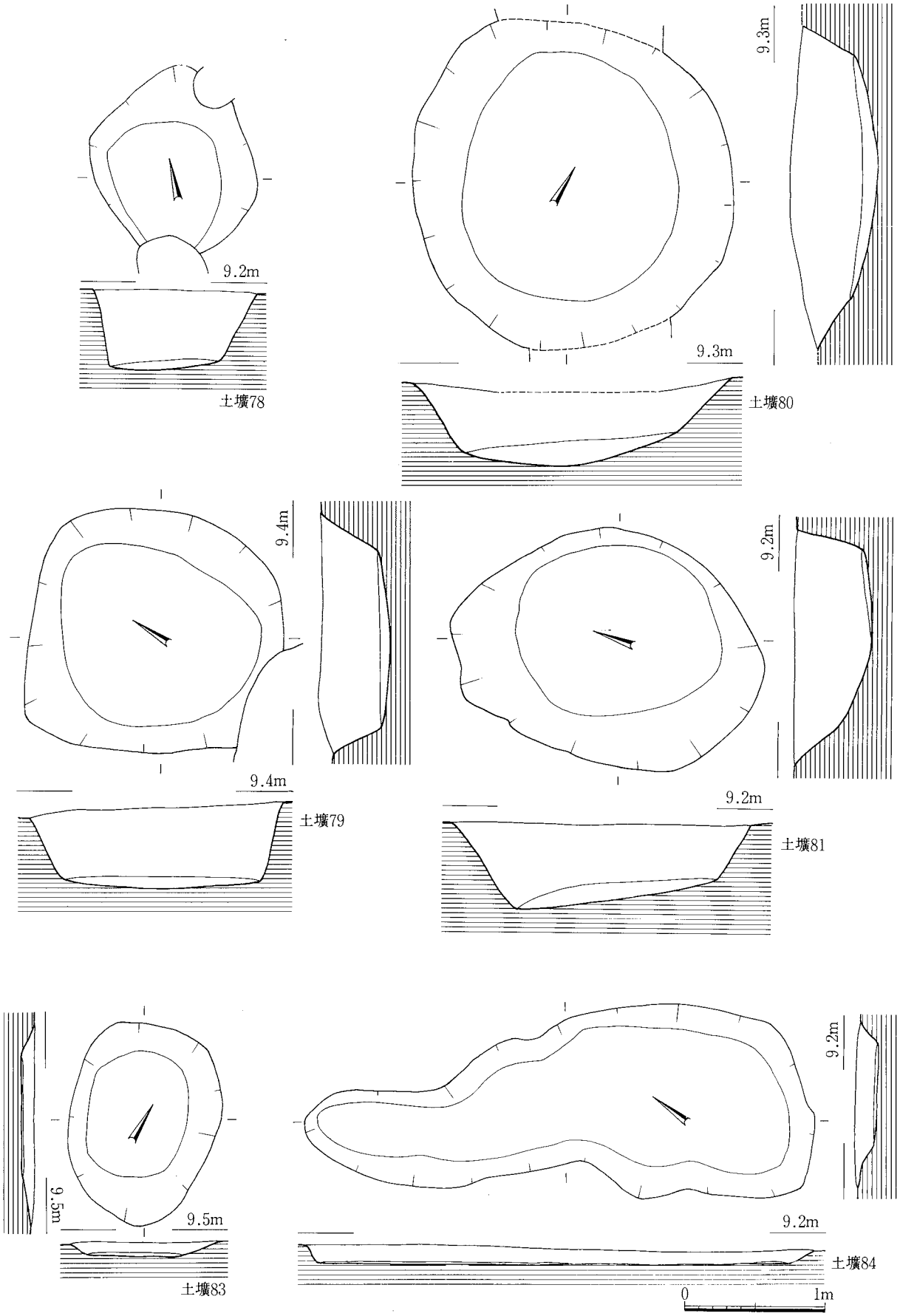


Fig.31　土壙実測図6（1：40）

と考えられ、本来はやや東西に長い長方形であろう。検出時で、東西、南北とも1.5mを測る。床面は長方形を呈する。壁は緩やかに落ち、床面はほぼ水平である。図化に耐える遺物は出土していない。

土壙64(Fig.27)

Ｃ３区で検出した。円形を呈する。径1.4mを測る。壁は比較的直に立つが、検出面から30cmほどと浅い。床面はほぼ水平である。完形の土師器坏、皿、土師質の鍋、瓦器片などが比較的まとまって出土した。

出土土器(Fig.28)

282は土師質の鍋。内外とも比較的丁寧なナデで、外面は煤が付着する。271、275、277は土師器小皿。糸切り底である。271は口径８cm、275は9.5cmを測る。272、276、278、279は坏。糸切り底である。272、278、279には板目が見られる。272は口径14、8cm、279は口径13cmを測る。270は瓦器底部。踏張り気味の高台を貼付ける。273も瓦器椀。高台は細く低い。内外に目の粗い磨きをかける。281も焼成がやや甘く、桃色を帯びるが同じく瓦器椀底部であろう。280は黒色土器Ｂ類の底部片である。599はⅥ類の白磁である。外面に縦線文、内面に櫛歯文を施す。600も白磁。皿である。外面の遺存部下端近くまで施釉する。

土壙66(Fig.27)

Ｃ３区で検出した。土壙67、溝９に切られる。長径2.6m、短径2.4mを測り、やや南北に長い楕円形を呈する。壁は比較的直に立ち、床面はほぼ水平である。検出面からの深さは60cmである。調査時には湧水が著しかった。

出土土器(Fig.28)

292は土師器小皿。糸切り底で、口径9.2cmを測る。293は瓦器椀の口縁部である。端部のみ黒変している。294は内黒の黒色土器。内面に右上がりの刻線状を呈する工具痕が見られる。295は土師質の鉢である。焼成は非常によい。内面には横方向のハケメが見られる。外面は煤が付着する。296は須恵器坏身である。外底部に回転ヘラ削りを施す。６世紀末～７世紀前半頃の遺物と考えられ、混入品であるが、あまり磨滅を受けていない。調査区内では古墳時代の遺構は検出されていない。丘陵部の古墳から、中世に至って持ち込まれたものであろうか。604は白磁碗。口縁端部は斜めにきる。見込は釉を輪状に掻き取る。外面は体部上半のみ釉がかかる。釉は灰白色を呈し、透明感に欠ける。605も白磁椀である。高台外面に短斜線文を刻む。底部は露胎。見込に圏線を一条巡らせる。釉は鈍く透明感に欠ける。606は壷口縁である。端部は折り返して玉縁状をなす。外面に暗い緑色の釉がかかる。

土壙67(Fig.27)

Ｃ３区で検出した。径１mの円形を呈する。土壙66、溝9を切る。壁は比較的立つが、床面は丸く凹む。検出面からの深さは30cmほどで浅い。

出土遺物(Fig.29)

図示したものは土師器である。297は坏である。復元口径13.5cmを測る。298は小皿である。復元口径9.2cmを測る。いずれも糸切り底で、板目が見られる。

土壙68(Fig.27)

Ｃ４区で検出した。ほぼ円筒形を呈する土壙で、径１mを測る。検出面からの深さは60cmを測る。湧水が著しく、井戸の可能性もある。図化に耐える遺物は出土していない。

土壙69(Fig.27)

Ｄ３区で検出した。溝112に切られる。東西1.6m、南北1.8mほどの楕円形と考えられる。検出面からの深さ60cmを測る。東側の壁は緩やかに落ちる。床面は丸く凹まる。

出土遺物(Fig.29)

299は土師器小皿である。底部はヘラ切りである。復元口径10.1cmを測る。300は黒色土器Ｂ類の底部である。底部はヘラ切りで板目があり、高く踏張る高台が付く。

土壙70(Fig.30)

Ｄ５区で検出した。径1.5mの円形の土壙である。円錐形を呈し、壁は緩やかに落ち、床と壁との境界が明瞭でない。検出面からの深さは70cmを測る。図化に耐える遺物は出土していない。

土壙71(Fig.30)

Ｃ５区で検出した。径3.2m～3.3mほどのややいびつな円形を呈する。検出した中では大形の部類に属する。壁は比較的立つが、湧水が極めて著しく、調査中にも間断なく壁が崩落していくような状態であった。検出面からの深さは80cmを測る。

出土遺物(Fig.29)

301は土師器坏である。小片で、磨滅が著しく、復元口径は疑問がある。また底部調整も不明である。302～304は瓦器椀である。303はやや焼成が甘く、桃色を呈する。低く幅狭の高台が付く。

土壙72(Fig.30)

Ｃ６区で検出した。径２mほどの円形を呈する。壁は直に近く、一部オーバーハングする部分もある。床は平坦で、西側に向かって若干傾斜する。検出面からの深さ40～60cmを測る。

出土遺物(Fig.29)

305は土師器甕の口縁部片である。外面はヨコナデ、内面はナデを施す。

土壙77(Fig.30)

Ｂ６区で検出した。土壙80に切られる。南北１m、東西1.5mほどの楕円形と考えられる。壁は比較的立つ。床面は南側へ向かって傾斜している。南端で検出面からの深さは60cmを測る。

出土遺物(Fig.29)

308～310は土師器小皿である。いずれも底部はヘラ切りである。309には板目がある。310は底部1/2に平行の擦過痕様の痕跡が見られる。口径は308が10cm、309が10.4cm、310が9.5cmである。306は土師器椀。307は黒色土器Ｂ類の椀である。ほぼ同形同大である。黒色土器の方はやや口縁部が外反する。

土壙78(Fig.31)

Ｃ３区で検出した。南北に長い楕円形を呈するが、北側の壁がやや崩れている可能性もあり、床面の形状から本来は円形に近かったかも知れない。南北1.4m、東西1.2mほどを測る。壁は比較的立つ。床面は平坦である。検出面からの深さは60cmを測る。

出土土器(Fig.29)

311、312とも小片で傾きも疑問であるが、311は小皿の可能性もある。312は瓦器碗で、口縁端部のみ内外とも黒変する。

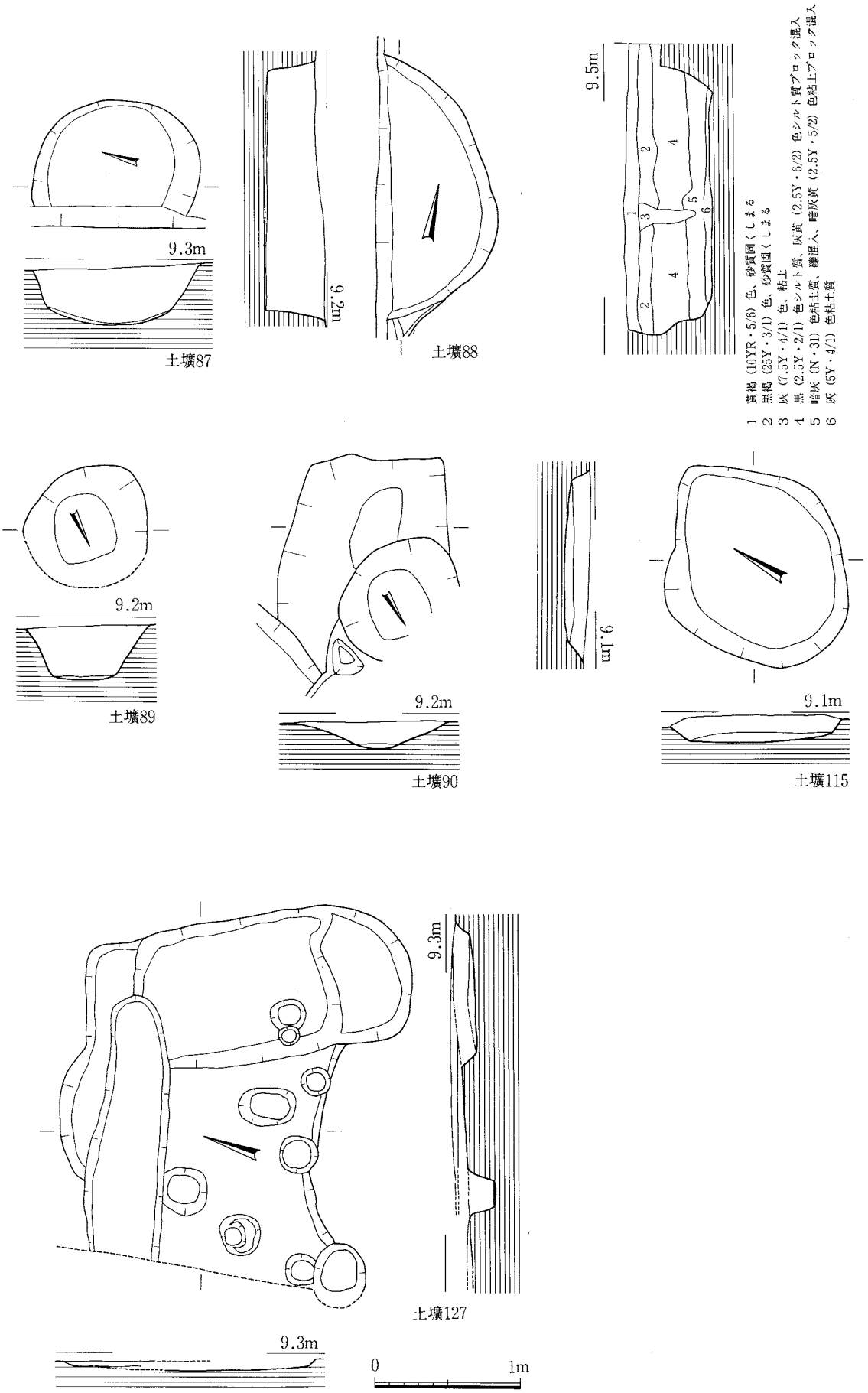


Fig.32　土壙実測図7（1：40）

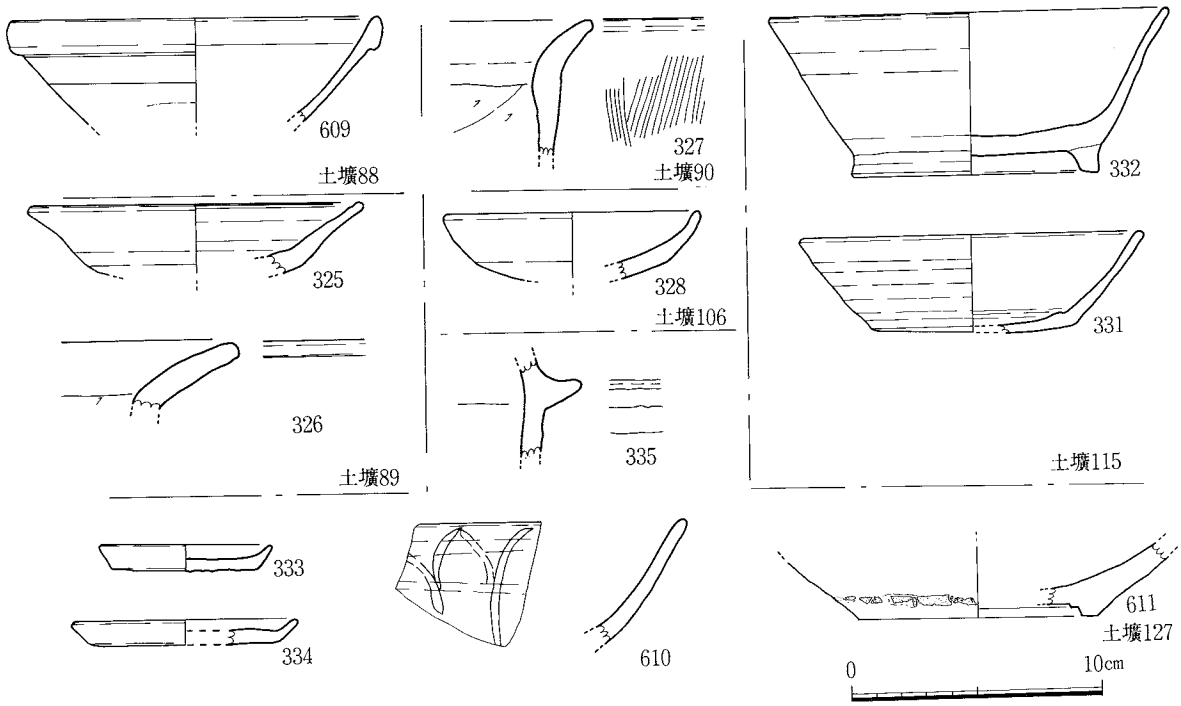


Fig.33　土壙出土土器実測図7（1：3）

土壙79(Fig.31)

Ｂ７区で検出した。溝20、土壙275に切られる。径1.8mほどの円形を呈する。壁は直に近く、床面は平坦である。床面からかなり浮いた、検出面に近い位置から、土師器椀や、石鍋破片が出土している。検出面からの深さは60cmほどを測る。

出土土器(Fig.29)

313は土師器小皿である。ヘラ切り底で、板目が見られる。復元口径10cmを測る。314、315、318は土師器椀である。焼成は非常によい。314、315は口縁端部が外反し、丸く納めるが、318はそのまま立上り、端部は薄く尖らせる。318には比較的高い断面三角形の高台が付く。316、317は瓦器椀である。316は底部で、断面方形のしっかりした高台が付く。317は楠葉産と考えられる。口縁端部内面に沈線を巡らせ、目の細かいミガキを施す。

土壙80(Fig.31)

Ｂ６区で検出した。径2.3mの円形を呈する。調査時には湧水が著しかったが、深さは検出面から50cmほどと浅く、壁も緩やかに落ちていくので、井戸ではないようである。床面も平坦ではなく、中心に向かって凹んでいる。

出土土器(Fig.29)

607は青白磁の合子蓋である。天井部に浮線で車輪文を巡らす。内面と、天井の中心の径２mm程の部分は露胎である。

土壙81(Fig.31)

Ｃ５区で検出した。南北にやや長い楕円形を呈するが、床面の形状から、本来は円形に近い形で

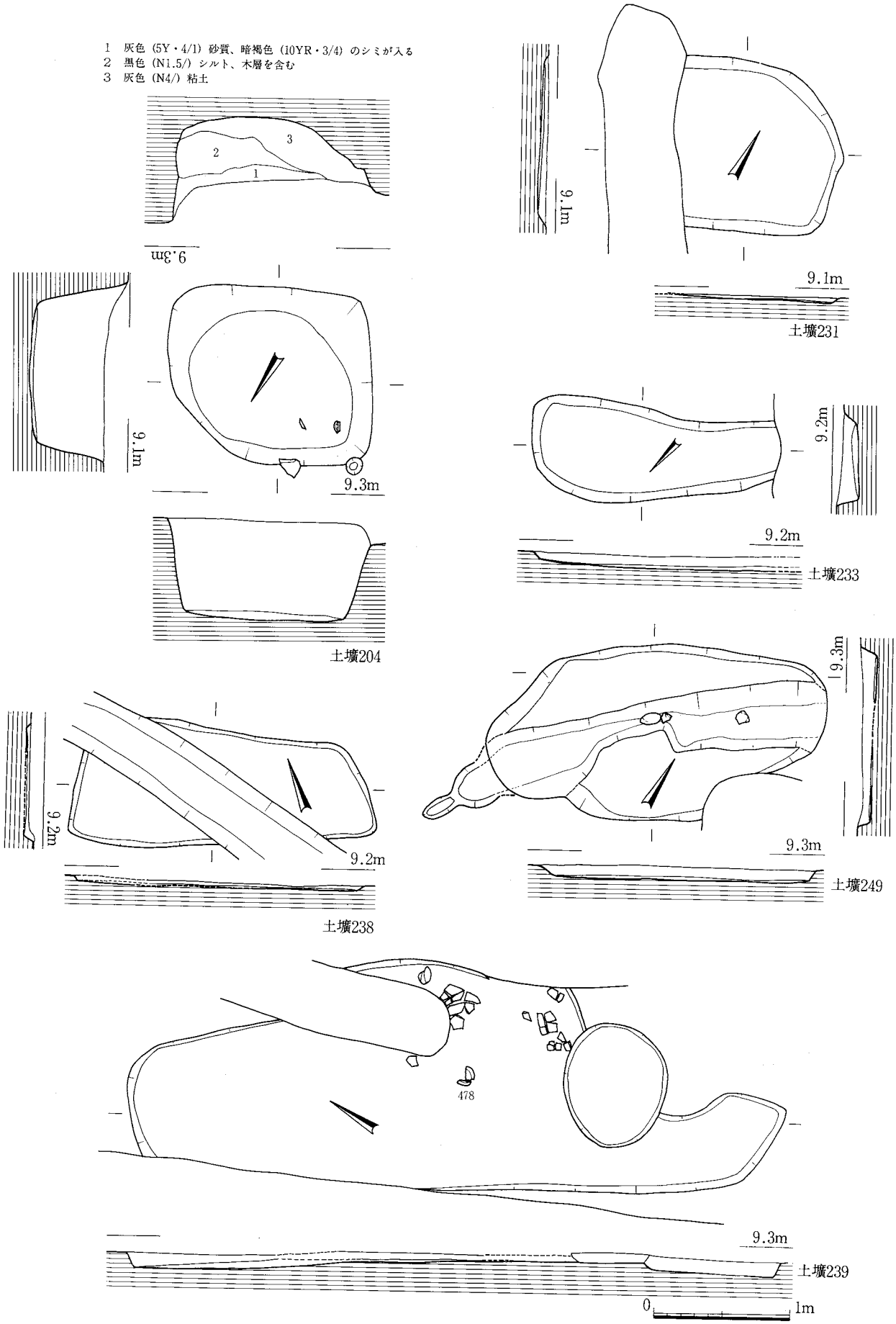


Fig.34　土壙実測図8（1：40）

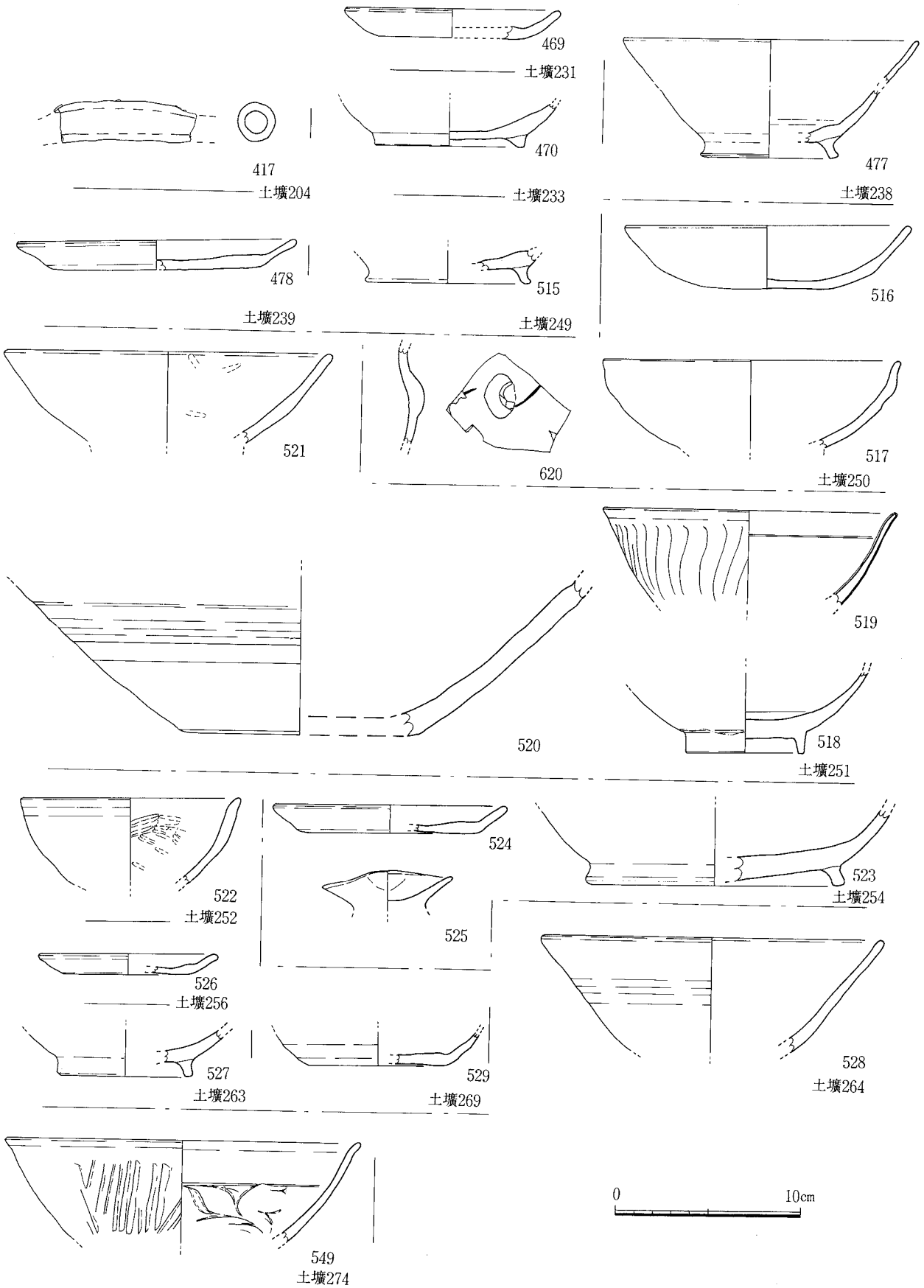


Fig.35　土壙出土土器実測図8（1：3）

あったと考えられる。長径２ｍ、短径1.7ｍを測る。床は緩やかに落ち、床面は北側に向かって凹んでいる。調査時には湧水が著しかった。北端で検出面からの深さ60㎝を測る。

出土遺物(Fig.29)

319～321は土師器の丸底坏である。321は完形品で、口径15.5㎝を測る。底部に板目が見られる。体部は回転ナデ、内面はナデを施す。他の二つもほぼ大きさ、器形、調整は共通する。

土壙83(Fig.31)

Ｆ４区で検出した。楕円形の浅い皿状を呈する土壙である。南北1.5ｍ、東西1.1ｍを測る。検出面からの深さは10㎝に過ぎない。床面は平坦である。

出土遺物(Fig.29)

608は白磁片である。碗または皿と思われるが、小片でよくわからない。内面口縁下に圏線を一条巡らせる。

土壙84(Fig.31)

Ｄ４区で検出した。不定形の溝状を呈する土壙である。南北に長く、長3.7ｍ、最大幅1.4ｍを測る。極めて浅い土壙で、検出面からの深さは10㎝に過ぎない。床面はほぼ平坦である。

出土遺物(Fig.29)

322は土師器。薄手で焼成はよい。323は土師器甕。口縁は厚く、胴部内面はケズリを施す。口縁部はヨコナデ。324は内黒の黒色土器である。比較的高く踏張る高台が付く。外面は明るい橙色を呈する。

土壙87(Fig.32)

Ｃ３区で検出した。西側が調査区外に出るが、円形と考えられ、径1.2ｍほどに復元できよう。壁は比較的直に近いが、床面は東側に向かって凹んでいく。東端で、検出面からの深さ40㎝ほどである。図化に耐える遺物は出土しなかった。

土壙88(Fig.32)

Ｃ３区で検出した。土壙104を切る。西側約半分が調査区外に出る。径２ｍほどの円形と考えられる。壁は直に立ち、床面は平坦である。検出面からの深さ40㎝を測る。

出土遺物(Fig.33)

609はⅣ類の白磁である。口縁は玉縁を呈し、体部は直線的に開く。釉は外面の中位当たりまでにかかっている。

土壙89(Fig.32)

Ｅ２区で検出した。土壙34、土壙90を切る。径80㎝ほどの円形を呈する。壁は緩やかに落ちるが、床面は平坦である。検出面からの深さ40㎝を測る。

出土遺物(Fig.33)

325は坏であろうか。体部で屈曲する。灰色を呈し、質は焼成の甘い須恵器に近い。体部は回転ナデで、口縁端部内面に沈線状の段が付く。326は土師器甕の口縁部片である。外面には煤が付着する。

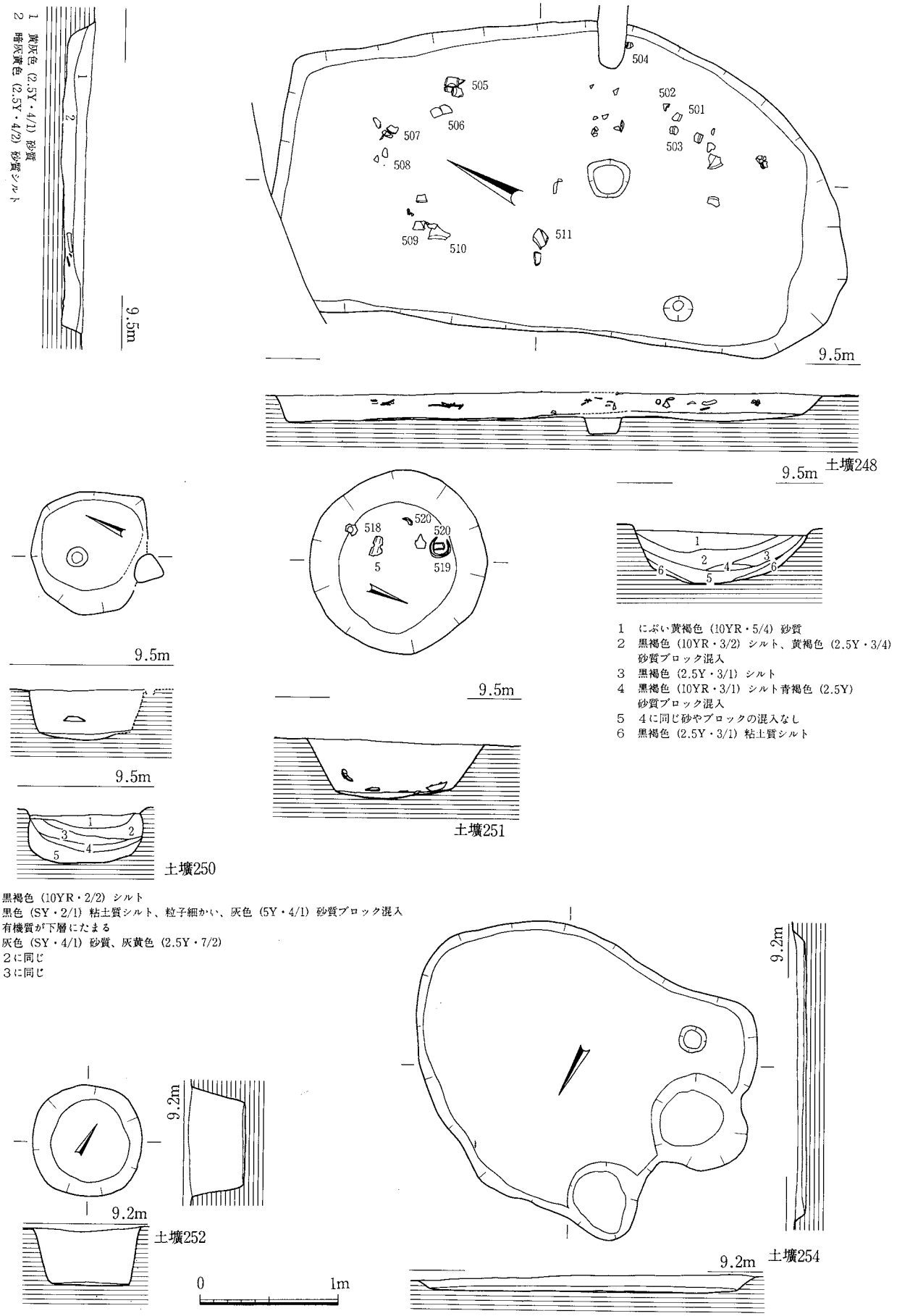


Fig.36 土壙実測図9 (1：40)

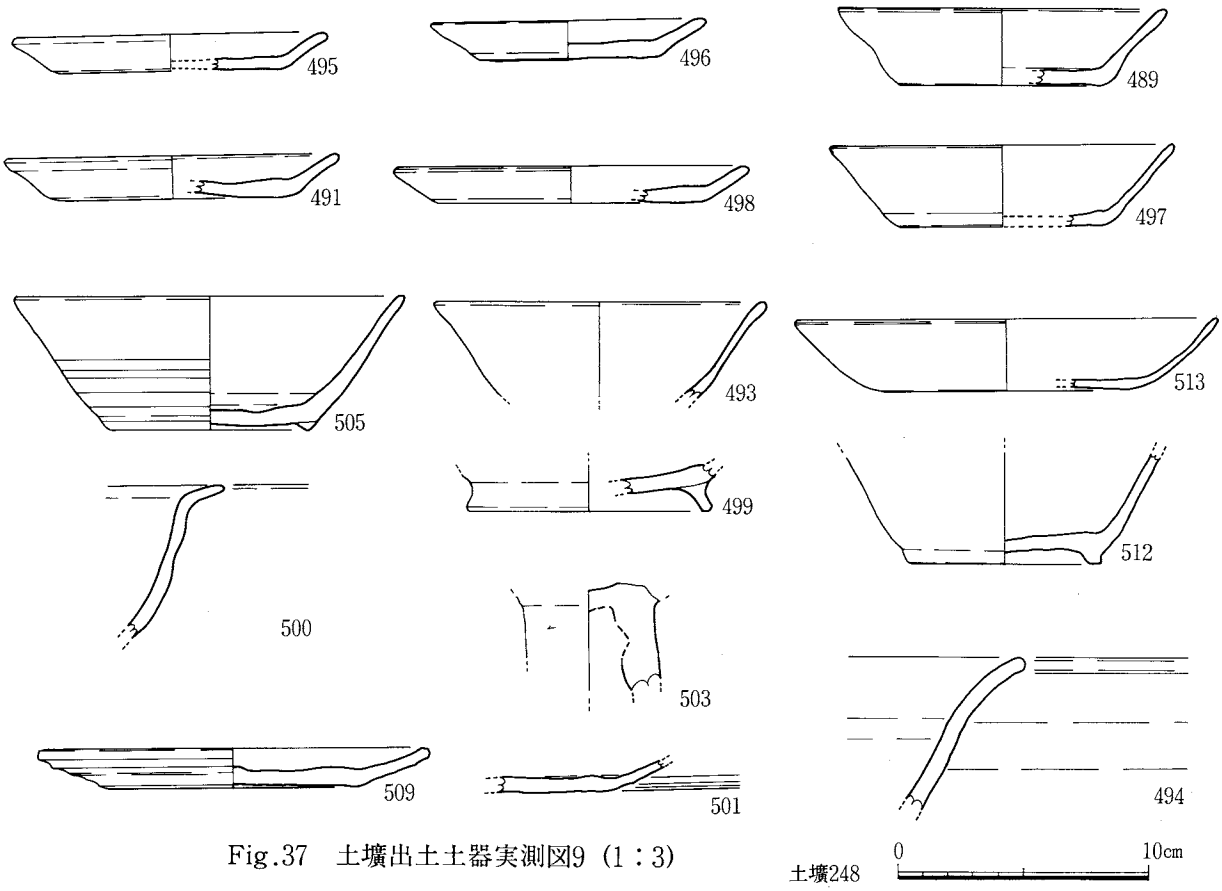


Fig.37　土壙出土土器実測図9（1：3）

土壙90(Fig.32)

Ｅ２区で検出した。土壙89に切られる浅い土壙で、平面形は方形に近い。壁と床の区別が曖昧な皿状を呈する。土壙34と同一遺構かも知れない。

出土土器(Fig.33)

327は土師器甕口縁部である。口縁部があまり開かず、胴部も張らないことから甑の可能性もある。外面ハケメ、内面ケズリ。

土壙115(Fig.32)

Ｆ２区で検出した。径1.2mほどの円形を呈する。浅い皿状の土壙である。床面からやや浮いた、検出面に近い位置から、土師器坏などが出土した。

出土土器(Fig.33)

図示したものは土師器である。331は坏である。底部はヘラ切り。体部は回転ナデを施す。復元口径13.7cmを測る。332は高台付きの椀である。厚くしっかりした高台が付く。底部は平底で、体部は直線的に開く。復元口径15.8cmを測る。

土壙127(Fig.32)

Ｃ４区で検出した。２～３基の溝、土壙が切り合っていると考えられるが、検出面では判別できず、遺物も分けていない。いずれも浅い凹み状の土壙である。

出土遺物(Fig.33)

333、334は土師器小皿。糸切り底である。小片で復元口径はやや疑問。335は土師質の羽釜であろうか。鍔部のみの破片で、断面三角形の高い突帯状を呈する。610は龍泉窯系青磁碗。外面は鎬なしの蓮弁文を刻む。611は褐釉の陶器底部で、外面は露胎である。内面には刷毛目状の平行線の擦痕が見られる。高台は削り出しで、体部は回転ヘラ削りを施す。

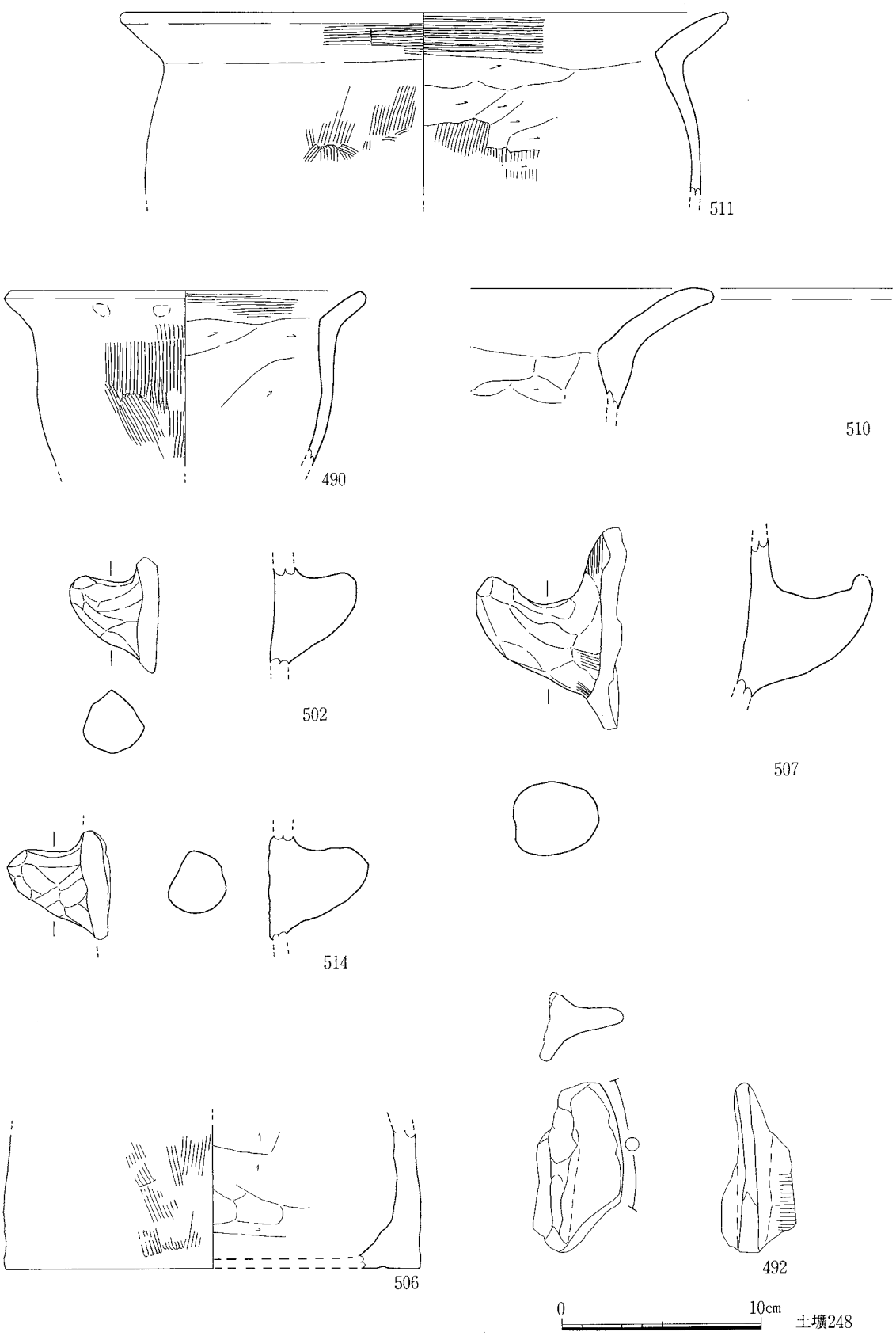


Fig.38　土壙出土土器実測図10（1：3）

土壙204(Fig.34)

Ｂ８区で検出した。溝185の東端に位置する。溝185の床面で検出され、従って溝185より古い。楕円形を呈し、東西1.6m、南北1.3mを測る。壁は直に近く、床面は平坦である。覆土中に多量の有機物を含む層がある。検出面からの深さは70cmほどである。

出土土器(Fig.35)

417は土師質で円筒形を呈する。注口部か、土錘ではないかと考えられる。ただ土錘にしては器壁が薄い。

土壙227、228、229(Fig.41)

Ｅ10～Ｆ９区にかけて溝状に並ぶ土壙群である。遺構の分け方は確実でなく、便宜的である。あるいは同一の溝状遺構かも知れない。北端で土壙251に切られる。延長は17mほどである。幅は最大で４mを測る。

出土遺物(Fig.42)

遺物の取上げも、遺構の分割に合わせて行なっている。

451は土師器甕である。口縁部は直線的に開き、端部に坦面を持つ。458も土師器甕口縁片である。端部は丸みを持つ。456は土師器把手である。比較的細身である。457は土師器皿である。底部にもナデを施す。452は土師器坏。底部のわずかな遺存部を見ると、ヘラ切り底でよいようである。459、460は土師器底部片である。いずれも高い高台が付くが、459は踏張り気味、460は直立気味を呈する。454、455、453、463は瓦器椀である。内外に目の粗いミガキをかける。461は須恵質の鉢。口縁端部は坦面をなす。体部は回転ナデを施す。462は須恵器壷である。

467は土師器坏である。底部はヘラ切りで、ナデを施す。464は土師器皿。底部はヘラ切り。465は黒色土器Ｂ類の底部。466は須恵器坏である。幅広の高台を持つ。

468は瓦器椀。618、619は白磁である。619は底部近くに短い縦線文を刻む。高台は露胎。見込に幅広の圏線を巡らす。Ⅳ類と考えられる。618は皿である。体部は緩やかに内湾する。外面中位以下は露胎である。Ⅵ類と考えられる。

土壙231(Fig.34)

Ｅ８区で検出した。溝215に切られる。楕円形と考えられる。南北1.3m、東西1.6mほどであろう。極めて浅く、検出面からの深さは10cmに満たない。

出土土器(Fig.35)

469は土師器小皿である。底部は丸みを帯び、ヘラ切りと考えられる。小片で復元口径は疑問がある。

土壙233(Fig.34)

Ｅ７区で検出した。土壙67、溝９に切られる。長径2.6m、短径2.4mを測り、やや南北に長い楕円形を呈する。壁は比較的直に立ち、床面はほぼ水平である。検出面からの深さは60cmである。調査時には湧水が著しかった。

出土土器(Fig.35)

470は土師器椀底部である。幅広で低い高台が付く。底部は平底で、ヘラ切りである。

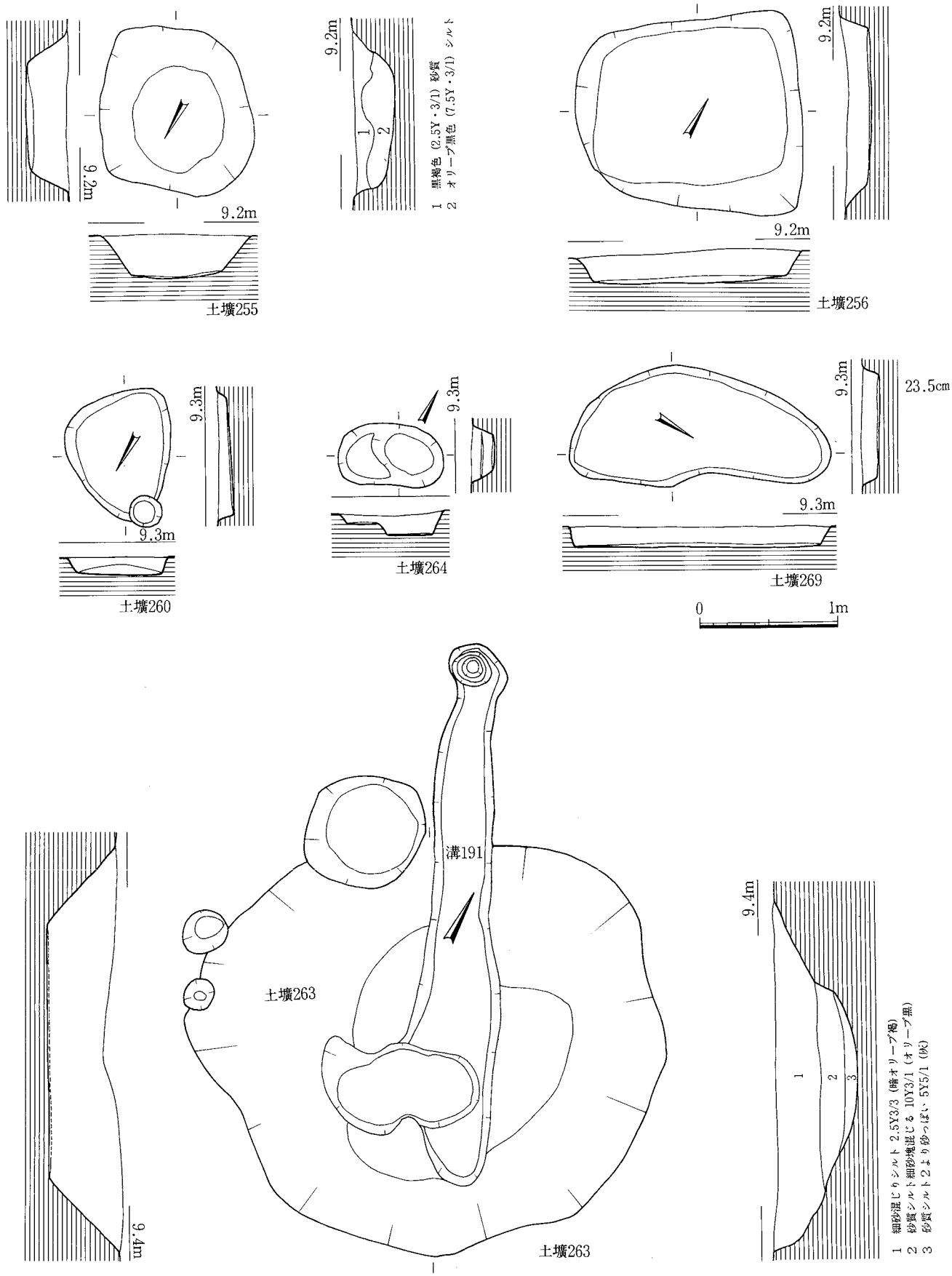


Fig.39　土壙実測図10（1：40）

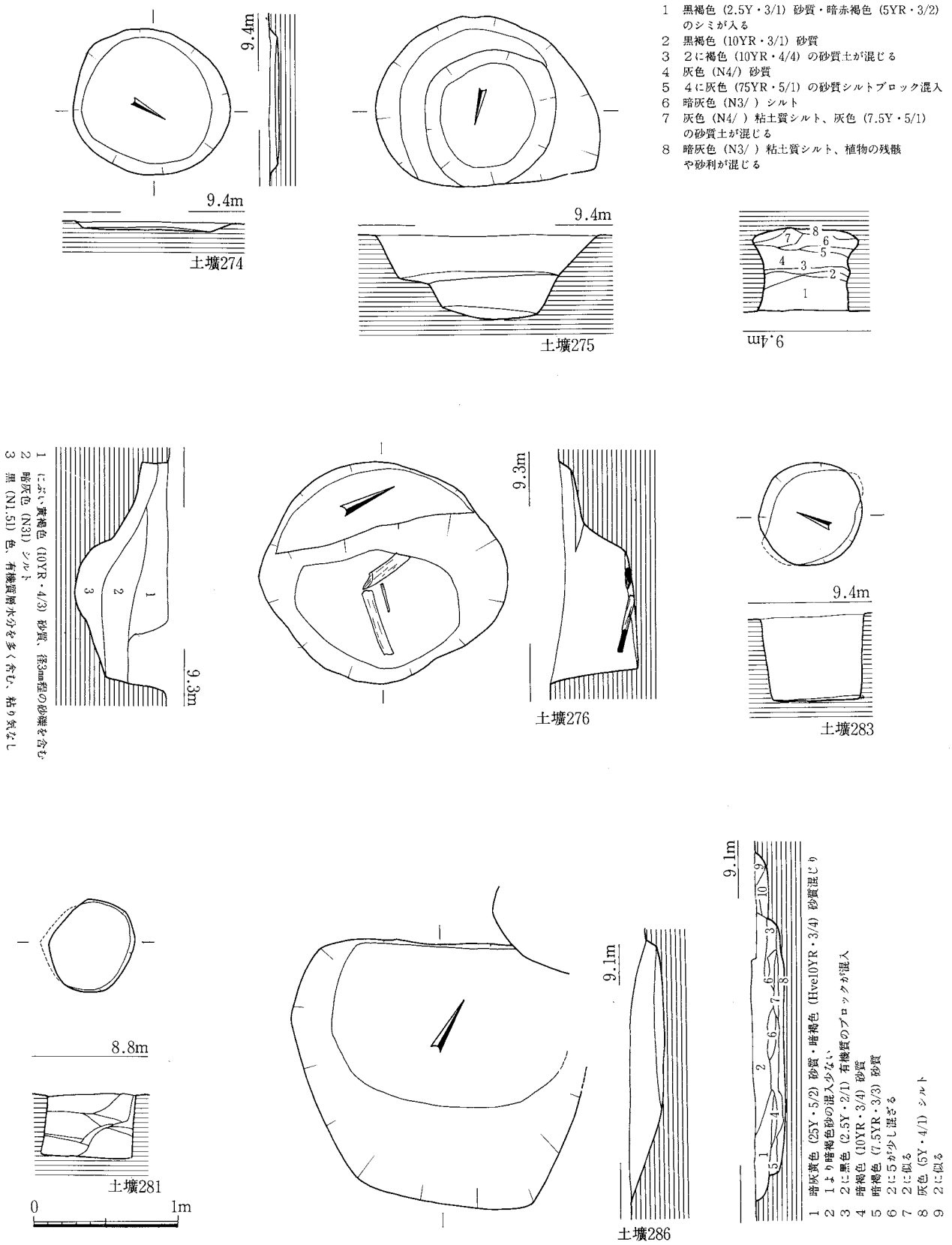


Fig.40　土壙実測図11（1：40）

土壙235、236(Fig.44)

Ｆ10区で検出した。床面の溝状の凹凸で遺構を分けたが、確実ではない。方形を呈する一遺構の可能性もある。方形遺構とすれば、南北5.5m、東西4.3mほどの規模である。

出土遺物(Fig.43)

471は土師器小皿である。底部はヘラ切り。復元口径９cmを測る。

472、476は土師器甕の口縁部である。476は端部に坦面を持つ。473、474は須恵器坏の底部である。内底部に回転ナデが認められる。475は内黒の黒色土器である。体部は緩やかに内湾しながら開く。

土壙238(Fig.34)

Ｆ８区で検出した。溝220に切られる。東西に長い長方形を呈し、長2.2m、幅80cmを測る。極めて浅い皿状の土壙である。

出土土器(Fig.35)

477は土師器椀である。断面方形の高く踏張る高台が付く。体部は直線的に大きく開く。外面は回転ナデを施す。

土壙239(Fig.34)

Ｄ８区で検出した。遺構自体は不定形の凹みと考えられる。床面近くで土器片が散布している。この土器片はほぼ同じレベルで溝202の方へ広がっており、土壙239が溝202を切るものと考えられる。溝203には切られている。

出土遺物(Fig.35)

478は土師器皿である。底部はヘラ切りで、痕をナデ消す。口縁部はわずかに外反する。この他散布しているのは土師器甑片と考えられる。ほとんど小片であるが、基底部片などが認められる。

土壙244(Fig.44)

Ｆ８～９区にかけて広がる大形の土壙であるが、不定形で、深さも無い。自然の凹みの可能性が高い。溝210に切られる。

出土遺物(Fig.43)

480は土師器甕口縁部である。端部をやや薄く仕上げる。481は黒色土器Ｂ類である。口縁端部直下がわずかに凹む。高台は外面接合部の強いナデにより一部玉縁状になる。482は黒色土器か。内外とも鈍い褐色を呈し、内面が外面よりやや暗い程度である。端部は外反する。483は須恵器長頸壷である。内外とも回転ナデを施す。

土壙247(Fig.44)

Ｆ10区で検出した。東を土壙235に切られ、南は調査区外に出るが、方形、もしくは長方形であろう。東西5.5m以上を測る。深さは20cmほどで浅い。

出土遺物(Fig.43)

487、488は土師器甕口縁部である。口縁内面にもハケメを施す。484は土師器椀である。外面は回転ナデを施す。485は内黒の黒色土器Ａ類である。底部は平底で、薄くて高い高台が付く。486は須恵器の底部。底部、高台とも厚く大振りで、比較的大形のものになるようである。体部外面は回転ヘラ削り。

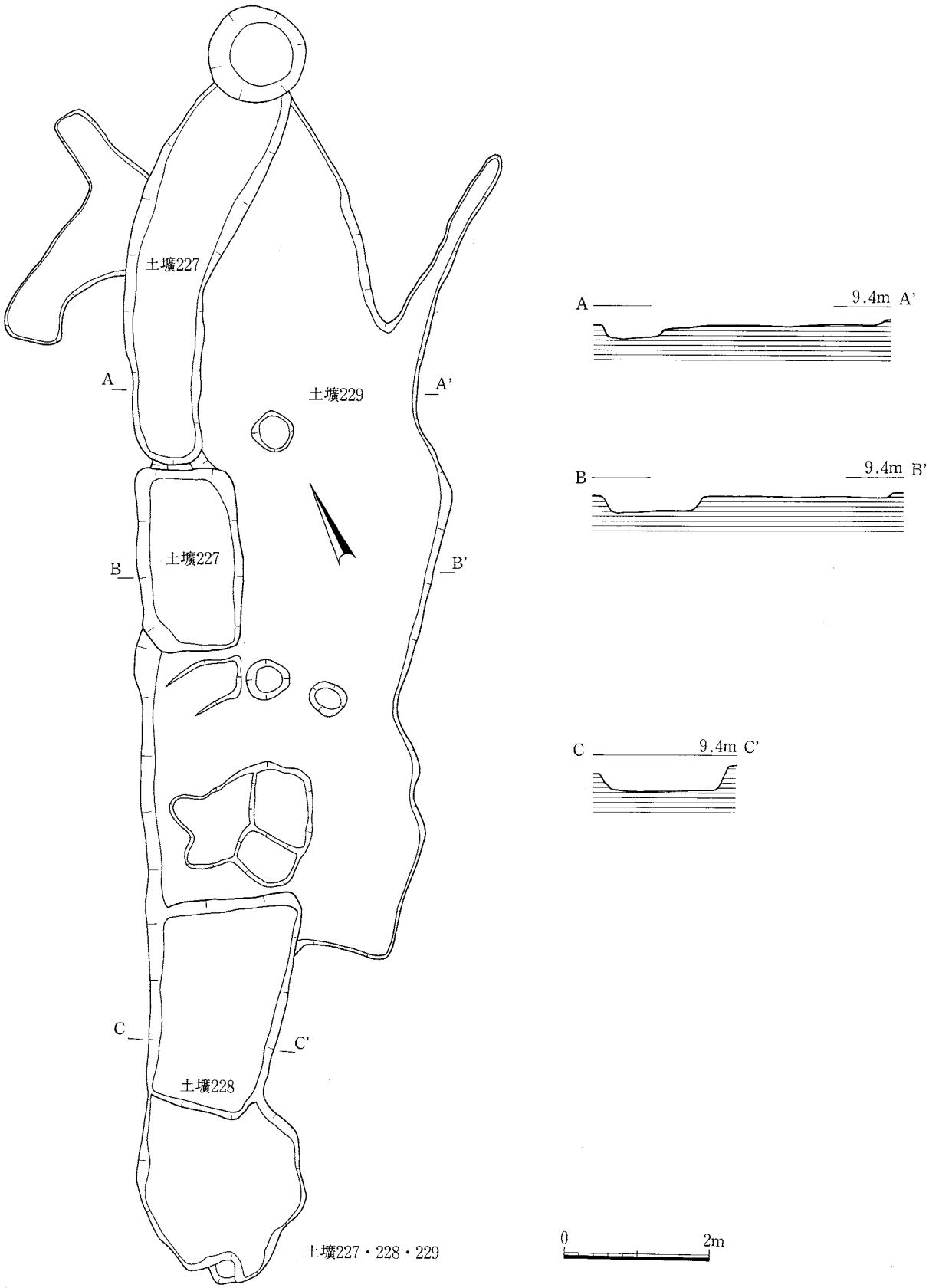


Fig.41　土壙実測図12（1：80）

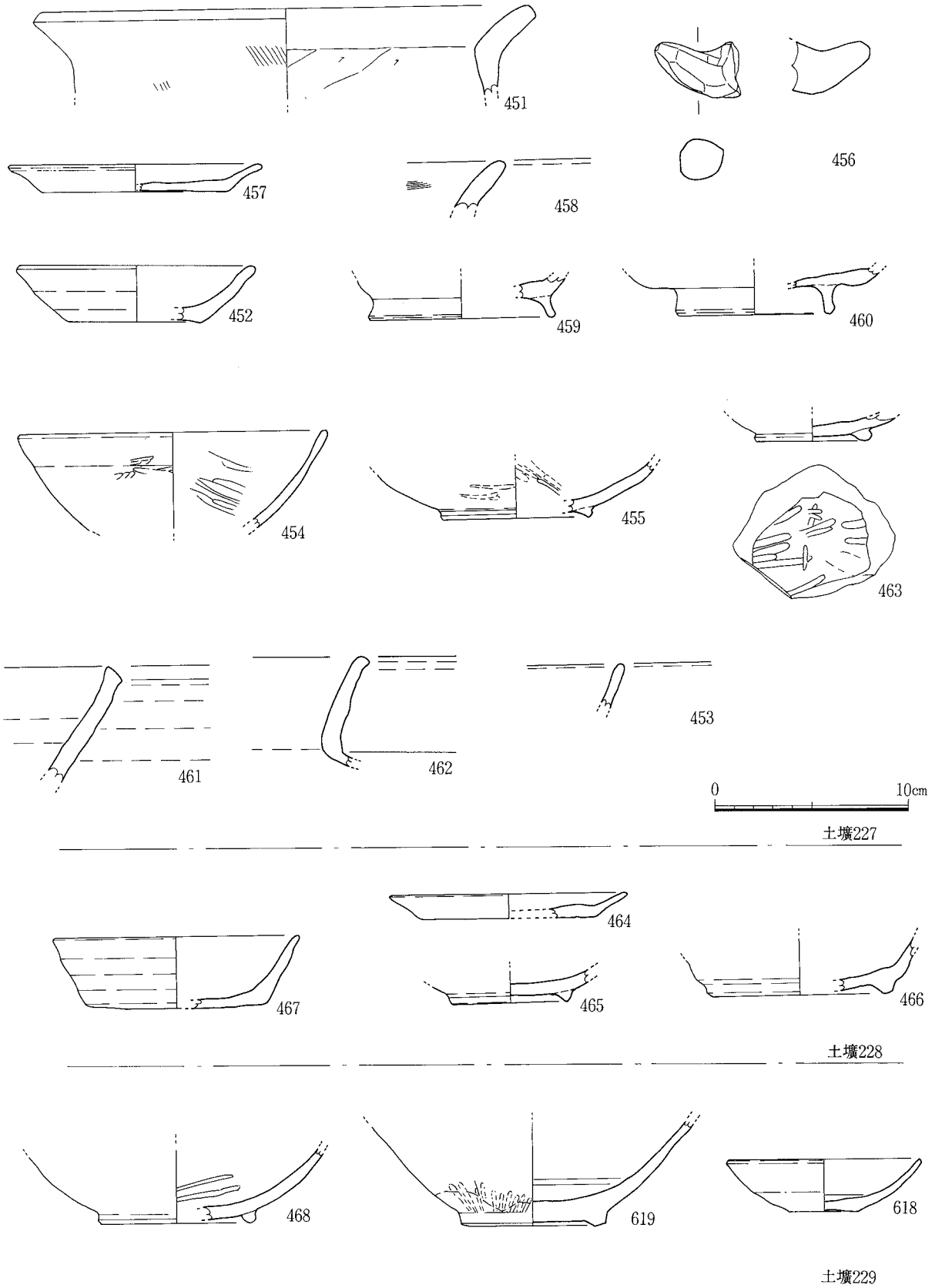


Fig.42　土壙出土土器実測図11（1：3）

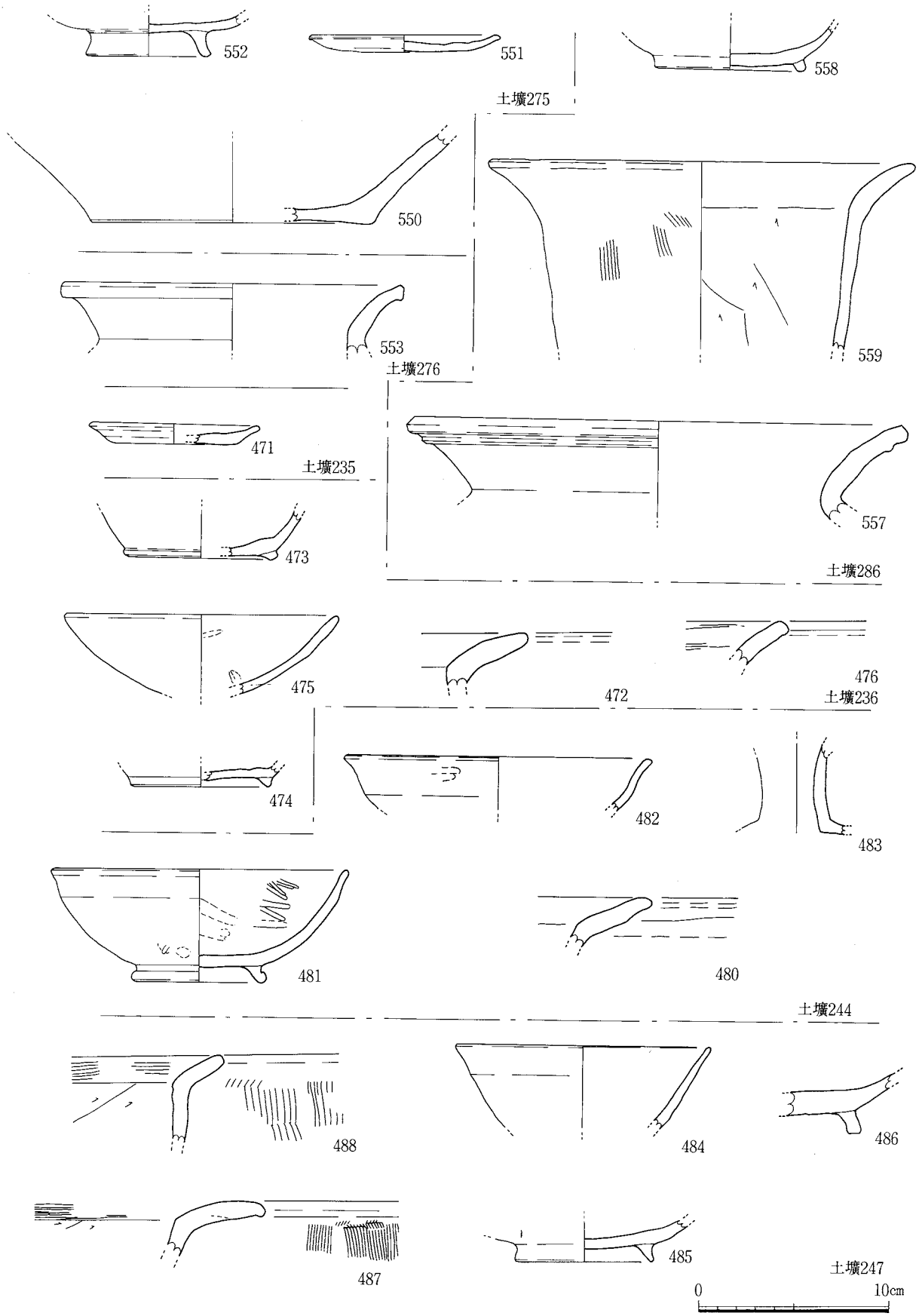


Fig.43　土壙出土土器実測図12（1：3）

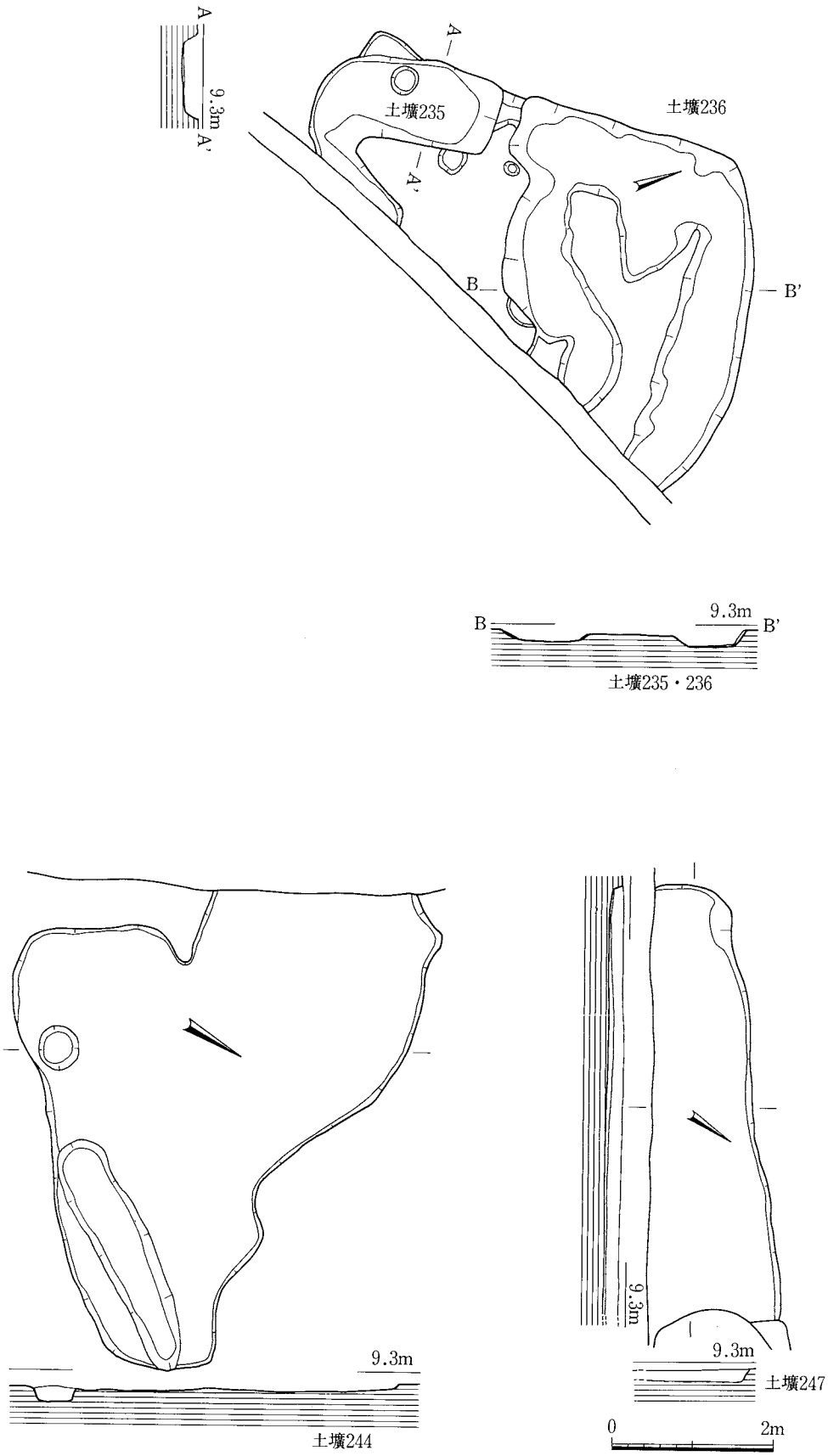


Fig.44　土壙実測図13（1：80）

土壙248(Fig.36)

Ｄ５区で検出した。径1.5mの円形の土壙である。円錐形を呈し、壁は緩やかに落ち、床と壁との境界が明瞭でない。検出面からの深さは70cmを測る。

出土土器(Fig.37、38)

495、496、491、498は土師器皿である。いずれも底部ヘラ切りで、491は痕をナデ消す。489、497、513は土師器坏。以上いずれも小片で、復元口径には疑問が残る。493は土師器椀である。499は土師器底部。高く踏張る高台が付く。500は土師器の小甕、もしくは鉢であろう。内面もナデを施す。503は土師器の高坏脚である。外面は回転ヘラ削り。505は土師器椀である。直線的に開く体部を持つ。外面は回転ナデ、底部はヘラ削りを施し、高台の接合部内外面を強くヨコナデする。高台は底部端につき、断面三角形の低いものである。501、509は須恵器皿である。底部はヘラ切りのままである。509の内面は回転ナデのままで、不定方向のナデを施さない。494は大形の坏であろうか。緩やかに外反しながら開く口縁部を盛る。端部は丸く納める。内外面とも回転ナデである。

490、510、511は土師器甕である。490は小甕である。510は長く伸びる口縁部を持つ。502、507、514は土師器把手である。507は大振りで、上方へ屈曲する。492、506は土師器竈片である。506は基底部、492は炊口鍔部の破片である。

土壙249(Fig.34)

Ｆ10区で検出した。土壙229に切られる。南北に長い長楕円形を呈する。調査区内では大形に属する規模で、東西2.5m、南北4.2mを測る。検出面からの深さは20cmほどで浅い皿状を呈する。床面からやや浮いた位置から、土師器、須恵器などの遺物が比較的多く出土している。

出土土器(Fig.35)

515は土師器底部片である。高く踏張る高台が付く。

土壙250(Fig.36)

Ｂ７区で検出した。径90cmほどのややいびつな円形を呈する。壁は比較的直に近く、床面は中心に向かって緩やかに凹む。検出面からの深さは80cmを測る。覆土中には有機物を多量に含む黒色土が互層となっている。４層上面に完形の土師器坏が伏せられていた。

出土土器(Fig.35)

516は完存品の丸底坏である。体部と底部の境は明瞭でなく、緩やかに移行する。内外面とも丁寧にナデられる。口径15.3cmを測る。517も土師器である。小片であるが、椀と思われる。620は陶器の耳部片である。釉は緑色を呈する。

土壙251(Fig.36)

Ｆ９区で検出した。径1.3mの円形を呈する。壁は緩やかに落ちる。床面は比較的平坦である。検出面からの深さは45cmを測る。床面近くから磁器、木製品などが出土している。

出土遺物(Fig.35)

518、519は白磁碗である。接合しない上、胎土、釉調が若干異なり、別個体である。518は底部片で厚く、高台は薄く高い。見込に圏線を巡らせる。外面は高台のやや上位から露胎である。519は体部片。口縁端はわずかに外反し、薄く仕上げる。外面に縦線文を施す。内面に圏線を一条巡らすが部位によっては見えなくなる。518、519ともＶ類の白磁である。520は須恵質の鉢である。内外面とも回転ナデの後、不定方向のナデをかけている。

土壙252(Fig.36)

Ｃ９区で検出した。径80cmほどの円形を呈する。壁は直に近く、床面は平坦である。検出面からの深さ40～60cmを測る。

出土遺物(Fig.35)

522は内黒の黒色土器Ａ類の口縁部片である。

土壙254(Fig.36)

Ｆ８区で検出した。東西に長いいびつな楕円形を呈する。東西2.4m、南北1.9mを測る。検出面からの深さは10cmで、浅い皿状の土壙である。

出土遺物(Fig.35)

523は須恵器底部である。大形の坏もしくは壷と思われる。底部に比して体部が薄い。外面は体部、底部とも回転ヘラ削りを施す。高台は厚く、踏張り気味に付く。524は土師器皿である。底部もナデを施す。525は土師器耳皿である。径７cm程の皿部の両端を折り曲げて起こしている。脚部があり、破損しているが、相当に太い脚柱部のようである。

土壙255(Fig.39)

Ｅ８区で検出した。径1.2mほどの円形を呈する。壁は緩やかに落ち、床面は平坦である。検出面からの深さは30cmを測る。東側の壁際から須恵器甕の胴部片が出土している。

土壙256(Fig.39)

Ｅ８区で検出した。楕円形を呈する。長径1.65m、短径1.4mほどを測る。壁は緩やかに落ち、床面は平坦である。検出面からの深さは15～20cmの浅い皿状を呈する。

出土土器(Fig.35)

526は土師器小皿の小片である。底部はヘラ切りである。

土壙260(Fig.39)

Ｃ９区で検出した。楕円形を呈する。長径１m、短径75cmほどを測る。壁は緩やかに落ち、床面は平坦である。検出面からの深さは15～20cmの浅い皿状を呈する。図化に耐える遺物は出土していない。

土壙263(Fig.39)

Ｂ７～Ｃ７区で検出した。比較的大形の円形を呈する。南北３m、東西3.3mほどを測る。土壙250、溝191に切られる。壁は緩やかに落ち、床面は平坦である。検出面からの深さは50cmを測る。

出土土器(Fig.35)

527は内黒の黒色土器である。比較的高い高台が付く。

土壙264(Fig.39)

Ｃ９区で検出した。小楕円形を呈する。長径75cm、短径45cmほどを測る。西側に段を持つ。壁は緩やかに落ち、床面は平坦である。検出面からの深さは15cmの浅い皿状を呈する。

出土土器(Fig.35)

528は土師器の椀である。体部は直線的に開き、回転ナデを施す。

土壙269(Fig.39)

Ｇ10区で検出した。南北に長い楕円形を呈する。南北1.9m、東西0.9mほどを測る。検出面からの深さは15cmの浅い皿状であるが、壁は比較的直に近い。床面は平坦である。

出土土器(Fig.35)
529は黒色土器Ｂ類の坏である。底部はヘラ切りである。

土壙274(Fig.40)
Ａ10区で検出した。径1.1mほどの円形を呈する。検出面からの深さ10cm程の浅い皿状の土壙である。
出土土器(Fig.35)
549は同安窯系の青磁碗である。口縁端部はわずかに外反する。外面は櫛描文、内面は片切彫で文様を刻む。この遺物は、火を受けたか何かの理由により、釉が溶けて、白濁化して付着している。その付着範囲を見ると、外面中位以下は露胎であった可能性がある。下月隈のような周辺部の集落では、このような不良品まで使用していたのであろうか。

土壙275(Fig.40)
Ｂ７区で検出した。土壙79を切る。溝20とも切りあうが、調査区の分割の境界線上にあり、先後関係は確認できなかった。径1.6mほどの円形もしくは楕円形である。二段掘りになり、壁は比較的立つ。床面は中心に向かって凹まる。検出面からの深さは60cmを測る。
出土土器(Fig.43)
550は陶器の底部である。遺存部は無釉で、焼成は堅緻である。551は土師器小皿である。底部はヘラ切りで、口縁部との境は不明瞭である。復元口径10cmを測る。552は土師器椀の底部である。高く踏張る高台を持つ。

土壙276(Fig.40)
Ｂ８区で検出した。旧河道271を切る。径1.6～1.7m程のほぼ円形を呈する。西側に段があり、床面が東側による。床面はほぼ平坦で、木材が出土している。最下層に多量に有機物を含む黒色土層が厚く堆積している
出土土器(Fig.43)
553は須恵器壷口縁部である。外反しながら開く頸部で、口縁端は坦面をなす。

土壙281(Fig.40)
下層の水田検出途中で検出した遺構群の一つである。径60cm、検出面からの深さ40cmの円筒形を呈する。形態から井戸の可能性もある。図化に耐える遺物は出土していない。

土壙283(Fig.40)
同じく下層の検出遺構である。Ｂ７区に位置する。径75cm、検出面からの深さ60cmの円筒形を呈する。土壙281と同じく形態から井戸の可能性もある。図化に耐える遺物は出土していない。

土壙286(Fig.40)
下層検出遺構である。溝200に切られる。やや東西に長いいびつな楕円形を呈する。東西2.2m、南北1.8mを測る。床面は北側に寄る。検出面からの深さ25cm程の浅い皿状を呈する。
出土土器(Fig.43)
557は須恵器甕である。頸部は強く屈曲して開く。口縁端部直下に突帯状の段が一条巡る。

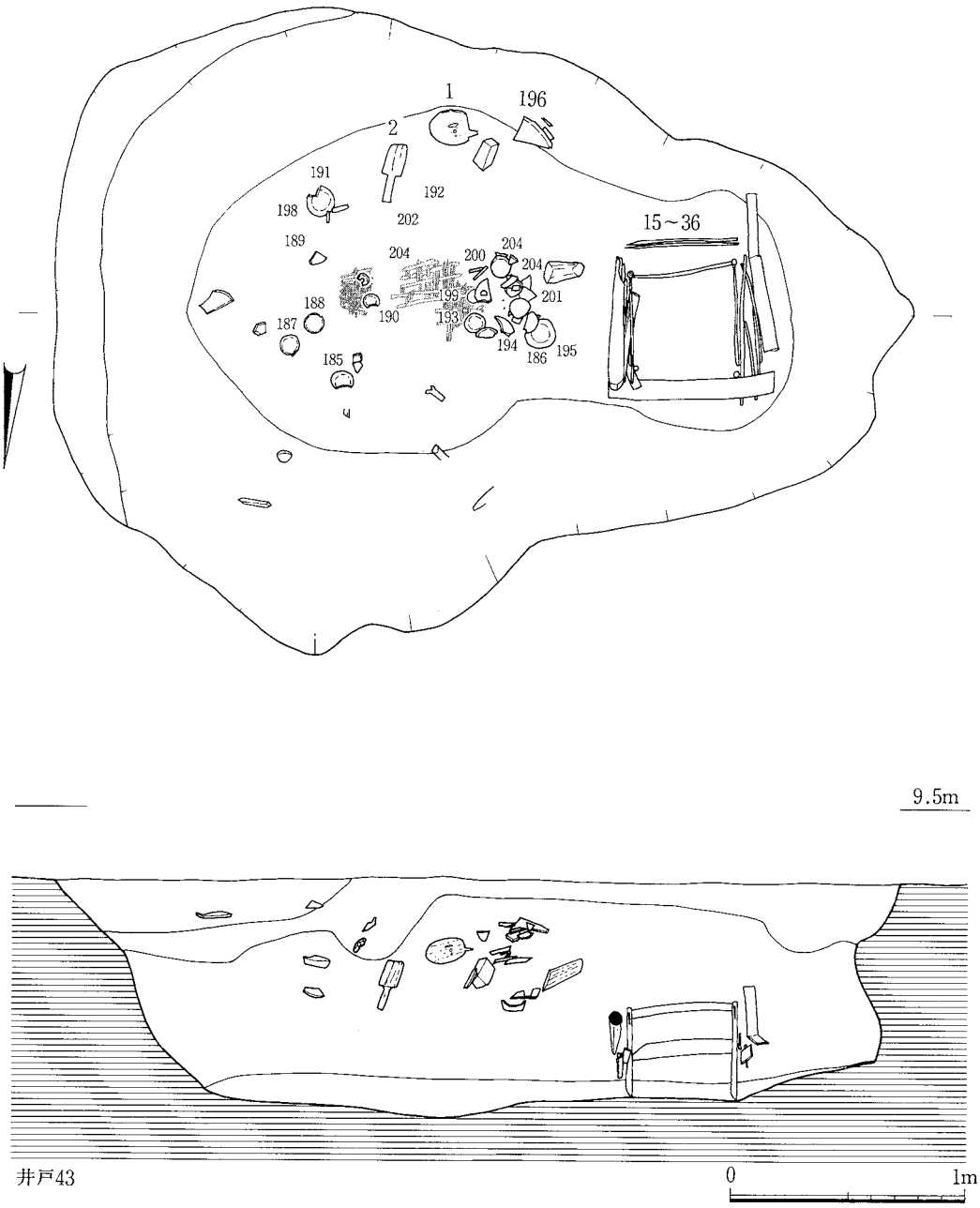


Fig.45　井戸43実測図（1：30）

（4）井戸

井戸は井戸枠を有し、井戸と判別できたものについて遺構番号を付した。土壙の中に井戸の可能性あるものがあるということは先述したとおりである。

井戸43(Fig.45)

Ｄ６区で検出した。土壙と井戸との切り合いで、土壙が井戸を切っている。検出時には判別できず、井戸枠が西端に寄って検出された段階で、井戸の掘方としてはあまりに大きいことから別遺構の切り合いの可能性を考え、土層観察によって確認した。

土壙の方は径2.7～３m程の円形もしくは楕円形を呈する。壁は緩やかに落ち、床面はほぼ平坦である。検出面からの深さは１m程を測る。覆土の上半部から、土師器、陶磁器などの土器や、横槌、蓋などの木製品が出土しているが、出土位置から見て土壙に伴う遺物群と考えられる。

井戸の方は径1.5～1.6m程の円形を呈する。掘方の壁はほぼ直に立つ。井戸枠は45cm程の方形を呈し、四隅に杭を打ち込み、幅10cm程の横板をはめ込んだ構造である。検出面からの深さは土壙とほぼ等しく90cm程である

出土土器(Fig.47)

土師器には小皿、坏がある。小皿は口径8.5～９cm程を測る。底部は糸切り底である。板目を持つものが多い。190のように薄手で口縁部が開く器形のものや、199のように厚手で、口縁が直に近い器形のものなどがある。坏は体部が開く器形のものが多い。口径は197が12cm、195が13cm、191で14cmと若干の幅がある。204はやや深めの器形で、外面の底部近くに工具痕が見られる。体部も歪みが見られる。196は東播系の鉢と考えられる。端部は拡張して坦面をなし、黒変する。体部は直線的に開く。185、186は口禿の白磁である。双方とも口縁端を除き全面施釉される。185は浅い器形で、やや緑がかった釉で、186は深く、灰色を帯び透明感に欠ける釉である。

井戸61(Fig.48)

Ｄ３区で検出した。掘方は円形を呈する。径1.1～1.15mを測る。壁は比較的直に立つ。検出面から60cm程である。井戸枠は西側に寄っている。幅10cm、長さ33cm程の板材を17枚立て並べて井戸枠としている。

出土土器(Fig.50)

261は土師器小皿。糸切り底である。263の坏も糸切り底である。262は土師質の鍋であろう。内湾する受口口縁を呈する。外面には煤が付着する。597は陶器の底部。器壁はかなり厚手である。596は龍泉窯系の青磁碗。鎬蓮弁を刻む。

井戸65(Fig.48)

Ｃ３区で検出した。掘方は1.7～1.8mの円形を呈する。壁はほとんど直に立つ。床はほぼ平坦である。検出面からの深さは75cm程である。井戸枠は径75cmほどの広葉樹の丸太を刳り抜いたものである。厚さ５cm程を測る。掘方のほぼ中央に据える。調査中から恒常的にかなりの湧水が見られた。

出土土器(Fig.50)

283、290は瓦器椀である。いずれも胴部で屈曲する。284、289は同じく瓦器椀の口縁部片である。288は瓦器椀の底部片で、底部は丸みを持ち、断面三角形の幅狭の高台が付く。285は土師器小皿。286、287は坏である。いずれも糸切り底である。601は白磁碗。口縁は玉縁を呈する。Ⅳ類の白磁であ

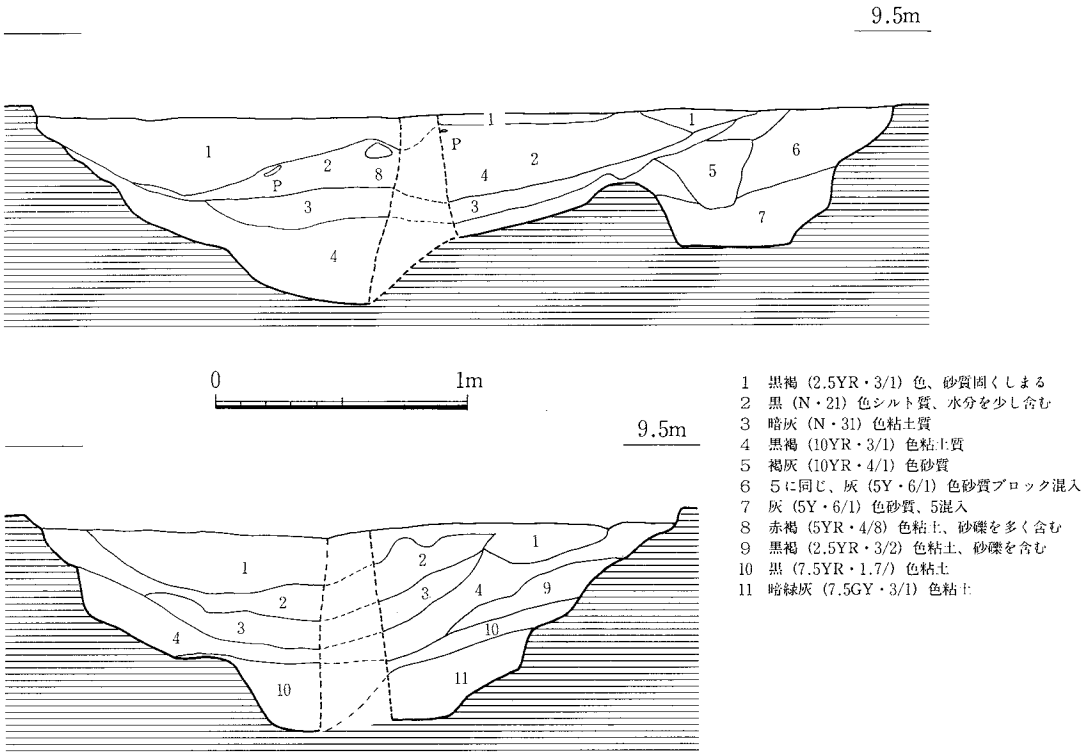


Fig.46　井戸43土層図（1：30）

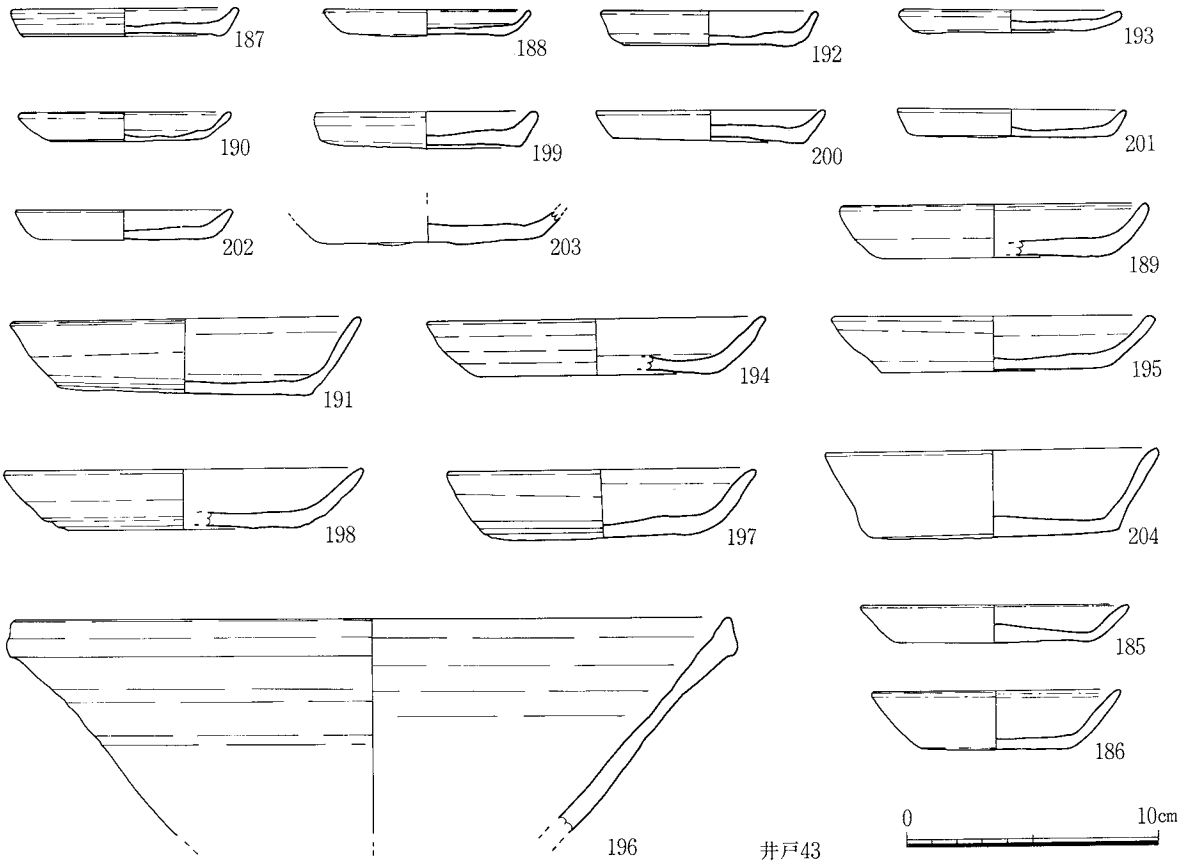
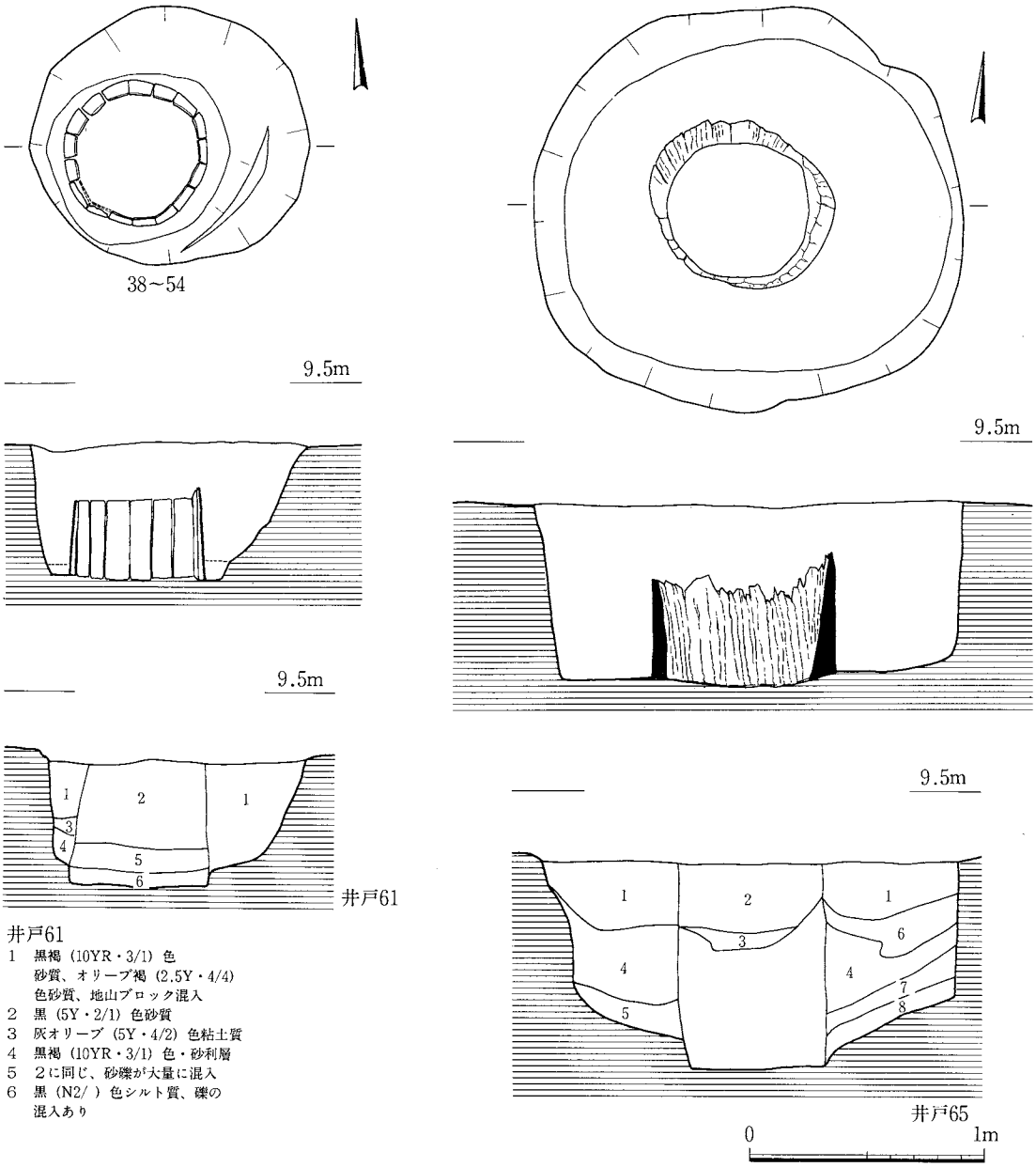


Fig.47　井戸43出土土器実測図（1：3）



井戸61
1　黒褐（10YR・3/1）色
　砂質、オリーブ褐（2.5Y・4/4）
　色砂質、地山ブロック混入
2　黒（5Y・2/1）色砂質
3　灰オリーブ（5Y・4/2）色粘土質
4　黒褐（10YR・3/1）色・砂利層
5　2に同じ、砂礫が大量に混入
6　黒（N2/ ）色シルト質、礫の
　混入あり

井戸65
1　黒（N2/）色砂質シルト
　暗灰黄（25Y・4/2）色砂質
　（地山）ブロック混入
2　暗灰（N・3/）色シルト、礫の混入多い
3　黒（N・2/）色粘土
4　暗灰色粘土・礫を含む
5　灰（N・4/）色粘土・礫含む
6　黒（2.5Y・2/1）色砂
7　4に同じ、青灰（10BG・5/1）色
　粘土ブロック混入
8　黒褐（25Y・3/1）色、砂礫層、
　青灰色粘土ブロック混入

Fig.48　井戸実測図1（1：30）

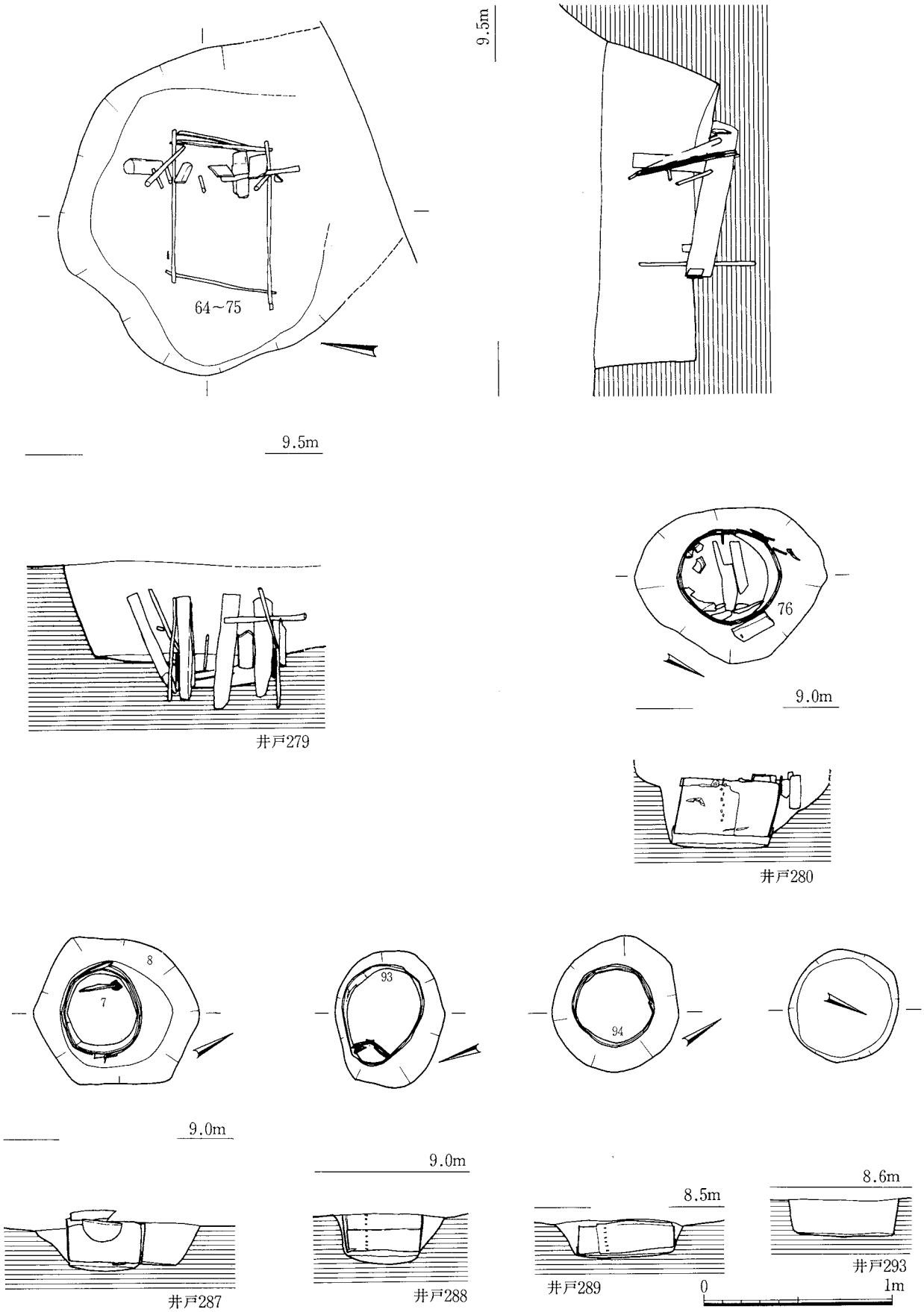


Fig.49　井戸実測図2（1：30）

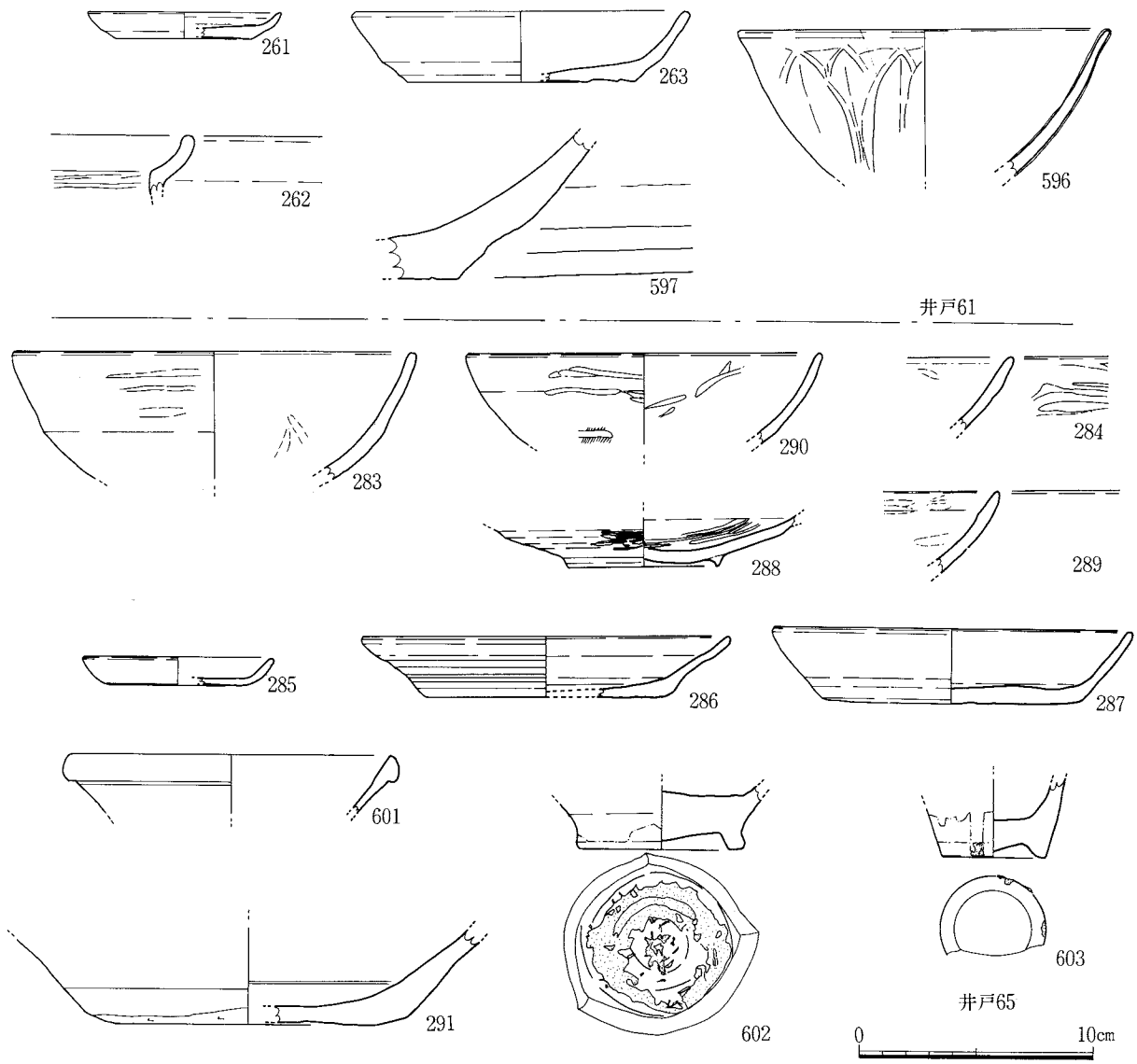


Fig.50　井戸出土土器実測図1（1：3）

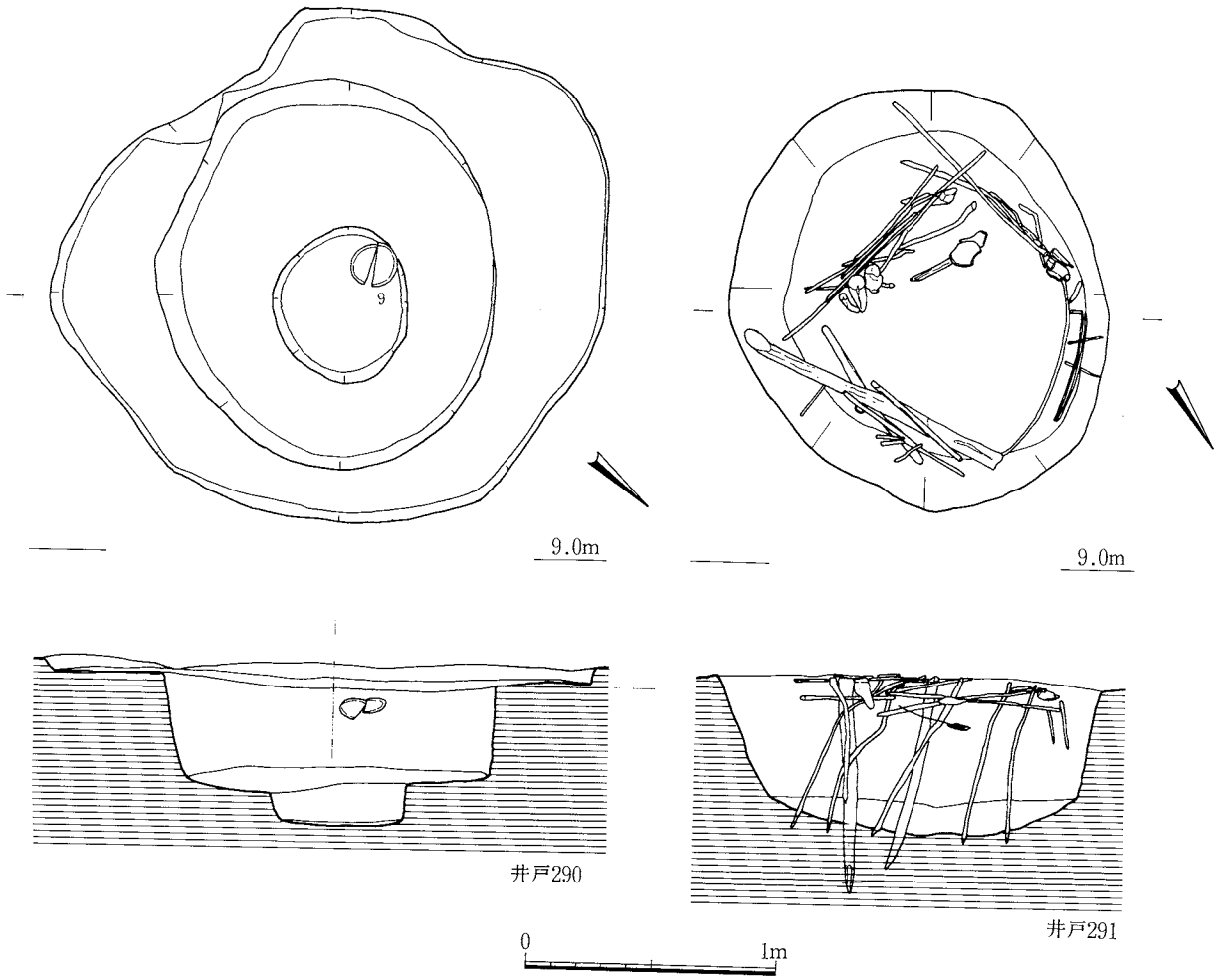


Fig.51　井戸実測図3（1：30）

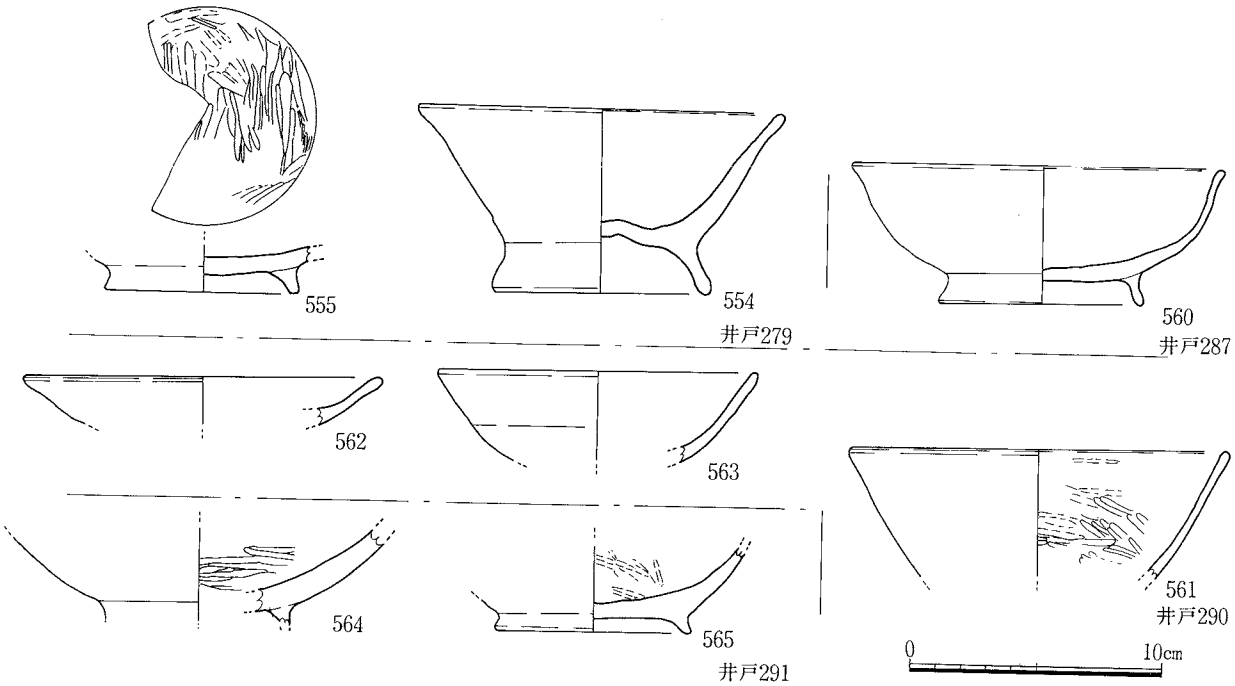


Fig.52　井戸出土土器実測図2（1：3）

る。291は須恵質の底部片である。体部下端に回転ヘラ削りを施す。底部と体部の境にも削りを施し、面取りする。602は白磁底部である。底部は厚く、高台は端部を面取りする。高台外面付近まで施釉する。内面は輪状に目跡が残る。603は陶器。

井戸279(Fig.49)

Ｆ10区で検出した。溝272の床面で検出し、272に切られる。掘方は径1.7～1.8m程の円形を呈する。掘方壁はかなり直に近く、床面は平坦である。検出面からの深さは60～70cmを測る。井戸枠は板材の組合せで、東西に長軸を持つ長方形を呈する。短辺50cm、長辺80cmを測る。長辺側の材にほぞ穴を切り、短辺側の材にほぞを作り出して組み合わせている。板材の幅は15cmである。枠の内外数ヶ所に丸杭や板杭を打って補強している。

出土土器(Fig.52)

555は内黒の黒色土器である。高く踏張る高台が付く。内面はよく燻され、銀色の光沢がある。554は土師器椀である。高く踏張る高台が付く。体部は直線的に大きく開き、端部近くでわずかに外反する。口縁端、高台端とも丸く納める。底部は外底部側から押し出されて、丸い上底状を呈する。内外に回転ナデを施す。完存品で、口径14.8cm、器高7.4cm、底径8.6cmを測る。

井戸280(Fig.49)

Ｇ９区で検出した。掘方は長径１m、短径80cmほどの楕円形を呈する。掘方の壁は比較的直に近く、床面はほぼ平坦である。検出面からの深さは45cm程を測る。井戸枠は径50cmほどの曲物を据えている。高さは35cm程を測る。周囲に補強と思われる板材が立てられている。図示していないが、土師器坏などが出土している。

井戸287(Fig.49)

Ｄ８区で検出した。掘方は径80～90cm程の円形を呈する。掘方の壁は比較的直に近く、床面はほぼ平坦である。検出面からの深さは25cm程を測る。井戸枠は径40cmほどの曲物を据えている。高さは25cm程を測る。南端に寄って据えられている。井戸枠内から木製の蓋、櫛などが出土している。

出土土器(Fig.52)

560は土師器椀である。体部は内湾し、後円部はわずかに外反する。底部は丸底で、高台は高く踏張る。口縁部は内外とも回転ナデを施している。

井戸288(Fig.49)

Ｃ10区で検出した。掘方は長径75cm、短径60cmほどの楕円形を呈する。掘方の壁は比較的直に近く、床面はほぼ平坦である。検出面からの深さは25cm程を測る。井戸枠は径40cmほどの曲物を据えている。やや東西方向に歪んでいる。高さは20cm程を測る。図化に耐える遺物は出土していない。

井戸289(Fig.49)

Ｂ７区で検出した。掘方は径70cm程の円形を呈する。掘方の壁は比較的直に近く、床面はほぼ平坦である。検出面からの深さは20cm程を測る。井戸枠は径50cmほどの曲物を据えている。高さは15cm程を測る。ほぼ掘方の中央に据えられている。図化に耐える遺物は出土していない。

井戸290(Fig.51)

Ｄ７区で検出した。井戸枠は検出されていないが、床面に均整な円筒形の落ち込みがあり、これを井戸枠痕と考えた。掘方は径２～2.2m程の円形を呈する。掘方の壁は比較的直に近く、３段掘りになっている。床面の落ち込みの径は50cm～60cmである。各段の床面はほぼ平坦である。検出面からの深さは60cm程を測る。検出面近くで木製の皿が出土している。

出土土器(Fig.52)

561は黒色土器Ａ類である。焼成は堅緻であるが、内面の炭素は剝落が著しい。562、563は土師器である。いずれも小片で、器形、口径は確実でない。

井戸291(Fig.51)

Ｄ８区で検出した。井戸かどうかは疑問がある。細い丸杭を円形に打ち込み、丸材を横に組み合わせている。井戸枠としては構造的に弱いと考えられる。掘りは径1.5～1.7mを測る円形を呈する。壁は直に近いが、床は中央に向かって凹んでいる。検出面からの深さは60cmを測る。検出面近くから木製容器が出土している。

出土土器(Fig.52)

564は瓦器椀であろう。外面が若干橙色を帯びる。内面はよく燻され、銀色の光沢があり、ミガキも明瞭である。外底部も黒色を呈する。565は黒色土器Ａ類の椀である。内面はよく燻され、銀色の光沢があり、ミガキも明瞭である。

（5）ピット、包含層など出土遺物(Fig.53)

ピット、包含層、遺構検出時などにも多くの遺物が出土しているが、ここでは主な陶磁器類について略述することにする。569は龍泉窯系青磁碗。鎬蓮弁を刻む。621は蛇の目高台の白磁である。畳付のみ露胎である。622は外面に櫛歯文を刻む同安窯系の青磁である。623は白磁碗。端部は緩やかな端反りを呈する。624は龍泉窯系の青磁香炉である。外底部は露胎である。625は龍泉窯系の青磁碗であろう。厚い底部で、高台外面まで施釉される。626は越州窯系の青磁碗。全面施釉される。畳付に目跡がみられる。蛇の目高台で、体部は大きく開く。

（6）各遺構出土石製品(Fig.54、55)

各遺構から出土した石製品をまとめて報告する。Fig.54の4026、4017は権と考えられる。4026は摘みを持ち、L字に穿孔する。重量は36ｇを測る。4017は台形を呈し、上部に穿孔する。重量は77ｇを測る。いずれも滑石製である。4016は権の再製品の失敗作であろう。上面に穿孔の跡があり、ここで破損したものを再加工したのであろう。4001は二連結の容器状の滑石製品である。博多遺跡や箱崎遺跡で類例が多い。4009は砂岩質の紡錘車である。4018は滑石製石鍋の転用品で、上部に穿孔し、側面を削り調整して形を整える。温石として用いたものか。Fig.55の4008、4010、4011、4015は石鍋の破片である。4008は外面に煤が付着する。穿孔しかけており、再加工の途中のものかも知れない。4010は鍔部の破片である。4011は縦方向の把手を持つ。4015は内面に加工痕が明瞭で、未製品と考えられる。4006、4024は石鍋鍔部の再加工品である。鍔を削り落し、全体に丸みを持つ様に仕上げている。4023は権の未製品であろうか。擦り切りによる裁断と、穿孔をやりかけている。4021は側面に切り込みをいれた石錘である。4004も中央に孔をもつ石錘であろう。

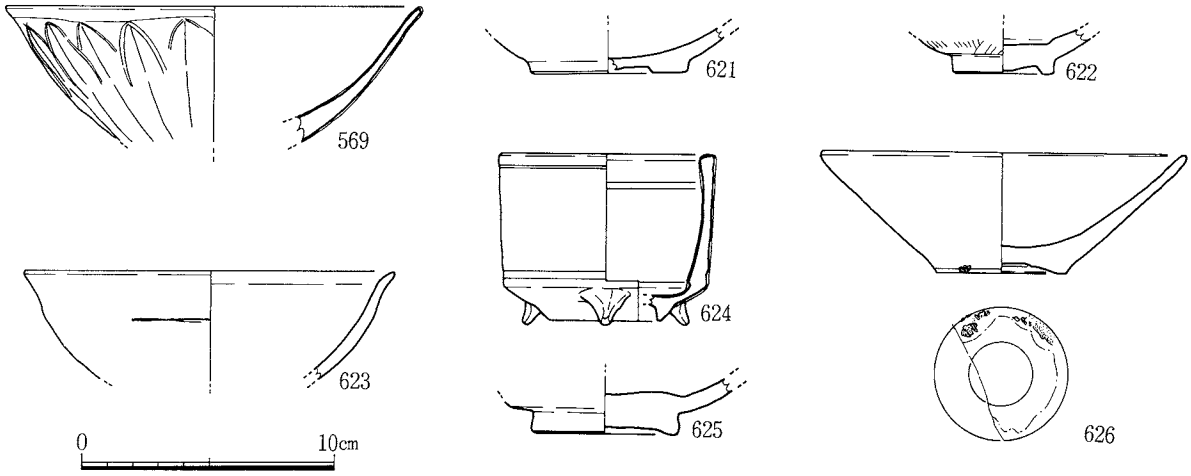


Fig.53　ピット、包含層出土土器実測図（1：3）

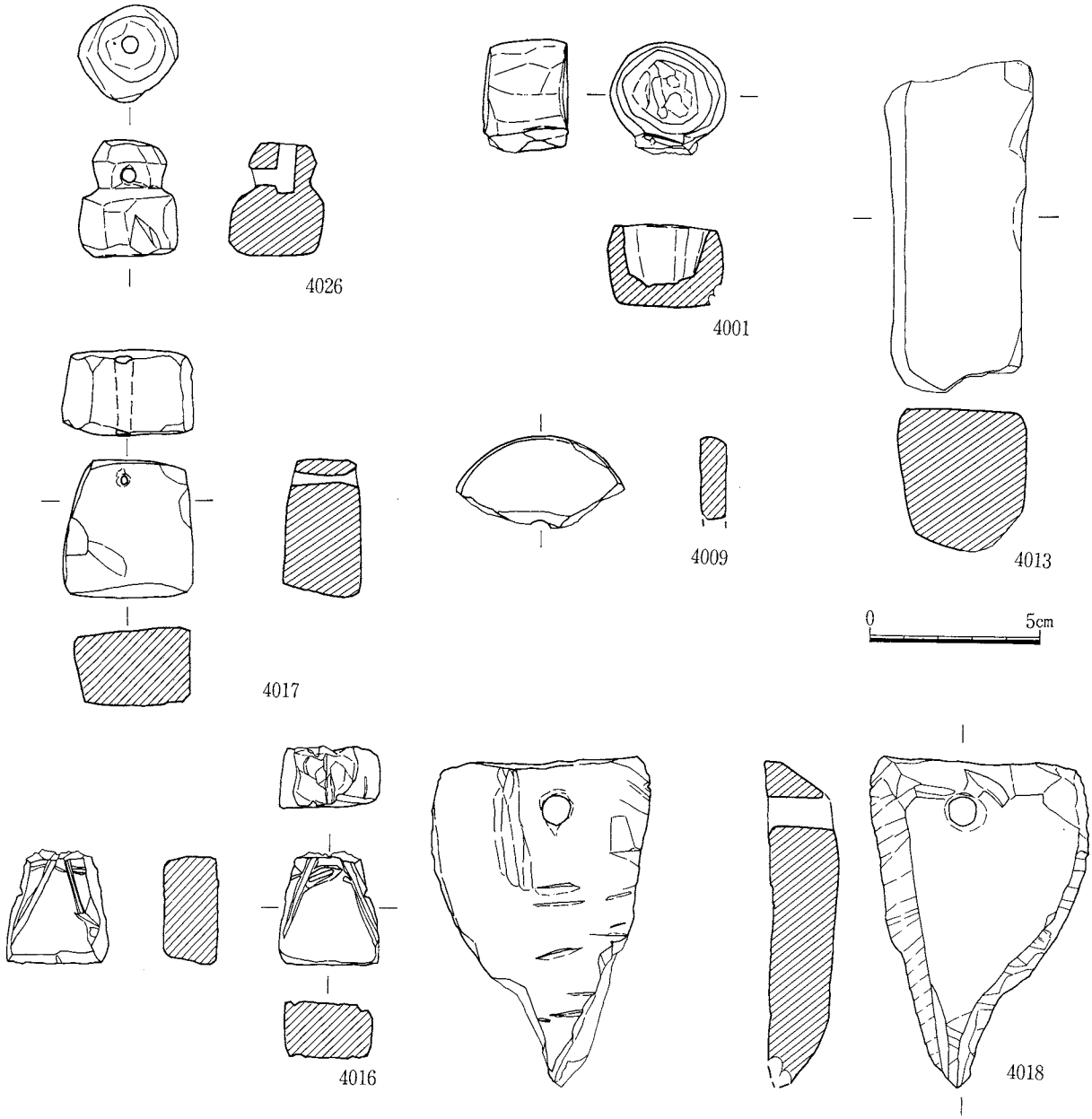


Fig.54　各遺構出土石製品実測図1（1：2）

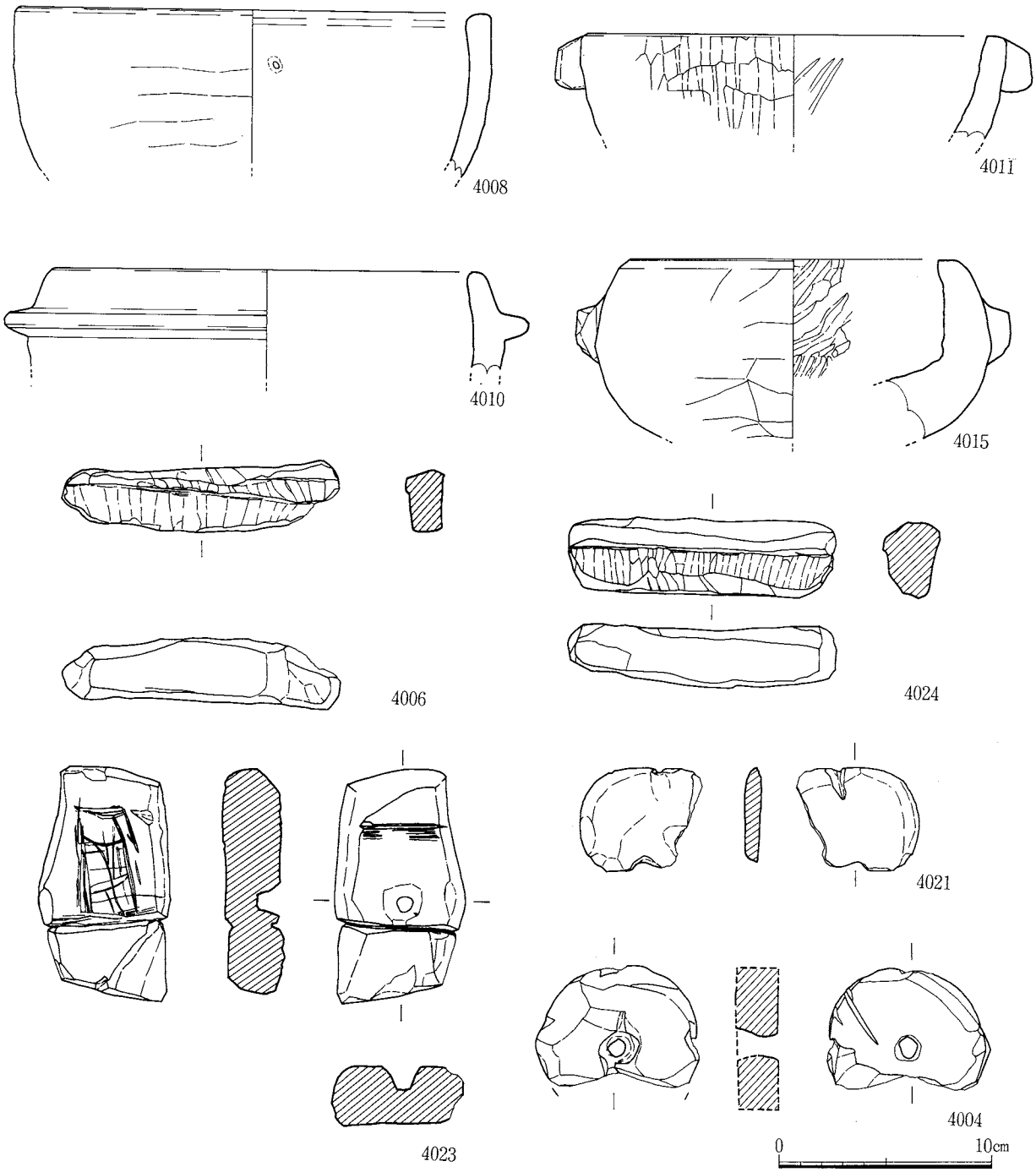


Fig.55　各遺構出土石製品実測図2（1：3）

（7）**掘立柱建物**（付図参照）

以上報告した溝、土壙、井戸の他、調査区内では多数のピットが検出されている。上面集落の時期である古代〜中世の時期には掘立柱建物の住居が一般的であるから、当然住居、屋敷を構成する掘立柱建物が多数あると考えられるが、建物としてまとめることができたのは数棟に過ぎなかった。その結果は付図に示した。

最も明確なものは、溝１の項でも触れたが、溝１の屈曲部に近い陸橋に付設されたと見られる門状遺構である。この建物は梁行１間、桁行３間の南北棟の建物である。規模は梁行４ｍ、桁行６ｍほどを測る。ピットの径も他のピットに比べて大形である。桁行の中央の柱間が陸橋部に合う。

この他に検出された掘立柱建物には大きく分けて南北棟と東西棟がある。このうちＣ４区で検出された２間×３間の東西棟、Ｃ５区からＤ５区で検出された２間×３間の東西棟等はほぼ溝１に併行し、方向も同じくすることから、溝１に伴う掘立柱建物の可能性を考えてもよかろう。またＤ２区からＤ３区で検出した２間×３間の南北棟と、Ｃ５区からＤ５区で検出された１間×２間の南北棟もほぼ方向を同じくする。これらの建物は、北側のものが溝１と切り合い、溝１が取り囲む集落とは時期を異にする。直接時期を示す資料には欠けるが、溝28とほぼ直行することから、この溝に伴う建物の可能性がある。

この他ピット群の分布については粗密があり、南半区に比べると北半区に密であり、また調査区の西端に近い方が密である。この状況から考えると、上面集落の中心部は更に西側に広がっていると考えられる。現在調査区の西側には小水路が流れており、この水路を境に立花寺Ｂ遺跡に隣接するように、遺跡範囲の設定がなされているが、下月隈Ｃ遺跡２次調査地点の状況から見ればここで集落が途切れるとは考えにくい。この水路はある時期の小流路を反映していることは間違いなさそうであるから、水路西側の状況、すなわち立花寺Ｂ遺跡東端の状況を明らかにすることが必要であると考えられる。このことについては集落総括の項で再び考えて見ることにする。

（8）上面集落について

下月隈Ｃ遺跡２次調査地点では上面にあたる標高９ｍほどの微高地の上から、生活遺構が検出された。その主な検出遺構は、溝、土壙、井戸、ピットなどである。この面に集落が展開していたことが明らかになったといえよう。この集落は古代前期（奈良時代）頃、下面の水田が洪水によって放棄されたのち、ある程度の安定したシルト層の堆積を待って、古代後期（平安時代）頃より、集落が作られ始めると考えられる。

検出遺構を今仮に、大きく３期に分けて考えて見たい。

第１期　ヘラ切り底の土師器坏、皿を指標とする。集落の初期の遺構と考えられる段階。
第２期　第１期と第３期の中間に属する段階。12世紀から13世紀代。
第３期　溝28を指標とする、ほぼ14世紀にあたる段階。集落の終末期。

第１期に属する遺構としては、溝では溝196、199、210、211、215、272などで、旧河道271もこの時期と考えられる。土壙では土壙34、40、48、49、77、115、248、227～229等が属すると考えられ、土壙墓133、134も第１期に属するものであろう。井戸では井戸279、280以下の曲物枠の井戸、290、291などが属するものと考えられる。

第１期は比較的長期にわたっていると考えられ、また溝196と199が切り合ったり、溝272と井戸279が切り合うなど、時期のことなる遺構群を包摂しており、いくつかの小期に分けることができると思われる。この時期の遺構は主として南半区に集中する傾向が見られる。

注目すべき遺物としても、調査区の南端の検出面出土の、精製品の越州窯系青磁碗、同じくＧ５区検出面出土の蛇の目高台の白磁碗、溝214出土の緑釉陶器皿、また石製品の中にも滑石製の権など、一般の集落では見られない遺物が含まれている。しかし、遺構としては溝196と、井戸などが目立つ程度で、集落景観を明らかにするまでの成果には恵まれていない。溝196は確実に南側へ延長が延びており、第１期の集落の中心が調査区の南側にある可能性は十分に考えられる。

周辺の該期の遺跡としても、北方にも雀居遺跡があって該期の遺構も見られるものの、やはり距離的に近縁関係を考えるべきなのは、立花寺遺跡と、立花寺Ｂ遺跡であると考えられる。この両遺跡は立地的には立花寺遺跡が丘陵裾部、立花寺Ｂ遺跡が沖積地内の微高地と異なっているが、掘立柱建物を主体とする遺構群と、越州窯系青磁などの特徴的な遺物を持ち、性格がよく似ている。調査者は駅との関係を考えているが、妥当なものと考える。今回調査地点の第１期の検出遺構も位置的にはちょうど両遺跡の中間に位置し、集落の中心が調査区の南側にあるとすれば、更に立花寺Ｂ遺跡の中心部に近づくことにもなる。地形的にも、立花寺Ｂ遺跡と下月隈Ｃ遺跡を画するとされる水路は、先述したように下月隈Ｃ遺跡の中世集落廃絶後の流路の可能性が高く、景観的にも極めて近縁性の高い集落と考えられる。

なお第１期の後半期に至って調査区の北端近くにまで遺構の分布が拡大する。第２期の集落の先駆的な動きと考えられよう。土壙墓133、134はこの第１期の後半期の遺構と考えられる。この墓には土師器、黒色土器などの副葬しか見られず、陶磁器類が見られないので、既にこの墓の被葬者は、前代の官衙的施設とは関係が薄いものと考えられる。第１期後半期には前半期と性格のことなる一般的な集落の形成が始まり、第２期につながっていくものと考えられる。

第２期の遺構群としては、溝では溝１、２に代表される。土壙では土壙37、46、50、51、52、62、

64、66、127等が該期に属するものと考えられる。井戸では井戸61、65が該期に属するものであろう。

第２期には第１期の後半期に拡大した遺構群を受けて、遺跡の中に稠密に生活遺構が分布する状況が認められる段階である。特徴的なことは、溝１、２によって囲まれる遺構群の出現である。溝１と２の関係は残念ながら明確にすることはできなかったが、第２期の遺構はほぼこの中に集中する。この中に井戸、廃棄土壙、掘立柱建物等の生活遺構が作られ、集落としての景観が整った感がある。溝１は検出時には浅いものであるが、入口に門状遺構を備える堂々たる溝である。深さも本来はもっとあったものであろう。溝１の内部には溝１に平行、直行する浅い溝があり、更に小区画に分けられていた可能性が高い。更に内部には溝１と軸を同じくする掘立柱建物も検出された。

出土した遺物は、同時期の他の遺跡と共通する。博多遺跡群には及ばないものの、中国製磁器、陶器の優品も相当量出土する。

第２期の集落は南北はほぼ40mの範囲であろうが、東西には、とくに西側に溝１、２が延びることは確実であるから、更に集落が拡大する。掘立柱建物の項でも述べたように、ピットは西端に近いほど密になる傾向が見られ、むしろ中心部は遺跡の推定範囲を越えて、西側にある可能性が高い。

第３期の遺構群は、溝28に代表されるが、溝としては溝185、土壙としては、土壙45、井戸43のうち井戸を切る土壙の方などが第３期に属するであろう。第２期に比べると遺構が激減する感は否めない。この時期の遺構の特徴といえるかどうかわからないが、今挙げた各遺構には、多量の遺物の一括廃棄という特徴がある。とくに顕著なのはいうまでもなく溝28である。これが集落の廃絶になんらかの関係があるのかもしれないが、明らかでない。ともかく、該期を最後に集落は廃絶し、その後は水田として利用されることになる。

3．第２面水田の調査

（1） 概　要（Fig. 56）

第２次調査では、第１面の古代～中世の集落および包含層の下層において、水田面を検出しこれを第２面として調査した。第１面では、調査対象地のほぼ西半分のみにしか遺構と包含層が認められなかったが、第２面の水田は対象地全面に広がっている（Fig. 56)。第２面の水田は、第１面の遺構検出面である灰色～黄褐色シルト層からおおよそ 0.7～1.0m下げた高さで検出されている。第２面への掘り下げは、重機を用い、砂層の間に畦畔の頂部が現れたところで人力掘削を開始した。第２面の水田は全体的には残りが良く、水田面の土質と明らかに異なる洪水砂層が覆っている部分が大部分

Fig.56　第2面水田全体概略図(1/600) ※中央アミかけ線は旧河川の等高線(m)、348などの数字は遺構番号。

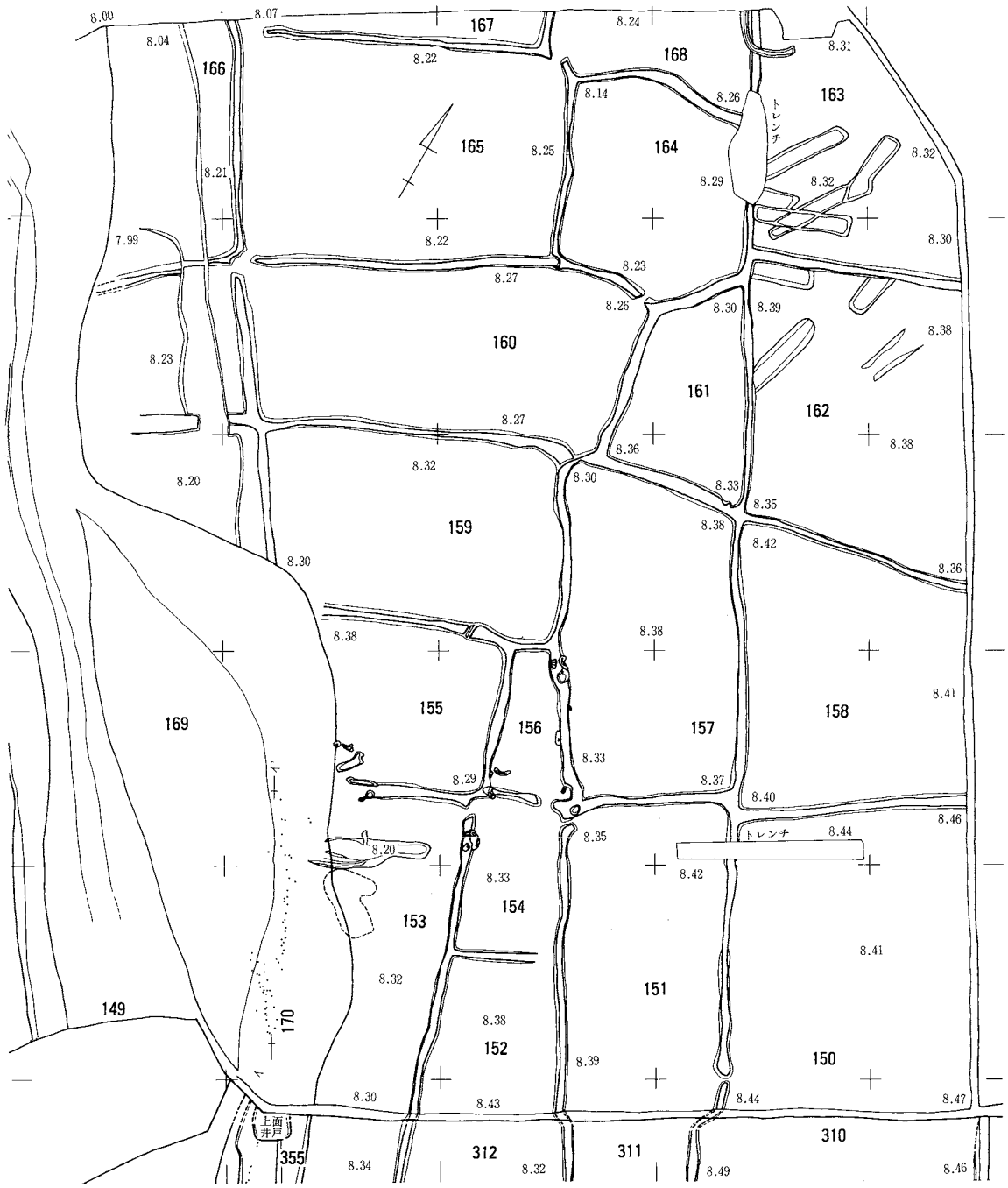


Fig.57　北部調査区東半水田平面図(1/300) ※170は杭列、ゴシックは遺構番号、8.07などは水田面の標高(m)

であったためその検出は容易で、先に記したように重機による掘り下げでも畦畔の頂部が良く分かるほどであった。一方、検出を容易にした洪水砂層の存在は、逆にその洪水が畦畔を一部流失させていたと考えられる部分もあり、そうした部分ででは、水田面自体も一部流失し分かりにくい部分もあった。水田面は、その洪水砂層を人力で取り除くことにより姿を現した黒褐色～暗褐灰色の粘土ないし粘質のシルト土層である。なお、調査は排土処理の関係上、南北に調査区を分け（「北部調査区」「南部調査区」）、排土を反転処理している。また、調査区の中央では、略南北方向に水田と同一面で旧河川跡が検出されている。これは主に重機で掘削している。便宜上、この旧河川を境として東西の調査区に分けて呼称する（「東半水田」「西半水田」）。さらに、西半水田では、当初検出した水田直下ないし数十cm下部に、砂層をはさんでより古い水田面（黒色粘土層）が検出されている（これを「下層水田」、この上面の水田は「上層水田」とする）。

検出された水田は、畦畔により囲まれた１区画を１枚として、東半水田では29枚、西半上層水田では９枚以上（畦畔が一部流失している可能性あり）、西半下層水田は14枚以上（下層水田は一部のみの調査のため）である。全体的な特徴では、東半水田と西半上層水田は、概して整った長方形区画を呈し、一部を除き１区画が80～350m²の間におさまるが、西半下層水田は、長方形であるものの、15

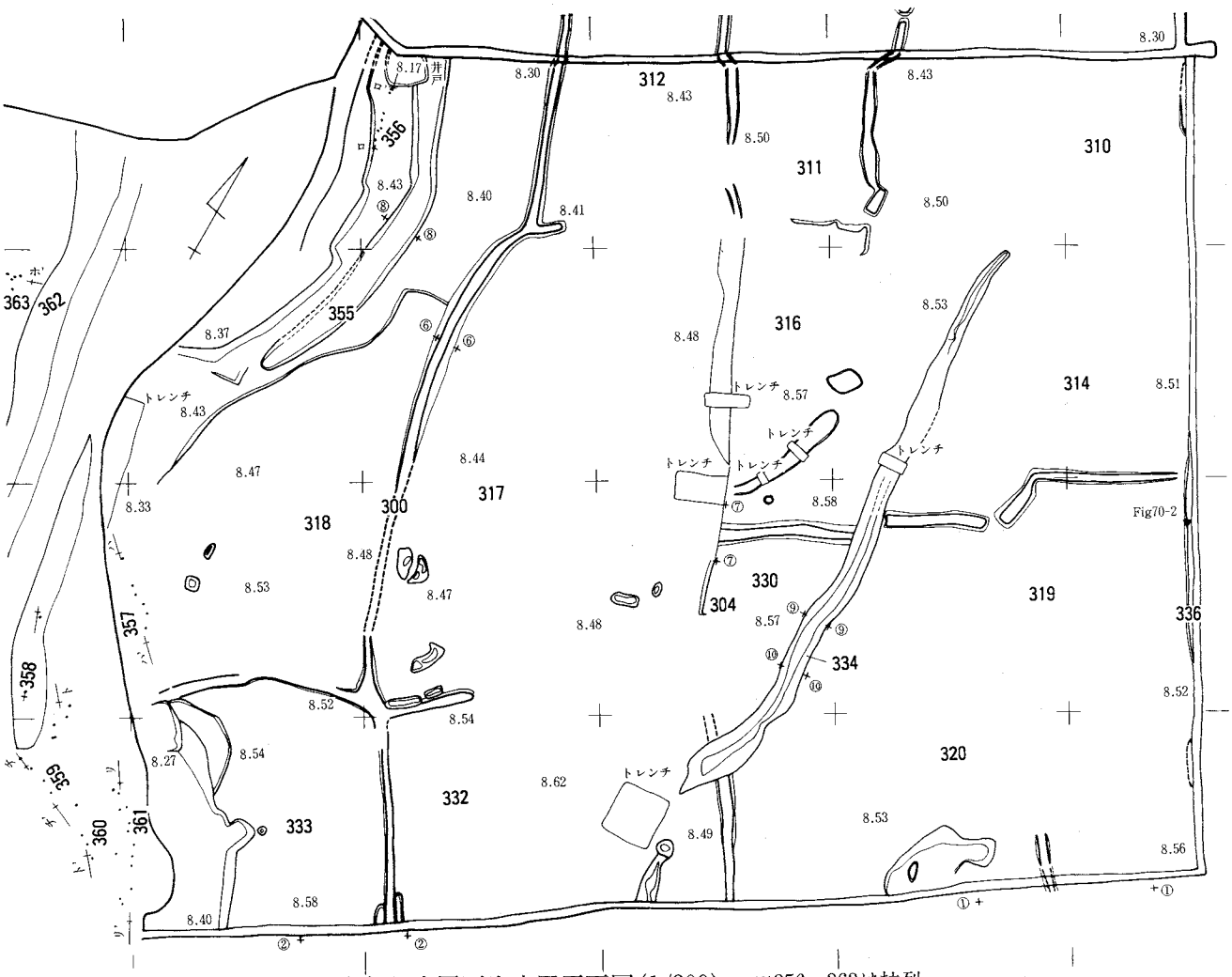


Fig.58　南部調査区西半水田平面図(1/300)　※356～363は杭列

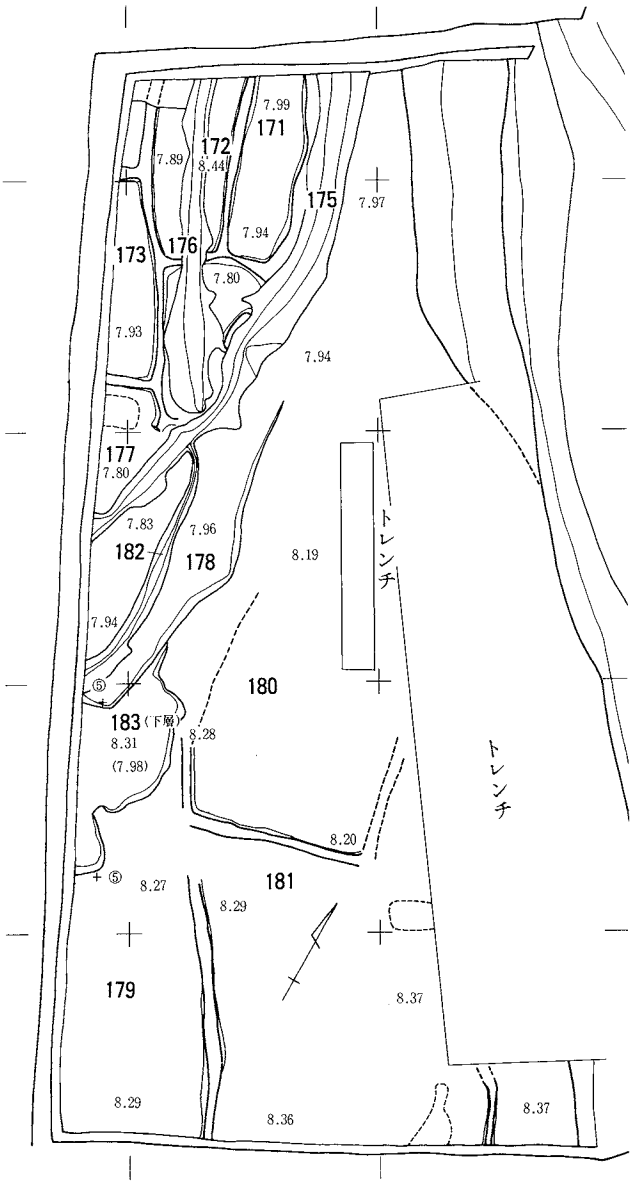


Fig.59　北部調査区西半水田平面図(1/300)

～100m²と概して小さいことが指摘できる。大局的には、福岡平野全体の地形と同じく、水田面は南から北へ低くなるが、部分的には逆になる箇所も多い。また、東西の水田は中央の旧河川に向かって低くなるものの、このレベル差は顕著ではない。立地的には、微妙な起伏はあるものの、全体的には平坦な、沖積微低地に営まれた水田ということができる。なお、西半下層水田は、旧河川側の方が逆に微妙に高く、西に向かって低くなる傾向がある。

以下では、説明の便宜上、東半水田、西半水田（北部調査区）、西半水田（南部調査区）に分けて、順に各水田の内容について報告する。

（2）　各水田の内容

・東半水田（北部調査区はＦig. 57、南部調査区はＦig. 58）

東半水田の北部調査区は、今回の第２次調査の水田の調査の中で、まず初めに調査した部分である。そのため、調査自体に試行錯誤な部分も否めず、調査方法に反省すべきところもある。

水田面の検出は、前述したように、非常に残りの良い畦畔が、重機による掘削の途中で検出できたところで人力掘削に切り替え、砂に埋もれたやや青みのある黒褐色の粘質シルトを出していくことでなされている。しかし、実際の状況は単純ではなく、明瞭に違いの分かる灰白色の砂や粗い砂が覆っている部分は良いが、場所によっては、水田面自体の土が洪水で流されているためか、似たような土質のシルトが水田面を覆う箇所もあり、良く分からない場合もあった。また、畦畔の全体的な残存は良好であるが、途中で途切れる場合があり、そうした所では、隣接する水田区画との関係が良く分からなくなる場合もあった。それでも、水田面を覆っている土砂（水田の土と類似していても）を除去すれば、足跡や稲株の痕跡が見いだされる面で水田面と認定できるものの、特に 150･153･156･154･152号の各水田区画は、なぜか異常に激しい小さな凹凸が全体的に広がり、足跡も深く入り込んでいた。また、これらの区画の畦畔も不明確になってしまっていた。このこと自体は、この水田が洪水で埋没したのが、水田耕起中であったことを示すものであろう。他の水田区画によっては、足跡や稲株痕がきれいに残るものもある（158号等、Ｆig. 63)。逆に、全体的に平坦で、足跡などが少なく、または浅く、良く分から

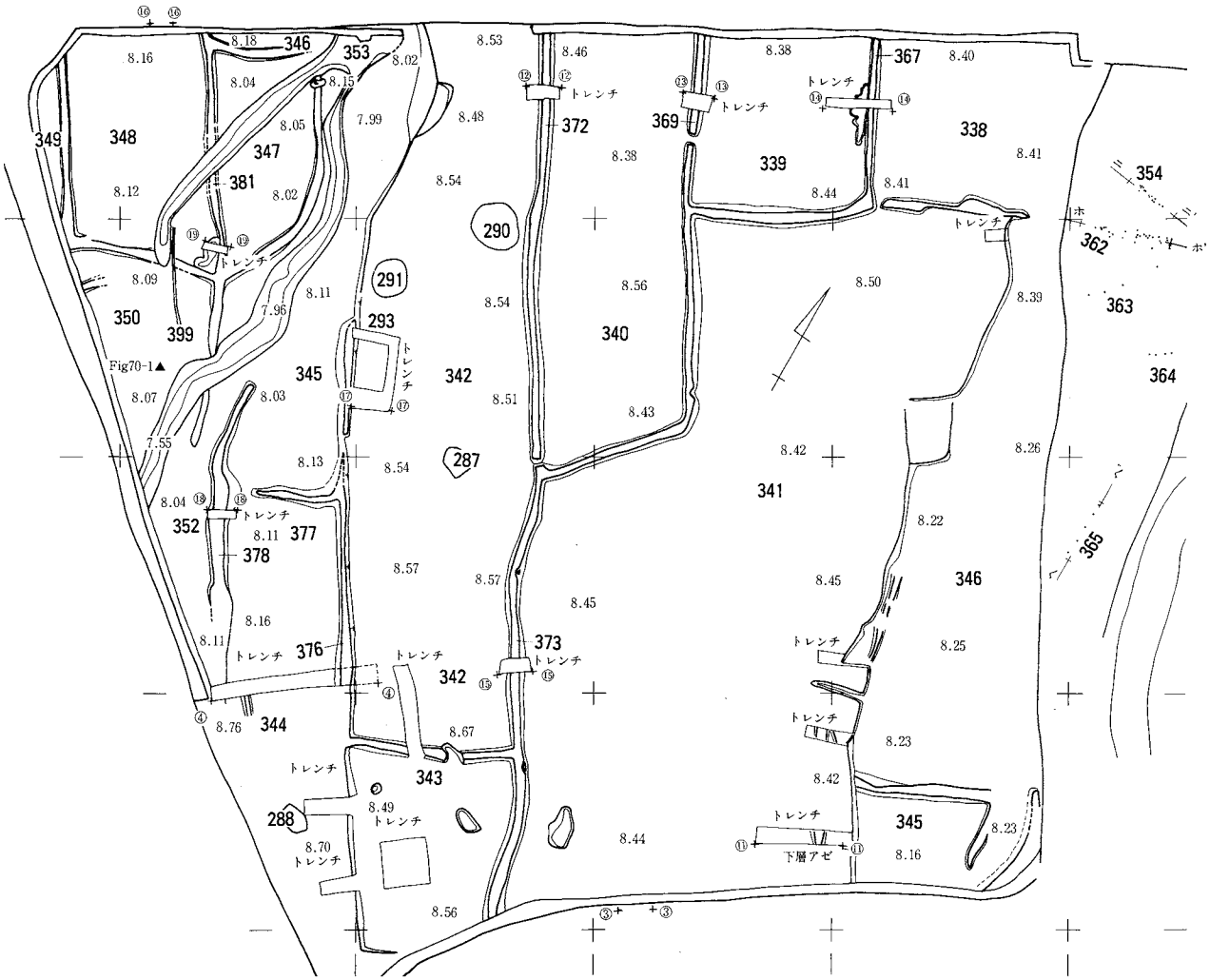


Fig.60　南部調査区西半水田平面図(1/300)　※354、362～365は杭列、287・288・290・291は上面の井戸

ない区画も少なくなかった(163・164・165号水田等)。これらは群馬県御布呂遺跡の水田で推定されているように、田植え直前の水田におけるさまざまな作業の段階の違いが、各区画に現れていることを示すと見られる（工楽善通1991『水田の考古学』P.96-98 を参照)。

調査では、これに気付いたまでは良かったが、ここから次の失敗（？）をおかしてしまった。畦畔が途中で途切れ、区画が不明なことに気を取られたあげく、耕作土を取り除けば、畦畔の盛土の下に地山を削りだした畦畔の基部が残っているだろうと考え、多くの部分でここまでこれを実行してしまった。結果としては、これは正しく、耕作土上面で畦畔が不明確な部分でも、耕作土を取り除くと、地山削り出しの畦畔の基部が、上面での畦畔の想定部分に現れた。事実掘削では、地山（黒色粘土）と耕作土の間には、微妙な灰白色の細砂層がはさみ、分離することができた。つまり、水田設定当初の区画プランを現出させることができたと言える。しかし問題があるのは、慌ててこのような作業を行ってしまったため、耕作土上面での段階で、十分な記録を取らないこととなり、実際の耕作土面の状況が不明瞭になってしまったことである。Fig. 57（およびFig. 58～60の一部）の水田面のレベルは、全てではないが、耕作土をある高さ除去した場合のものである（Fig. 61・62ではこれを考慮して、耕作土面レベルに点線を付している)。また、先に書いた水田耕起中の各作業段階云々という話も、調査中のメモと記憶によっている。はじめに洪水砂層を除去した段階で、十分な記録作業を

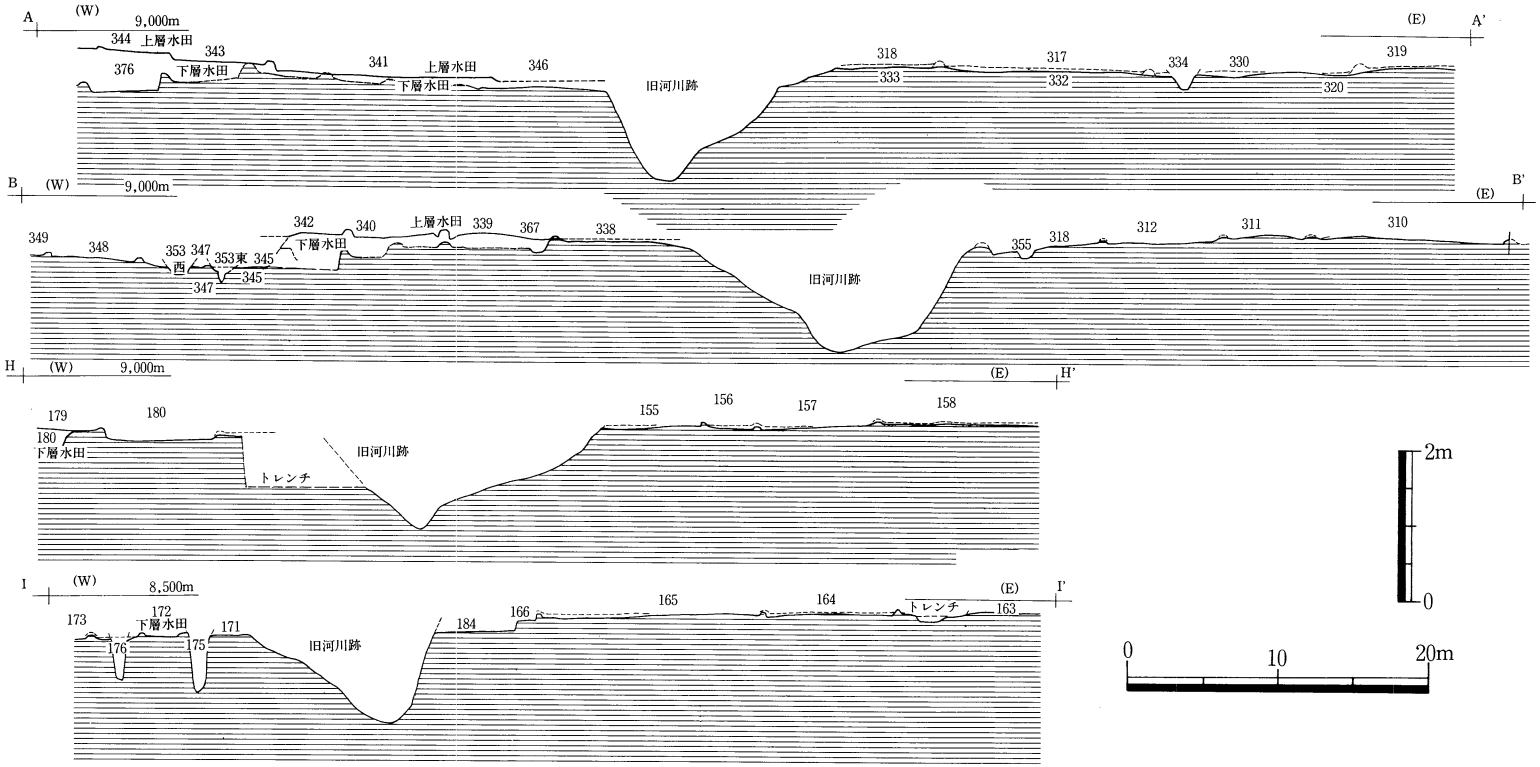


Fig.61　水田東西断面図　A-A'、B-B'、H-H'、I-I'(横1/500、縦1/100)

残していれば、田植え直前における、各区画の作業の細かな内容が復元できたと思うと悔やまれる。また、調査中は畦畔の途切れる部分は、洪水により流失したものと考えたが、あるいは、手畦を造る途中であったためかもしれない。さらに、結果的には耕作土上面で予想した畦畔の部分に、地山削り出しの基部があった場合が大部分であったが、2段階の調査をすることにより、両者が違う場合ということもありうるから、当初の区画と、経営時（実際はその最終時の）区画が変わるということも分かるかもしれない。今後はそうした調査が必要になるだろう。

東半水田の北部調査区で検出された水田は、調査区中央の旧河川寄りの165・160・159 等では東西に長い長方形であるが、これより東は正方形もしくは南北に長い長方形となっている。調査区全体や、東側の第3次調査から見ると、後者が基本形のようである。前者は、具体的には不明なものの、河川際であるために、地形上の制約でこのような形になったのであろうか。またこの両者の間の、156・154・152(=312) は、北に細くなって行く台形状となっているが、これも河川の流路との関係上であろうか。これらの東辺は、他の区画（畦畔） と同じN－35°－W前後を走る。他にもこうした台形の区画(161号等）や、多角形状の区画(164号等）があるが、これらは微地形を反映するのであろうか。残念ながら今回の調査だけではそのあたりが良く分からなかった。また、畦畔が途切れる水口も、いくつかの場所で検出しており、非常に細かい灰白色砂が低い方に放射状にたまっている場合が見られた(160-164号間等)。しかし大半の畦畔では、そうした例や、水口そのものが不明な場合が多い。結論的には、配水系統は、水口は補助的なもので、田越しが主であったようである。

各水田区画の面積は、微地形による調整的な台形区画の水田が15～80m²ときわめて小区画であることを除けば、 80～200m²前後のやや広い区画である。やや広いといっても、水田の分類では、工楽善通（前掲）のB類であり、広義の小区画水田である。先に述べた配水系統（方法）は、この類型によくあるものであり、特に問題はないだろう。

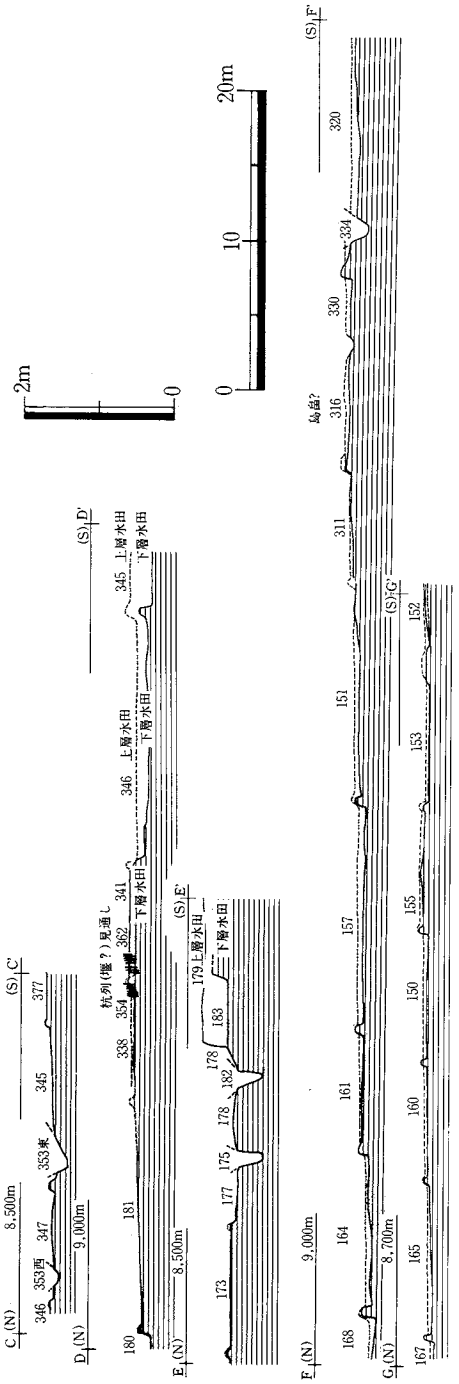


Fig.62　水田南北断面図　C-C'、D-D'、E-E'、F-F'、G-G'(ヨコ1/500、タテ1/100)

以上、東半水田の北部調査区の内容、とりわけ調査時の状況について長々と述べてきた。これは、調査自体が試行錯誤状況であったことも報告するのが責務であると認識するからであり、今後の水田調査に何か役立つのではないかと考えるからである。また、南部調査区の東半水田と西半上層水田の状況は、基本的に同様の内容であることも、ここまで詳しく記述した理由である。

次に、東半水田の南部調査区について報告する（Fig. 58)。この部分は、以上の北部調査区と同一の水田面である。排土処理の都合上南北に分けて調査したのであるが、その境界間において、同一の水田区画を別の遺構番号で呼称しているものがある(150=310、151=311、152=312、153=313)。この水田の調査では、北部調査区の調査時の所見を踏まえ、洪水砂層を取り除いたところでの観察と記録をするように試みた。しかし、度重なる雨天による清掃の繰り返しと、特に調査区の東側では、洪水砂が少なく、水田面直上にシルトがかぶっていたため、水田面の検出が難しく、結果的に全体を下げすぎてしまっている。

この水田の西側の旧河川との間には、北部調査区では部分的にしか分からなかった(169・170号杭列)、護岸と推定される杭列や(356～361 号杭列)、土手状の高まり（大畦畔？、H－7・8グリッド）を川縁に検出している。本来この両者は一連のものであろうが（土手状高まりと 356号杭列)、洪水で流失したのが大部分で、その一部を検出したのであろう。杭列や旧河川については別に後述する。

以下、各水田の状況を記述する。調査区南東隅の319・320号水田は、洪水砂の被覆が少なくシルトが覆っていたために、水田面をかなり下げてしまった。両水田区画の間は、調査区南壁際に、辛うじて地山削り出しの畦畔の基部を検出している（Fig. 64、土層①20層他)。これを北に延長すると、ちょうど 302・303号畦畔の間の水口付近になる。地下水位が高く、湧水のある水田である。いずれも耕起前の水田の可能性があり、足跡は少なく浅い。また動物（牛馬？）の足跡と見られるものもあった。稲株痕？（不整小円形状の砂の落ち込み）は少数見られた（以前のものか)。320号水田の西側の330号も同様の状況であるが、304号畦畔に接する北辺と西辺は、足跡が比較的多く残っていた。320・330号水田は、北辺の303・304号畦畔の接合がずれるため、この位置に直交する畦畔が本来あったのではないかと、現場において推定したので分けている。その想定位置は、295号畦畔から延長した位置になる。ただし畦畔の痕跡は、調査区南壁土層を精査しても不明であったので、同一の区画かもしれない。332号水田は、西半において足跡が残り、稲株痕？もあった。特に、西辺の308号畦畔に沿って足跡が多くあった。全体的に直下に鉄分の沈殿が見られた。333号水田は、その北東部分で足跡が比較的残り、鉄分の沈殿が見られた。西側は、河川の洪水で削れられて落ち込む形になるが、本来は護岸の杭列と考えられる361号杭列まであったのだろう。318号水田は、水田自体の土が流失したのか、はっきりしない水田面であったが、その東側は残りが良く、耕起中と考えられる凹凸が残っていた。西は本来、357号杭列で画されるのだろうが、北の313号水田との境界の畦畔は残っておらず不明である。317号水田の面積は、約205㎡である。この区画はその南半において足跡（動物？も含む）や稲株痕？が比較的多く見られた。北半では、足跡は浅く少なかったが、稲株痕がやや多く見られる。東の330号水田との間は、畦畔が不明確であったが、レベル差が明らかにある。ただし、304号畦畔の途切れ方が不自然であるので、本来は西にのびて、317号水田は二つの区画に別れていた可能性がある（南半を331号とする)。316号水田は、南の畦畔は明らかであるが、東西北が不明である。この区画は不思議なことに、耕起痕はもとより、足跡や稲株痕が全く検出されなかった。鉄分の沈殿もない。現場では、この部分は本来一段高く、検出時にすでに削ったのではないかと考えたが、その理由が良く分からなかった。整理の段階で、水田に関する資料を収集するなかで、このような区画は「島畠」と呼ばれるものではないかと考えるに至った。「島畠」は、水田の中に、休憩等の共有スペースとし

Fig.63　158号水田足跡・稲株痕実測図(1/80)

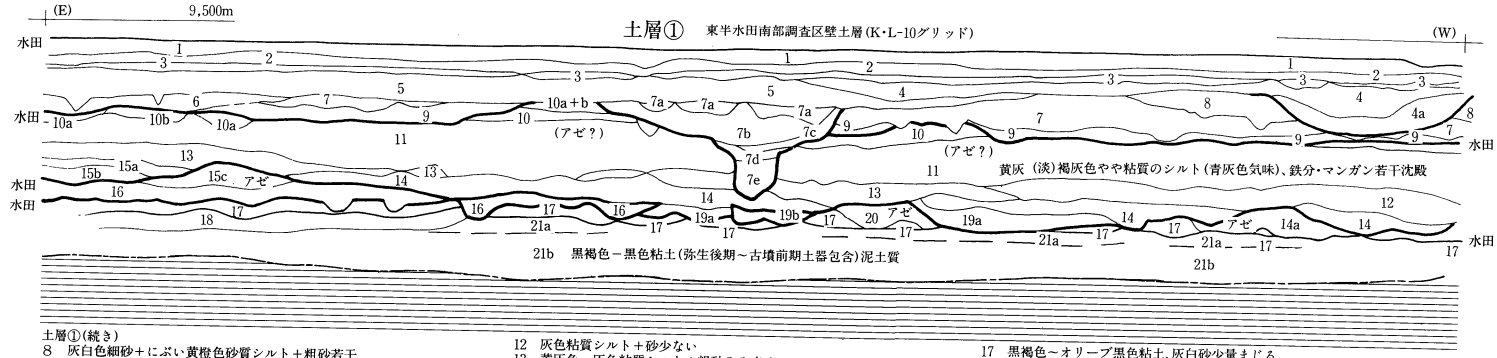
て存在することがあるらしいが、消極的ながらこの区画も耕作痕跡が不明な点でその可能性を指摘できる。この東の314号水田は耕起前？かと見られ、足跡が少ない。稲株痕？が少数見られる。この北の310号水田は、北部調査区の150号と同一と考えるが、314号との間の畦畔が不明なことと、その西の295号畦畔が調査区境界で屈曲しているようなので、ちょうど調査区の境に略東西の畦畔があったのを検出し損ねている可能性もあり、むしろ314号水田と同一区画かもしれない。西辺の295号畦畔に沿って足跡が見られるが、他は少なく、稲株痕もない。311号水田は、南の316号水田（島畠？）との間にあきらかにレベル差があるが畦畔は不明であった。北部調査区の151号水田と同一であろうが、前述の理由で、間に略東西の畦畔があった可能性もある。足跡、稲株痕ともに少ない。312号水田は、北部調査区の152号と同一か。足跡若干、稲株痕あり。この西の313号水田は、足跡・稲株痕があるが西側は水田面の土自体が流失しているのか不明瞭であった。西は河川沿いに土手状の高まりにより画される。なおこれに平行する溝355は、切り合いから洪水時または洪水後にできた小流路である。

以上、東半水田の南部調査区の各水田区画について記述したが、北部調査区のところで記述したのと同じく、水田耕起中を示すように区画により異なる状況が見られる。ただし、331(317)・332号水田では稲株痕が比較的多く、それより以前の稲株痕の残存ではなく、すでにそのシーズンの田植えがなされていた可能性が高い。北部調査区の158号水田（Fig. 63）は、足跡列が数列畦畔とは斜行して残っているが、これにそって稲株痕があり、ちょうど田植え中のものであろう。この観察が正しいとして、かつ洪水が同一時期とすれば、田起こしから田植えまでの各作業が区画により微妙に時期が異なっていた可能性もある。類例や民俗例を求めたい。

東半水田の南部調査区では、畦畔について、一部を断ち割るなどして、詳しい観察を試みた。298・299・300号畦畔は、一連のものであるが、いずれも地山削り出しの上に盛土をしている（Fig. 65、土層⑥)。300号畦畔が南で欠失するのは、流失しいるというよりも、西側の318号水田が耕起中のためか。その走向が曲がっているのは、旧河川に関連する微地形に規制されているためであろう。306・307・308号は、地山削り出しの部分しか平面的には良く分からなかったが、土層の観察では盛土が若干残るようである（Fig. 64、土層②12b層など)。なおこのあたりは、水田面直上に洪水砂が少なく、直後にシルトがのり、水田が新たに経営されていると判断される（土層②)。296・297号畦畔は、地山削り出し部しか検出できず、途切れが多いが、方向から南の309号畦畔へ続くのだろう。西から304・303・302号遺構の略東西の畦畔は、途中に水口状の途切れる箇所もあるが、一連のものである。土層観察では、地山削り出しがほとんどなく、主にシルトの盛土による畦畔である（Fig. 65、土層⑦)。294号から336号畦畔は、調査区東辺の排水のための側溝に沿って辛うじて検出された。一見地山削り出しであったが、一部断面を観察すると実は盛土のようである。336号畦畔では、この盛土の中に、8世紀初頭頃の須恵器の坏蓋の破片があり、東半水田の時期の上限を示す（Fig. 70-2)。

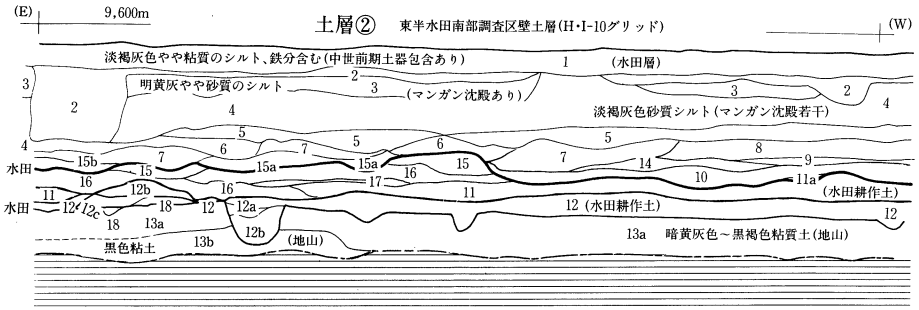
・西半水田（北部調査区）（Fig. 59）

旧河川の西側にあたるこの調査区では、旧河川の西に沿って大きく確認トレンチを入れて、より下層の水田の有無を確認した。結果として、以下記述する下層水田より下には水田面が確認できず、黒色粘土層、さらに下層には、基盤に緑灰色または青灰色の粘土層があるのみであった。検出された水田は、調査区の南半では179・180・181号の区画のやや広いものが、調査区北半から西縁にかけては、区画が小さく細長い水田を検出した。両者の水田面のレベル差は、20～30cmであり、この部分の調査ではその関係を良好につかむことができなかったが、南部調査区西半水田の「上層水田」「下層水田」



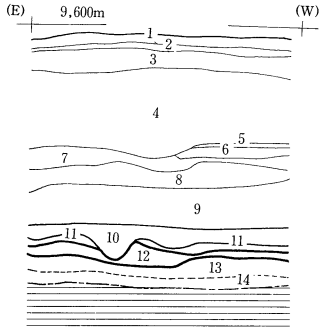
土層①
1　旧表土下水田耕作土(埋立土以前)
　灰黄色土、砂を若干含む
2　1層の水田床、鉄分沈殿、にぶい黄橙色
3　黄灰色－灰田色土、砂を若干含む
4　明褐灰～褐灰色シルト、砂を若干含む、鉄分あり
4a　褐灰色砂質シルト、砂・粗砂を含む
　マンガン粒子あり
5　褐灰色シルト、砂を少し含む
6　灰白色細砂と褐灰色砂質シルト互層
7　灰色・白色・明褐灰砂、粗砂層
7a　灰－褐灰色細砂質シルト＋砂層
7b　灰色・白色・褐灰色粗砂層
7c　明褐灰砂質シルト＋灰白細砂
7d　灰白砂＋褐灰粘質シルト互層
7e　青灰粘質シルト(柱痕?)
(7a～7e層　溝状遺構か)

土層①(続き)
8　灰白色細砂＋にぶい黄橙色砂質シルト＋粗砂若干
9　灰白色細砂＋明褐灰色砂質シルトの互層
10　明褐灰～褐灰粘質シルト、灰白色細砂まじる
10a　10層と9層の中間、砂は少し　　10b　10層＋砂・粗砂やや多い
11　(図を参照)
12　灰色粘質シルト＋砂少ない
13　黄灰色～灰色粘質シルト＋粗砂やや多め
14　灰黄色～灰色粘質シルト、砂・粗砂やや多い
14a　(むしろ17層?)暗灰色粘質土～シルト＋砂・粗砂若干
15a　灰色粘質シルトと灰白色砂の混合層(半々)
15b　黄灰色～暗灰色粘質シルト＋灰白色砂・粗砂やや多
15c　(むしろ16層?)灰色～暗灰色、灰白色砂・粗砂若干まじる
16　黒褐色粘土、粗砂やや多くまじる(水田層)
17　黒褐色～オリーブ黒色粘土、灰白砂少量まじる
18　黒褐色粘土(泥土)、21a層とほぼ同じ
19a　灰色粘質シルト＋灰白砂・粗砂混入
19b　灰色粘質シルト、砂少量まじる
20　灰～暗灰色粘土＋黒色粘土、粗砂混入
21a　黒褐色粘質土、一部耕作土下半
21b　(図を参照)湧水多い

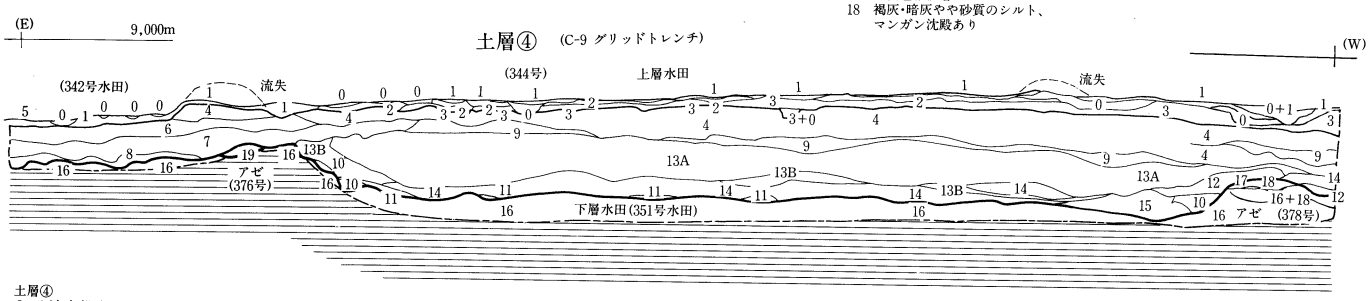


土層②
2　褐灰～明褐灰色シルト、砂若干、
　鉄分・マンガン若干沈殿
5　明黄灰色やや砂質シルト、砂少し
6　黄灰～灰色粘質シルト
7　明灰～灰黄色砂・粗砂層
8　明褐灰色シルト＋にぶい黄橙色細砂互層
9　淡灰黄色細砂層
10　明黄灰シルト若干＋灰白色砂・粗砂多
11　暗黄灰粘質シルト＋砂若干・鉄分・マンガン沈殿あり
12　灰色～暗灰色粘質土＋砂・細砂・粗砂若干混合層、鉄分・マンガンあり
12a　12層＋粗砂やや多い、鉄分・マンガン目立つ
12b　褐灰～暗褐灰色粘質シルト＋砂・粗砂少し
12c　12b層に似るが砂やや多い、鉄分・マンガン含む
11a　11層＋細砂若干
14　9と10の間層の灰色シルト、砂少し
15　褐灰色やや粘質のシルト、砂まじり
　マンガン沈殿多い
15a　15層＋灰白色細砂、鉄分・マンガン含む
15b　15層＋砂・粗砂まじり、やや砂質シルト
16　灰色～黄灰色シルト、細砂少し、マンガンあり
17　灰白色細砂層
18　褐灰・暗灰やや砂質のシルト、
　マンガン沈殿あり

土層③　(E-10グリッド)



土層③
1　暗オリーブ色砂質シルト(水田?)
2　黄褐色砂質シルト、鉄分沈殿
3　黒褐～暗褐色砂質シルト、マンガン沈殿
4　にぶい黄褐色砂質シルト、鉄分・マンガン沈殿
5　黄褐色細砂層
6　黄褐色砂層
7　黄灰色～暗灰黄色シルト、鉄分沈殿、下面に砂
8　黒褐色粘土、鉄分わずかにあり(上部水田)
9　暗灰黄色砂・粗砂、灰色砂の互層
10　灰黄色粗砂＋灰色砂＋明黄褐色砂
11　灰色砂層
12　オリーブ黒色粘土、細砂を若干混入(上層水田)
13　オリーブ黒色粘土、砂混入なし(下層水田?)
14　黒色粘土、砂混入なし、湧水(地山)



土層④
0　灰白色粗砂、又は灰白色粗砂と灰色シルトの混合土
1　灰色～褐灰色シルト、砂が少しまじる
2　灰褐色やや粘質のシルト、鉄分・マンガン少し沈殿
3　灰色～暗灰色シルト、やや粘質、青灰色気味、一部砂まじり
4　オリーブ黒色・粘質シルト、灰白砂・細砂一部含む
5　オリーブ黒色・粘質シルト、砂わずか
6　オリーブ黒色～暗青灰色やや粘質シルト、砂・粗砂少し含む、一部鉄分あり
　1～6層上層水田耕作土・床土
7　オリーブ黒色－黒色粘質シルト
8　オリーブ黒色粘質シルト＋淡黄色砂少し(下層水田表層か)
9　暗灰～オリーブ黒色シルトと灰色細砂の互層
10　黒褐色粘質土＋灰色砂質シルト
11　灰白～灰色細砂(青灰色)
12　オリーブ黒色細砂シルト＋明灰色細砂混合層・互層
13A　灰白色細砂・砂＋灰色砂質シルトの混合層・互層
13B　灰黄色－灰白色砂・粗砂＋暗灰色砂質シルト若干混合層
14　明灰色～黄灰白色砂・粗砂＋灰色砂質シルト少し、粗砂主体
15　灰白～黄灰砂、粗砂＋灰白色細砂層、湧水あり
16　黒褐色～オリーブ黒色粘土、一部下方に鉄分、湧水あり、下層水田
17　18と16＋18層の間に明灰色細砂層あり
18　灰白～明灰色砂質シルト＋黒灰色粘質シルト＋砂含む
19　暗灰(黒灰)粘質シルト、砂が少しまじる

0　2m

Fig.64　水田調査区壁面土層(1/40) ※土層①・②・③・④

に対応する。前者の水田面積は、180号は125㎡ 以上、179(=339)号は215㎡ 前後、181(=338)号は180㎡以上である。これらの畦畔は、比較的高く残り、盛土がなされている。ただし後述するが、この「上層水田」部分の水田は、本来存在した下層水田面と、ほぼ同一か直上の面で経営されたようである。調査区の北部も、下層の水田まで下げたが、この面の水田が続いていたようである。171・172・173号の各水田は、いずれも南北に細長い、20㎡前後（調査区外にのびるものの、大きくても30㎡前後か）の典型的な小区画水田である。略南北の畦畔は、上層の水田に似た方位を走行する傾向があるが、実際は歪んでいる。これは、旧河川の関係で微地形の制約を受けているためか。174・177号水田は、溝175・176に大きく切られていて全容が不明であるが、略長方形の区画であろう。174号水田は25㎡前後である。183号水田は、179号水田の北部に砂層をはさんだ落ち込みがあり、これを下げることで現れた水田面である。形態が不整形なのは、検出が困難で調査時の問題もあろうが、実際の水田が旧河川に関連して微地形により制約されていることが主因であろう。上・下層水田の間に、砂層をはさむ場合は、下層水田の確認が容易であるが、これがほとんどない箇所が多く（Fig. 65、土層⑤を参照)、いずれの土も黒褐色～黒色の粘土であり、その分離が容易ではない。調査区の北半で下層水田まで下げてしまったのも同様である。179・180・181 号の上層水田では、足跡等が比較的はっきり残っており、激しくはないものの、水田面の凹凸が見られ、耕起中であったようである。一方、下層水田は足跡や稲株痕が平均的に残っていた。上層水田の土は、黒灰色の粘土ないし粘質シルトであるが、下層のそれは黒色の粘土で湧水のある地下水位である。地下水位と土質が微妙に異なり、水田の種類も微妙に異なる。

・西半水田（南部調査区）（Fig. 60）

この部分の水田の調査は、第2次調査の最終段階であったため、それまでの調査の成果を踏まえた調査をすることができた。しかし一方、時間的にかなり厳しいこともあり、下層水田の調査は全面をすることができなかったのが悔やまれる。

上層水田は、全体的に洪水砂層でパックされた状況で検出され、畦畔の残りが良いものが多く、その頂部が見いだされたところで重機の掘削を止め、人力による水田面の検出に入った。ただし、旧河川際の東側については、洪水のためか畦畔や、水田面自体が流失していたようであり、一部不明確な検出となり、そのまま直下の下層水田面を検出してしまった部分もある。しかし全般的には、耕作土上面で止めて検出できた。調査区西側において、上層水田の落ち込み(342号水田）が認められたが、誤ってそのまま下げすぎて下層水田を重機で検出した。しかし、調査期間の都合から、そのまま調査区の西側を一段下げ、下層水田の調査はこの部分だけ行うことにした。下層水田自体が、調査区西側で一段下がり、上層水田との間に厚い洪水砂層がはさまっている。以下、各水田について記述する。338(=181?）号水田は、始め上層水田の耕起中と見られる深い足跡や、田面の凹凸が観察されたが、旧河川に近いためか、耕作土が流失し、下の砂層がいくつも露出してしまって残りが悪かった。そのため、上層水田を除去し、下層の水田面を調査した。下層水田は、平坦で、足跡や稲株痕が比較的良好に残っていた。また、この部分では上・下層とも畦畔が踏襲されていて、両者の時期が接近していることが示唆される。339(=179)号水田は、耕起中と見られる田面の凹凸や足跡が観察された。この部分は上層水田までしか調査していないが、一部洪水により流失したと思われる凹みの下で下層水田を観察したが、338号水田と類似した状況であった。この区画の東西両辺の畦畔は、断ち割りによる土層観察の結果、盛土が主体であるが、ほぼ同位置に下層水田の畦畔があり、区画が踏襲されているようである（Fig. 65、土層⑬⑭)。同様の状況は、この西の372号畦畔でも見られる（土層⑫)。340号

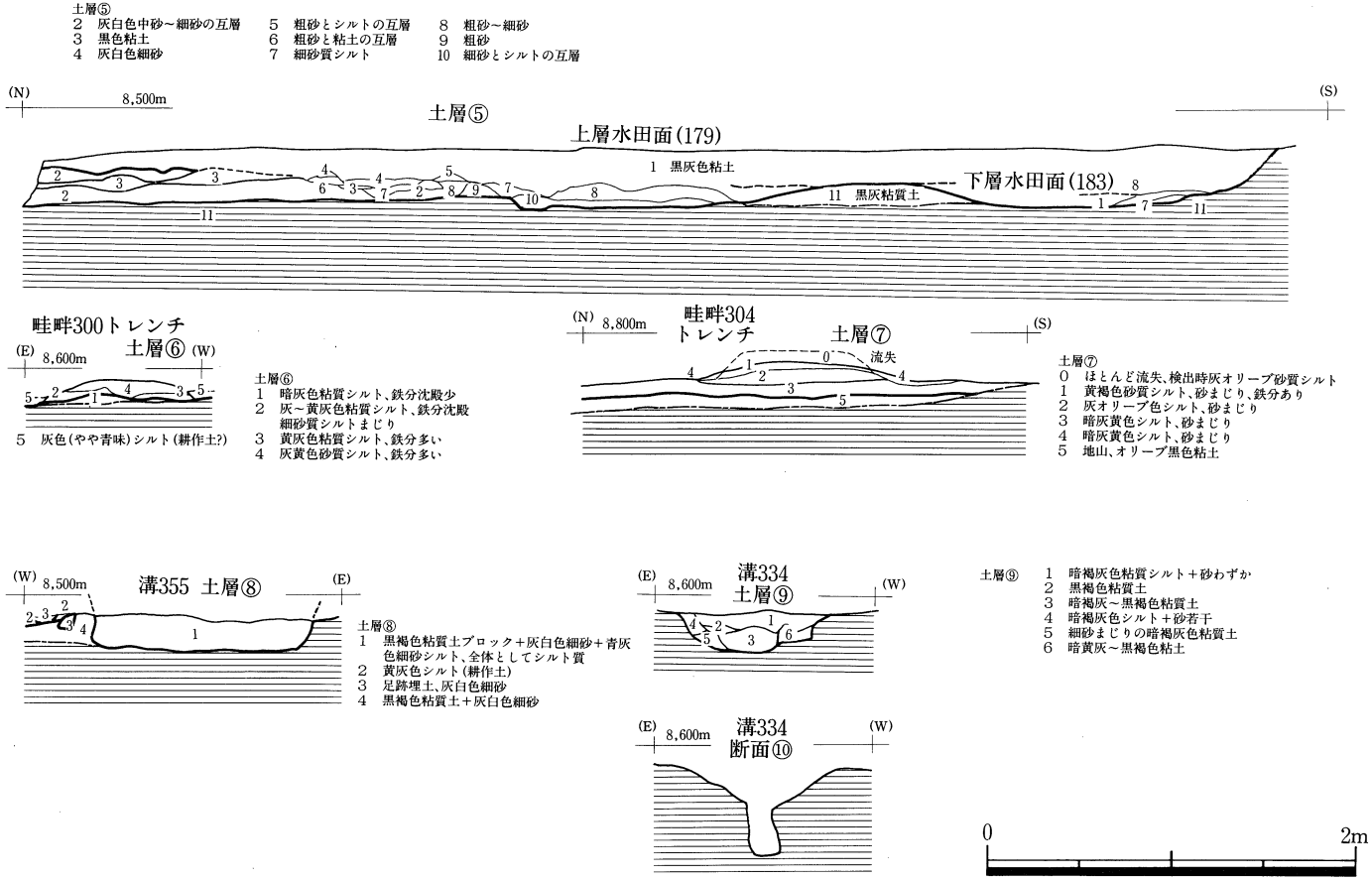


Fig.65　各水田区画、畦畔土層図(1)、溝土層図・断面図(M183水田、M300-304畦畔、M334-335溝)(1/40)
※土層・断面⑤～⑩

水田は、非常に残りの良い水田で、畦畔も高く残っていた。水田面には凹凸があるが、激しいものではなく、足跡も浅く少ないので、畦畔もすでに作られている状況から、耕起直後ないし耕起中でも終わり頃の状況のようである。稲株痕が不明で、田植え以前であろう。342号水田は、非常に細長い水田区画である。西側は、北部では西へ落ち、中部から南部では、ちょうど下層水田の376号畦畔の上に本来畦畔があったが、下層水田の調査のためとばしている。この本来あった畦畔に沿う形で、水田の西半部分に足跡や稲株痕の分布が認められたので、田植えを開始していたようである。東半分は、水田面に若干凹凸のある状況だが、足跡はほとんど認められなかったので、田起こし（耕起）後ならされた直後の状況であろう。343号水田は、水田面上にシルトが堆積していたこともあり、水田面が良く分からない状況であった。中央に方形のトレンチを設定したが、厚さ15cm前後の砂層を挟んで、上層の面から20～25cm下に黒色粘土の下層水田面を確認した。なお北辺と東辺の畦畔は(375・374号)、断ち割った結果は盛土主体である。耕作土と畦畔盛土の間に粗砂が数cm認められた。この西の344号水田は、青味のある暗褐灰色粘質シルトであるが、343号との間に20cmほどの段差がある。トレンチによる確認では、粗砂層を一部挟んで、下層にも水田面と推定される同様の土の層があり、むしろこれがここでの「上層水田」に続く可能性があるが、砂の間層ほとんどないので平面的な検出は困難と判断される。東半水田の調査区南壁土層で見られたように、洪水砂の被害が少なかった部分では、直後に復旧して直上に水田を経営しているらしい。なおこの344号の確認は、やはり上にシルトが覆っていたので、水田上面が不明でかなり下げてしまっている。また鉄分の沈殿が若干認められた。341号水田は、広い区画となっているが、その東半は水田面自体若干流失しているので、畦畔が流失している可能性が高い。特に北側は、371号畦畔の延長方向にそのまま略東西の畦畔があった可能性が高く（東側でその痕跡がある)、この部分は別の水田区画とすべきか。水田面の状況は、残りがやや悪いが、全体的に耕起中の水田のためか凹凸が激しい状況である。水田の東側では、トレンチにより（1～3トレンチ)、下層水田面と畦畔を確認している（Fig. 66、土層⑪)。この水田のさらに東側の 344号水田は、上層水田の土が多く流失していたので下層水田まで掘り下げた。その西辺の畦畔を部分的に確認している。畦畔は低く、足跡等の深い凹凸が多い点で、調査区西側の下層水田と同じである。水田面自体も凹凸があり、下層水田の洪水時期も、上層と同様の耕起作業前後であった可能性が高い。345号水田は、344号と同様の理由で下層まで下げたものである。やはり水田面の凹凸がある。なお、344号水田との間の畦畔は、上層レベルでもこれに相当する位置で存在したので、区画が一部踏襲されているようである。このように、上層水田は、下層水田の畦畔・区画をある程度踏襲している。ただし次に見るように、下層水田はより小区画であり、全体的な地割や方位のみが継承されている。

調査区西側の下層水田面は、全体として足跡が深く、凹凸があり、また足跡の中には動物（牛馬か？）と見られるものも多く存在した。耕作土は下部の地山と区別つかない黒色粘土で、地下水位高く湧水がある。また畦畔は、一見地山削り出しに見えるものの、断ち割った結果は、下部の地山？(耕作土か）との間に砂層が薄くはさむ場合が多く、盛土によるものである(Fig. 66、土層⑱・⑲)ただし、東側を略南北に走る 376号畦畔は、他と比べ高く幅広く、地山削り出しのようである（Fig. 64、土層③)。各水田の面積は30～50㎡であるが、350・352号が同一であれば、100㎡前後となる。351号水田は、田面の凹凸が小さく、足跡も目立たず、稲株痕も少ない（以前のものか)。耕起直後でならされた状況か。352号も同様である。350号は、足跡や稲株痕の分布がある。田植えの開始時か。348号水田は、足跡があり、稲株痕が多く見られる。347号も同様である。345号水田は類似する状況だが、田面に凹凸がやや目立つ。このように、下層水田は、上層水田が一部田植え時であるが、全体としては耕起前後の埋没なのに比べ、むしろ田植え前後の時期の埋没であることがうかがえる。また、排水系

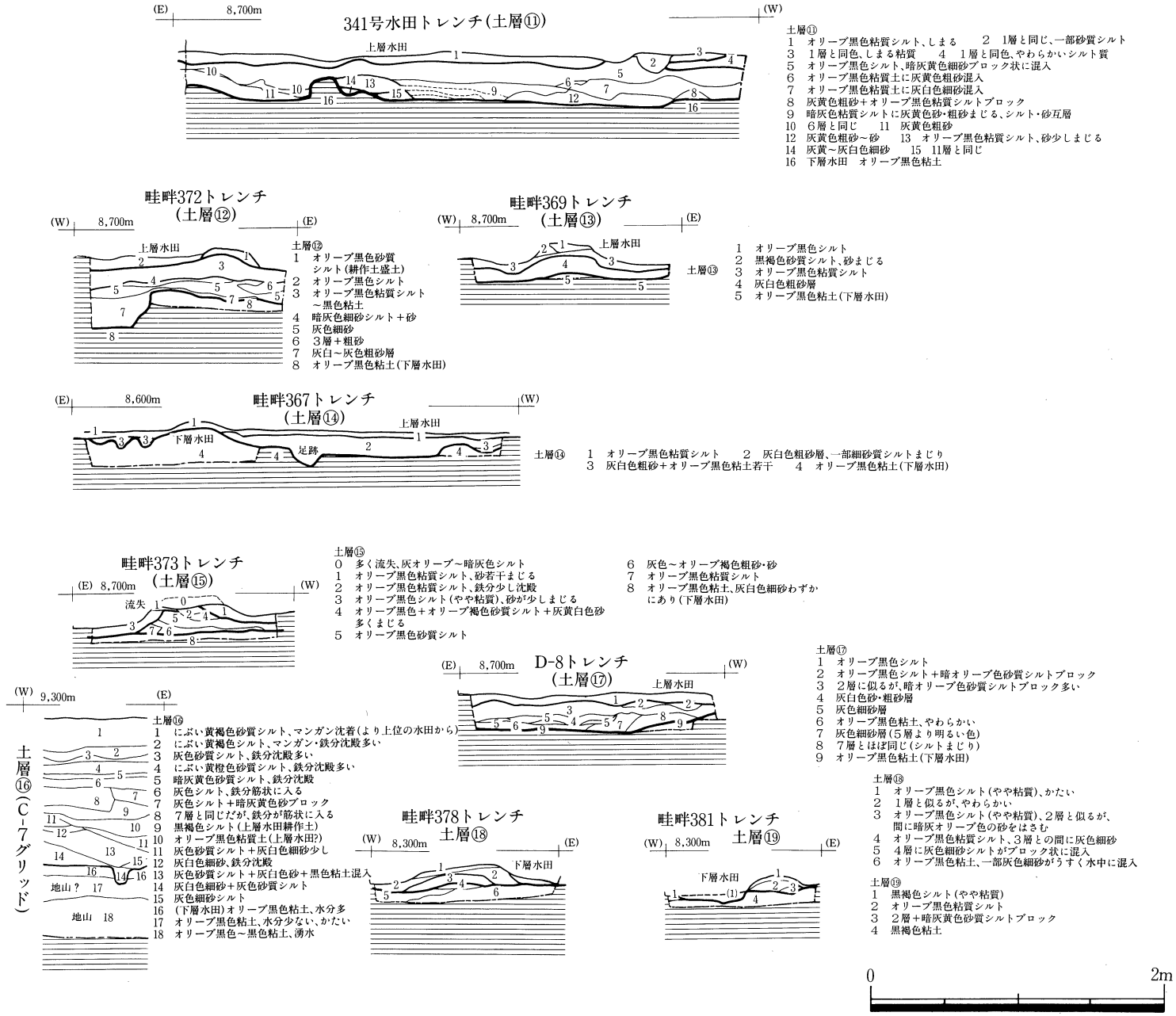


Fig.66　各水田区画、畦畔土層図(2)、調査区壁面土層図(南部調査区西半水田)(S＝1/40)※土層⑪～⑲

統は、各水田のレベル差が少ないこと、畦畔が低いことから田越しが主なようであるが、352・377号畦畔の間は水口と見られ、378号と382号畦畔は一部互い違いに走行するが、これは一種の水口であろうか。なお、溝353は洪水時に形成された小流路と見られ、水田を切っている。

（3） 調査区の土層（Fig. 64～66）

第2面の調査では、調査区の壁面の土層を部分的ではあるが検討している（土層①・②・③・⑯）。

東半水田部分では、調査した水田以外に、その直上の一部に、おそらく時期の近接した水田面が認められた（土層①の16層、②の11・16層等）。調査した水田より約50cm上部にも、水田層が認められるが（土層①）、これはレベル的に第1面の集落に対応し、第3次調査の第1面水田と同じであろう。なお調査区表層の水田は、近世～近代のもので、この上に空港造営時に関わる近年の盛土がなされている。東半水田の土質は、場所により微妙な変化があるが、おおむね黒褐色（オリーブ黒色）から青味のある暗褐灰色の粘土ないし粘質のシルトである。地下水位は高く、若干湧水する部分が多いが、湧水しない部分では水田下面に若干の鉄分が沈殿している。これを参考とすると、東半水田は湛水田ではなく湿田ないし半湿田であろう。青灰色のグライ層はこの調査区壁面土層トレンチでは未確認で、旧河川部分を参考とすると、水田面から約80cm前後以下のレベルである。

西半水田では、その上層水田より約30cm上部に、水田層が認められる（Fig. 64、土層③8層）。なおこの上面の第1面集落・包含層の検出面は、　その水田層からさらに60～70cm上位のレベルである。西半上層水田では、下面の鉄分沈殿はほとんどなかったが、グライ層はトレンチでは達せず、東半水田と同様のレベルであろうから、水田の類型も同様であろう。一方下層水田は、鉄分沈殿等は全く認められない湿田である。ただし、水田面からグライ層まで50cm程度あり、湛水田ではない（Fig. 66、土層⑯の18層の下がグライ層）。なおこの部分では（土層16）、下層水田の20～30cm上部に上層水田の続きがあり（10層）、1層にマンガン・鉄分が、2～6層に鉄分の連続的な沈殿があることから、上層水田の埋没から上面の第1面集落の間に、最低2枚の水田があった可能性が高い。

（4） その他の遺構

第2面では、水田と重複し、溝状遺構や第1面の井戸の最下層の井戸側・水溜を検出した。ここでは溝状遺構について報告する。

・溝状遺構

水田面においては、これと重複する形で、いくつかの溝が検出された。いずれも浅く、多くが南北の正方位に近い走行となっている。ただしその流れる方向は、レベル的に南→北だけでなく、その逆も多い。これらは洪水時、またはその直後の水田埋没後の地盤が不安定な状況で形成された小流路と思われ、多くの覆土は砂層か、砂質のシルト層である。たとえば、西方下層と重複する溝353は、その西の支流は南→北、東の支流は北→南に流れる。溝355は南→北に流れるが、西の土手状高まりに沿うように走行する（土層⑧）。ただしこの溝は北部調査区では旧河川の落ち込みと区別できていない。東方水田と重複する溝334は北→南であるが、途中で途切れる。この溝に関しては、水田直前に存在し、水田造成の際に埋められた可能性がある（土層⑨）

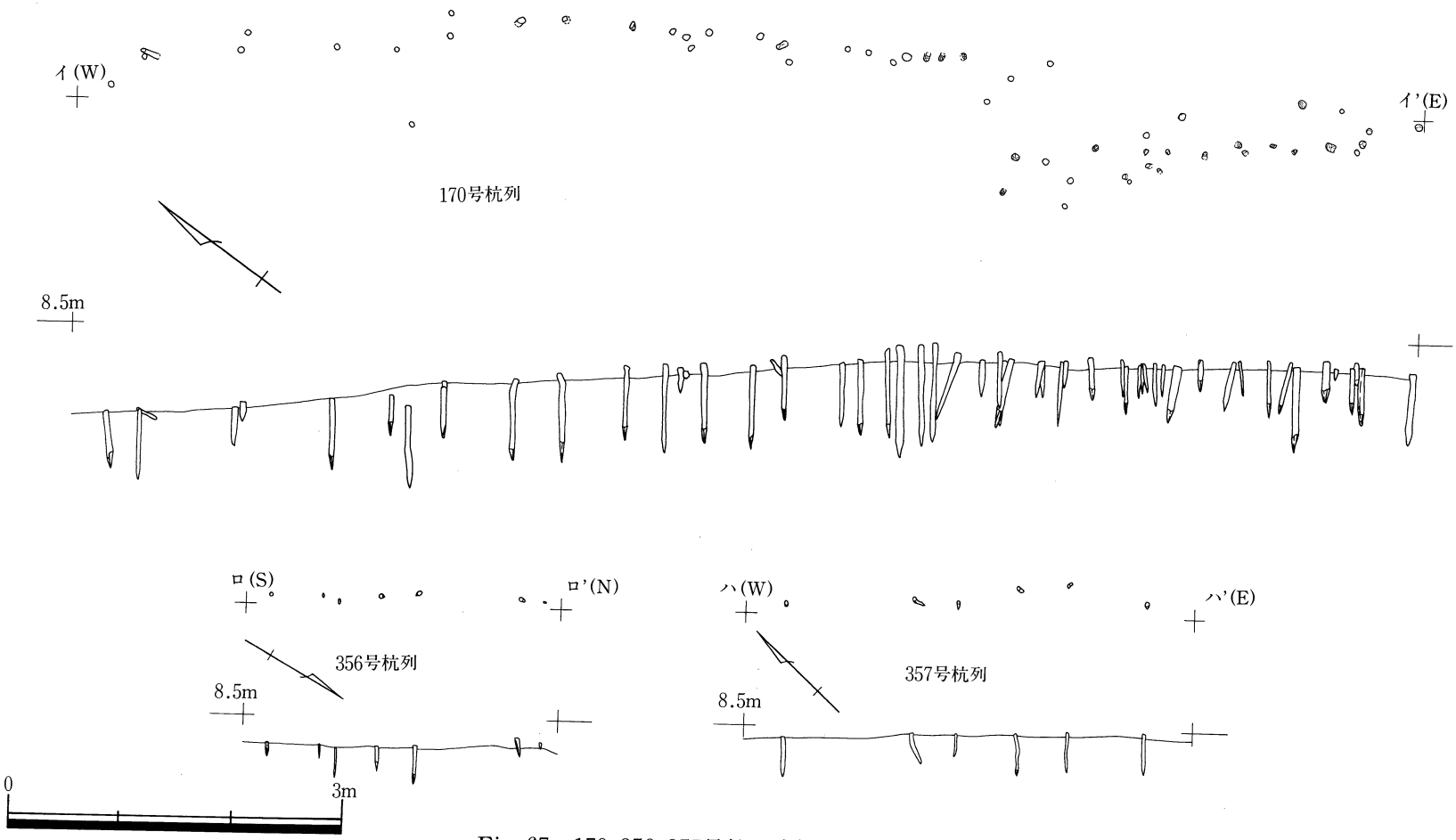


Fig.67　170・356・357号杭列実測図(S＝1/60)

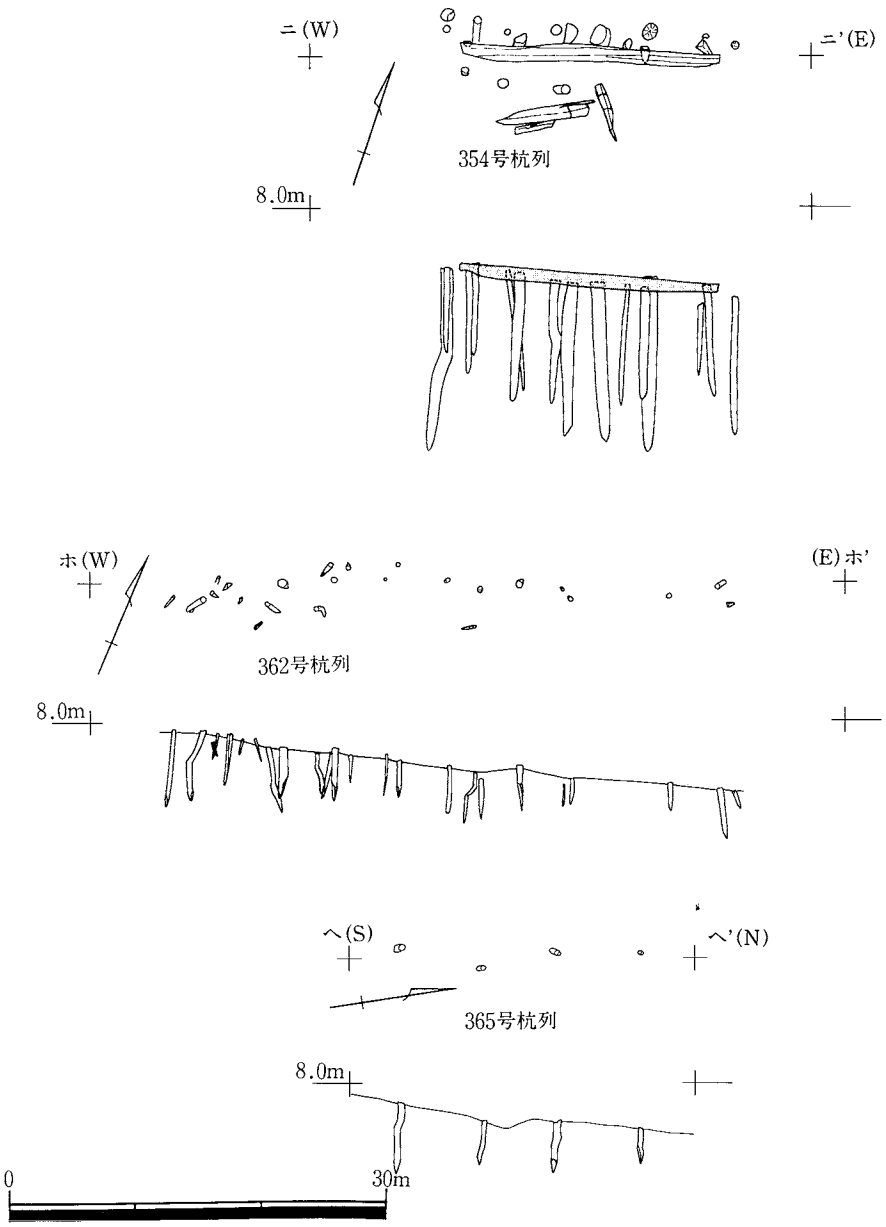


Fig.68　354・362号杭列(堰？)・365号杭列実測図(1/60)

(5) 旧河川と杭列（杭列はFig. 67～69）

調査区中央で検出された**旧河川跡**は（Fig. 56)、水田と同様に洪水砂で埋没していた。掘削は重機で行ったので、全体的に掘りすぎている。検出面、埋土の状況や、旧河川の東西の水田の畦畔の走行方向が、これに規制されていること、杭列が東西両辺で検出されていることから、旧河川と水田の同時性は問題ない。西方下層水田の時期も、東方水田に対応する水田がないので、自然の境界として存在していたのだろう。なお本来の幅は狭いものと考えられるが、洪水で河道が広がったのだろう。

杭列は、旧河川の東側に北から169・170・357・360・361号が、西側に365号が検出された。これらは本来護岸の杭列であろう。東側の358・359号は一段低い位置で、潅漑施設の一部の可能性があるが、ほとんど杭材が失われよく分からない。旧河川に直交する354・362・363・364号遺構は、一連のもので**井堰**の可能性がある。特に354・362号は有機的関連を持ち、杭列の間に横材がある（Fig. 68上)。杭材の流失が多く不明確なのが惜しまれる。しかし、井堰であろうことは、これに接する西半水田の

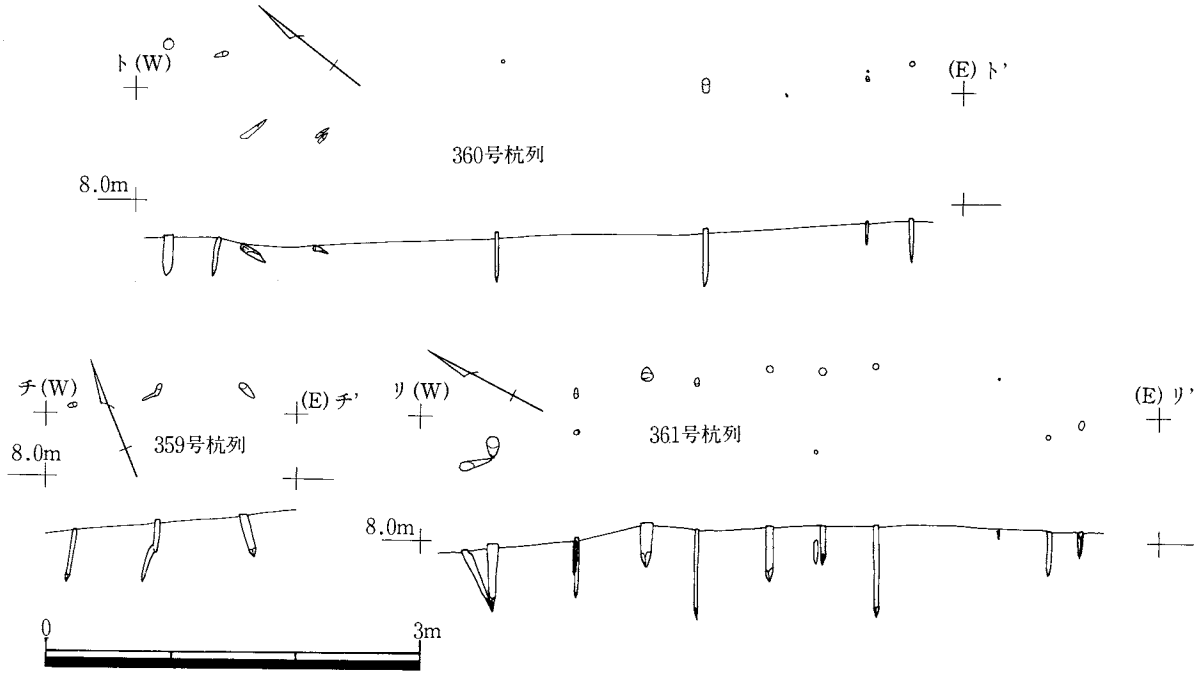


Fig.69　359・360・361号杭列実測図(S＝1/60)

レベルが（北が338号、南が346号）、この遺構の位置を境とし南北両側に傾斜していることからも推定できる（Fig. 62、D－D' 断面）。

（6） 出土遺物（Fig.70、71）

第2次調査の第2面からは、水田を覆った洪水砂や、旧河川跡、水田面、溝などから弥生時代・古墳時代・古代の土器が出土している。これらのうち、水田の時期に関連すると思われる遺物は、数少ないものの、最も新しい遺物の一群を抽出すると、奈良時代頃が主体をなすことが分かる（Fig. 70）。出土遺物の大半は、主として水田上面の洪水砂中から出土した弥生土器（一部古式土師器）であるが、これらは明らかに流れ込みの混入遺物である（Fig. 71）。それらの多くは、ローリングによる著しい器面の摩滅を受けている。また、ここでは図示していないが、東半水田の下部の黒色粘土層からは、弥生時代終末から古墳時代前期の土器がややまとまって出土している。これらは、器面の摩滅をあまり受けていない。その出土分布にも粗密があるようであり、十分な調査をしていないので、その包含層の性格も不明であるが、近くに同時期の集落が存在する可能性を指摘することはできよう。以下、それぞれの出土遺物について説明する。

・水田の時期に関連する遺物（Fig. 70-1～14）

1は、須恵器の坏身である。350号水田（西半下層水田）面の直上で、黒色粘質土に食い込むように出土した。この上には、灰白色の洪水砂層が覆っており、出土状況に微妙な点もあるが、一応洪水砂以前に水田面に廃棄されたものと判断している。約2／3周残存している。口径13cm、高さ4.4cm、

底径9.2cm、をそれぞれ測る。灰色、焼成は良く還元炎焼成される。胎土は細かく、砂礫を少し含む。外面回転ナデ、内面ヨコナデ・静止ナデ、底部はヘラ切り、高台貼付。法量と形態から、九州須恵器編年のⅦ期の古相、8世紀初頭から前葉に位置付けられる。

2は、土師質のミニチュア土器の椀である。完形。手ずくね土器であり、内外に指頭圧痕が残る。外面は若干ナデが施され、やや平滑になっている。口径4cm前後、高さ2.3cmを測る。胎土には砂礫多い。178号水田（西半水田北部調査区）を覆った洪水砂層から出土。時期は不詳であるが、類例から古墳時代後期以降、奈良時代までの範疇か。

3は、須恵器の坏蓋である。336号畦畔（東半水田南部調査区東端）の盛土内から出土した。口縁部の小片で、1／6周前後であろうが、径は復元困難である。現存高2.3cmを測る。内外面回転ナデだが、天井部は回転ヘラケズリである。口縁端部のヨコナデが比較的シャープである。灰色、焼成は良く還元炎焼成される。胎土には砂礫少ない。法量が不明確なものの、形態的特徴から、Ⅶ期の古相、8世紀初頭頃のものであろう。

4は、須恵器の坏身である。162号水田（東半水田北部調査区）を覆った洪水砂と、旧河川（149号遺構）に堆積した砂層から出土した破片が接合している。両者が、同時期の洪水砂により埋没したことを示唆するものである。約1／2周残存。口径12.4cm、高さ4.0cm、底径9.6cmを測る。内外面回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ、高台貼付。灰色、焼成は良く還元炎焼成。胎土は細かく、砂礫は少ない。体部から口縁部の立ち上がりが垂直気味で、口縁端部はすぼめ気味。形態と法量から、Ⅶ期でも古相の、8世紀前葉頃の型式であろう。

5は、須恵器の坏蓋の口縁部の小片である。343号水田（西半上層水田）を覆った洪水砂中より出土した。灰色。法量等不明確であるが、端部の特徴から、Ⅶ期の古相、8世紀初頭頃のものであろう。

6は、土師器の甑の把手の破片。156号水田（東半水田）を覆った洪水砂層から出土。全体的に摩滅を受けている。外面はユビナデが顕著に残り、内面は不明である。胎土には粗砂礫が目立つ。一部のみなので確実なことは言えないが、形態的には把手が退化し、あまり湾曲しないものであるため、8世紀後半頃に下る可能性がある。

7は、土師器の坏である。338号水田（西半上層水田）を覆った洪水砂層中から出土。1／8周しか残っていないので、径の復元はやや無理があるものの、口径19.9cmと復元される。残存高は5.4cmを測る。橙色を呈し、砂礫を含まない非常に精選された胎土である。外面は、ヨコナデ後ヨコミガキ、下部はヘラケズリ後ミガキのようである。内面は、ヨコナデ後ヨコミガキ。8世紀後葉頃の型式か。

8は、土師器の坏の底部の破片である。318号水田（東半水田南部調査区）を覆った洪水砂層から出土。小片であり、径の復元はやや疑問。全体的に摩滅。高台は外にやや広がる。胎土は非常に精良であり、砂礫を含まない。法量不明だが形態的には8世紀後葉頃のもの。

9は、土師器の小形の甕または大形の鉢である。163号水田（東半水田北部調査区）を覆った洪水砂層より出土。口径は復元で25.4cm、残存高3.6cmを測る。外面は、タテハケ後一部ナデ、口縁部はやや雑なヨコナデ。内面は、胴部ヘラケズリ後一部ナデ、口縁部ヨコハケ後ナデ。胎土は、粗い砂礫を多く含む。甕とした場合、胴部と口縁部の角度等から、8世紀でも前葉から中頃のものか。

10は、土師器の椀または坏である。高台が付くタイプであろう。343号水田（西半上層水田）を覆った洪水砂層から出土。全体的にやや摩滅気味。口径の復元は部分的な破片のためやや疑問もある。にぶい橙色を呈し、胎土はきわめて精良で砂礫を含まない。体部中位で屈曲するのは9世紀後半～10世紀のタイプか。これが正しければ、ここに掲げた遺物の中では最も新しいものとなる。ただし、1点のみ他と年代が離れるのも疑問もあり、洪水砂層も同一層か不明な部分もあり、これが即水田の下

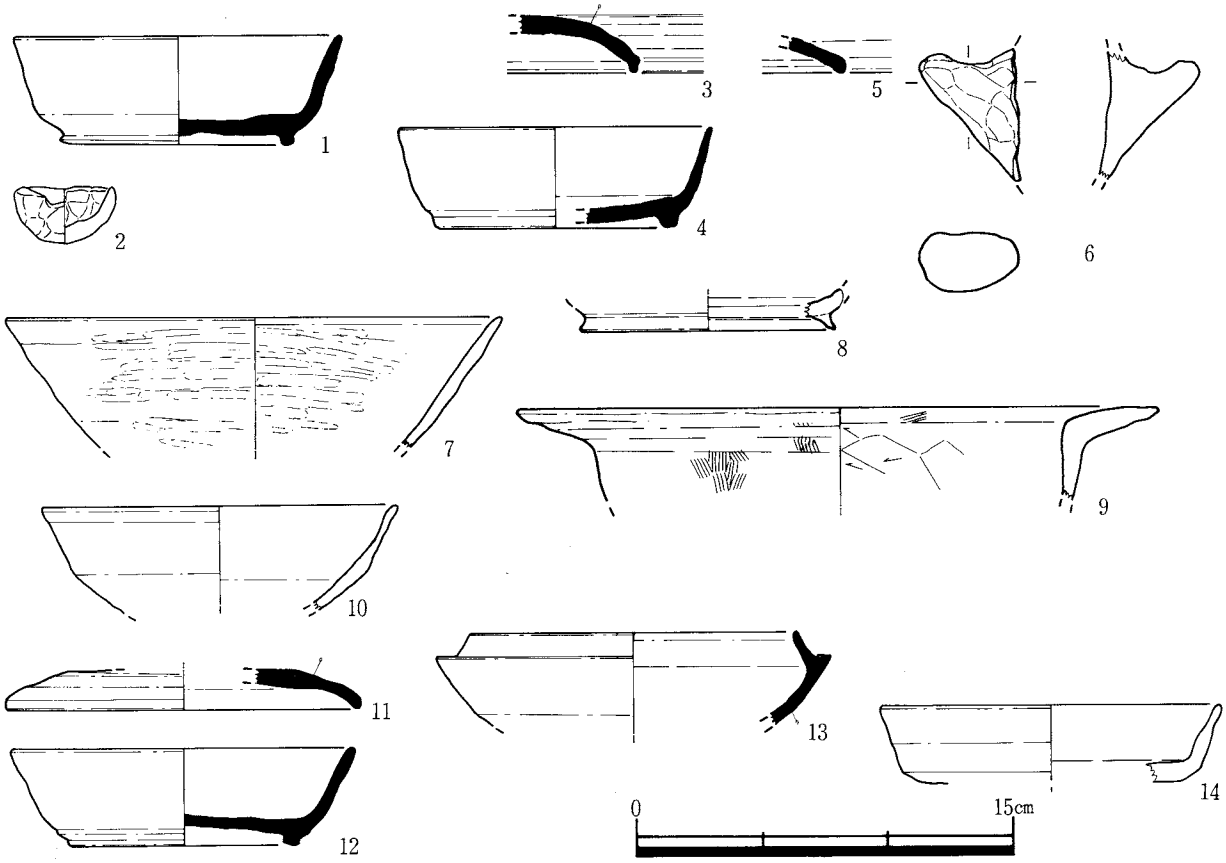


Fig.70　第2面水田の時期に関連する遺物(水田・旧河川出土)S＝1/3

限を示すかどうかは慎重に考えたい。

11は、須恵器の坏蓋。調査区中央を南北に走る旧河川が、北部調査区において東半水田側に広がった部分（169号遺構）に埋没した粗砂層から出土。１／６周残存。復元口径14.0cm、現存高1.55cmを測る。青灰色。胎土は精良で砂礫は微量。口縁端部の形態的特徴より、Ⅶ期古相、８世紀前葉の範疇である。

12は、須恵器の坏身。旧河川(149号遺構）の埋没砂層中より出土。１／２周残存。口径13.6cm、高さ3.9cm、底径9.1cmを測る。外面は回転ナデ、内面は回転ナデ後内底を静止ナデ。底部は、回転ヘラケズリ。高台貼付。青灰色。胎土は細かいが、粗砂礫を若干含む。型式的には、Ⅶ期の古相、８世紀前葉の範疇であろう。

13は須恵器の坏身。旧河川（149号遺構）の埋没砂層中より出土。小片で径の復元はやや疑問だが、一応推定口径は12.8cmを測る。外面は、回転ナデ、下方は回転ヘラケズリである。内面は、回転ナデである。灰色。胎土は細かく、砂礫は少ない。ⅢＢ期でも新相のもの、６世紀末頃だろう。下層水田や旧河川の上限に関係する資料と考え参考に図示したが、単に洪水による流れ込みかもしれない。

14は土師器の坏。旧河川の埋没砂層中より出土。小片で径の復元はやや疑問だが、一応復元口径13.6cm、残存高3.05cmを測る。器面摩滅多いが、内外回転ナデであろう。胎土は精良で砂礫は微量。型式的に、８世紀前葉のものと考えられる。

以上、奈良時代を中心とする、第２面水田の時期に関連する遺物を取り上げた。もとより、水田そのものに遺物が伴うことはその性格上少なく、これらの遺物がどれほど時期を示すかとなると疑問もある。しかし、１の須恵器坏身は西半下層水田に伴うと見て良く、少なくとも水田経営の時期の一点を示すと考えて良い。その場合下層水田は８世紀初頭前後となる。一方、２は東半水田の畦の盛土中から破片として出土したもので、この遺物の時期はやはり８世紀初頭であるから、東半水田は８世紀初頭以降ということになるだろう。なお、水田の平面形態やレベル、地下水位等の類似から、東半水田と西半の上層水田が同時期の成立・経営であろうことはすでに示唆した。これらの水田を覆った洪水砂層中から出土した遺物の時期は、８世紀前半のものを含むが、６～８のように８世紀後葉に下る可能性のあるものも含まれる。この２次調査の東半水田に続く、東側の３次調査の第２面（下層）水田は、８世紀後葉の遺物を含む河道により一部を破壊される形になり、またその水田の埋没もその時期に推定される可能性があるから、少なくとも２次調査の東半水田に関しては、同様に８世紀後葉の埋没を推定して大過ないだろう。一方、西半上層水田を覆った洪水砂層は、東半水田のそれと同時期と考えられるものの、10のように９～10世紀の遺物もあり、あるいはこの時期に埋没が下るかもしれない。ただし、この水田の上面の包含層および第１面集落の遺物には、少なくとも10世紀以降の遺物が出土しているので、その関係が微妙であり、この遺物は上面からの混入である可能性も捨て切れない。したがって、東半水田および西半上層水田の時期は、一応８世紀初頭以降（前葉頃成立か）、８世紀後葉までというように考えておきたい。ただし、ここが難しいところだが、一度の洪水で水田の広がりが全て埋没したのかどうかは断定できず、区画によっては、上面の洪水砂層が不明確な部分も存在するし、土層の観察からすぐ上に水田が経営されている部分（Ｆig. 64、土層①の左側）もあるから、洪水砂層を免れた部分はあるいは後まで水田経営されているかもしれない。なお、調査区中央の旧河川は、８世紀後葉以降の遺物を含まず、４のように、東半水田面上の洪水砂層と河川出土の遺物が接合する例があるから（ただしこの遺物自体の時期は別問題）、同一の洪水による埋没が考えられよう。

一方、西半下層水田（南部調査区）は、３より８世紀初頭の一点が考えられる。下限も上の水田との関係で言えば、近い時期であろう。問題は上限である。全体の方位からすれば、上層水田と同様に条里制との関連が考えられるものの、時期的にやや早すぎ、また水田区画も非常に細長く、小さく、面積も一定していないことから、この水田の成立はさらに古い可能性もある。ただし、遺物の上からはその時期を限定することはできない。旧河川はこの水田の時期から存在した可能性が高いが、13の須恵器坏身（６世紀末）は、下層水田や旧河川の上限を示唆するかもしれないが何とも言えない。また、北部調査区の西半下層水田は、遺物が出土せず、時期不明瞭であり、水田の諸特徴から南部調査区西半下層水田の時期と同時期とするにとどまる。さらに下層の黒色粘土層からは、まれに古墳時代前期の土器を出土し、これ以降とすることはできよう。

・水田に伴わない遺物（Ｆig.71-15～30）

15～22は、旧河川より出土。全て弥生土器。15は甕。復元口径32.6cm、残存高3.2cmを測る。胎土には、大小の砂礫を含む。須玖Ｉ式新相か。16は鉢。口縁部の部分的な破片で径復元不可。残存高4.6cmを測る。器面摩滅。胎土には、大小の砂礫を含む。弥生前期か。 17は甕。口縁部の部分的な破片で径復元不可。残存高4.3cm。器面摩滅。胎土は、大小の砂礫を含む。中期初頭か。18は甕。残存高2.4cmを測る。胎土には、大小の砂礫を含む。須玖Ｉ式か。19は甕。残存高2.7cm。口縁部の部分的

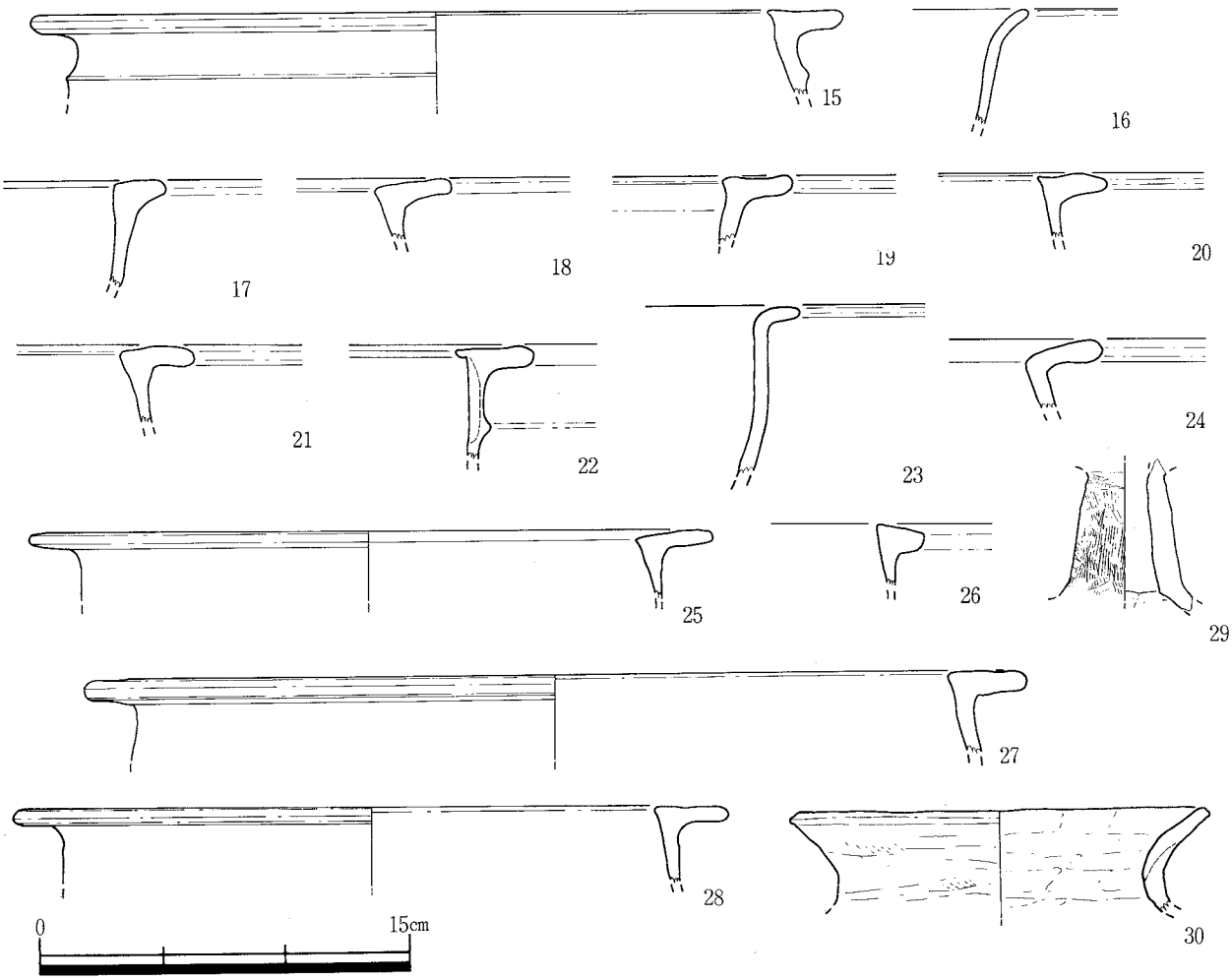


Fig.71　第2面出土その他の遺物(1/3)

な破片で径復元不可。大小の砂礫を含む。須玖Ⅱ式か。20は甕。残存高2.6cm。口縁部の部分的な破片で径復元不可。胎土は小砂礫を含む。須玖Ⅰ式新相。21は甕。口縁部の部分的な破片で径復元不可。残存高3.0cm。胎土には、大小の砂礫を含む。須玖Ⅱ式。22は甕。口縁部の部分的な破片で径復元不可。残存高4.6cm。胎土には小砂礫を含む。須玖Ⅱ式。23は弥生土器の鉢ないし甕。163号水田を覆った砂層から出土。部分的な破片で径復元不可。残存高6.8cm。摩滅し調整不明。胎土には大小の砂礫含む。弥生前期末だろう。24は弥生土器の甕。161号水田を覆った砂層から出土。口縁部の部分的な破片で径復元不可。残存高2.7cm。胎土には大小の砂礫含む。須玖Ⅱ式新相か。25は弥生土器の甕。出土は24と同じ。復元口径27.6cm、残存高2.7cm。胎土には小砂礫を含む。須玖Ⅰ式新相か。26は弥生土器の甕。155号水田を覆った砂層から出土。口縁部の部分的な破片で径復元不可。残存高2.4cm。胎土には大小の砂礫を含む。弥生中期初頭か。27は弥生土器の甕。156号水田を覆った砂層から出土。復元口径39.1cm、残存高3.3cm。胎土はやや粗く、大小の砂礫含む。須玖Ⅰ式。28は弥生土器の甕。出土は27と同じ。復元口径28.8cm、残存高3.1cm。胎土には大小の砂礫を含む。須玖Ⅱ式。29は古式土師器の高坏の脚柱状部。334号溝状遺構より出土。残存高5.5cm。柱状部下端径は5.3cm、上端径は3.0cm。摩滅少なく、外面ハケメ、内面は柱状部はシボリ後ナデ、裾部はヘラケズリ。にぶい黄橙色。胎土はやや精良で、砂礫少量。古墳時代前期でも後半期か。この遺物は、本来水田下部の包含層

に帰属する可能性がある。30は、土師器の甕。溝353より出土。１／６周残存。復元口径17.0cm、残存高4.2cm。外面ハケメ後ヨコナデ、内面横の板ナデ後、雑なヨコナデ。砂礫多く含む。灰黄褐色。６世紀後半頃のものか。以上の遺物は、28・30を除くと器面の摩滅が著しい弥生土器であり、より上流のその時期の集落に帰属する遺物が洪水により流されてきたものであろう。なお、30の土師器甕は、あるいは西半下層水田の上限時期に関連することも考えられようが、出土状況からは何とも言えない。

（７） まとめ

ここで、第２次調査の第２面の水田調査のまとめを行いたい。

①水田の時期‥‥出土遺物の項ですでに記したように、西半下層水田が８世紀初頭前後であり、上限がそれ以前、東半水田は８世紀初頭以後、８世紀後葉まで、と推定される。西半上層水田は、下限は東半水田と同じ８世紀後葉、上限は下層水田の直後であるから、８世紀初頭～前葉の成立である。東半水田と西半下層水田は、出土遺物、水田の特徴等から、同時期に成立し、埋没したものである。なおこれは、第３次調査の第２面水田と同じである。しかし洪水砂が及ばなかった部分では、同一面またはその直上のシルト堆積後の面で、時期は不詳なもののもう少し後まで水田が維持された可能性があることも述べた。問題は西半下層水田の成立時期であるが、古墳時代後期に遡る可能性もある。

②水田の類型‥‥水田土壌による分類では、西半上層水田および東半水田（以下「新期水田」）は地下水位が高いものの、一部直下に鉄分沈殿があり、グライ層との関係から、湿田もしくは半湿田であろう。西半下層水田（以下「古期水田」）は、同様の観点から、湿田の類型になろう。水田区画の分類では、工楽善通（前掲）の分類では、いずれもＢ類になってしまうが、古期水田はより小区画であり、分類に問題を残す。しかし、那珂君休遺跡の古墳時代水田のような、平坦地に営まれた極小区画の水田類型（工楽のＣ類）とも異なる。なお新期水田は、都出比呂志の分類（都出1989『日本農耕社会の成立過程』）のＢ類型のうち、「大八木・日高類型」に属し、条里制との関連が濃厚である。

③水田埋没直前の状況‥‥今回の調査では、新旧の水田ともに、区画ごとに異なる水田面の状況が見られ、新期水田では耕起（田起こし）前後の、古期水田では田植え前後の埋没を想定した。前者において、耕起中の水田区画を検出したのは問題ないが、一部田植えを開始していたと観察した区画が同時にある。田起こしから田植えは一連の農作業であるものの、他の遺跡の例や、民俗例で、同時に区画ごとで、このように別段階の作業が行われうることがあるのか知りたい。田植えに入っていた区画は、洪水後に復旧した区画の可能性もないことはないが、おそらくそうではないだろう。

④条里制との関連‥‥検出された水田は、特に新期水田では、現在の地割りの起源となる条里方向（Ｎ－36°－Ｗ）にきわめて良く一致している（日野尚志1976「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」参照）。水田区画も、旧河川に近い部分では形状が一定していない部分もあるが、他は南北に長い長方形で一致し、南北長はまちまちだが、100～300㎡の整った水田区画であり、第３次調査地点に続く。古期水田との間に画期がある。近年この方位に一致する奈良時代前葉の溝が席田丘陵裾の遺跡で発見されており（下月隈鳥越遺跡）、この平野での条里制の成立の初源を示すと見られる。ただし、平野全体に施行されたかどうかはそれぞれの遺跡の調査地点ごとで見る必要があろう。また古期水田も似た方位であるが、地形上の理由で必然的に同じ方位になったためであろうか。

その他、水田調査の方法として、畦畔の断ち割り（見かけでは地山か盛土か分からない）と掘り下げ（遺物を含む場合あり）が必要なこと、耕作土上面と下面の地山面（耕作土除去、床土面）の２段階の調査をするのができれば望ましいのではないかといった点を、提案しておきたい。

Ⅳ. 3次調査の記録

1. 基本層序(Fig. 72)

3次調査地点では2面の水田面を調査対象とした。水田は2次調査の下面水田よりは遺存が悪いと言える。

調査地点の基本土層は次の通りである。まず最下層に基盤となる青灰色粘土が堆積する。この粘土は厚さ3m以上を測る。その上位部分は土壌化により黒色を呈する。この粘土層上面が最下層水田の基盤面となる。粘土中には弥生時代中期～古墳時代前期頃の土器を包含する。その上層には洪水による粗砂層や、シルトなどの水成層が堆積する。比較的安定したシルト面に水田遺構が営まれる。Fig. 72に示したように、土層観察からは、近現代の水田も含め、最低4面の水田が確認できる。面的な調査を行なったのは、その内の下から第1面目と、第3面目にあたる。

2. 上層水田の調査(付図)

上面で検出した水田面は標高9m程のレベルで検出した。水田は地山削り出しによる畦畔状遺構により区画され、長方形を基本とした区画を持つ。畔状遺構の交点は十字形をなさずに食違いを見せている。水田の規模は長辺15～20m、短辺10～15mほどである。検出した水田の確実な枚数としては、13枚を数える。水田面を覆う砂層から土師器、黒色土器片などが出土している。2次調査地点で検出した集落と重複する時期の水田と考えられる。

出土遺物(Fig. 75)

土師器小皿26、土師器坏23は磨滅で底部調整不明であるが、形態や法量から糸切りと考えられる。椀底部類は22、24、25が黒色土器B類。21は土師器。27は磨滅がひどいが、瓦器と思われる。19、20は須恵器である。

3. 下層水田の調査(付図)

下層の水田は基盤の粘土面で検出した。上面水田と同様地山削り出しの畦畔状遺構により区画され、水田は長方形を基本とする。水田の規模は長辺15m、短辺10m程である。検出された水田面は8枚で上面を覆う砂層、およびこの水田を切る旧河道506から、奈良時代に属する須恵器、土師器などが出土している。

出土遺物(Fig. 75)

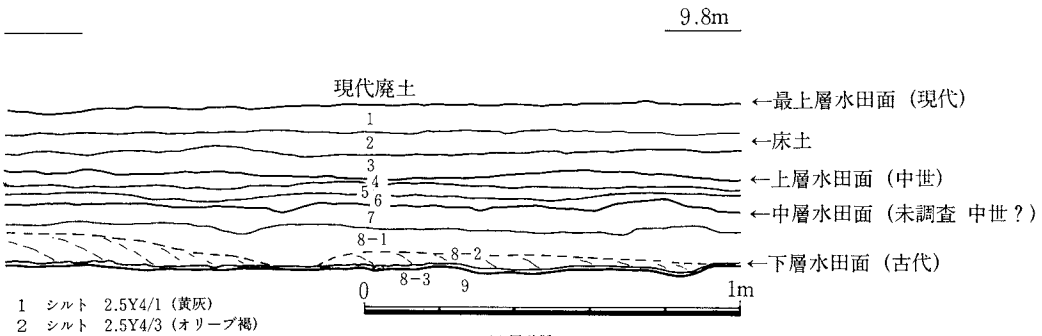
35は土師器甕である。31は小片でよくわからないが、古式土師器の小形丸底壷と思われる。29は弥生土器。須恵器坏34は体部が開き、底部端に高台が付く。須恵器坏28の高台もほぼ底部端に付く。33は叩き目を施す土師器である。32は壷の肩部で、屈曲部に沈線が巡る。

旧河道506

旧河道506は調査区南半をS字状に蛇行する河道である。下層水田の畦畔が一部河道に規制されたように見えるところから、河道が水田より古い可能性も考えたが、畦畔そのものが河道に切られる個所があり、また河道に沿って湾曲する畦畔と、河道の間にも田面が確認されるところから、やはり河道が切るものと考えられる。河道の方が、畦に阻まれて河道を変えたと考えられる。流路は土層からは2回以上の切り合いが見られる。

出土遺物(Fig. 74)

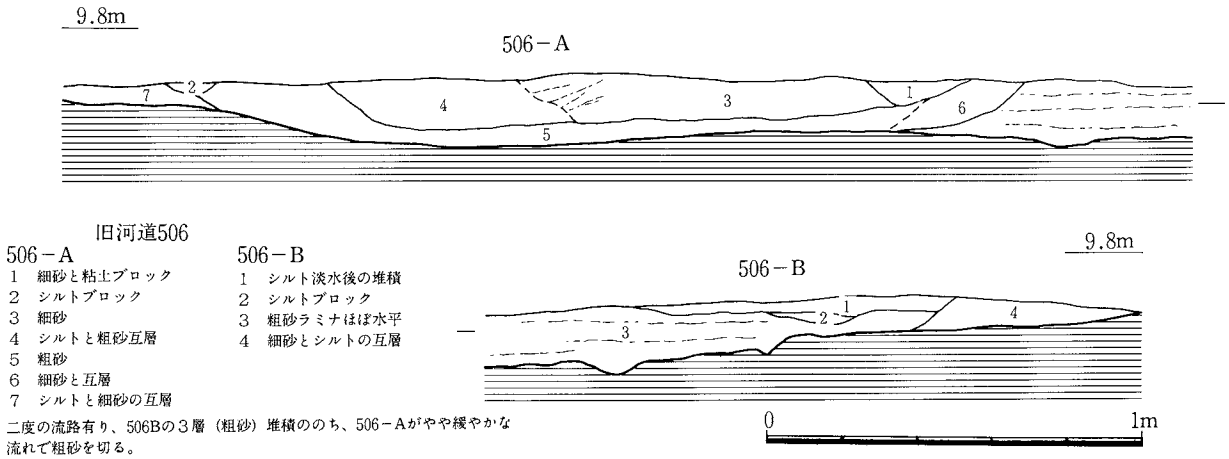
須恵器坏17は完存品で、外底部に墨書がある。「主」と考えられるが、第一画が横線で、「一王」、



1　シルト　2.5Y4/1（黄灰）
2　シルト　2.5Y4/3（オリーブ褐）
3　砂質シルト　2.5Y5/2（暗灰質）←部分的には下層に砂をかむ工面土層砂層
4　粘土質シルト　粗～細砂　多く混じる　10YR4/1（褐灰）
5　粘土質シルト　4より粘性少くややシルト味がつよい　細砂を混じえる　10YR4/2（灰黄褐）
6　砂質シルト　細砂がブロック状のものを含め多く混じる　2.5Y4/2（暗灰黄）　南側では上下層との層理区分不分明
7　粘土質シルト　粗～細砂多く混じる　4層に類似　2.5Y4/1（黄灰）
8－1　灰色粗砂　粘土小ブロック　多く混じる
8－2　黄褐色粗砂　南→北へのラミナが見られる
8－3　細砂
9　粘土5Y3/1（オリーブ黒）

（調査区西壁）

Fig.72　3次調査区基本層序（1：40）



旧河道506

506－A
1　細砂と粘土ブロック
2　シルトブロック
3　細砂
4　シルトと粗砂互層
5　粗砂
6　細砂と互層
7　シルトと細砂の互層

506－B
1　シルト淡水後の堆積
2　シルトブロック
3　粗砂ラミナほぼ水平
4　細砂とシルトの互層

二度の流路有り、506Bの３層（粗砂）堆積ののち、506－Aがやや緩やかな流れで粗砂を切る。
506－Aの方がシルト細砂の堆積が多い。

Fig.73　旧河道506土層図（1：40）

「二土」等の可能性もある。18は土師器の坏で、底部はヘラ切りのままである。６は小形の提瓶である。外面はカキメ。５は須恵器の短頸壷。外面は擬格子叩きをナデ消している。３は須恵器甕口縁で、端部は坦面をなす。かなり厚手である。７は土師器。高坏と考えられる。回転ナデによる凹凸が多い。11は古式土師器の小形鉢、もしくは高坏と考えられる。器壁は薄い。８も古式土師器の高坏。外面は縦方向のケズリ。15は弥生土器。13は支脚型の小形の土製品である。14は突出する底部である。弥生時代終末から古墳時代初頭併行期の遺物と考えられる。10は土師器椀。12は叩きを施す土師器で、玄界灘式製塩土器と考えられる。1001は穿孔を持つ土製品である。

調査区出土石製品(Fig.75)

2003は砥石である。やや軟質の石材を用いる。人為的に穿孔を試みたような痕跡が見られる。2002は滑石の不明石製品である。中央を両面とも凹ませている。周囲は全周とも破損している。2001は黒耀石製の石鏃である。

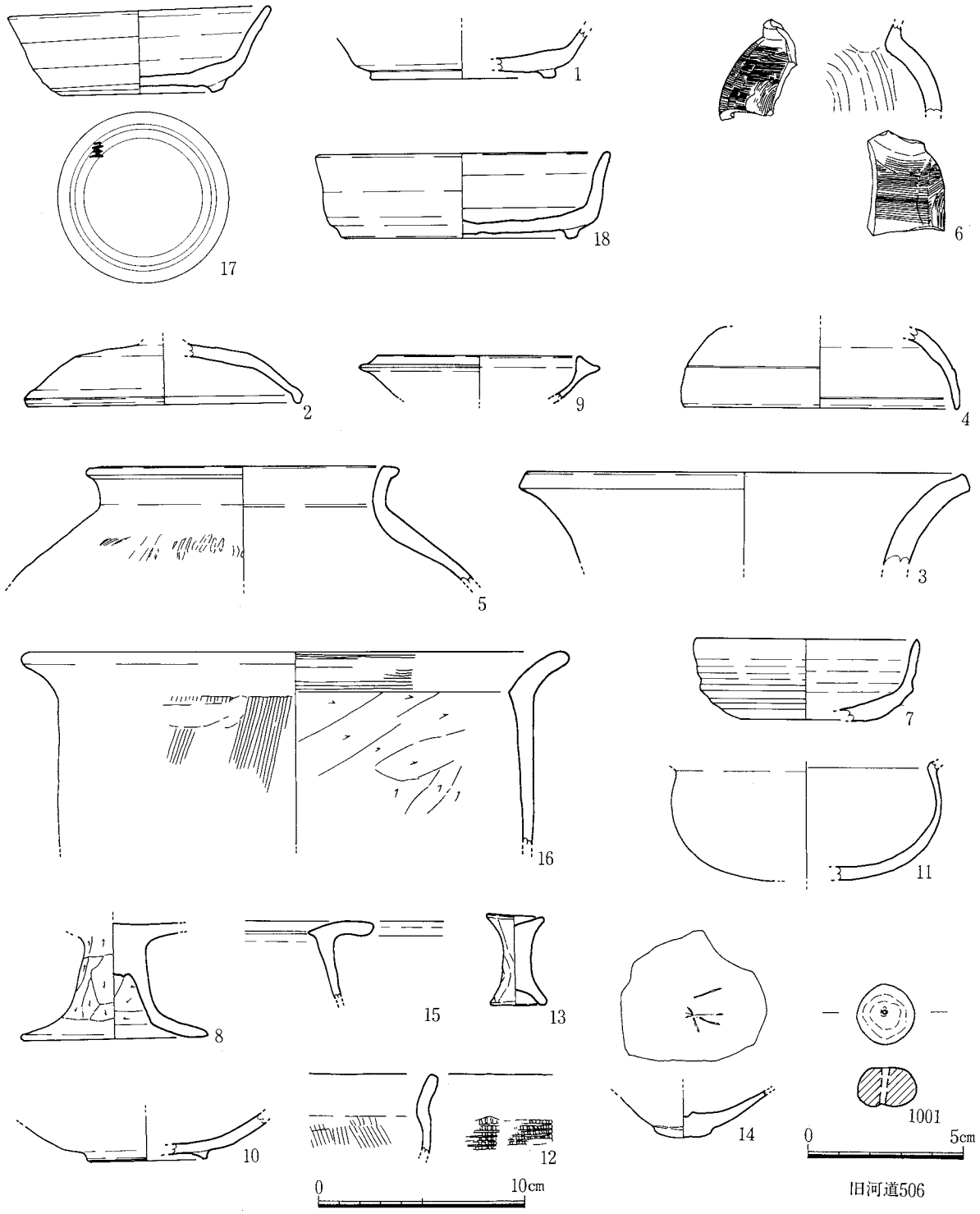


Fig.74　3次調査区出土遺物実測図1（1：3）

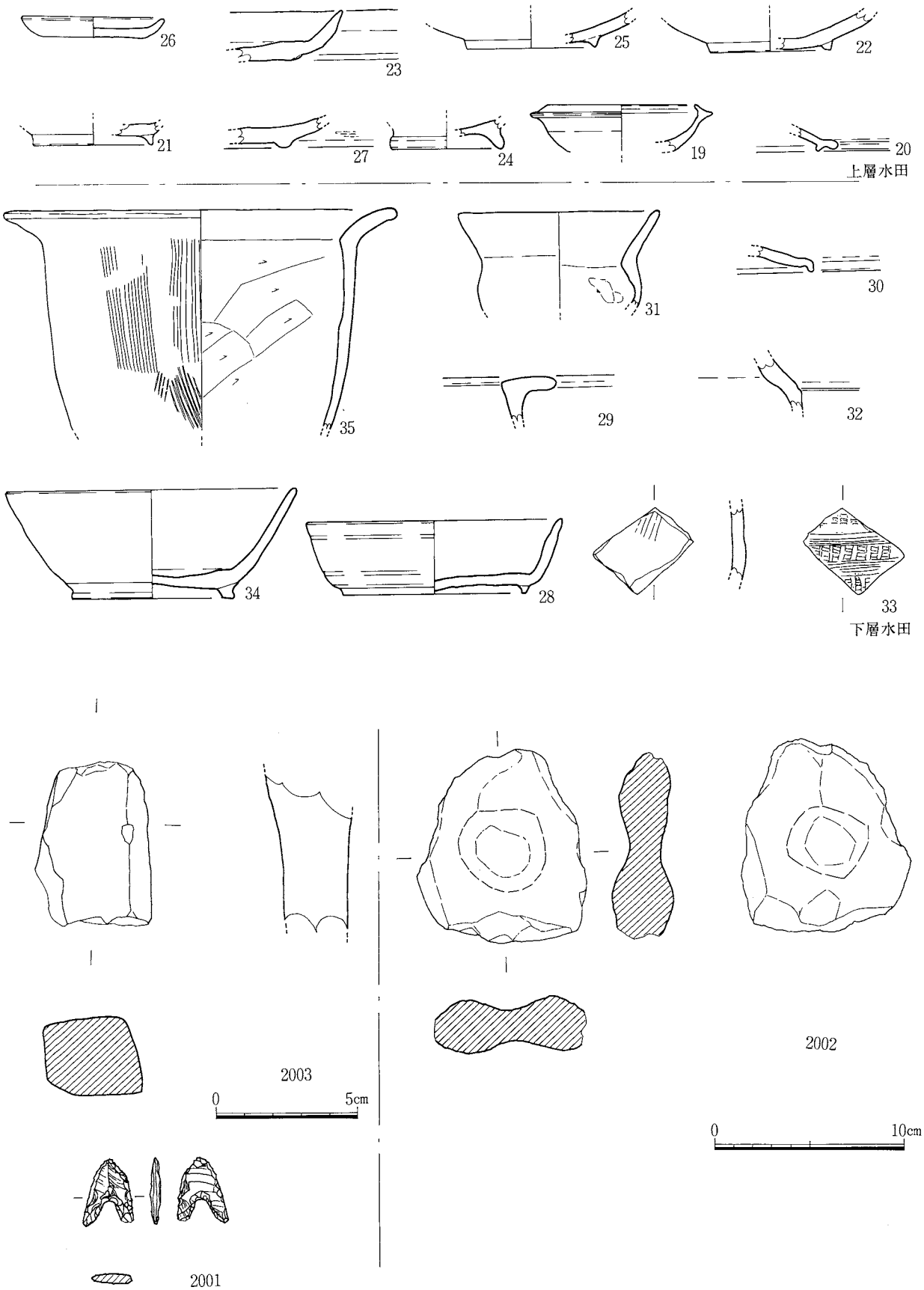


Fig.75　3次調査区出土遺物実測図2（1：3）

Ⅳ. 小　　結

（1）集落と水田

以上、下月隈Ｃ遺跡２次調査地点、３次調査地点の調査成果について報告してきた。各遺構面の内容についてはそれぞれのまとめのところで述べてきたので、ここでは、集落と水田の関係を中心に、まとめと課題を挙げていくことにする。

２次調査地点と３次調査地点では、ともに水田が検出された。ある一時期に広い範囲で水田が営まれていたことを示しているが、２次調査地点の水田と３次調査地点の水田の関係は、直接的な形では明らかにされていない。その原因としては、水田という性格上出土遺物によって厳密な時期比定が難しいこと、また２次調査地点と３次調査地点の間に、空港進入路の誘導灯ケーブルの埋設があったり、また作業用のアスファルト舗装の道路があったりして、未調査部分を残さざるをえず、連続的に調査することができなかったこと、また沖積地という性格上、複雑な堆積状況を呈し、集落の検出面でさえ土壌が目まぐるしく変わり、２次調査地点、３次調査地点を結ぶ鍵となる土層は、最下層の基盤層である黒色粘土層を除いて、明確にできなかったことなどが挙げられる。そのような点も考慮して、今検出標高を参考に考えてみることにする。

２次調査地点の下層水田はほぼ標高8.2～8.7m程の高さに展開する。基盤面は遺跡全体の基盤層である黒色の粘土である。この基盤面上の水田は３次調査地点ではほぼ8.6m程の高さに有り、２次調査地点から連続してくるものと考えてよかろう。水田の時期は２次、３次両地点とも奈良時代を下限とすると考えられ、上限については古墳時代にさかのぼる可能性も残されている。基盤層の黒色粘土中には遺物も包含されており、おそらくその下限は古墳時代前期と考えられるからである。この水田はおそらく奈良時代のうちに洪水によって埋没し、その後ある程度シルト層の堆積が進み、安定した微高地を形成した後、第１期の集落が営まれるようになるのであろう。

この水田の造営主体については未だ明らかとはいえない。周辺には奈良時代の集落が未だ明確でないからである。明確になるのは下月隈Ｃ第１期に併行する時期以降である。しかし古墳時代まで視野にいれて考えると、下月隈Ｃ遺跡の南東部には持田ヶ浦古墳群、影ヶ浦古墳群、堤ヶ浦古墳群、今里不動古墳など、月隈丘陵有数の群集墳が密に分布している。これら古墳群の造営主体となる集落も実はまだ見つかっていないのであるが、周辺に存在したことは確実である。これらの群集墳は７世紀代までは造営が続いていたようであるから、下月隈Ｃ遺跡下層水田の造営主体の候補の一つとして、これら群集墳と共通する集団を考えておいてよいかもしれない。

３次調査の上層水田は標高９ｍほどにあり、２次調査の集落検出面から若干低い高さにある。集落の生活面が若干削平されている可能性を考えれば、集落より一段低いところに営まれた水田と考えられ、集落に伴う水田と考えるのが自然であろう。厳密な時期については明確でないが、ほぼ第２期、第３期の集落に伴うものであろう。第１期前半期の集落は、越州窯系青磁や緑釉陶器などの遺物や、立花寺、立花寺Ｂ遺跡との関係からみられるように、一般的な農村としての色合いは薄い。

３次調査では土層図に示したように、上層水田と、下層水田の中間に、中層水田とした水田面を検出している。中層水田はほぼ標高8.8m程である。第２期、第３期の水田と厳密に対応するかどうかは不明であるが、ほぼ12世紀頃から14世紀にわたる200年ほどの間に、何回か水田の補修やかさ上げが行なわれたものと考えられる。

この３次調査上層水田に対応する水田面は、２次調査地点では調査していない。これは時間の関係

から、水田面の調査を基盤粘土面の一面に絞らざるを得なかったせいで、2次調査地点には広がっていなかったわけではない。とくに集落関係遺構の途切れた東半部分には、下層水田検出途中に、更に上位に位置する水田面を確認している。これが3次調査上層水田に対応するとすれば、その広がりを確認することで、集落と水田の関係も明らかにすることができていたかもしれない。調査者の意識不足のせいであり、深く反省する次第である。

なお14世紀頃集落が廃絶した後は、比較的速やかに水田化が進行していったようである。調査区内では15世紀以降の遺物はほとんどみられない。3次調査地点の土層図で、最上層水田とした面はおそらく空港用地になって廃土が捨てられるようになる直前まで耕作されていた水田と考えられるが、その標高は9.4m程である。上層水田とは、10cm程間の層を挟んで床土となっている。中世末から近世、近代を通じて、比較的安定した水田として利用されていたのであろう。

（2）遺物補説

調査区内では報告した他にも多数の遺物が出土した。報告できなかったものについて、概略を述べておく。詳細については福岡市埋蔵文化財センターで現物に当たって頂ければ幸いである。

まず土製品としては、土錘が相当数出土している。御笠川における漁撈も生業の一つであろう。石製品としては図示したもの以外にも石鍋片が多い。ただ完形のものはなく、ほとんどのものは面取りや穿孔など、再加工されている。また第1期集落と関わると考えられる瓦類が出土している。丸瓦、平瓦ともあり凹面は布目が見られる。平瓦の凸面は縄目叩きを施す。

この他紙数と時間の関係で掲載できなかった重要な遺物に木製品がある。これについてはTab.1、2に主なものの一覧を示した。出土状況図や写真図版にあるものについては、挿図番号、図版番号を示したので、参照されたい。

遺物登録番号	出土遺構	器 種	特徴など	備　考
1	井戸43	蓋		Fig. 45　Pl. 5-(2)
2	井戸43	横槌		Fig. 45　Pl. 5-(2)
15	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
16	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
17	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
18	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
19	井戸43	丸太杭	横板補強	Fig. 45　Pl. 5-(2)
20	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
21	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
22	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
23	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
24	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
25	井戸43	杭	井戸枠支え	Fig. 45　Pl. 5-(2)
26	井戸43	杭	井戸枠支え	Fig. 45　Pl. 5-(2)
27	井戸43	杭	井戸枠支え	Fig. 45　Pl. 5-(2)
28	井戸43	杭	井戸枠支え	Fig. 45　Pl. 5-(2)
29	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
30	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
31	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
32	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
33	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
34	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
35	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
36	井戸43	板材	井戸枠横板	Fig. 45　Pl. 5-(2)
	井戸43	アンペラ		Fig. 45　Pl. 6-(1)
38	井戸61	板材	井戸枠	Fig. 48　Pl. 6-(2)
39	井戸61	板材	井戸枠	Fig. 48　Pl. 6-(2)
40	井戸61	板材	井戸枠	Fig. 48　Pl. 6-(2)
41	井戸61	板材	井戸枠	Fig. 48　Pl. 6-(2)
42	井戸61	板材	井戸枠	Fig. 48　Pl. 6-(2)
43	井戸61	板材	井戸枠	Fig. 48　Pl. 6-(2)
44	井戸61	板材	井戸枠	Fig. 48　Pl. 6-(2)
45	井戸61	板材	井戸枠	Fig. 48　Pl. 6-(2)
46	井戸61	板材	井戸枠	Fig. 48　Pl. 6-(2)
47	井戸61	板材	井戸枠	Fig. 48　Pl. 6-(2)
48	井戸61	板材	井戸枠	Fig. 48　Pl. 6-(2)
49	井戸61	板材	井戸枠	Fig. 48　Pl. 6-(2)
50	井戸61	板材	井戸枠	Fig. 48　Pl. 6-(2)

Tab. 1　出土木器一覧表 1

遺物登録番号	出土遺構	器 種	特徴など	備　考
51	井戸61	板材	井戸枠	Fig.48　Pl.6-(2)
52	井戸61	板材	井戸枠	Fig.48　Pl.6-(2)
53	井戸61	板材	井戸枠	Fig.48　Pl.6-(2)
54	井戸61	板材	井戸枠	Fig.48　Pl.6-(2)
5	土壙251	下駄		Fig.36　Pl.5-(1)
6	旧河道271	椀	漆器	
64	井戸279	板材	井戸枠、矢板	Fig.49　Pl.8-(1)
65	井戸279	板材	井戸枠、矢板	Fig.49　Pl.8-(1)
66	井戸279	板材	井戸枠、矢板	Fig.49　Pl.8-(1)
67	井戸279	板材	井戸枠、矢板	Fig.49　Pl.8-(1)
68	井戸279	板材	井戸枠、矢板	Fig.49　Pl.8-(1)
69	井戸279	板材		Fig.49　Pl.8-(1)
70	井戸279	板材		Fig.49　Pl.8-(1)
71	井戸279	板材	井戸枠、ほぞ穴有り	Fig.49　Pl.8-(1)
72	井戸279	板材	井戸枠、ほぞ有り	Fig.49　Pl.8-(1)
73	井戸279	板材	井戸枠、ほぞ穴有り	Fig.49　Pl.8-(1)
74	井戸279	板材	井戸枠、ほぞ有り	Fig.49　Pl.8-(1)
75	井戸279	板材		Fig.49　Pl.8-(1)
76	井戸280	曲物	井戸枠	Fig.49　Pl.8-(2)
86	井戸287	曲物	井戸枠	Fig.49
7	井戸287	蓋		Fig.49
8	井戸287	櫛		Pl.9-(1)
93	井戸288	曲物	井戸枠	Fig.49
94	井戸289	曲物	井戸枠	Fig.49
9	井戸290	皿		Fig.51　Pl.9-(2)

この他、杭や板材などが多く出土している。

Tab. 2　出土木器一覧表 2

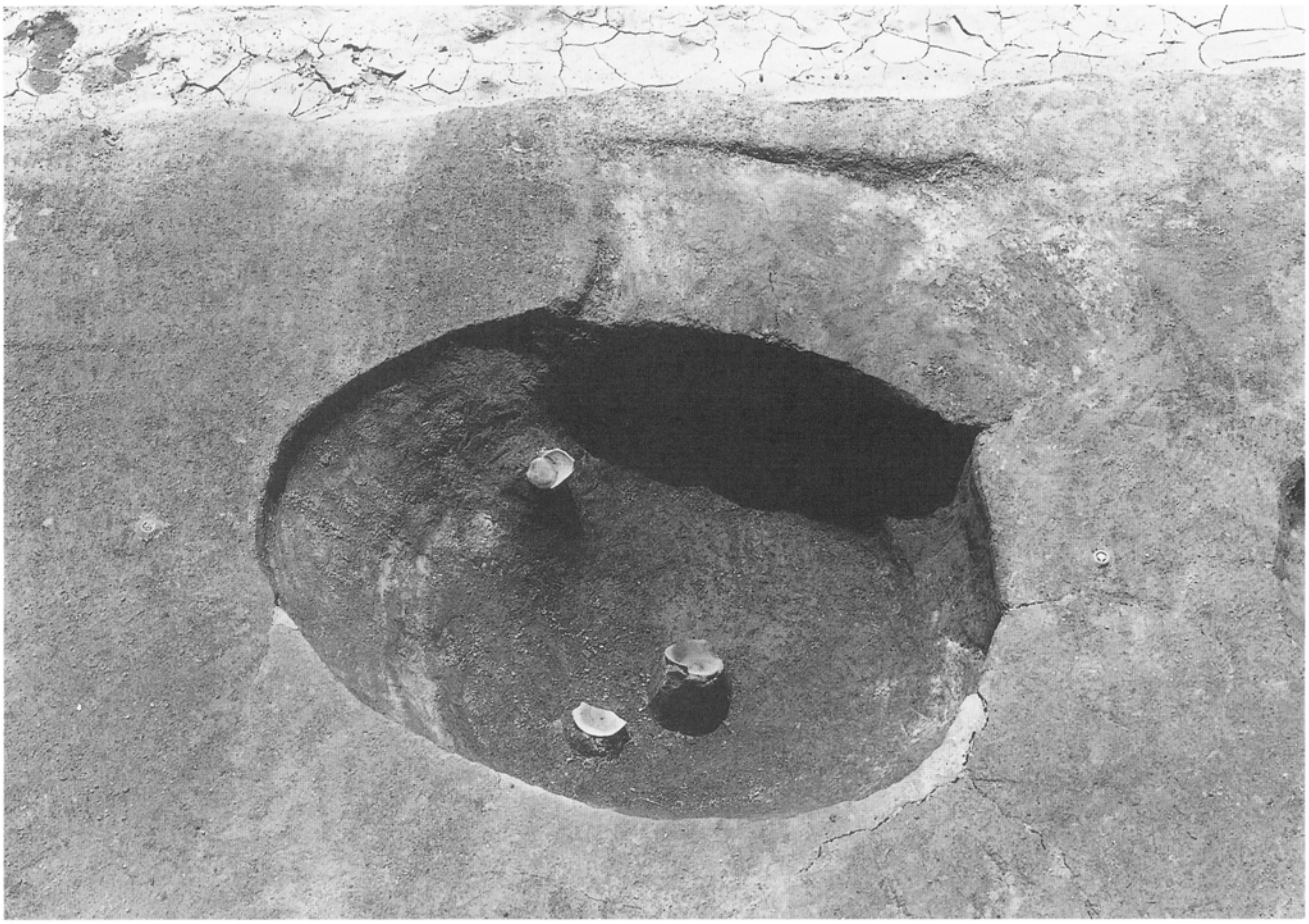
図　　版

(1)　溝28（西から）

(2)　溝28遺物出土状況（北から）

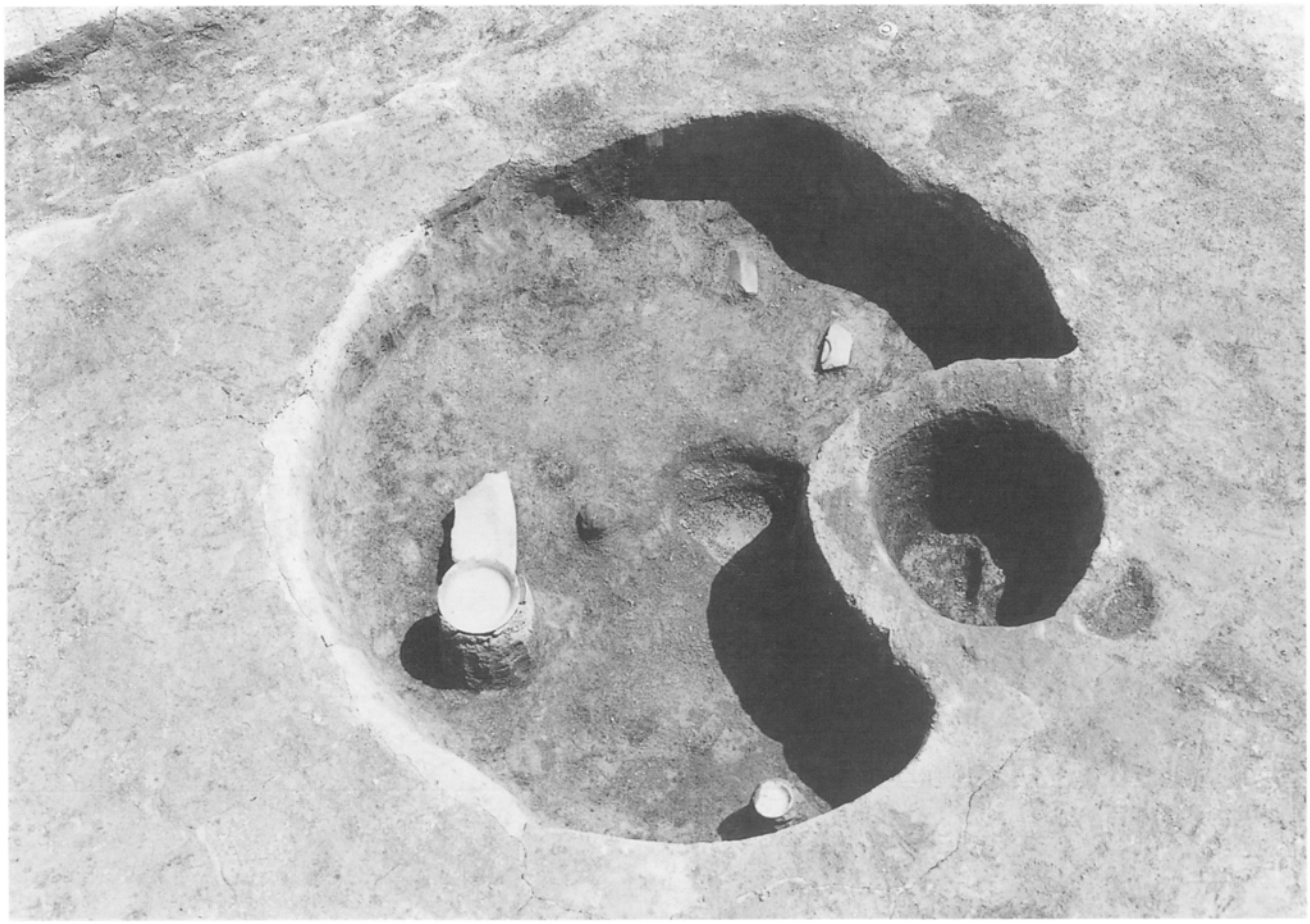
(1)　土壙墓133（東から）

(2)　土壙墓134（北から）

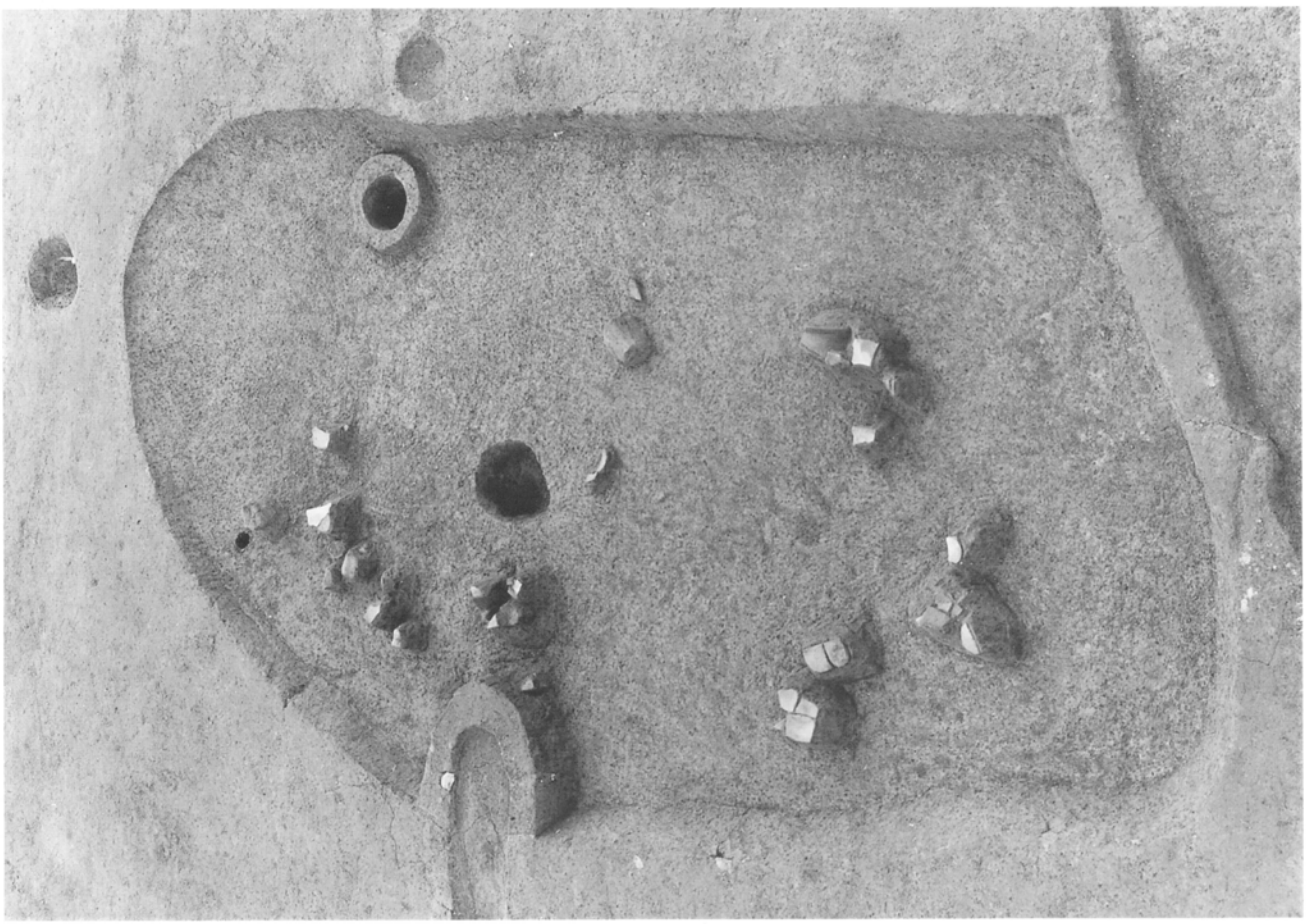


(1)　土壙40（北から）

(2)　土壙46（西から）

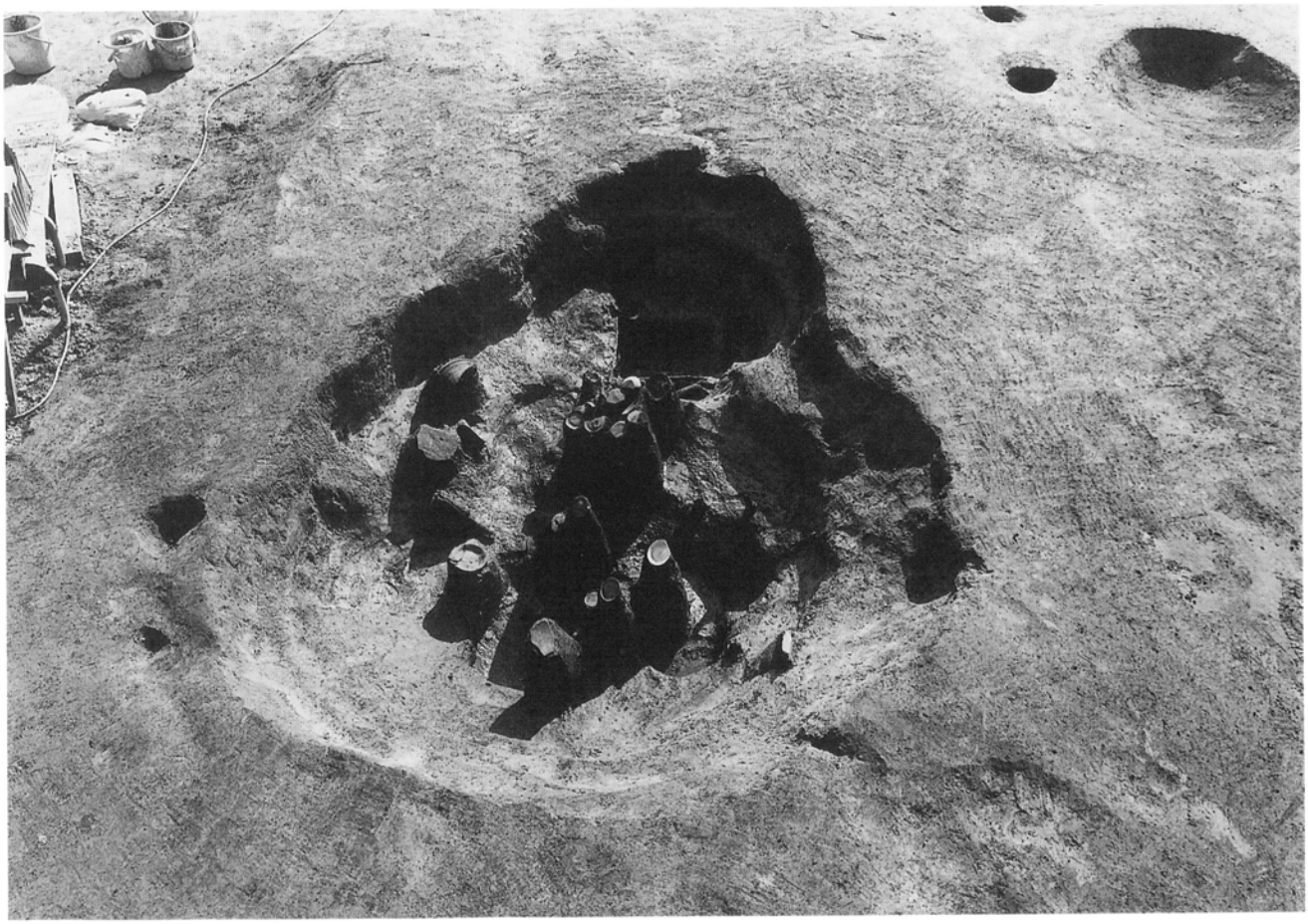


(1)　土壙64（西から）



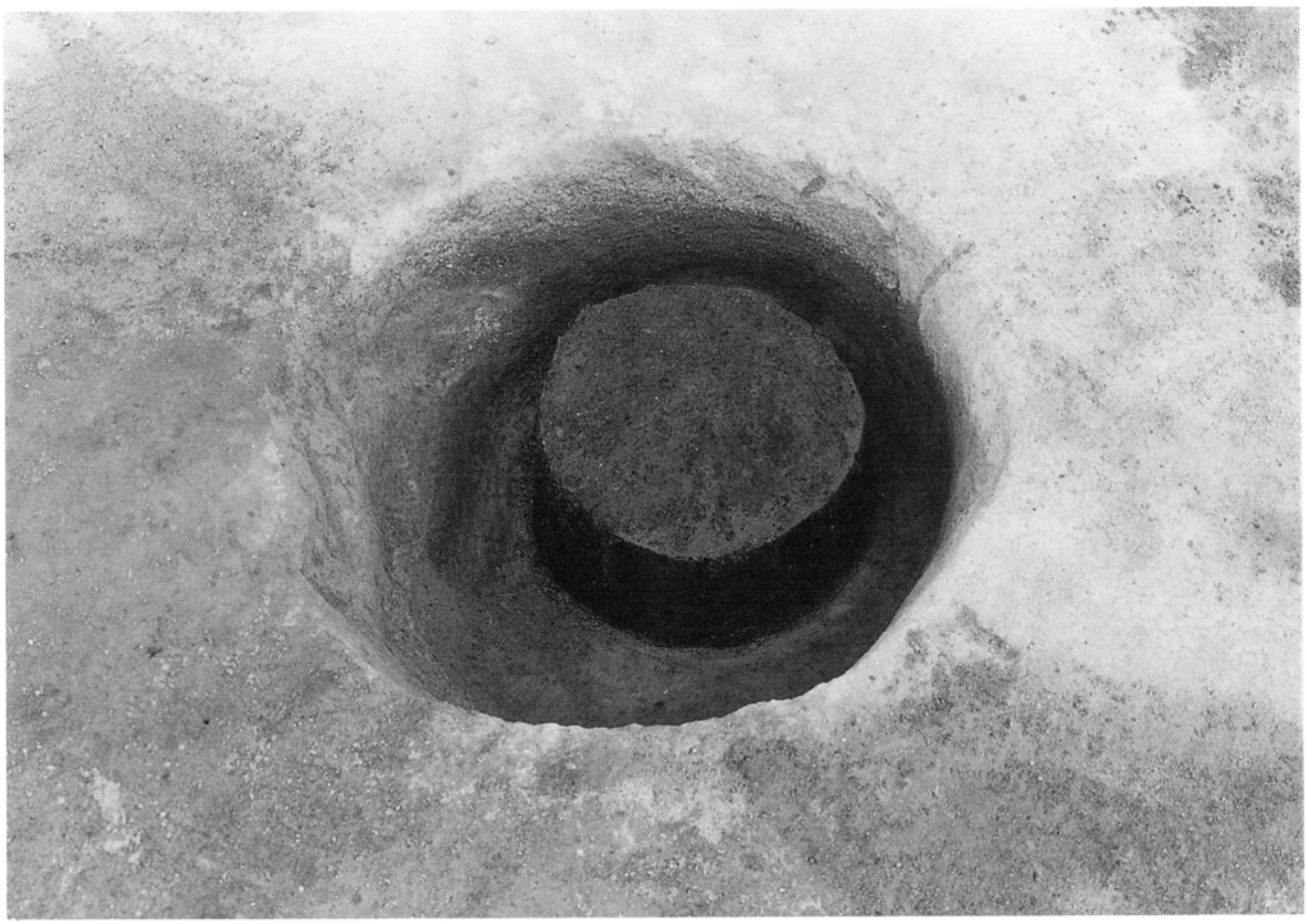
(2)　土壙248（北から）

(1)　土壙251（東から）

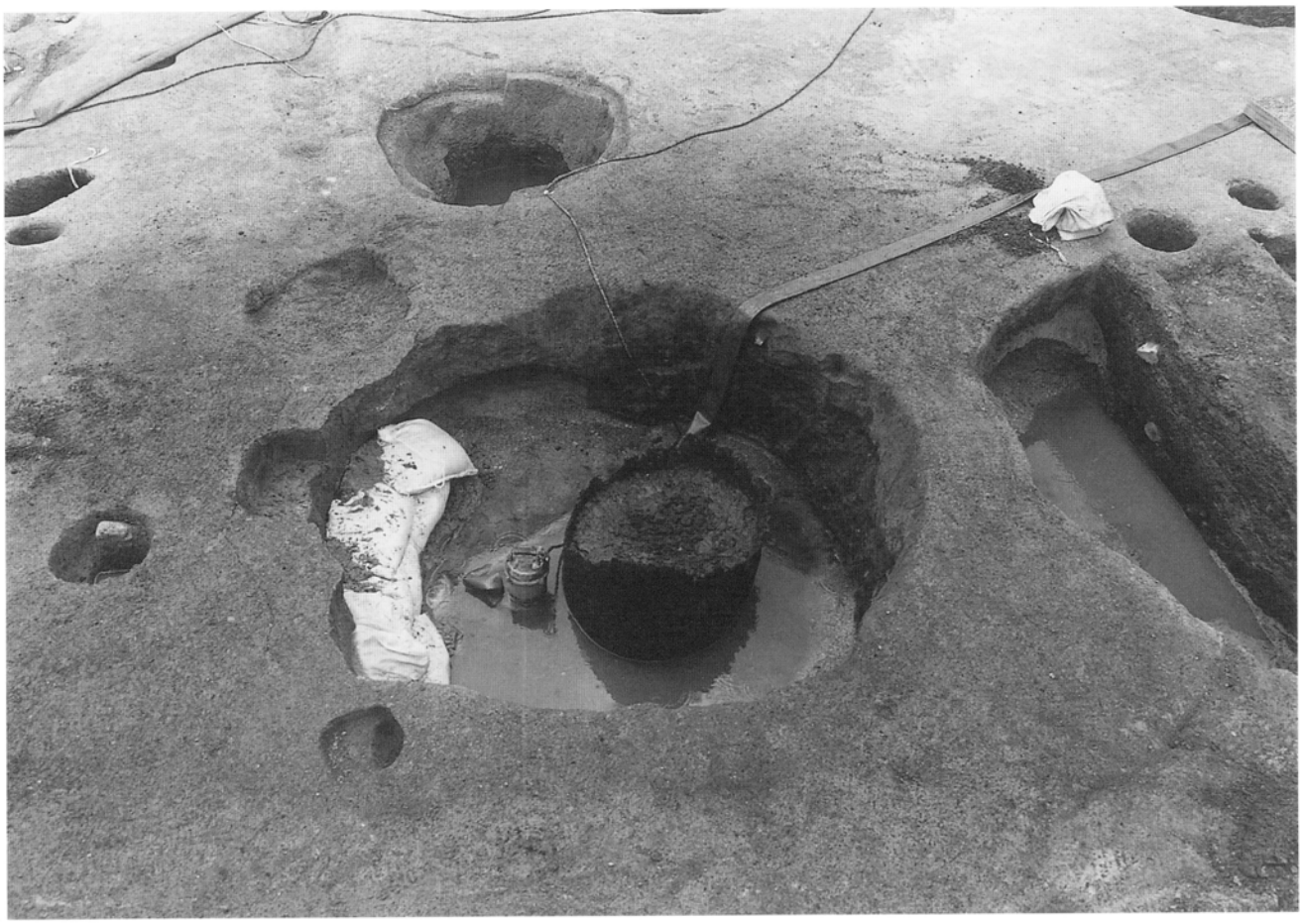


(2)　井戸43（東から）

(1)　井戸43遺物出土状況（北から）



(2)　井戸61（北から）



(1)　井戸65（東から）

(2)　井戸65井戸枠

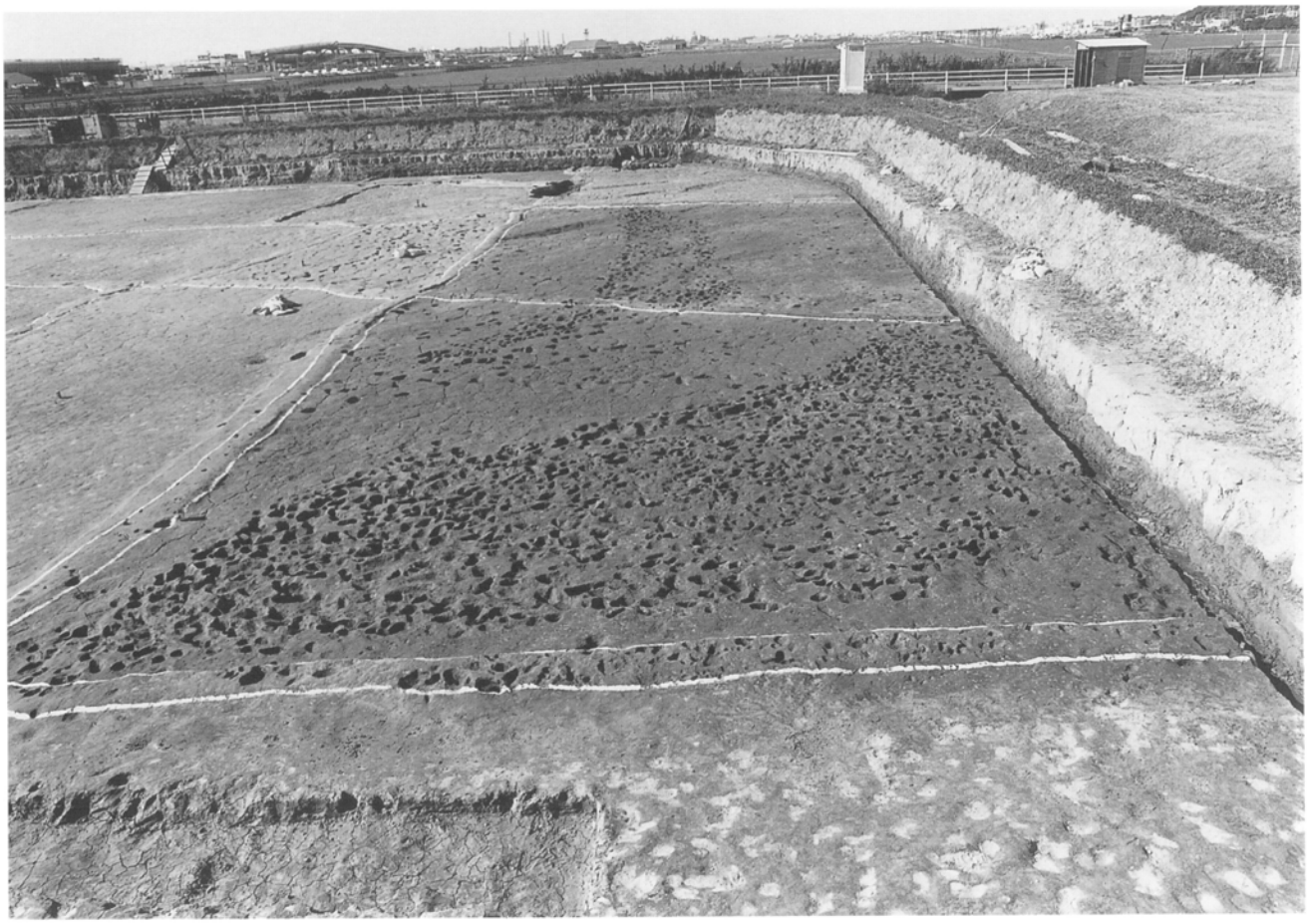
(1)　井戸279（東から）

(2)　井戸280（東から）

(1)　井戸287櫛出土状況

(2)　井戸290木器出土状況（東から）

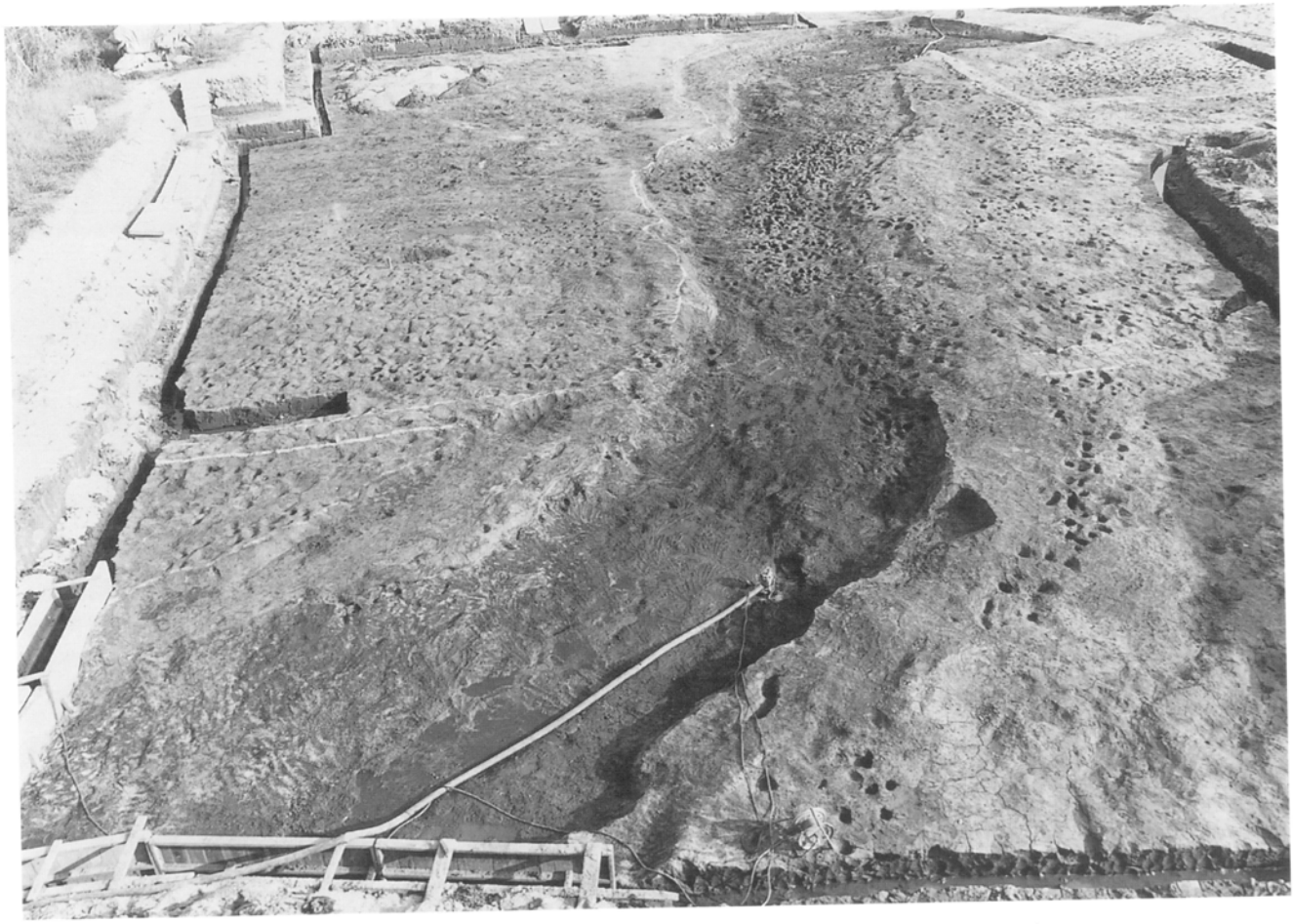
(1)　井戸291（東から）



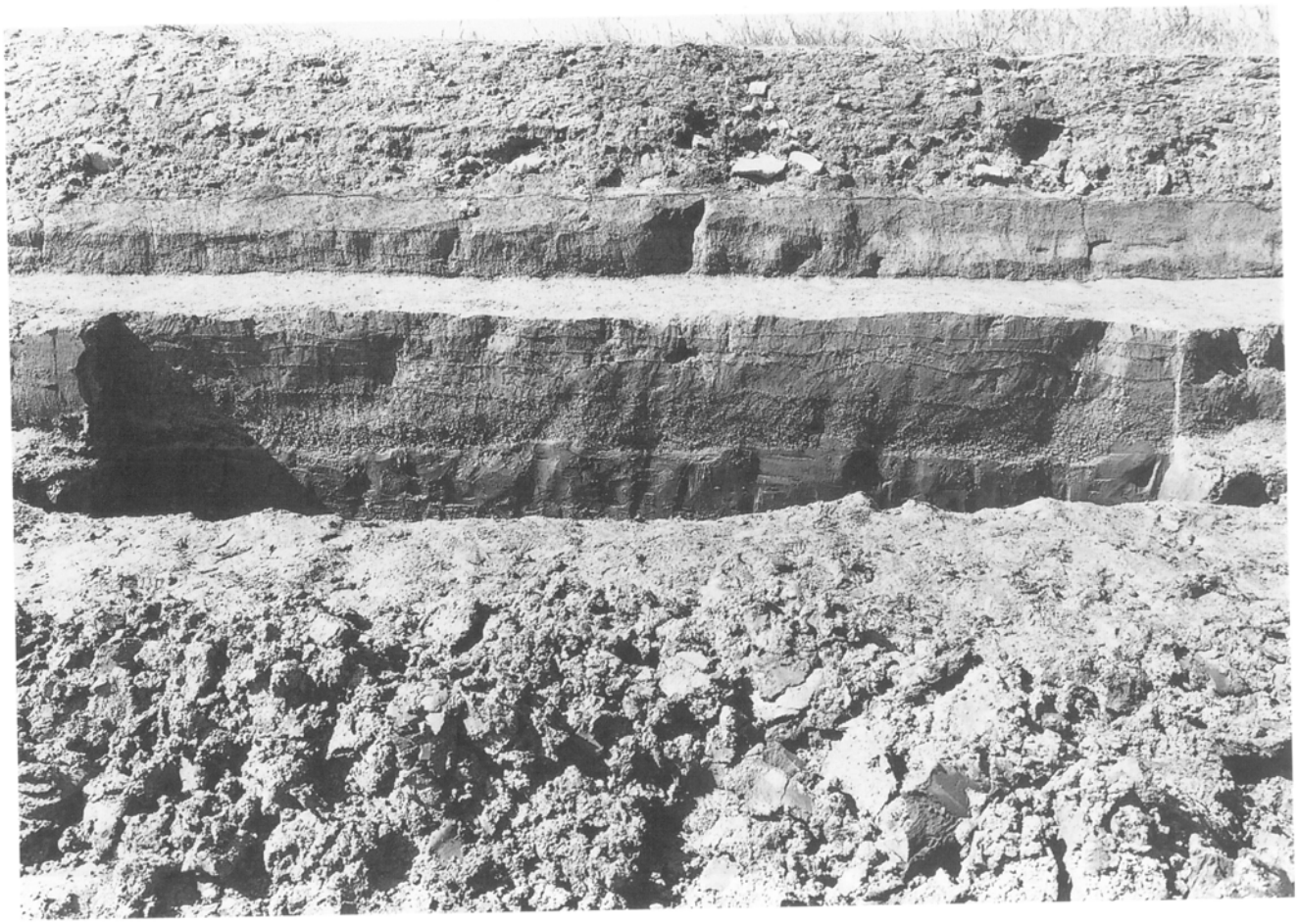
(2)　2次調査区下面水田（南から）

(1)　2次調査区土層

(2)　3次調査区上層水田（南から）



(1)　旧河道506（北から）



(2)　3次調査区土層

(1)　3次調査区下層水田（北から）

(2)　3次調査区下層水田（南から）

下 月 隈 C 遺 跡 2
— 下月隈C遺跡2次、3次調査 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第566集

発　　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8—1
平成10年3月20日
印　　刷　大成印刷株式会社
福岡市博多区東那珂三丁目6番62号